財団法人八尾市文化財調査研究会報告60

Ⅰ　跡部遺跡（第22次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第24次調査）
Ⅲ　植松遺跡（第５次調査）
Ⅳ　植松遺跡（第６次調査）
Ⅴ　亀井遺跡（第４次調査）
Ⅵ　萱振遺跡（第21次調査）
Ⅶ　木の本遺跡（第７次調査）
Ⅷ　久宝寺遺跡（第21次調査）
Ⅸ　小阪合遺跡（第33次調査）
Ⅹ　小阪合遺跡（第34次調査）
Ⅺ　志紀遺跡（第３次調査）
Ⅻ　田井中遺跡（第15次調査）
XIII　竹渕遺跡（第７次調査）
XIV　東郷遺跡（第52次調査）
XV　東郷遺跡（第53次調査）
XVI　中田遺跡（第33次調査）
XVII　中田遺跡（第34次調査）
XVIII　水越遺跡（第６次調査）
XIX　山賀遺跡（第４次調査）
XX　山賀遺跡（第５次調査）

１９９８年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人八尾市文化財調査研究会報告６０　正誤表

頁	行	誤	正
序	2	平成７年度・	削除
ＸⅡの例言	7	平成８年３月12日	平成９年３月12日
抄録1P	16	１９９８年　月　日	１９９８年９月30日
抄録２P	３・５	19960312 ～ 19960328	19970312 ～ 19970328

財団法人八尾市文化財調査研究会報告60

Ⅰ　跡部遺跡（第22次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第24次調査）
Ⅲ　植松遺跡（第５次調査）
Ⅳ　植松遺跡（第６次調査）
Ⅴ　亀井遺跡（第４次調査）
Ⅵ　萱振遺跡（第21次調査）
Ⅶ　木の本遺跡（第７次調査）
Ⅷ　久宝寺遺跡（第21次調査）
Ⅸ　小阪合遺跡（第33次調査）
Ⅹ　小阪合遺跡（第34次調査）
Ⅺ　志紀遺跡（第３次調査）
Ⅻ　田井中遺跡（第15次調査）
XIII　竹渕遺跡（第７次調査）
XIV　東郷遺跡（第52次調査）
XV　東郷遺跡（第53次調査）
XVI　中田遺跡（第33次調査）
XVII　中田遺跡（第34次調査）
XVIII　水越遺跡（第６次調査）
XIX　山賀遺跡（第４次調査）
XX　山賀遺跡（第５次調査）

１９９８年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

大阪府の東部に位置する八尾市は、東部の生駒山地西麓部から西部に広がる河内平野を占地しており、その豊かな自然環境のもとで、先人達が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しています。

平野部では、古大和川水系の豊かな水量と肥沃な土壌を背景に、水稲耕作の初期段階の弥生時代前期から活発な開発が行われています。

一方、市域東部の生駒山地西麓部においても、旧石器時代以降の遺跡・遺物が数多く残されています。なかでも、古墳時代後期には、日本有数の群集墳に数えられる「高安古墳群」が形成されており、この地域一帯で古墳文化が昇華した証を今に伝えています。

また、瀬戸内海・河内湖・大和川水系を介して、国内はもとより大陸や朝鮮半島との交流の中継地としての役割を果してきたほか、難波と大和を結ぶ交通至便な土地柄から奈良時代後期には、本市南部の弓削郷に「西の京」が設けられています。

このように、本市には先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しており、これらの文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが我々の大きな責務と認識しております。そこで私共では、破壊され消滅する危険にさらされている埋蔵文化財を、後世に永く伝えるため事業者の御協力を仰ぎ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に務めている次第であります。

今回、平成8年度に実施しました20件の発掘調査の整理が完了しましたので、これをまとめ報告書として刊行することに致しました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成10年9月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　　木山丈司

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成７年度・平成８年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成10年３月をもって終了した。

1．本書に収録した報告は次のとおりである。

1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅸ・XⅣ・XⅤ・XⅦ・XⅧが高萩千秋、Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅺ・XⅢが岡田清一、Ⅳ・Ⅹ・XXが原田昌則、Ⅲ・XⅥが西村公助、Ⅴ・XⅡが古川晴久、ⅨXが森本めぐみで全体の構成・編集は原田が行った。

1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（昭和61年８月）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成８年10月１日改正）をもとに作成した。

1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面である。

1．本書で用いた方位は磁北及び国土座標の真北を示している。

1．遺構は下記の略号で示した。

竪穴住居―ＳＩ　掘立柱建物―ＳＢ　井戸―ＳＥ　土坑―ＳＫ　溝―ＳＤ

小穴・柱穴―ＳＰ　落ち込み―ＳＯ　土器集積―ＳＷ　自然河川―ＮＲ

1．遺物実測図は断面の表示によって下記のように分類した。

弥生土器・土師器・瓦器・埴輪―白　須恵器・陶磁器―黒　石製品・木製品・屋瓦―斜線

1．土色については、『新版　標準土色帖』1996　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

1．各調査に際しては、写真・実測図のほかにカラースライドも多数作成しており、市民の方々に広く利用されることを希望する。

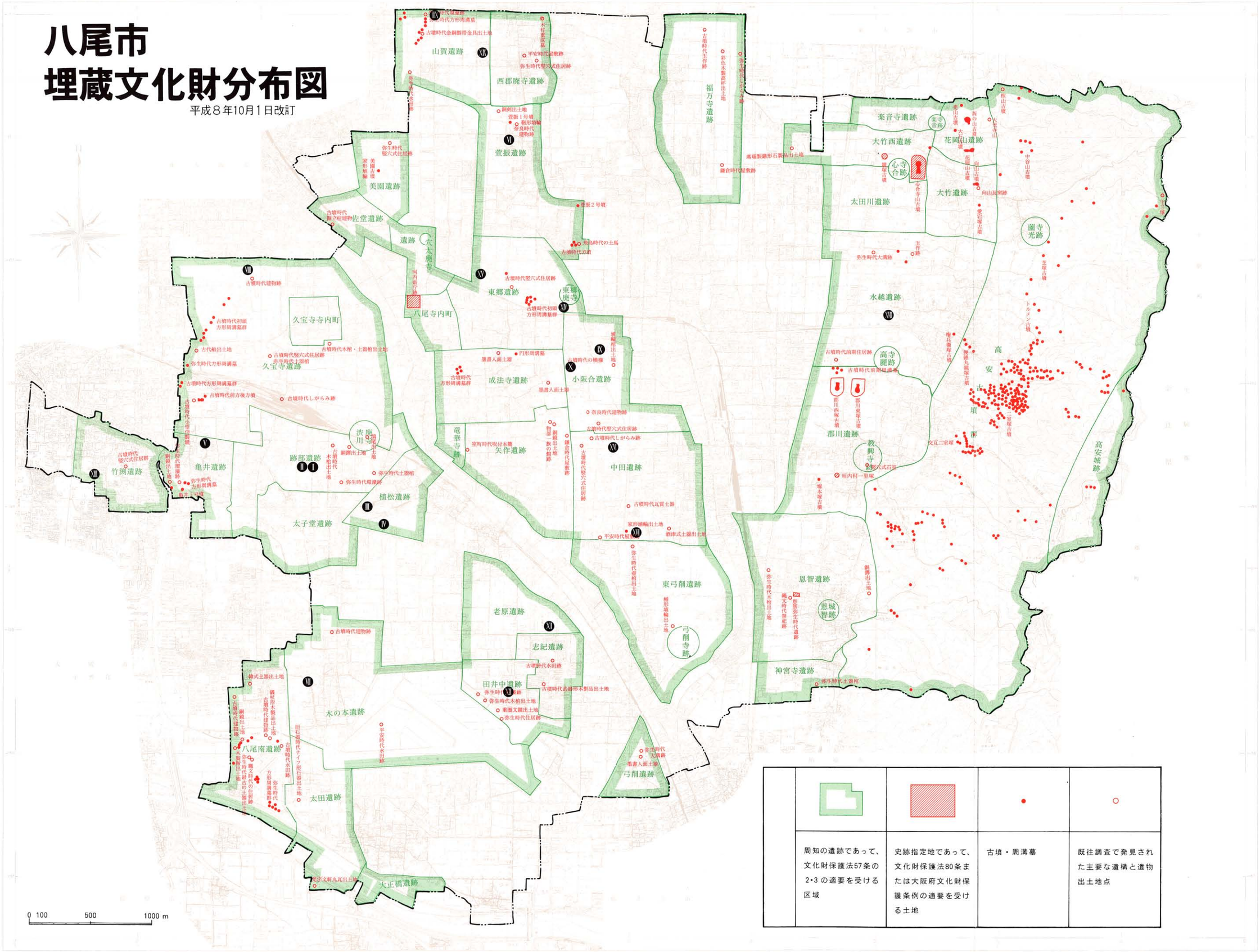
目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　跡部遺跡　第22次調査（ＡＴ96－22）…… 1
Ⅱ　跡部遺跡　第24次調査（ＡＴ96－24）…… 7
Ⅲ　植松遺跡　第５次調査（ＵＭ96－５）…… 13
Ⅳ　植松遺跡　第６次調査（ＵＭ96－６）…… 17
Ⅴ　亀井遺跡　第４次調査（ＫＭ96－４）…… 25
Ⅵ　萱振遺跡　第21次調査（ＫＦ96－21）…… 37
Ⅶ　木の本遺跡　第７次調査（ＳＫ96－７）…… 43
Ⅷ　久宝寺遺跡　第21次調査（ＫＨ96－21）…… 49
Ⅸ　小阪合遺跡　第33次調査（ＫＳ96－33）…… 55

Ⅹ　小阪合遺跡　第34次調査（ＫＳ96－34）…… 61
Ⅺ　志紀遺跡　第３次調査（ＳＩＫ96－３）…… 71
Ⅻ　田井中遺跡　第15次調査（ＴＮ96－15）…… 77
ⅩⅢ　竹渕遺跡　第７次調査（ＴＫ96－７）…… 83
ⅩⅣ　東郷遺跡　第52次調査（ＴＧ96－52）…… 87
ⅩⅤ　東郷遺跡　第53次調査（ＴＧ96－53）…… 103
ⅩⅥ　中田遺跡　第33次調査（ＮＴ96－33）…… 117
ⅩⅦ　中田遺跡　第34次調査（ＮＴ96－34）…… 125
ⅩⅧ　水越遺跡　第６次調査（ＭＫ96－６）…… 137
ⅩⅨ　山賀遺跡　第４次調査（ＹＭＧ96－４）…… 151
ⅩⅩ　山賀遺跡　第５次調査（ＹＭＧ96－５）…… 165
報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成８年10月１日改訂



周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適要を受ける区域	史跡指定地であって、文化財保護法80条または大阪府文化財保護条例の適要を受ける土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

Ⅰ　跡部遺跡第22次調査（ＡＴ96－22）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市太子堂１丁目地内で実施した公共下水道（７－19工区）工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する跡部遺跡第22次調査（ＡＴ96－22）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋633－3号　平成８年３月４日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年４月10日から４月19日（実働５日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は約33㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・西岡千恵子・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー中村・西岡・市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに…… 1

2．調査概要…… 2

　1）調査の方法と経過…… 2

　2）基本層序…… 3

　3）検出遺構と出土遺物…… 4

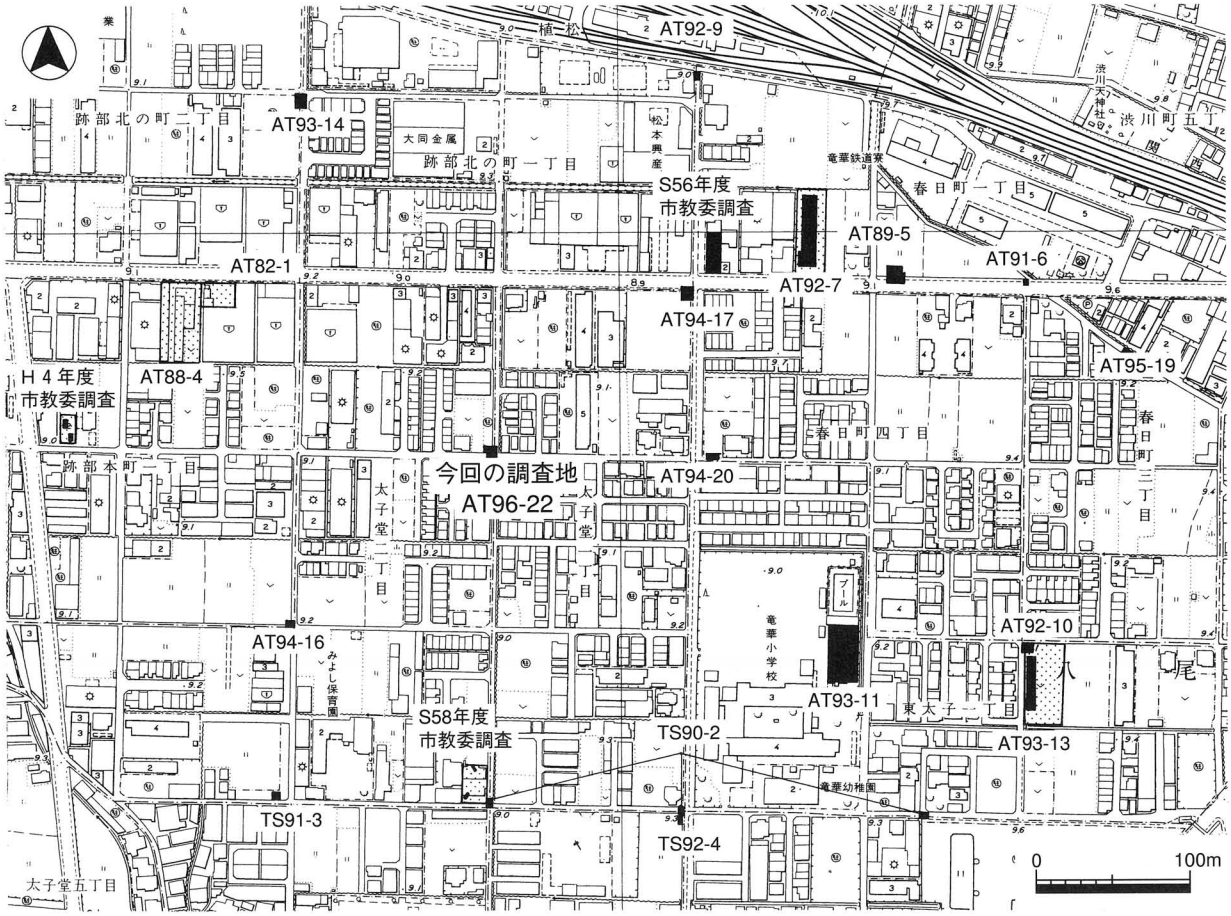
3．まとめ…… 4

Ⅰ　跡部遺跡第22次調査（ＡＴ96－22）

１．はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に位置し、現在の行政区画では跡部本町１～４丁目、跡部南の町１・２丁目、跡部北の町１・２丁目、春日町１～４丁目、太子堂１・２丁目、東太子１丁目、安中町３丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に立地しており、同一沖積地には東に植松遺跡・老原遺跡、西に亀井遺跡、南に太子堂遺跡・木の本遺跡、北に久宝寺遺跡が接している。

当遺跡では、八尾市教育委員会が昭和53年に春日町１丁目内の旧国鉄職員寮建設工事の際に、弥生時代前期の土器、鎌倉時代の瓦が出土したと記録されている。その後昭和56年以降、市教委・当調査研究会により十数次の発掘調査が行われている。現在までの調査成果から、弥生時代前期から近世にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。特筆としては、平成元年度に当調査研究会が実施した公共下水道工事に伴う第５次調査（ＡＴ89－５）から銅鐸を埋納した土壙が検出され注目された。



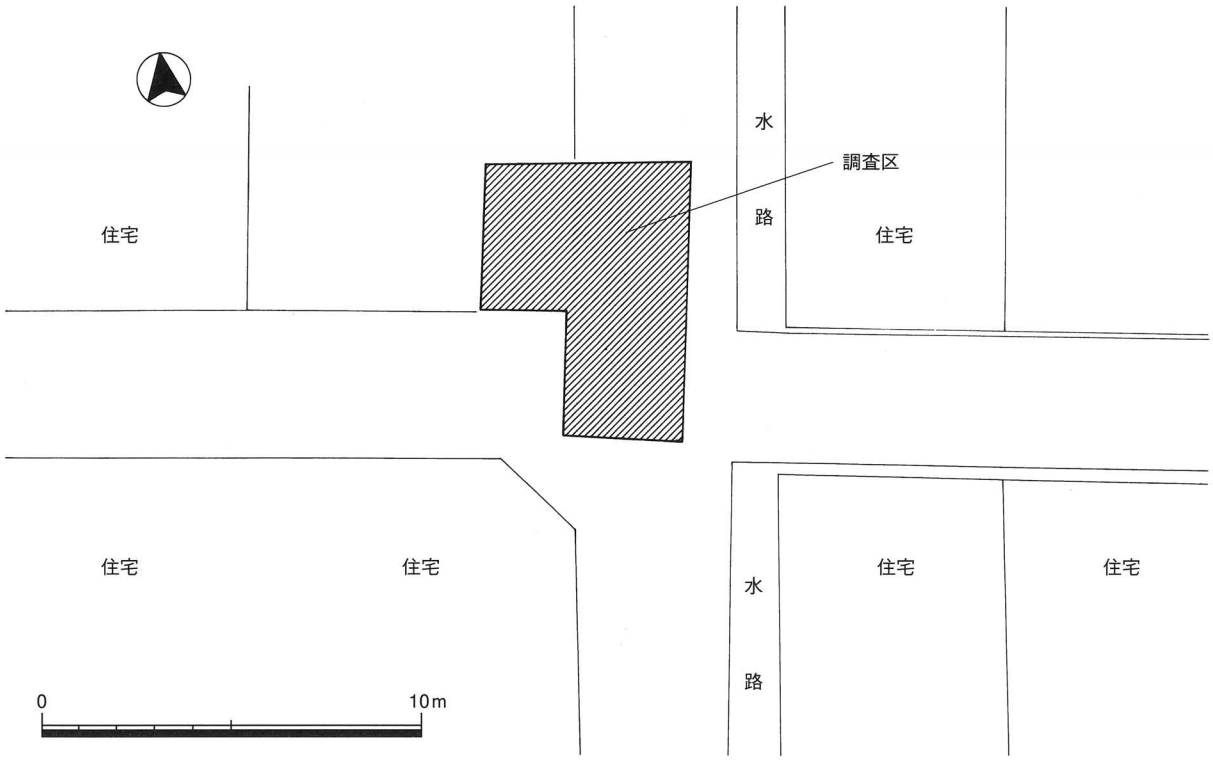
第１図　調査地位置図及び周辺図（Ｓ＝１／5000）

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道（７－19工区）工事に伴う立坑部分の調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第22次調査（ＡＴ96－22）にあたる。調査区は立坑１ヶ所で、面積約33㎡を測る。調査期間は、平成８年４月10日から４月19日までであった（うち実働５日）。

調査は、工事進行に沿って進めた。まず覆工板を設置するため、現地表(約T.P.＋8.9m)下約1.5mまでを立ち会いのもとで機械掘削を実施した。その結果、南西角で旧耕土下より切り込む井戸を検出した。続いて１段目の支法工までの１次掘削については、周辺の調査で現地表下1.5～2.0mの土層で古墳時代前期に相当する包含層及び遺構面を検出しており、当地にもその存在が予想されていたため、機械と人力を併用して徐々に掘削を行った。その結果、現地表下1.6～1.9mで層厚0.3m前後を測る古墳時代前期の包含層が認められた。包含層下の土層上面で精査を行ったが、遺構は認められなかった。２段目の支法工までの２次掘削では現地表下2.0～3.5mの掘削を実施し、土層の確認を行ったが遺構・遺物は認められなかった。３次掘削は最終掘削深度までで、現地表下3.5～4.5mまでの土層の観察を行ったが２次掘削の土層と同様、遺構・遺物は認められなかった。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

第１層　盛土（層厚80㎝）。道路下は、アスファルト・バラス・盛り土が堆積している。また、公共（水道・排水管など）施設の埋設工事で撹乱・削平している。

第２層　旧耕土（層厚15㎝前後）。上部は削平されているが、近代の耕作土と思われる。

第３層　乳灰茶色粘土（層厚20～30㎝前後）。粘性のある粘土である。遺構と認められるものはなかった。

第４層　暗灰褐色粘土（層厚30～50㎝前後）。粘性のある粘土で褐色の斑点がみられる。内部に古墳時代前期の土器片がごく少量含まれている。

第５層　暗灰色粘質シルト（層厚10～25㎝）。古墳時代前期の遺構面と考えられる。

第5'層　淡灰色粘質シルト（層厚15㎝前後）。調査区北部の一部で検出した層である。

第６層　青灰色シルト～微砂（層厚60㎝前後）。植物遺体を少量含む。

第７層　灰色粘土（層厚10㎝前後）。粘着度の強い粘土である。

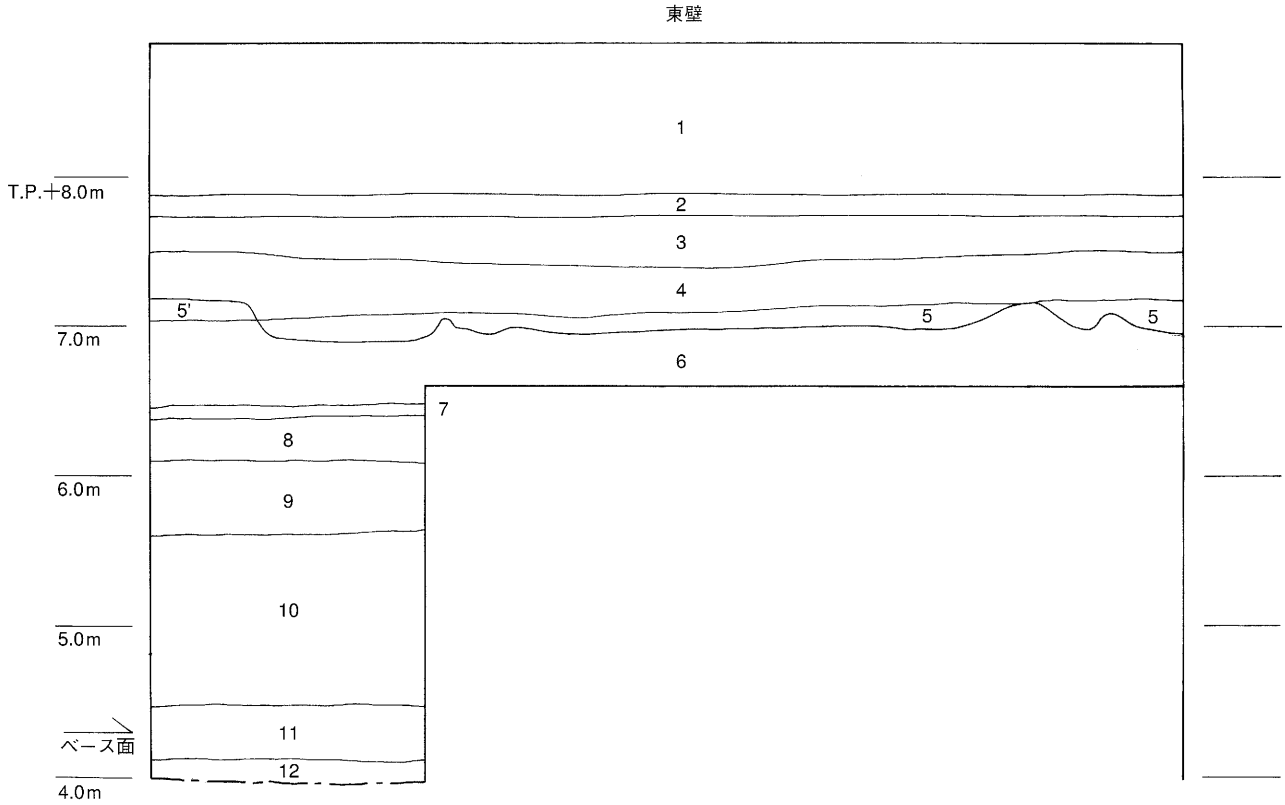
第８層　暗灰色粘土（層厚30㎝前後）。炭化物を含む。

第９層　灰青色シルト（層厚50㎝前後）。植物遺体が少量含まれる。

第10層　青白色微砂～細砂（層厚110㎝前後）。下部へ行くに従い砂粒が粗くなる。

第11層　黒灰色粘土（層厚40㎝前後）。植物遺体を多く含む層である。

第12層　黒青灰色粘土（層厚10㎝以上）。植物遺体を多く含む層である。



第３図　断面図

3）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約1.6～1.9m（標高7.2～7.5m）の第４層で古墳時代前期の包含層を検出した。その下の第５層上面では遺構は認められなかった。遺物は包含層内から土師器片をごく少量出土した程度である。工事最終掘削深度までの土層を観察したが、遺物を含む層や遺構面となる層は認められなかった。旧耕土直下より切り込む近代の井戸１基を検出した。井戸は円形の桶状にしたものである。この井戸の内部からビニール物が出土しており、当地周辺の住宅開発により埋まったものと思われる。

3．まとめ

今回の調査は、公共下水道工事の立坑部分の小面積の調査であった。調査の結果、古墳時代前期（布留式古相）の遺物包含層を検出することができたが、遺構と認められるものは検出されなかった。しかし、この時期のものは調査地周辺の調査で検出されており、集落域の範疇に入るものと想定できる。

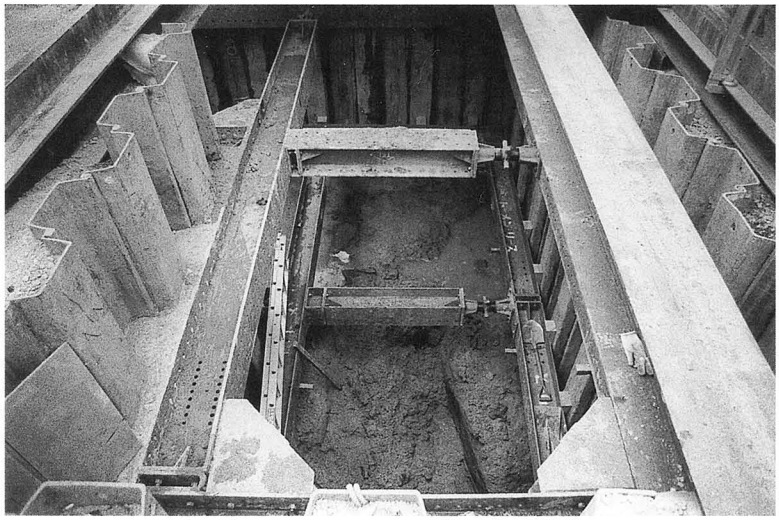
参考文献

・高木真光 1983.8「第６章　跡部遺跡（春日町１丁目51番地）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』八尾市教育委員会
・西村公助 1983「11．跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』(財) 八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸 1984「第６章　跡部遺跡発掘調査概要報告」『昭和58年度事業概要報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子 1988「19．跡部遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財) 八尾市文化財調査研究会
・西村公助 1989「19．跡部遺跡（第４次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子 1991『跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－』(財) 八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸・西村歩 1991「跡部遺跡発掘調査報告」『八尾市文化財紀要５』八尾市教員委員会
・高萩千秋 1992「Ⅻ　跡部遺跡第６次調査（AT91－6）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則 1993「Ⅰ　跡部遺跡（AT92－7）第７次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則 1993「Ⅲ　跡部遺跡（AT92－9）第９次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子 1994「１.跡部遺跡第11次調査（AT93－11）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1994「２.跡部遺跡第12次調査（AT93－12）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1994「３.跡部遺跡第13次調査（AT93－13）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋 1994「Ⅰ　跡部遺跡第14次調査（AT93－14）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財) 八尾市文化財調査研究会
・岡田清一 1994「５.跡部遺跡第15次調査（AT93－15）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子 1995「１.跡部遺跡第16次調査（AT94－16）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

・原田昌則 1995「２.跡部遺跡第17次調査（ＡＴ94－17）」『平成６年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則 1995「３.跡部遺跡第18次調査（ＡＴ94－18）」『平成６年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

東壁断面

調査風景（西から）



下層状況（南から）

Ⅱ　跡部遺跡第24次調査（ＡＴ96－24）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市太子堂１・２丁目地内で実施した公共下水道（８－114工区）工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する跡部遺跡第24次調査（ＡＴ96－24）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋524－3号　平成８年11月14日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成９年３月３日から３月６日（実働２日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は約８㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中村百合・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、図面レイアウト・トレースー中村・市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに…… 7

2．調査概要…… 8

　1）調査の方法と経過…… 8

　2）基本層序…… 8

　3）検出遺構と出土遺物…… 9

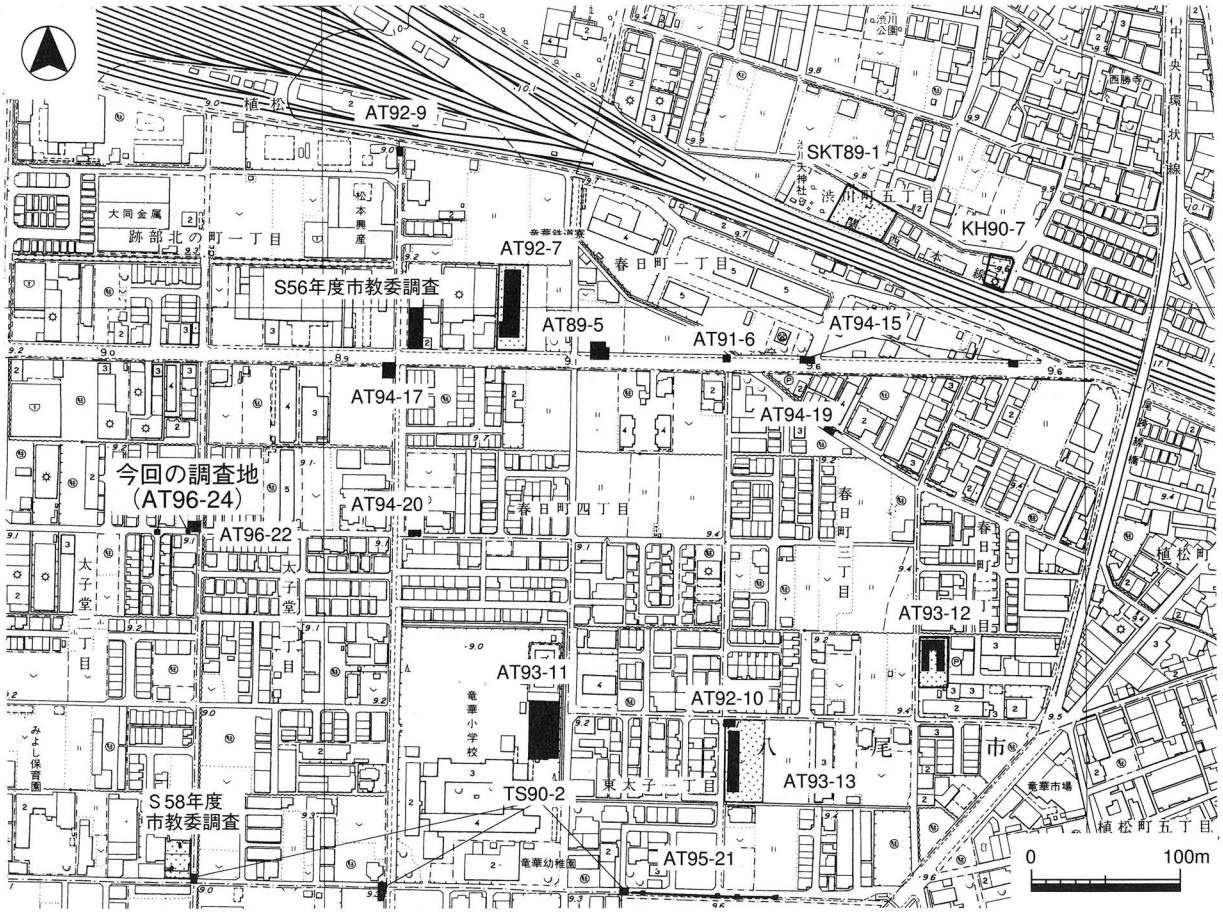
3．まとめ…… 9

Ⅱ　跡部遺跡第24次調査（ＡＴ96－24）

１．はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に位置し、現在の行政区画では跡部本町１～４丁目、跡部南の町１・２丁目、跡部北の町１・２丁目、春日町１～４丁目、太子堂１・２丁目、東太子１丁目、安中町３丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に立地しており、同一沖積地には東に植松遺跡、西に亀井遺跡、南に太子堂遺跡、北に久宝寺遺跡が接している。

当遺跡では、八尾市教育委員会が昭和53年に春日町１丁目内の旧国鉄職員寮建設工事の際に、弥生時代前期の土器、鎌倉時代の瓦が出土したと記録されている。その後昭和56年以降、市教委・当調査研究会により二十数次の発掘調査が行われている。現在までの調査成果から、弥生時代前期から近世にわたる複合遺跡であることが明らかになっている。特筆としては、平成元年度に当調査研究会が実施した公共下水道工事に伴う第５次調査（ＡＴ89－５）から銅鐸を埋納した土壙が検出され注目された。今回の調査地は遺跡範囲の西部にあたり、調査地の西側は亀井遺跡が隣接する。



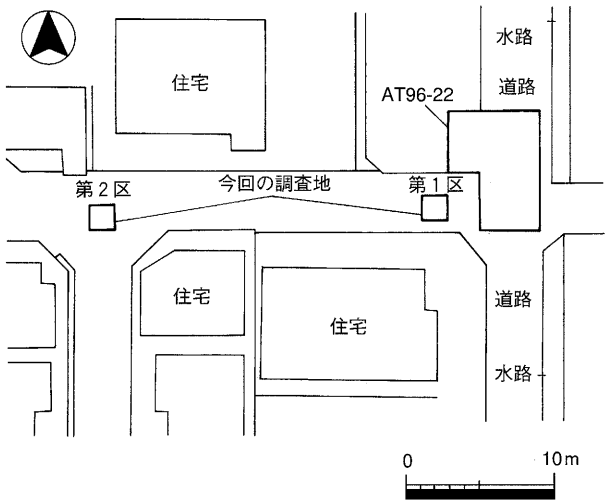
第１図　調査地位置図及び周辺図（Ｓ＝1/5000）

2．調査概要

1）　調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道（第８－114工区）工事に伴う人孔（マンホール）部分の調査で、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した第24次調査（ＡＴ96－24）にあたる。人孔は９ヶ所で、そのうちの２ヶ所を平成８年度に行うこととなった。２ヶ所分の面積約８㎡を測る。今回対象となる人孔№３（第１区）と人孔№3-1（第２区）である（第２図）。調査期間は、平成９年３月３日から３月６日までであった（うち実働２日）。

調査は人孔（一辺約2m、深さ2.7m）部分を現地表(T.P.＋8.9～9.0m)下1.6～1.7mまでを立ち会いのもとで機械掘削を実施し、遺構・遺物の検出及び地層の堆積状況等の記録保存の作成。次いで工事掘削深度（現地表下2.7m）までの地層状況を確認した。なお、掘削にあたっては隣接住宅、壁面崩壊防止による安全等の諸条件により、現地表下1.5m前後より下部の掘削については簡易矢板を打った。



第２図　調査区位置図

周辺の調査で現地表下1.5～2.0mの土層で古墳時代前期に相当する包含層及び遺構面を検出しており、当地にもその存在が予想されていたため、機械と人力を併用して徐々に掘削を行った。その結果、現地表下1.6～1.9mで層厚0.3m前後を測る古墳時代前期の包含層が認められたが、遺物は出土しなかった。下層調査では現地表下2.7mまでの工事掘削深度までの掘削を実施し、土層の観察を行ったが遺構・遺物は認められなかった。

2）基本層序

第１層　盛土（層厚80～160㎝）。道路下は、アスファルト・バラス・盛り土が堆積している。また、公共（水道・排水管など）施設の埋設工事で撹乱・削平している。

第２層　旧耕土（層厚20㎝前後）。上部は削平されているが、近代の耕作土と思われる。

第３層　灰緑色粘質土（層厚40～50㎝）。粘性のある粘土である。遺構と認められるものはなかった。

第４層　淡灰褐色粘土（層厚30～40㎝）。粘性のある粘土で褐色の斑点がみられる。

第５層　暗茶褐色粘質土（層厚20～30㎝）。古墳時代前期の包含層と思われる。

第６層　灰青色細砂混シルト（層厚60㎝前後）。第１区で検出した。古墳時代前期のベース面。

第７層　青灰色粘土（層厚20㎝前後）。第１区で検出した。

第８層　青灰色シルト（層厚30㎝以上）。第１区で検出した。粘着度の強い粘土である。

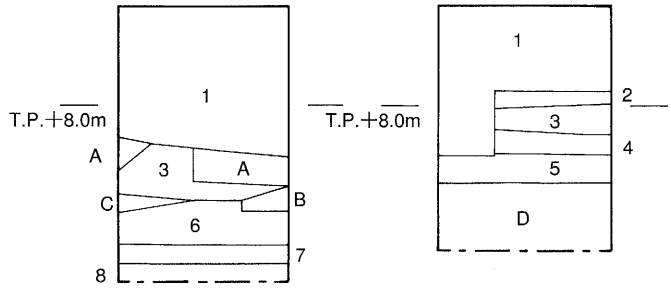
第Ａ層　暗灰緑色粘土（層厚50㎝前後）。第１区で検出した。近代の溝又は近世井戸の掘り方？

と思われる落ち込み。

第Ｂ層　淡灰色粘土（層厚30㎝）。第１区で検出した。調査区北部の一部で検出した層である。

第Ｃ層　暗褐灰色細砂混粘土（層厚20㎝前後）。第１区で検出した層で、遺構と思われる落ち込み。

第Ｄ層　淡灰色細砂（層厚70㎝以上）。第２区のみで検出した河川跡の堆積土。



第３図　断面図

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約1.6～1.9ｍ（標高7.2～7.5ｍ）の第５層で古墳時代前期の包含層と土層を検出した。その下面では第１区で遺構と思われる落ち込み、第２区で河川跡と思われる砂層の堆積が認められた。下層調査（工事最終掘削深度）では遺物を含む層や遺構面となる土層はなかった。遺物は遺物包含層と思われる土層や下層調査でも出土しなかった。

第１区（人孔№３）

当調査研究会第22次調査（ＡＴ96－22）の調査区（立坑）の西側に接する調査区である。現地表下約1.3～1.6ｍまでは埋設工事等の掘削で埋め戻した土層である。その下（T.P.＋7.5ｍ前後）で古墳時代前期の包含層と思われる土層（第５層）を検出した。第５層は上面を現在の埋設工事で削平され、調査区北部では近世の落ち込みがあった。この落ち込みは第22次調査で検出した近世井戸の掘り方の一部である可能性が考えられる。

第２区（人孔№3-1）

第１区より西へ約20ｍの所に位置する調査区である。現地表下約0.9～1.6ｍまでは第１区と同様、現在の埋設工事で埋め戻された土層である。大部分は現地表下約1.6ｍ（T.P.＋7.5ｍ前後）まで削平されていた。かろうじて南西部の一部で旧耕土から残存する土層があった。この土層観察では第５層が古墳時代前期の包含層に対応する層である。その下層（第12層）は砂層の堆積する河川跡が厚く堆積していた。工事掘削深度である現地表下約2.7ｍまでも続いており、層厚0.8ｍ前後までの堆積を確認できたのみである。

３．まとめ

今回の調査は公共下水道の人孔部分の工事に伴う小規模な調査であった。調査の結果、古墳時代前期の遺物包含層を検出することができた。遺構は遺物の出土や形状は確認できなかった落ち込みを検出できた。この時期のものは調査地周辺の調査でも検出しており、集落域の範疇に入るものと推定できる。

参考文献

・高木真光　1983.8「第６章　跡部遺跡（春日町１丁目51番地）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』八尾市教育委員会
・西村公助　1983「11．跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査－その成果と概要－』(財) 八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸　1984「第６章　跡部遺跡発掘調査概要報告」『昭和58年度事業概要報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1988「19．跡部遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財) 八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1989「19．跡部遺跡（第４次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1991『跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町１丁目出土銅鐸－』(財) 八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸・西村歩　1991「跡部遺跡発掘調査報告」『八尾市文化財紀要５』八尾市教育委員会
・高萩千秋　1992「Ⅲ　跡部遺跡第６次調査（AT91－6）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1993「Ⅰ　跡部遺跡（AT92－7）第７次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1993「Ⅲ　跡部遺跡（AT92－9）第９次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1994「1.跡部遺跡第11次調査（AT93－11）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1994「2.跡部遺跡第12次調査（AT93－12）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一　1994「3.跡部遺跡第13次調査（AT93－13）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋　1994「Ⅰ　跡部遺跡第14次調査（AT93－14）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財) 八尾市文化財調査研究会
・岡田清一　1994「5.跡部遺跡第15次調査（AT93－15）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1995「1.跡部遺跡第16次調査（AT94－16）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1995「2.跡部遺跡第17次調査（AT94－17）」『平成６年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則　1995「3.跡部遺跡第18次調査（AT94－18）」『平成６年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

1区（西から）

1区（南から）

2区（北から）

Ⅲ　植松遺跡第５次調査（ＵＭ96－５）

例　　言

1．本書は、八尾市植松町7丁目地内で実施した公共下水道（７－27工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する植松遺跡第5次調査（ＵＭ96－５）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋386－３号　平成７年10月16日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年5月27日から平成８年５月31日（実働４日）にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は38㎡を測る。なお、調査においては中西明美、西村和子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西村（公)、西村（和)、図面レイアウト・トレース－西岡千恵子、西村（公)、西村（和）が行った。

1．本書の執筆、編集は西村公助が行った。

本　文　目　次

1．はじめに…… 13

2．調査概要…… 14

　1）調査の方法と経過…… 14

　2）層序…… 14

　3）検出遺構と出土遺物…… 15

3．まとめ…… 16

Ⅲ　植松遺跡第５次調査（UM96－５）

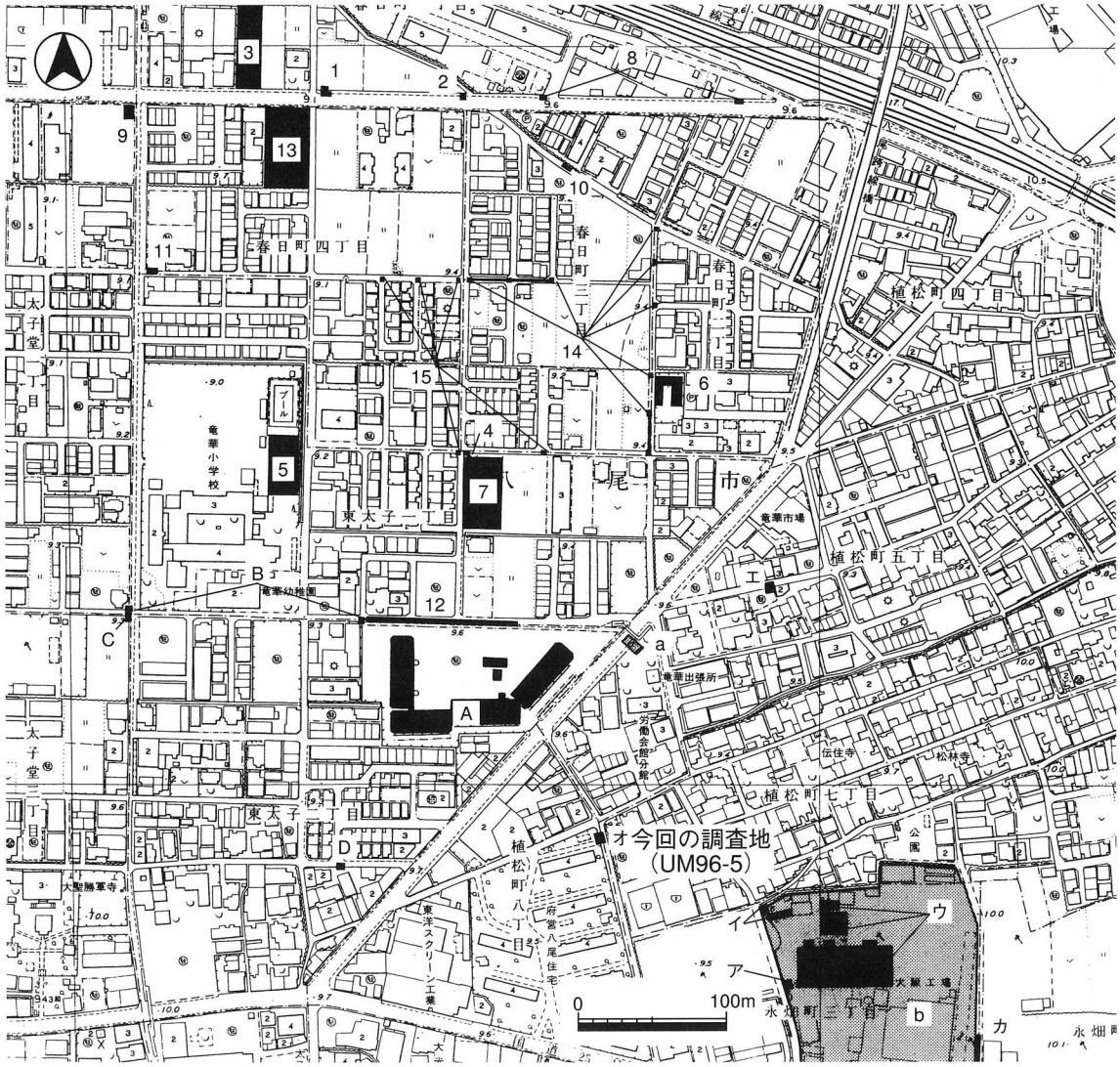
１．はじめに

八尾市の西部に位置する植松遺跡は、南東から北西方向に流れる旧大和川の主流であった長瀬川の左岸の沖積地上に位置する。同遺跡は、現在の行政区画では、植松町・永畑町にかけて存在している。

当遺跡内では、当研究会が平成９年度までに６件の発掘調査を実施している。なかでも、今回の調査地の北東約200ｍ地点での下水道工事に伴う発掘調査（ＵＭ95－４）[註1]では、弥生時代中期や奈良時代の遺物が多量に出土している。

また、北西約100ｍの太子堂遺跡内の調査（ＴＳ83－１）[註2]では奈良時代の井戸を検出していることから、同時代の集落が今回の調査地周辺にあったことがわかっている。

当遺跡の周囲には、西に弥生時代前期以降近世に至るまでの集落遺構を検出している跡部遺跡、北西に弥生時代以降の集落遺構を検出している久宝寺遺跡が隣接している。



第１図　調査地周辺図

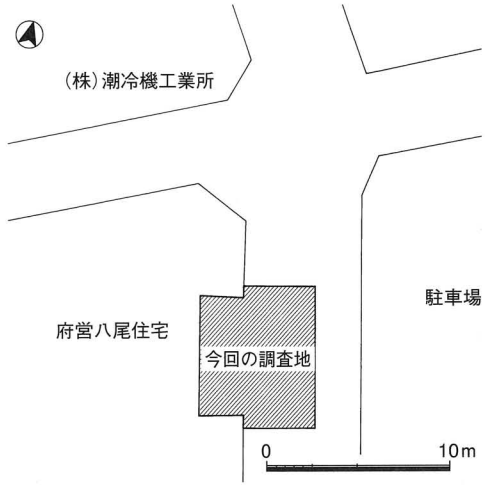
地図記載位置	遺跡	略号	調査地	調査原因	面積	調査期間	調査機関
a	植松	90-433	植松町５丁目地内	公共下水道	60	H030522～0527	市教委
b	植松	91-626	永畑町３丁目1-1、1-15他	共同住宅	63	H040413～0414	市教委
ア	植松	UM92-1	永畑町３丁目地内	公共下水道第26工区	40.32	H050118～0202	研究会
イ	植松	UM93-2	永畑町３丁目１号他	共同住宅（その１）	134	H050419～0719	研究会
ウ	植松	UM93-3	永畑町３丁目１号他	共同住宅（その２）	900	H060210～0331	研究会
エ	植松	UM95-4	植松3,5丁目地内	公共下水道7-20工区	43.2	H080318～0327	研究会
オ	植松	UM96-5	植松町７丁目地内	公共下水道7-27工区	38	H080527～0531	研究会
カ	植松	UM96-6	永畑町３丁目1-11	開発道路の整備工事	180	H081028～1206	研究会
1	跡部	AT89-5	春日町１丁目45-1	公共下水道	100	H011017～1130	研究会
2	跡部	AT91-6	春日町１丁目地内	公共下水道	16	H030930～1004	研究会
3	跡部	AT92-7	春日町１丁目47,48	店舗付共同住宅建設	220	H040709～0810	研究会
4	跡部	AT92-10	春日町３丁目地内	公共下水道98工区	28	H050129～0215	研究会
5	跡部	AT93-11	東太子１丁目106	龍華小学校	1215	H050517～0714	研究会
6	跡部	AT93-12	春日町２丁目35-1,35-2	共同住宅	130	H050517～0625	研究会
7	跡部	AT93-13	東太子１丁目16番地	共同住宅	180	H050628～0730	研究会
8	跡部	AT93-15	春日町１丁目2～44番地先	公共下水道19工区	29.1	H060218	研究会
9	跡部	AT94-16	跡部本町１丁目地内	公共下水道5-111	43.52	H060912～1013	研究会
10	跡部	AT95-19	春日町３丁目地内	公共下水道6-22工区	17	H070621～0810	研究会
11	跡部	AT95-20	春日町４丁目地内	公共下水道7-6工区	23	H071110～1115	研究会
12	跡部	AT95-21	東太子1,2丁目地内	公共下水道7-16工区	147	H080131	研究会
13	跡部	AT96-23	春日町４丁目４番	共同住宅	308	H090221～0331	研究会
14	跡部	AT97-25	春日町2･3丁目地内	公共下水道8-115工区	116	H090408～	研究会
15	跡部	AT97-27	春日町3･4丁目地内	公共下水道8-113工区	20	H090528～	研究会
A	太子堂	TS83-1	東太子２丁目１他	共同住宅建設	3393	S580606～1027	研究会
B	太子堂	TS90-2	太子堂2･3地内	公共下水道	110	H030215	研究会
C	太子堂	TS92-4	東太子２丁目地内	公共下水道第94工区	37	H050308～0406	研究会
D	太子堂	TS93-5	東太子２丁目地内	公共下水道第6工区	29	H051130～1203	研究会

第１表　植松・跡部・太子堂遺跡調査地一覧表

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（7－27工区）に伴って破壊が予測される立坑１個所を対象に実施した。調査面積は38㎡を測る。現地表面から1.5ｍまでを機械により掘削し、以下0.6ｍは人力掘削による調査を実施した。また調査終了後、工事掘削最終深度の現地表下約3.6ｍまでの土層堆積状況の観察を行った。



第２図　調査位置図

２）層序

第０層　盛土。層厚1.1ｍ。現地表面の標高はT.P.＋10.2ｍである。

第１層　旧耕土。5Ｂ 2/1　青黒色粗砂混粘土。層厚0.3ｍ。

第２層　10ＹＲ5/6　黄褐色細砂混粘土。層厚0.2ｍ。近世の磁器破片が出土した。

第３層　10ＹＲ3/3　暗褐色シルト混粘土。層厚0.2ｍ。室町時代末期頃の羽釜の破片が出土した。

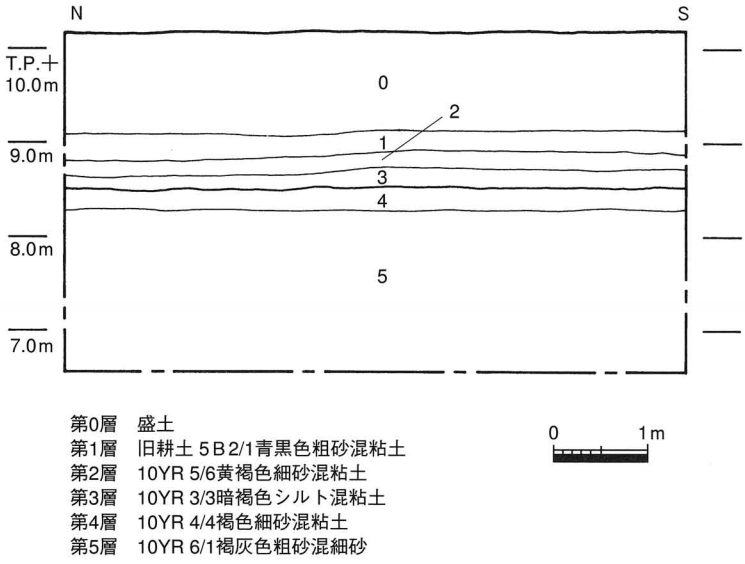
第４層　10ＹＲ 4/4　褐色細砂混粘土。層厚0.3ｍ。上面で調査を実施したが遺構の検出はなかった。上面の標高は、T.P.＋8.5ｍである。

第５層　10ＹＲ6/1　褐灰色粗砂混細砂。層厚1.7ｍ以上。河川内の堆積土である。

３）検出遺構と出土遺物

現地表面下1.8ｍに存在していた第４層上面で面的な調査を実施したが、遺構の検出および遺物の出土はなかった。

以下、土層堆積状況の観察を行った結果、工事掘削の最終の深さまでは室町時代以前の河川の堆積と推定される砂層（第５層）を確認した。この砂層内からは土師器の破片が少量出土しているが具体的な時期などの詳細は不明である。

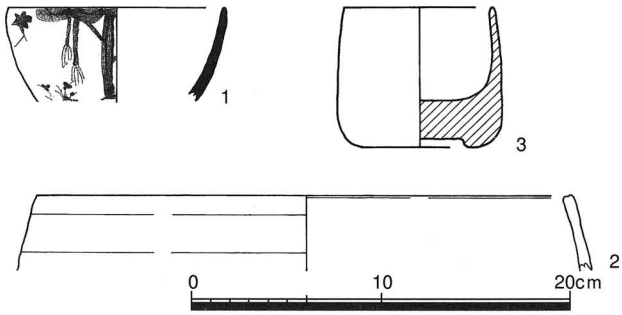


第３図　東壁実測図

遺構に伴わない出土遺物

第２層からは近世の磁器碗（１）が、第３層からは室町時代ごろの羽釜（２）と木製の漆器（３）が出土した。

（１）は伊万里焼と思われる。ややゆるやかに内湾気味に立ち上がる口縁部で、端部は尖り気味に丸く終る。口径11.2㎝を測る。外面に草・木・花の文様が描かれている。全面に釉薬を塗っているため光沢がある。（２）は上内方へ立ち上がる口縁部で端部は面をもつ。口径28㎝を測る。（３）は内上方へ立ち上がる口縁部。端部は尖り気味に丸く終わる。底部は上げ底である。口径7.8㎝、器高7.5㎝、底径5.8㎝を測る。全面に赤色（10Ｒ 4/8）の漆を塗っている。器種は不明である。



第４図　第２層（1）第３層（2･3）出土遺物実測図

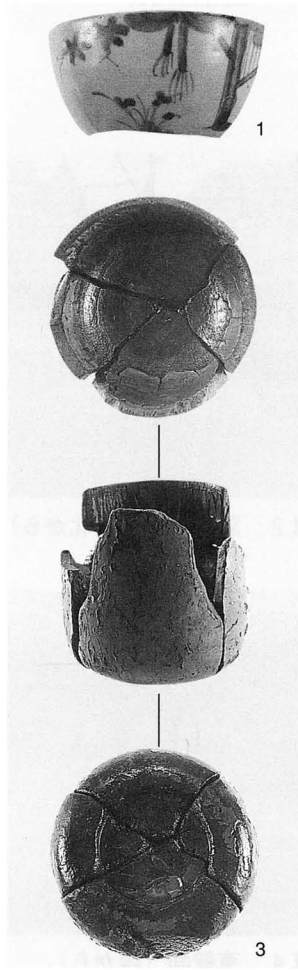


写真１　第２層（1）第３層（3）出土遺物

3．まとめ

河川内の堆積土である第５層の厚みは1.7ｍ以上あり、河川の中心部分である可能性が考えられる。しかし流れの方向や川幅等の詳細は不明であった。第４層内からの遺物の出土はなく時期は不明であるが、上層の第３層から室町時代末期頃の羽釜が出土していることから、河川は中世末以前まで機能していたと推定される。

中世末頃以降（第４層以上）はほぼ水平に堆積しており比較的安定した状況を示していた。しかし、今回の調査地では、集落に関連する遺構の検出はなかった。

註記

註１ 岡田清一　1997.３「４.植松遺跡第４次調査（ＵＭ95-4)」『平成７年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』

註２ 駒沢 敦他　1993「太子堂遺跡＜第１次調査・第２次調査報告書＞」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告36』(財) 八尾市文化財調査研究会

参考文献

・高木真光　1983.８「第2章植松南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要1980･1981年度』八尾市教育委員会

・吉田野乃　1992.３「４.植松遺跡（90-433）の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告26　八尾市教育委員会

・高萩千秋　1994「Ⅱ植松遺跡（第２次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財) 八尾市文化財調査研究会

写真２　調査地周辺（北から）

写真３　第４層上面全景（北から）

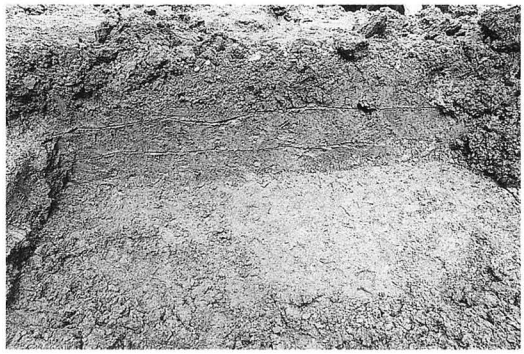


写真４　東壁面（西から）

写真５　下層掘削状況（北から）

Ⅳ　植松遺跡第６次調査（ＵＭ96－６）

例　　言

1．本書は、八尾市永畑町３丁目１－11で実施した開発道路の整備工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する植松遺跡第６次調査（ＵＭ96－６）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋255－３号　平成８年９月30日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会がニチメン（株）代表取締役専務　田淵弘通から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年10月28日から平成８年12月６日（実働11日間）にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積180㎡を測る。調査においては垣内洋平・岸田靖子・北原清子・辻野優子・西田真紀が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成９年９月に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田、図面トレース－北原、遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……17

2．調査概要……18

　1）調査の方法と経過……18

　2）基本層序……19

　3）検出遺構と出土遺物……19

　4）遺構に伴わない遺物……22

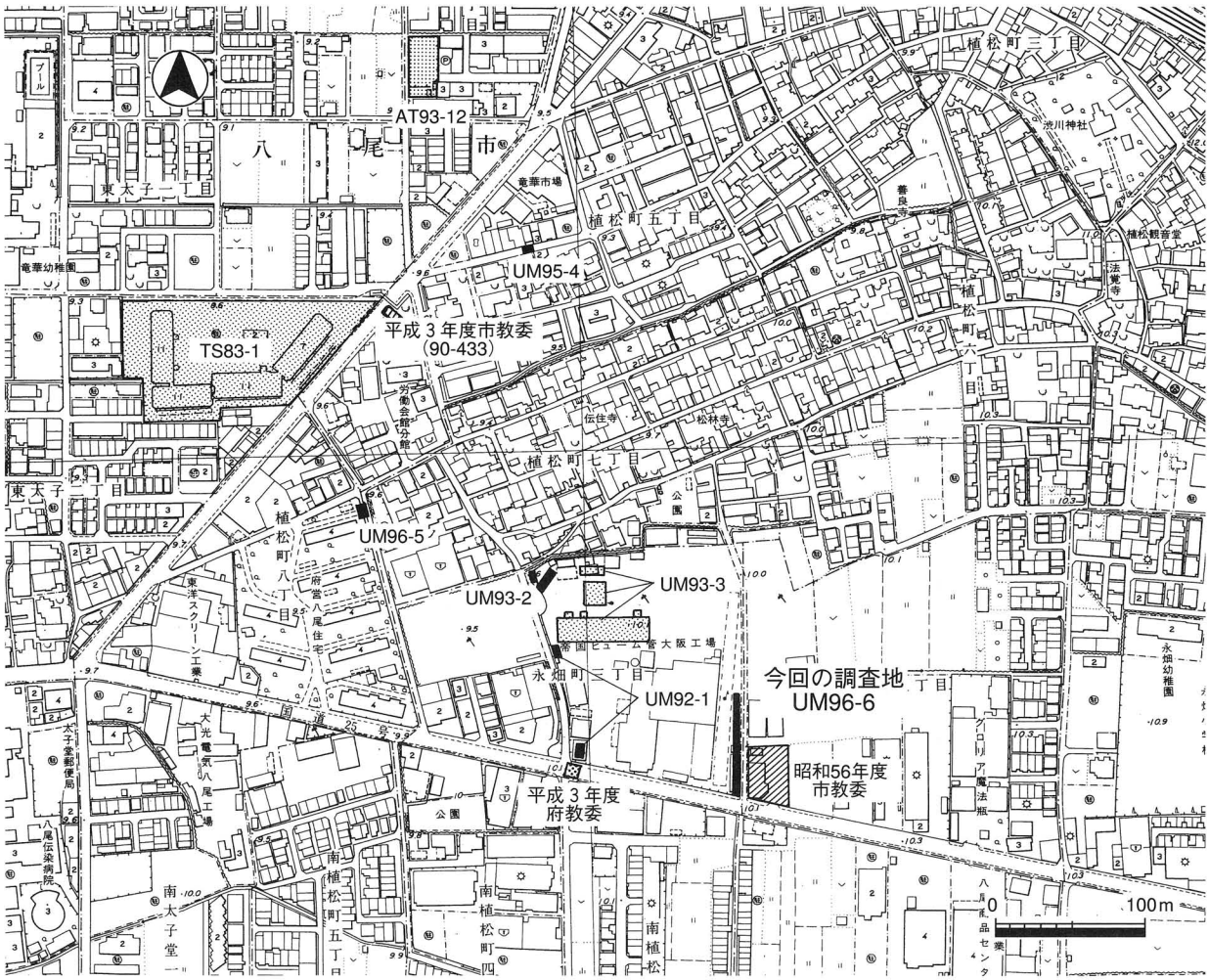
3．まとめ……22

Ⅳ　植松遺跡第６次調査（ＵＭ96－６）

１．はじめに

植松遺跡は八尾市の西部に位置し、河内平野内を南東から北西方向に流下した旧大和川の主流であった長瀬川左岸の自然堤防および沖積地上に立地している。現在の行政区画上では八尾市植松３～８丁目、永畑町２・３丁目の東西0.6㎞、南北0.6㎞がその範囲とされている。当遺跡周辺には、南東に老原遺跡、南に木の本遺跡、西に跡部遺跡・太子堂遺跡、北東に長瀬川を挟んで竜華寺跡・矢作遺跡・成法寺遺跡が存在している。

当遺跡は、昭和56年度に八尾市永畑町２丁目で八尾市教育委員会により実施された店舗建設に伴う調査[註1]で、平安時代前期の掘立柱建物１棟や溝群が検出されたことから遺跡として認識されるようになった。その後、新たな開発に伴う発掘調査は実施されず、本遺跡が西接する太子堂遺跡や奈良街道（亀瀬越道）に近接する関係から、街道を中心に展開した奈良・平安時代を中心とする遺跡として認識されてきた。ところが、平成３年度に永畑町３丁目の国道25号線上で大阪府教育委員会により公共下水道工事に伴う発掘調査が実施された結果、古墳時代から平安時代の遺物包含層が確認され、複合遺跡の性格を帯びた遺跡であることが明らかになった。さらに、大阪府



第１図　調査地周辺図

教育委員会調査地の北に隣接する地点で、平成４年度に当調査研究会が公共下水工事に伴って実施した第１次調査[註2]（ＵＭ92－１）では弥生時代前期・中期、古墳時代前期の遺物包含層の存在が確認された他、近接する地点で平成５年度に実施した共同住宅に伴う第２次調査[註3]（ＵＭ93－２）、第３次調査[註4]（ＵＭ93－３）でも弥生時代前期から近世に至る遺構が検出されており、遺跡範囲の南東部で、弥生時代前期以降の集落動態が明らかになってきた。また、遺跡範囲西部の植松３・５丁目地内で平成７年度に実施した第４次調査[註5]（ＵＭ95－４）では、弥生時代中期末・奈良時代の遺構・遺物が検出されており、現時点では遺跡範囲の南東部および西部を中心として重層的でしかも広範におよぶ各時期の集落が存在したことが想定できるようになってきた。

今回、第６次調査（ＵＭ96－６）を実施した八尾市永畑町３丁目１－11は遺跡範囲の南部にあたり、昭和56年度に八尾市教育委員会が行った調査地に西接している。

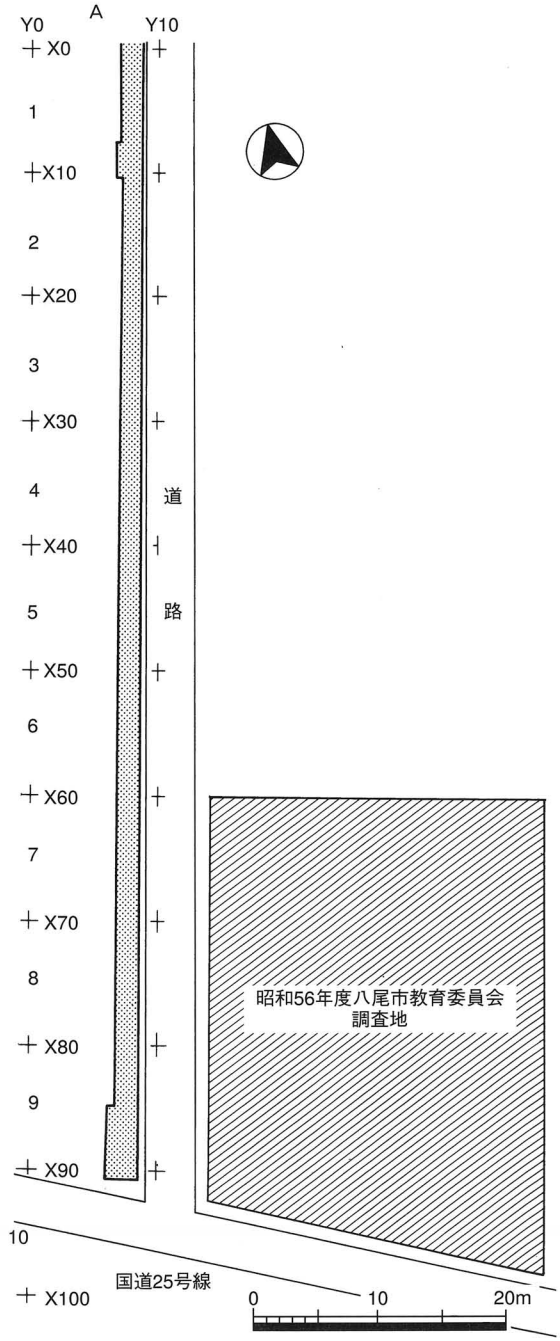
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は開発道路内の管路布設に伴うものである。調査では、東西幅２ｍ、南北長90ｍを測る調査対象地内の人孔部分で発掘調査を２ケ所（１Ａ地区・５Ａ地区）で行ったほか、調査地全体を対象として、最終掘削面（現地表下3.1ｍ前後）に至る遺構・遺物の有無ならび土層堆積状況を確認する目的で随時立会調査を実施した。

調査地の地区割については、調査地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を任意の基点として東西方向10ｍ、南北方向100ｍにわたって設定した。一区画の単位は10ｍ四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ）、南北方向は算用数字（北から１～10）で示し、地区の表示は１Ａ区～10Ａ区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ100）・南北線（Ｙ０～Ｙ10）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、発掘調査を実施した部分では、現地表下約1.6ｍ前後までを機械掘削した後、以下0.3ｍについては、人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、１Ａ地区の現地表下1.8ｍ前後（T.P.＋9.00ｍ前後）付近に存在する第７層10ＧＹ6/1緑灰色粘質シルト層上面で平安時代前期に比定される溝１条（ＳＤ－１）を検出した。また、調査地全域



第２図　調査区設定図および地区割り図（1/600）

を対象とした立会調査においては、１Ａ地区から９Ａ地区の広範囲にわたって、平安時代前期～後期の遺物を極少量含む第６層N4/ 灰色粘土層の存在が確認された。

２）基本層序

調査地内で普遍的に確認された14層（第０層～第13層）を摘出して基本層序とした。上部は既設の構築物により撹乱を受けており、現地表面から約0.6m前後までは明確でない。以下、第１層～第５層については、無遺物層であり、作土層を構成するものも認められない。第６層は、平安時代前期～後期の遺物を少量含む粘性の高い土層で、３・４Ａ地区付近で層厚を増しており、この付近に小さな谷状地形の存在が想定される。第７層上面が平安時代前期のベース面である。第８層以下は、無遺物層で沖積地に特有な灰色ないしは緑灰色の色調を基調とするシルト～粘土層の漸移的な堆積が認められた。

第０層　撹乱層。層厚0.6～0.9m。上面の標高はT.P.＋10.8m前後を測る。

第１層　Ｎ６/ 灰色砂質シルト。層厚0.15～0.4m。

第２層　10GY7/1 明緑灰色砂質シルト。層厚0.1～0.3m。

第３層　Ｎ８/ 灰白色極細粒砂。層厚0.1～0.25m。

第４層　Ｎ６/ 灰色細粒砂。層厚0.1m前後。

第５層　2.5GY7/1 明オリーブ灰色砂質シルト。層厚0.1～0.4m。酸化鉄の斑点が顕著。

第６層　N4/ 灰色粘土。層厚0.1～0.4m。粘性が高い。平安時代前半～後半の遺物を少量含む。４Ａ地区付近で層厚を増している。

第７層　10GY6/1緑灰色粘質シルト。層厚0.1～0.4m。上面が平安時代前期の遺構検出面。

第８層　N5/ 灰色粘土。層厚0.2～0.3m。

第９層　N7/ 灰白色シルト。層厚0.15～0.5m。

第10層　N5/ 灰色粘土。層厚0.2～0.4m。

第11層　N6/ 灰色シルト。層厚0.3m。

第12層　7.5GY8/1 明緑灰色細粒砂。層厚0.2m前後。流路ないしは洪水に関連する水成層。６Ａ地区・７Ａ地区付近のみに存在。

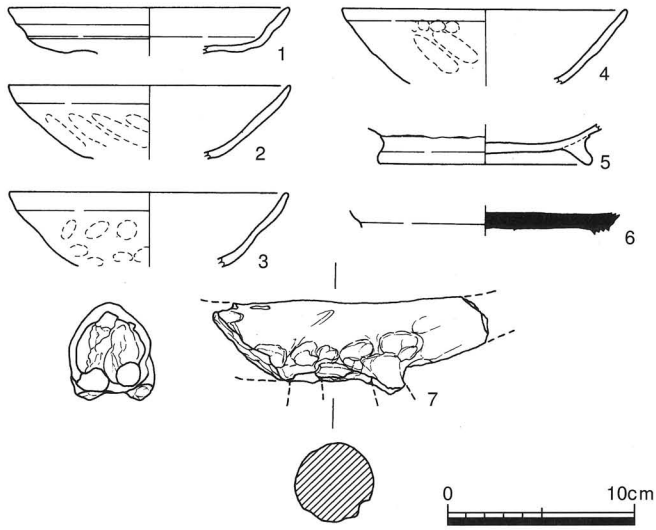
第13層　N8/ 灰白色細粒砂混じり粘質シルト。 層厚0.25～0.4m。５Ａ地区より南部に存在している。

３）検出遺構と出土遺物

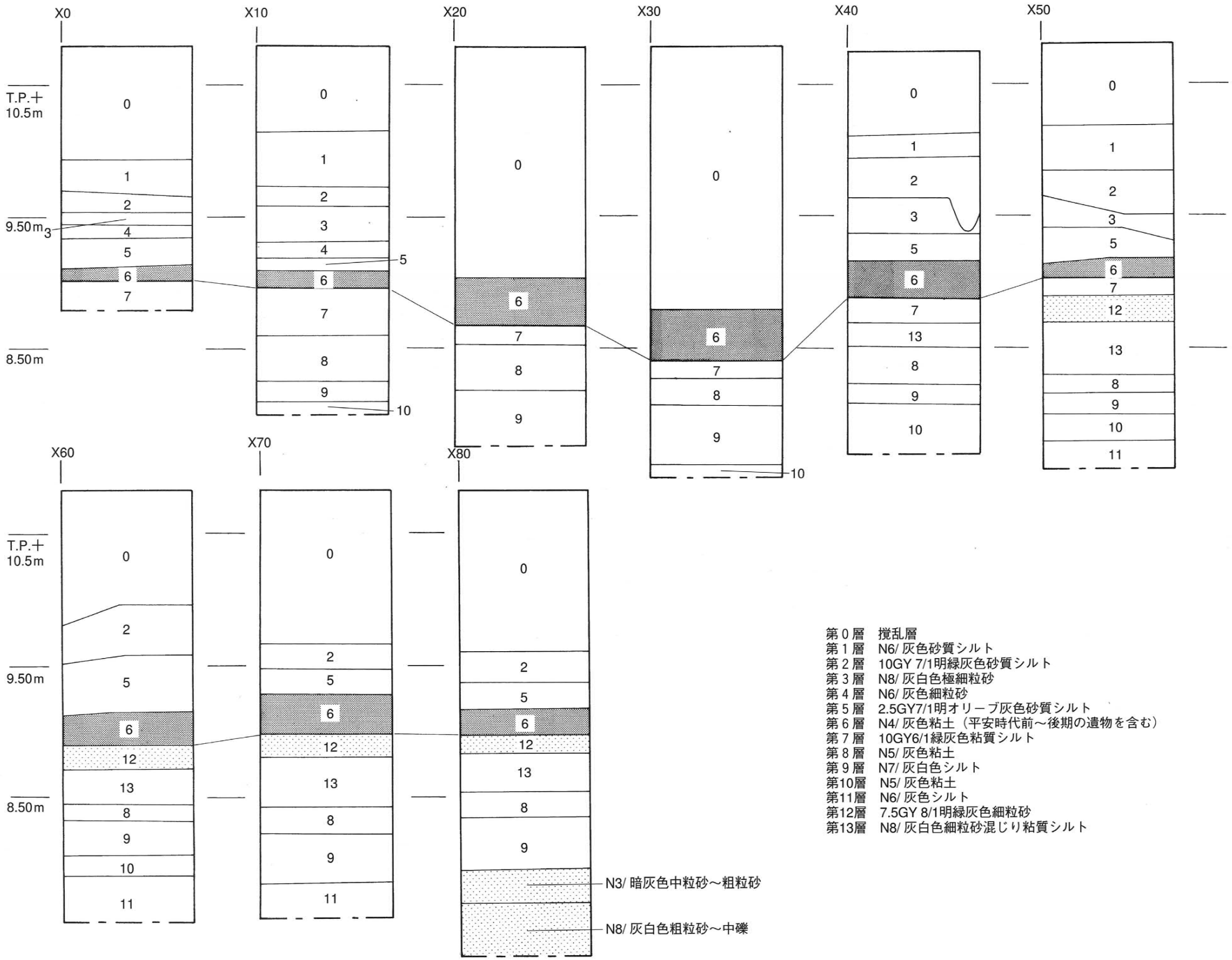
溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

１Ａ地区で検出した。検出部分では、南北方向に伸びる流路が南端部で西側に屈曲し、流路を東西方向に変えている。検出部分の法量は、東西長3.5m、南北長0.5m、幅0.35～0.4m、深さ0.05mを測る。溝底はほぼ水平で断面形状は逆台形を呈する。埋土は灰色粘土の単一層で、層中から平安時代前期（９世紀末～10世



第３図　１Ａ地区ＳＤ－１出土遺物実測図

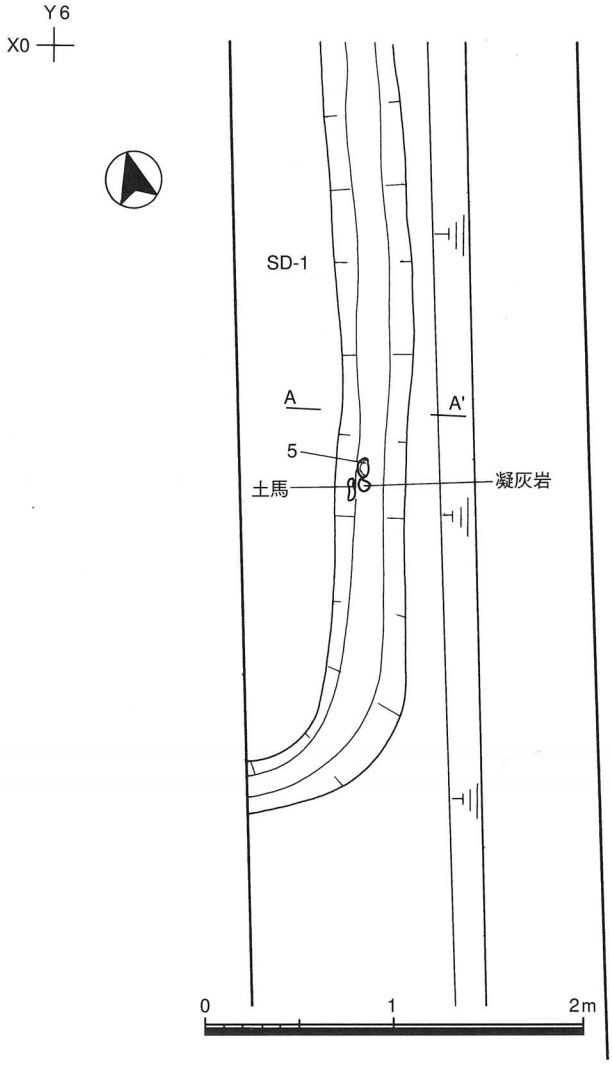


第0層　撹乱層
第1層　N6/ 灰色砂質シルト
第2層　10GY 7/1明緑灰色砂質シルト
第3層　N8/ 灰白色極細粒砂
第4層　N6/ 灰色細粒砂
第5層　2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト
第6層　N4/ 灰色粘土（平安時代前～後期の遺物を含む）
第7層　10GY6/1緑灰色粘質シルト
第8層　N5/ 灰色粘土
第9層　N7/ 灰白色シルト
第10層　N5/ 灰色粘土
第11層　N6/ 灰色シルト
第12層　7.5GY 8/1明緑灰色細粒砂
第13層　N8/ 灰白色細粒砂混じり粘質シルト

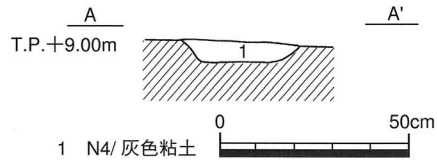
第4図　基本層序模式図

紀初頭）に比定される土師器皿・杯・台付き鉢、須恵器杯身・甕等の土器類の他、胴部が残存する土馬、一部熱変を受けた凝灰岩等が出土している。

そのうち、７点（１～７）を図化した。内訳は土師器－皿１点（１）・杯３点（２～４）・高台付き鉢１点（５）、須恵器－杯身１点（６）、土馬１点（７）である。（１）は土師器皿で約1/6程度が残存している。復原口径15㎝、器高2.3㎝を測る。口縁部外面は強いヨコナデにより体部中位に明瞭な段を有する。茶褐色の色調で、焼成は良好で胎土は精良である。土師器杯（２～４）の３点はいずれも体部の小破片である。復原口径15㎝前後を測る。やや深味のある体部で、口縁部外面はヨコナデ、以下の体部は指頭圧成形後ナデ調整が行われている。色調は（３・４）が茶褐色系、（５）が淡灰褐色である。胎土は（２）が精良で（３・４）には0.5～1㎜程度の長石・石英粒が多量に含まれている。（５）は土師器の高台付き鉢の底部と推定される。高台径11.1㎝、高台高1.3㎝を測る。淡茶褐色の色調で焼成は良好で、胎土中に大粒の長石粒が散見される。（６）は高台を有する須恵器杯身で、高台部分は大半が欠損している。淡青灰色の色調で、焼成は堅緻である。（７）は裸馬を表現した土師質焼成の土馬である。頸部・尾部・脚部の大半が欠損している。



第５図　１Ａ地区ＳＤ－１平面図（1/40）

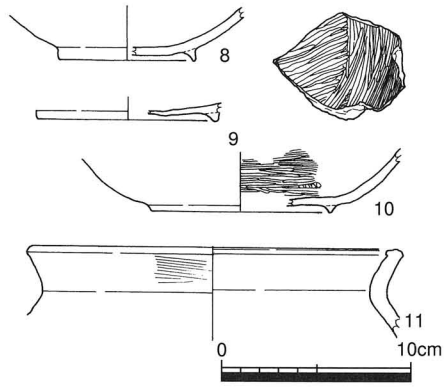


第６図　１Ａ地区ＳＤ－１断面図

写真１　ＳＤ－1内遺物出土状況（北から）

4）遺構に伴わない遺物

１Ａ区の第６層を中心に土器類が出土しているが、量的には極少量で小片化したものが大半を占めた。図化し得たものは４点（８～11）である。（８）はやや粗製の土師器椀である。高台径7.1㎝、高台高0.7㎝を測る。内面の全面に炭化物が付着しており、蓋として使用されたものと推定される。茶褐色の色調で、胎土中に３㎜程度の花崗岩が散見される。（９）は土師器杯底部の小破片である。復原高台径9.4㎝を測る。茶褐色の色調で、胎土中に１㎜未満の長石・石英粒が多く含まれている。（10）は内黒の黒色土器Ａ類椀である。高台径9.4㎝、高台高0.4㎝を測る。内面は見込みに一定方向の密なヘラミガキ、体部に水平方向のヘラミガキ調整が行われている。外面の色調は淡赤褐色で胎土は精良である。（11）は土師器甕の口縁部で、残存率は1/18程度の小破片である。復原口径19.3㎝を測る。口縁部が「く」の字に屈曲して上外方に伸びるもので、口縁端部は内側に肥厚して終わる。茶褐色の色調で、胎土２㎜程度の花崗岩が散見されるが、概ね密である。４点ともに平安時代前期（９世紀末～10世紀初頭）に比定される。



第７図　１Ａ地区 第６層出土遺物実測図

３．まとめ

今回の発掘調査は、開発道路内の管路布設に伴う線的な調査ではあったが、平安時代前期の遺構の存在と当該期の遺物包含層の広範囲な広がりが確認された。平安時代前期の遺構については、調査対象地南端に東接する地点で、昭和56年に八尾市教育委員会により実施された発掘調査で同時期の掘立柱建物や溝群が検出されており、それらの地点との有機的な関係が想定される。

一方、平安時代前期以前の状況については、工事掘削深度である現地表下3.１ｍ前後（T.P.＋7.7ｍ前後）について立会調査を実施したが、この範囲内では粘土～粘土質シルトを中心とした沖積地特有の堆積状況が看取されるのみで、遺構・遺物等は確認されなかった。ただ、西接する地点で実施された第３次調査（ＵＭ93－３）では、現地表下約3.2～4.4ｍ（T.P.＋7.4～6.2ｍ）で弥生時代前期～古墳時代前期の遺構および遺物包含層の存在が確認されており、当

写真２　調査地全景（南から）

調査地点のさらに下部においてもこれらに該当する遺構・遺物が存在する可能性が高く、今後、深層におよぶ掘削については注意をはらう必要があろう。

註記

註１　高木真光　1983「第２章 植松南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981』八尾市教育委員会

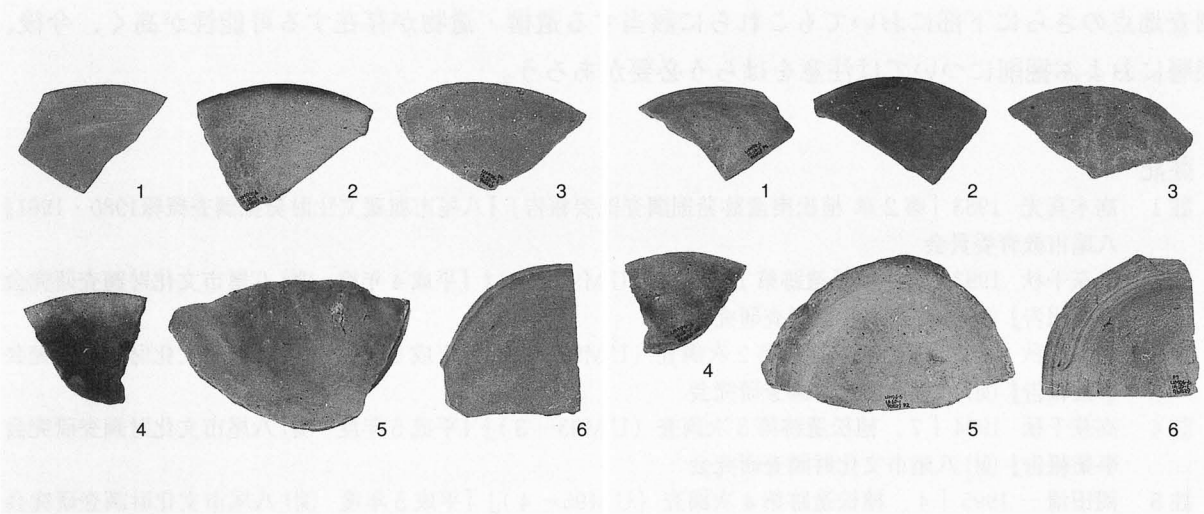
註２　高萩千秋　1993「５．植松遺跡第１次調査（ＵＭ92－１）」『平成４年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

註３　高萩千秋　1994「６．植松遺跡第２次調査（ＵＭ93－２）」『平成５年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

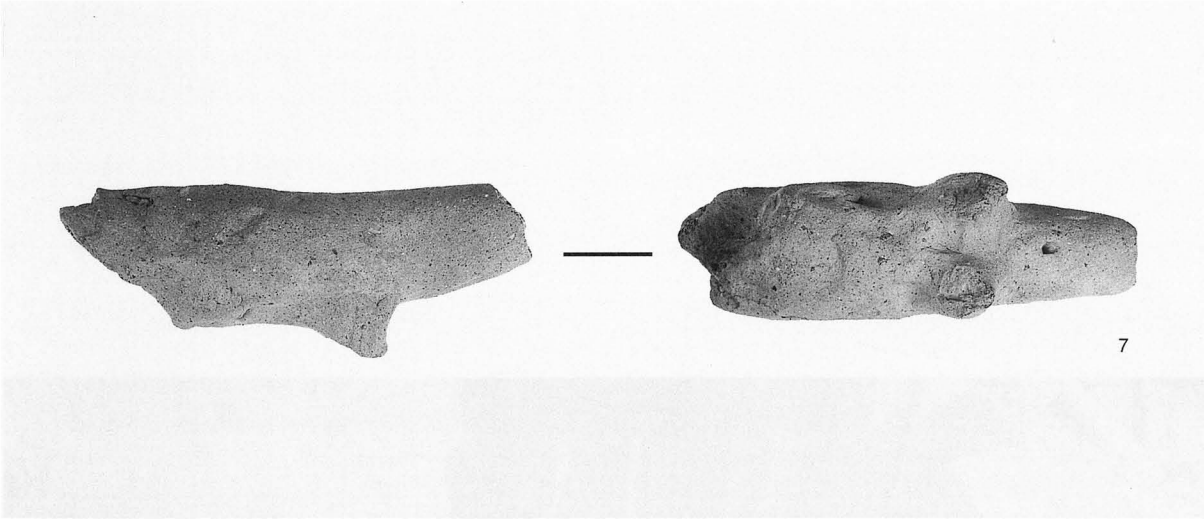
註４　高萩千秋　1994「７．植松遺跡第３次調査（ＵＭ93－３）」『平成５年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

註５　岡田清一 1995「４．植松遺跡第４次調査（ＵＭ95－４）」『平成５年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

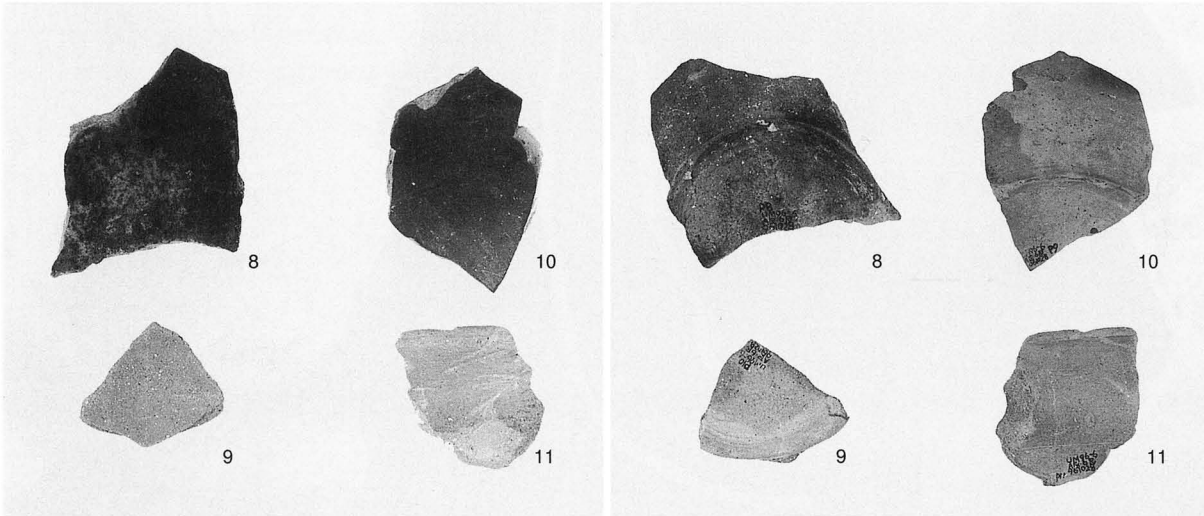
写真３　１Ａ地区 ＳＤ－１検出状況（北から）



ＳＤ－１出土遺物（１～６）左（内面）、右（外面）



ＳＤ－１出土遺物（７）



１Ａ地区第６層出土遺物（８～11）左（内面）、右（外面）

Ⅴ　亀井遺跡第４次調査（ＫＭ96－４）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市亀井町１・２丁目、跡部本町４丁目で実施した公共下水道工事（８－110工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する亀井遺跡第４次調査（ＫＭ96－４）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋403－３号　平成８年10月３日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成９年２月17日から２月21日（実働５日間）にかけて、古川晴久を調査担当者として実施した。調査面積は17.92㎡を測る。

1．調査および内業整理には村井俊子が参加した。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は古川が行った。

本　文　目　次

1．はじめに…… 25

2．調査概要…… 26

　1）調査の方法と経過…… 26

　2）層序…… 27

　3）検出遺構と出土遺物…… 28

　4）遺構に伴わない出土遺物…… 31

　5）出土遺物観察表…… 31

3．まとめ…… 32

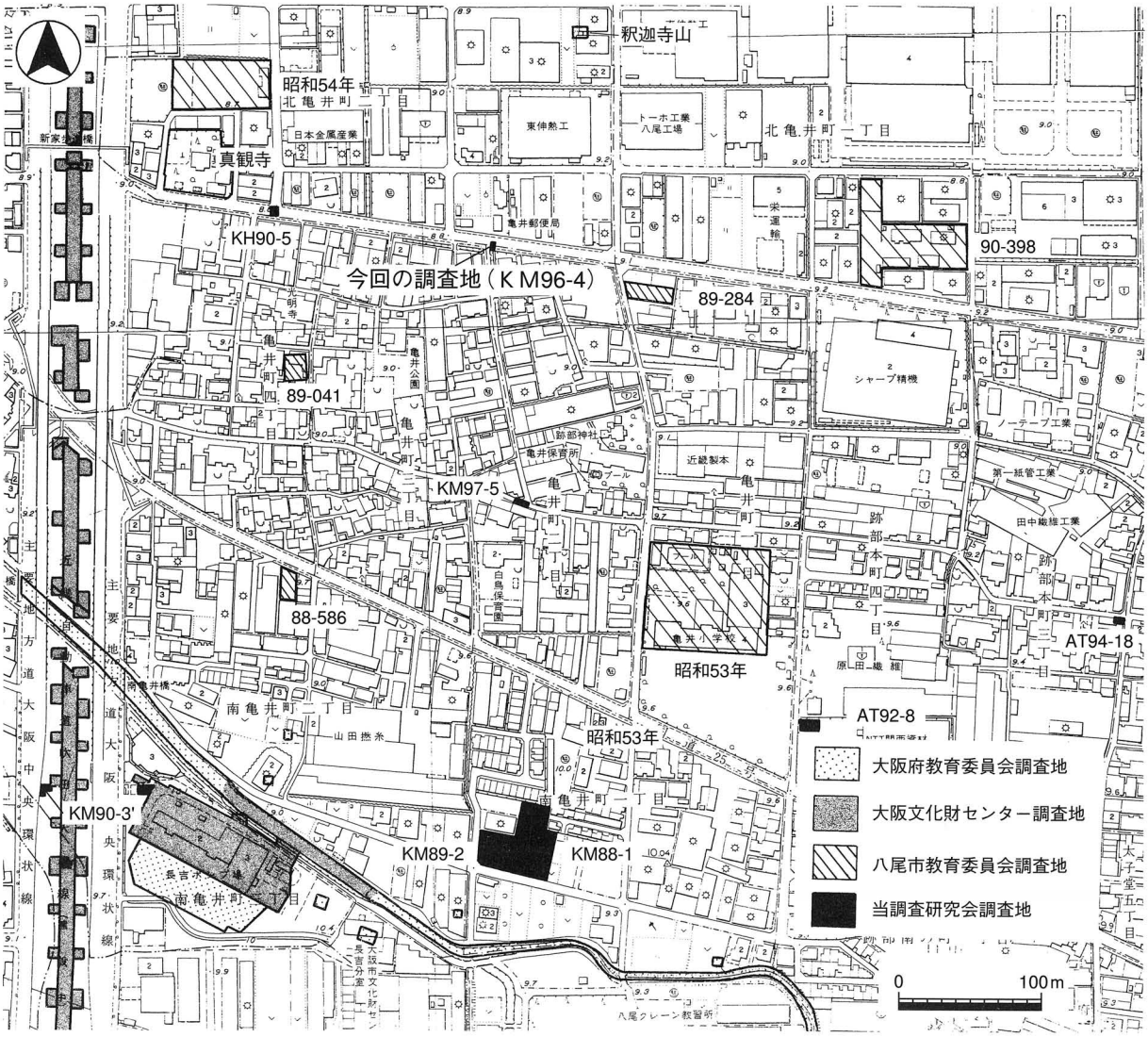
Ⅴ　亀井遺跡第４次調査（ＫＭ96－４）

１．はじめに

亀井遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画では、八尾市亀井町１～４丁目・南亀井町１～３丁目・跡部本町１～４丁目・跡部南の町１丁目と大阪市平野区長吉出戸にかけて所在する。

地理的には、河内平野南端部の沖積平野に立地し、旧大和川水系の東除川・平野川の２つの河道により形成された微高地上に位置する。同地形上で北に久宝寺遺跡、西に竹渕遺跡、東に跡部遺跡、南西に城山・長原（大阪市）遺跡が所在する。

亀井遺跡は、昭和43年（1968年）の平野川改修工事に伴う発掘調査で弥生土器が出土したことから周知のものとなった。その後、近畿自動車道建設・長吉ポンプ場築造などに伴い大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター（現・大阪府文化財調査研究センター）・八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が実施され、縄文時代晩期から近世にわたる遺構・遺物



第１図　調査地周辺図

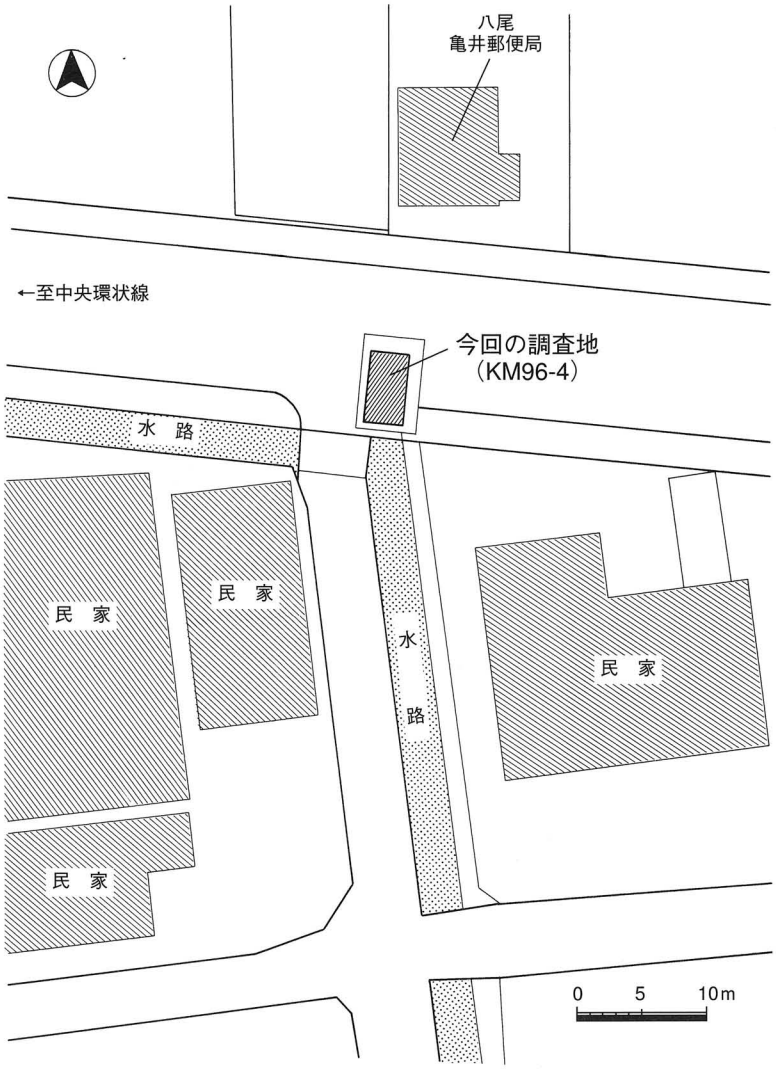
が多数検出されている。特に、弥生時代中期後半において集落をめぐる多重の大溝が確認されており、河内における拠点集落の実態を解明する上で重要な位置を占めている。

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（8－110工区）の発進立坑部分の1箇所を対象にした調査で、当調査研究会が亀井遺跡内で実施した第4次調査にあたる。調査地の平面形は、東西幅3.2m×南北幅5.6mの長方形を呈し、調査面積は17.92㎡を測る。

調査は、市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、現地表（T.P.＋8.56m）下から1.7m前後を機械掘削とし、それ以下1m前後について人力掘削を主として行い、状況に応じて機械掘削を併用して実施した。土層断面観察のため西壁（一部北壁）を残しながら掘削を行い、調査を進めた。最終的に、現地表下から約4.1m（T.P.＋4.5m）まで上記の方法で実施し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、現地表から約2.1mで室町時代中期（15世紀前半）に比定される溝（ＳＤ101）と時期不明の溝（ＳＤ102）各1条検出した。

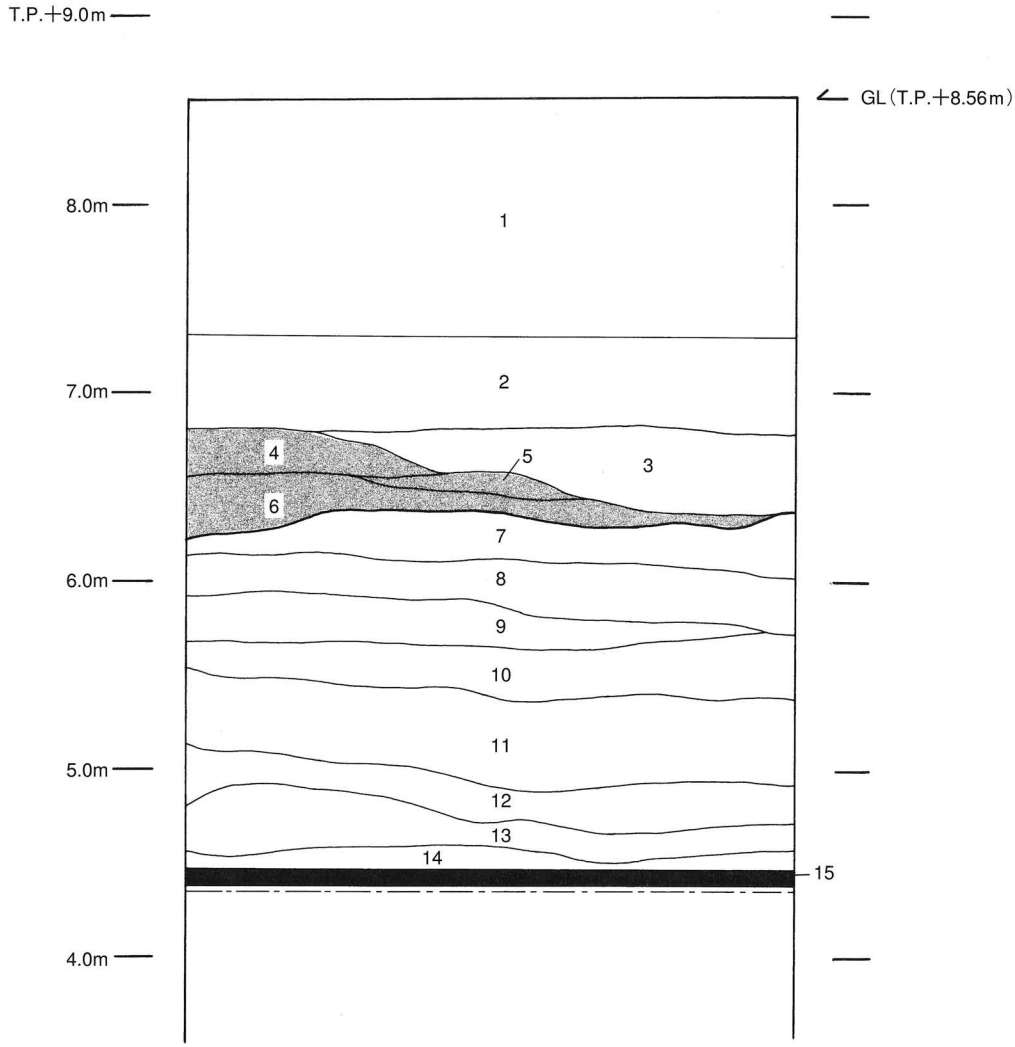


第2図　調査地位置図

写真　調査地近景（南西より）

２）層序

現地表（T.P.＋8.56m）下から1.25mで層厚約50cmを測る旧耕土を確認した。第４～６層は、しまりの弱い灰白色の粗砂を中心とする溝の埋土である。第７層より下部は、層厚20～40cmを測る灰色～緑灰色の粘土層を主体とする土層が水平に堆積しており、各層中には、植物遺体・炭酸



第１層　現代盛土
第２層　青灰色シルト質粘土(旧耕土)
第３層　薄灰色シルト質粘土（ＳＤ102埋土）
第４層　灰黄色粗砂（ＳＤ101埋土）
第５層　灰白色細砂（ＳＤ101埋土）
第６層　灰白色粗砂（ＳＤ101埋土）
第７層　薄灰色粘質土
第８層　灰色粘土
第９層　灰茶褐色粘土
第10層　灰色粘質土
第11層　灰色粘土
第12層　淡灰黒色粘土
第13層　緑灰色シルト質粘質土
第14層　緑灰色粘土
第15層　灰黒色粘土（黒色粘土）

第３図　土層断面図（西壁）

カルシウムが多く含まれている。このことから当地は、長期間にわたり河川域・沼沢地であったことが看取される。また、最終掘削面の第15層においては、中河内地域において確認されている黒色粘土層を確認した。以下に土層の層序を記す。

第１層　現代盛土。コンクリート塊・鉄筋・バラスを多数含む。
第２層　青灰色シルト質粘土。層厚50㎝。(旧耕土)
第３層　薄灰色シルト質粘土。層厚最大40㎝。(ＳＤ102埋土)
第４層　灰黄色粗砂。層厚最大25㎝。第６層より粒子大きく、しまり弱い。(ＳＤ101埋土)
第５層　灰白色細砂。層厚最大12㎝。自然木を少量含む。(ＳＤ101埋土)
第６層　灰白色粗砂。灰色の粘土ブロックを均一に含み、しまり弱い。(ＳＤ101埋土)
第７層　薄灰色粘質土。層厚15～35㎝。粘性強い。
第８層　灰色粘土。層厚20～28㎝。植物遺体を多く含む。
第９層　灰茶褐色粘土。層厚最大25㎝。炭酸カルシウム・植物遺体を均一に含む。
第10層　灰色粘質土。層厚15～30㎝。植物遺体を多く含み、粘性強い。
第11層　灰色粘土。層厚40～45㎝。粘性非常に強い。
第12層　淡灰黒色粘土。層厚15～35㎝。炭化物を若干含み、粘性強く、ややしまり強い。
第13層　緑灰色シルト質粘質土。層厚10～40㎝。灰色の微砂を層中の下部に含む。
第14層　緑灰色粘土。粘性強く、ややしまりあり。層中の上部に植物遺体を含む。
第15層　灰黒色粘土。粘性強い。この層は、部分的にしか確認していない。(黒色粘土層)

３）検出遺構と出土遺物

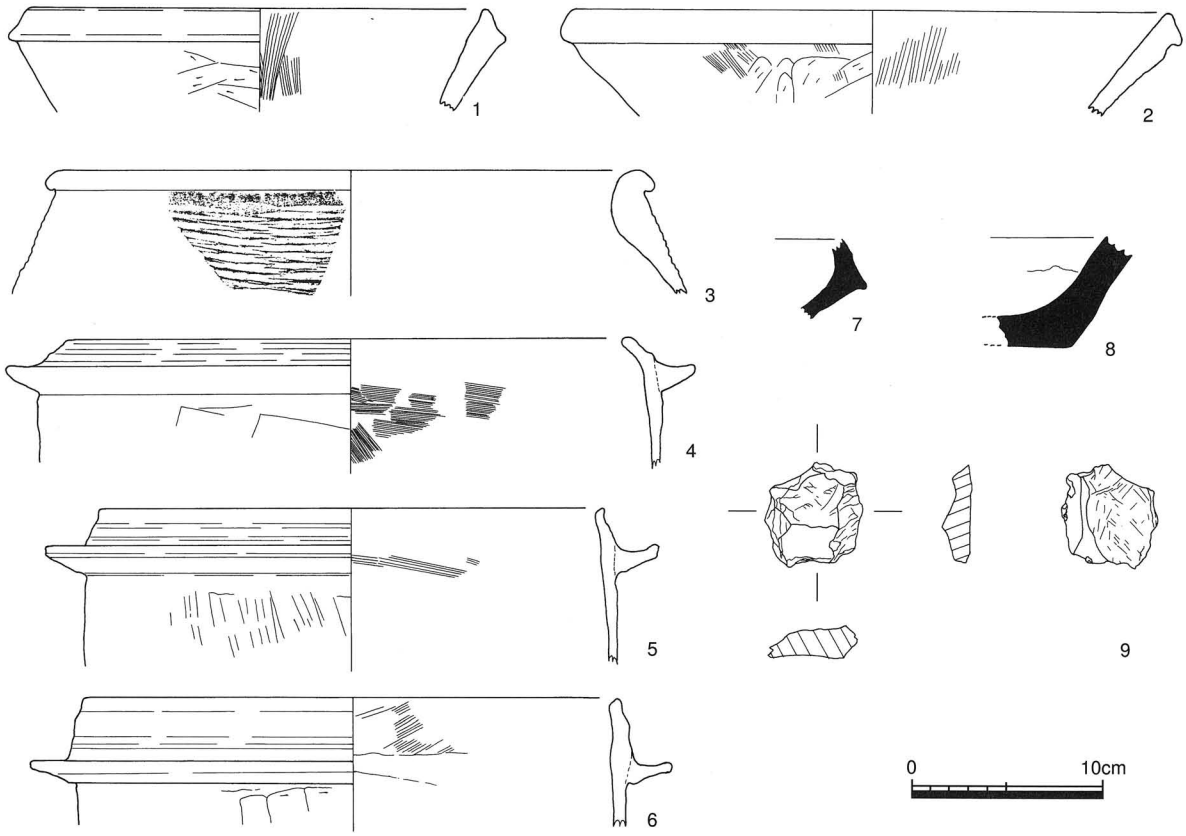
T.P.＋6.8m前後で溝（ＳＤ101）を１条検出した。

ＳＤ101

ＳＤ101は、調査区を東西方向に向かって伸びており、検出部分の上面幅約3.0m・深さ50㎝を測る。溝埋土は３層（第４～６層）から成り、何れも締まりの弱い粗砂～細砂が堆積している。遺物は、第６層を中心として室町時代前期～中期に比定される瓦質摺鉢（１・２）・瓦質甕（３）・土師器羽釜（４～６）・備前焼摺鉢（７・８）・サヌカイト剥片（９）・屋瓦（丸瓦10～13、平瓦14･15）が出土した。出土遺物は、コンテナに２箱を数える。

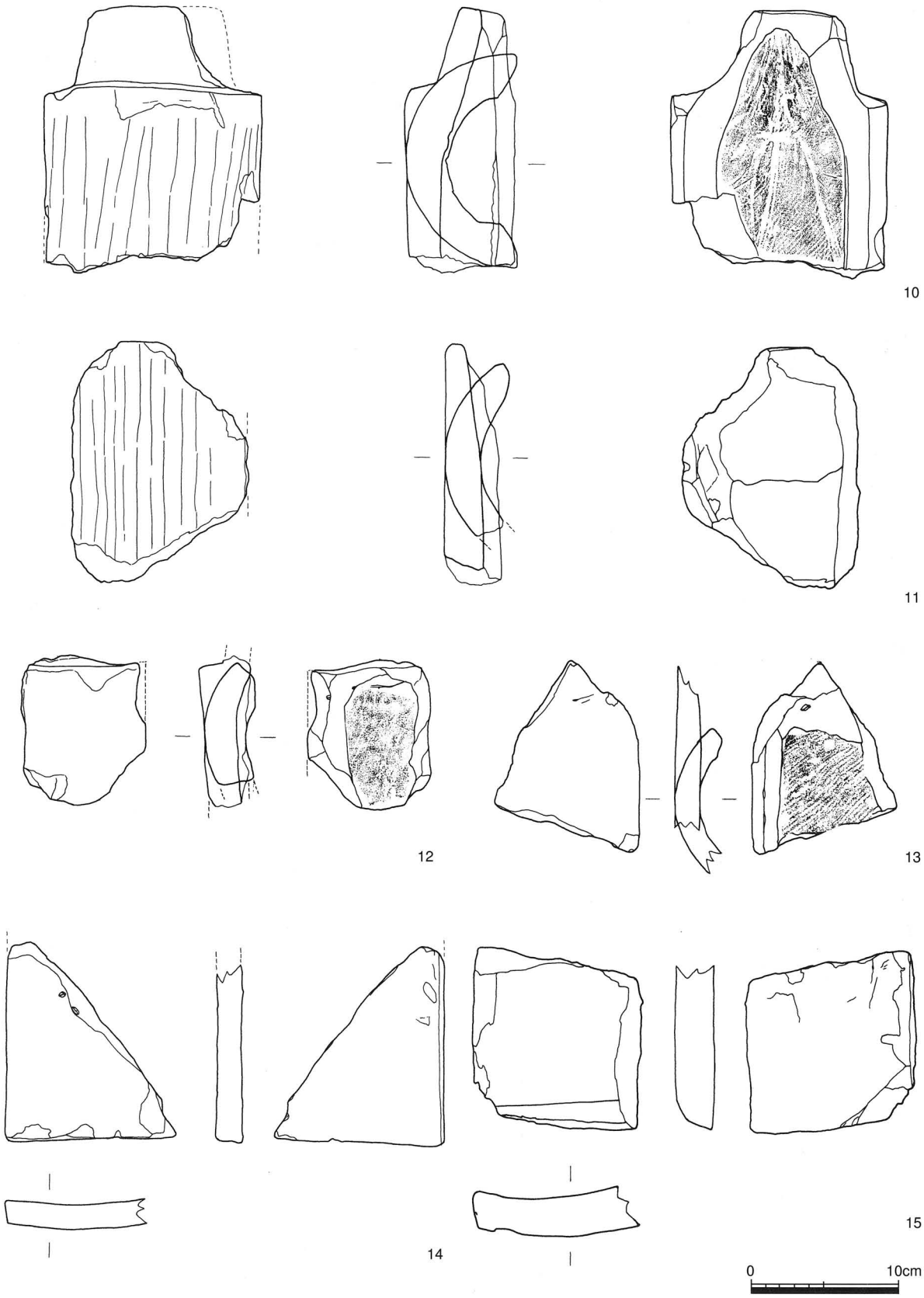
（１）は瓦質摺鉢で、体部下部は遺存していない。体部が逆ハの字形に開き、口縁部に至る。口縁端部は、尖り気味に終る。体部外面には、煤が濃厚に付着している。（２）は瓦質摺鉢で、逆ハの字形の体部より口縁部が内傾する。やや粗い作りで体部外面に粗いヘラケズリ、内面に７条/1.2㎝のおろし目を入れる。（３）は瓦器甕の小片で、口縁端部は外側に肥厚し、丸みをもつ玉縁状になる。体部外面に並行タタキを施す。色調は、薄い灰白色を呈す。（４）～（６）は土師器羽釜である。（４）は口縁部～体部上半にかけて遺存しており、口径（復元値）29.8㎝を測る。体部の張りはなく、口縁部が内傾して終る。鍔は短く、やや外上方へ伸びる。体部外面をヘラケズリ、体部内面は横方向の細かいハケメを施す。（５）は口径（復元値）26.6㎝を測る。口縁部の内傾は緩いが、口縁端部は短く外反する。体部外面ヘラケズリ、体部内面ハケメを施す。体部外面に煤が付着している。（６）は小片でやや高さのある直立した口縁部で鍔は水平方向に伸び、端面はやや面をもつ。口縁部下半あたりに接合痕が残る。（７）・（８）は備前焼摺鉢の口

縁部と底部の小片で、色調は茶褐色を呈し、胎土には白色砂粒を含む。（１）～（８）は14世紀後半～15世紀前半に比定される。同じＳＤ101内から出土した（９）はサヌカイトの剥片で片面に自然面を残し、もう片面には剥離痕が認められる。（９）は混入したものである。



第４図　ＳＤ101出土遺物実測図①

溝内から屋瓦が小片を含めて30点（うち丸瓦11点・平瓦19点）出土した。（10）は玉縁付丸瓦で広端部を欠いている。残存長17.8㎝・高さ7.3㎝・厚さ約2.4㎝を測る。凹面は、細かい布目・縄目が遺存している。凸面は、縦方向にヘラケズリした後丁寧にナデを施している。色調は灰白色を基調としていて、胎土は密で焼成は、硬質で良好である。（11）は残存長16.2㎝・高さ3.8㎝を測る。凸面の調整は、（10）とよく似ており凹面に細かい布目が遺存する。色調は両面とも薄い灰黒色を呈し、胎土は良で２㎜以下の長石を均一に含む。焼成は良である。（12）は玉縁付丸瓦で残存長10.0㎝・高さ3.4㎝を測る。凹面には細かい布目が残っている。凸面にナデ、色調は、灰白色を呈し、胎土は２～５㎜の長石を均一に含み、焼成は良である。（13）は、残存長11.5㎝・高さ1.7㎝を測る。凹面には粗い縄目そして側面は面取り後ナデをしている。凸面は、粗いナデ、色調は薄い灰黒色を呈し、胎土は３㎜以下の長石を均一に含む。（14）の平瓦は、長辺12.2㎝・厚さ1.8㎝を測る。凹面には縦方向のナデが確認できる。凸面にはタタキ痕、両面とも離れ砂がみられる。（15）は長辺11.2㎝・厚さ2.6㎝を測る。凹面にはナデを行う。凸面は、ハケ状工具によるナデ、両面とも離れ砂がみられる。２次焼成を受けており、色調は淡い黄橙色を呈す。遺物の出土状況などから判断するとＳＤ101は、短期間のうちに埋没した可能性が高いと考えられる。



第５図　ＳＤ101　出土遺物実測図②

ＳＤ102

ＳＤ102は、ＳＤ101を一部切り込んでいるが、遺物の出土もなく時期不明である。

４）遺構に伴わない出土遺物

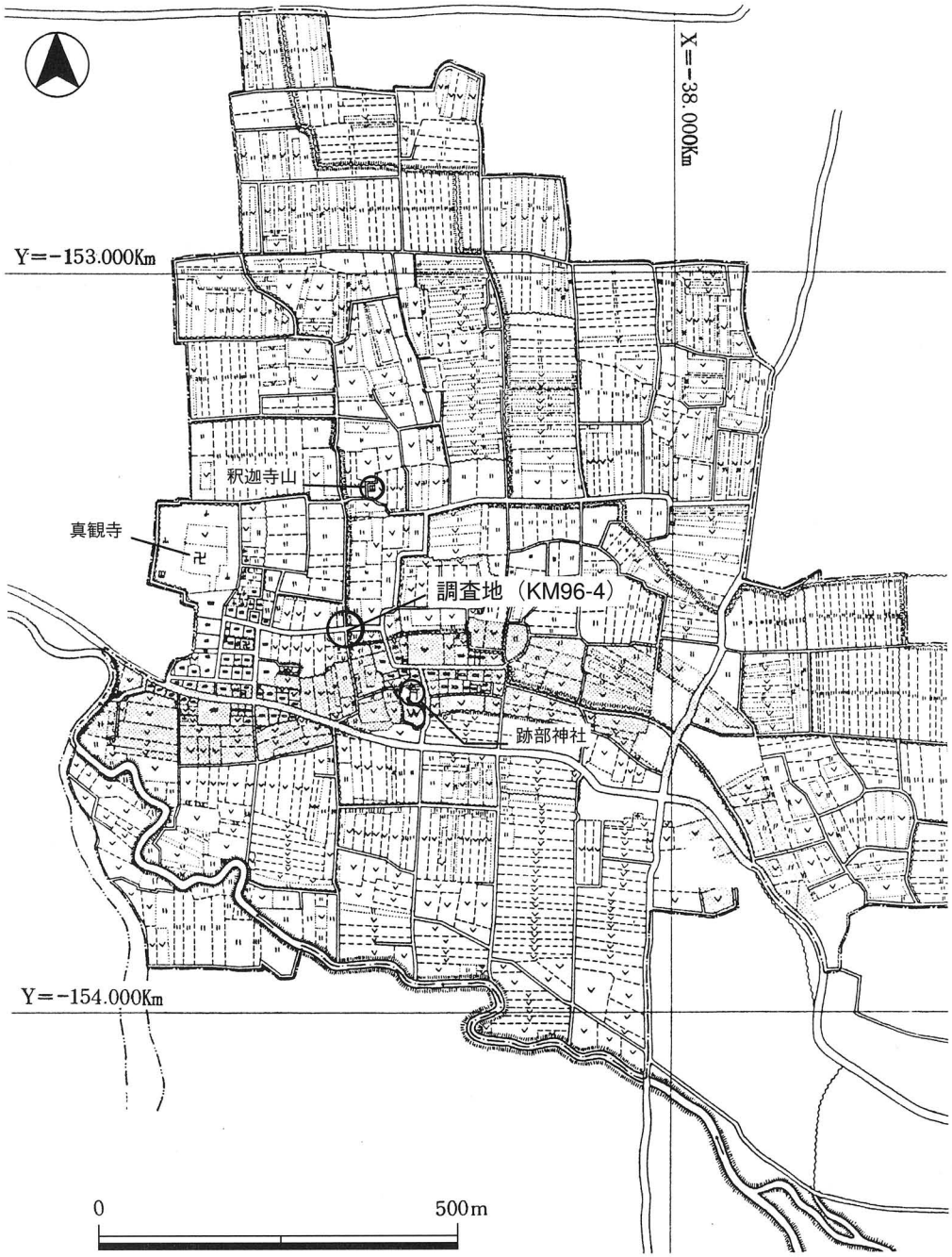
機械掘削時に第１～２層から土師器・磁器片が出土したが、いずれも小片であり図示できなかった。

５）出土遺物観察表（１～15）

番号	器種・部位	法量（cm）	色調	胎土	焼成	特徴	残存・備考
1	瓦器 摺鉢 口縁～体部	口径(復) 24.4	(外) 暗灰色 (内) 灰白色	密 2mm以下の長石を少量含む。	良	口縁端部は、面をもつ。体部が逆ハの字形に開き、口縁部に至る。 口縁部内外面は、横ナデ。体部外面は、ヨコ・ナナメ方向のヘラケズリ。体部内面に一部おろし目が残る。	極小 反転復原
2	瓦器 摺鉢 口縁～体部	口径(復) 32.4	(外) 灰白色 (内) 黒灰色	やや粗い 2mm以下の長石を少量含む。	良	口縁部ヨコナデ。 体部外面タテ方向のヘラケズリ。 体部内面に径11.2cmのおろし目を施す。	(残存) 1／3 反転復原
3	瓦器 甕 口縁～体部	口径(復) 31.0	薄灰白色	精緻	良好	玉縁状の口縁部。 口縁部直下から体部外面に並行タタキを施す。	極小 反転復原
4	土師器 羽釜 口縁～体部	口径(復) 29.8	黒～灰茶色	やや粗い	良好	口縁部（内外面）ヨコナデ。 体部外面ヘラケズリ。 体部内面は横方向の細かいハケメ。	(残存) 1／3 反転復原
5	土師器 羽釜 口縁～体部	口径(復) 26.6	(外) 淡茶褐色 (内) 淡黒灰色	やや粗い	良好	口縁部（内外面）ヨコナデ。 体部外面ヘラケズリ。 体部内面は、ハケメ。	(残存) 1／3 体部外面に煤付着。
6	土師器 羽釜 口縁～体部	口径(復) 27.6	(外) 淡灰褐色 (内) 淡黒灰色	やや粗い	良	口縁部（内外面）ヨコナデ。 体部外面ヘラケズリ。体部内面ヨコナナメ方向のハケメが一部残る。	極小 接合痕あり。
7	備前 摺鉢 口縁	器高(残) 4.0	茶褐色	精緻 白色砂粒を含む	良好	逆ハの字形に開く体部より、口縁部が幅広く内傾する。	極小
8	備前 摺鉢 底部	器高(残) 5.7	茶褐色	精緻 白色砂粒を含む	良好	底面は、平坦である。	極小
9	サヌカイト 剥片	現存長 5.1 最大幅 4.9 厚さ 1.4	暗灰色	精緻		片面は、自然面を多く残し、風化している。 もう片面には剥離痕が認められる。	
10	丸瓦	残存長 17.8 高さ 7.3 厚さ 2.4	(外) 淡白色 (内) 灰白色	密 3mm以下の長石を少量含む。	良好	凹面－細かい布目、縄目。 凸面－タテ方向のヘラケズリ後丁寧なナデ。 側面－面取り、ナデ。	
11	丸瓦	残存長 16.2 高さ 3.8	薄灰黒色	良 2mm以下の長石を均一に含む。	良	凹面－細かい布目。 凸面－ケズリ後丁寧なナデ。	
12	丸瓦	残存長 10.0 高さ 3.4	灰白色	良 2～5mmの長石を均一に含む。	良	凹面－細かい布目。 凸面－ナデ（磨滅のため不明瞭） 側面－面取り、ナデ。	
13	丸瓦	残存長 11.5 高さ 1.7	薄灰黒色	良 3mm以下の長石を均一に含む。	良	凹面－粗い縄目。 凸面－ナデ。 側面－ナデ。	
14	平瓦	長辺 12.2 厚さ 1.8	灰黒色	密 2mm以下の長石・石英を多量に含む。	良	凹面－縦方向のナデ、離れ砂。 凸面－タタキ、離れ砂。	
15	平瓦	長辺 12.2 厚さ 2.6	淡黄橙色	密	良	凹面－ナデ、離れ砂。 凸面－ハケ状工具によるナデ、離れ砂。	２次焼成を受けている。

3．まとめ

今回の調査では、室町時代中期に比定される溝を確認した。そして、溝内より屋瓦がある程度まとまって出土した。調査地から約200m西には、応永元年（1394）畠山満家の発願によって創建され、現在でも法灯を灯す真観寺や千光寺と称する大和西大寺の末寺にあたる釈迦堂遺址と考えられる釈迦寺山があり、鎌倉時代～室町時代にかけての古瓦が採集されている。特に、真観寺に関しては、寺域が確定しておらず17世紀末の境内図の写しを残すのみである。今回検出された遺構・遺物は上記の何れかに関連した可能性が高いものと推定される。弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が期待されたが、当地では全く確認できなかった。しかし、土層堆積状況から長期間にわたっての活発な沖積作用が確認できた。

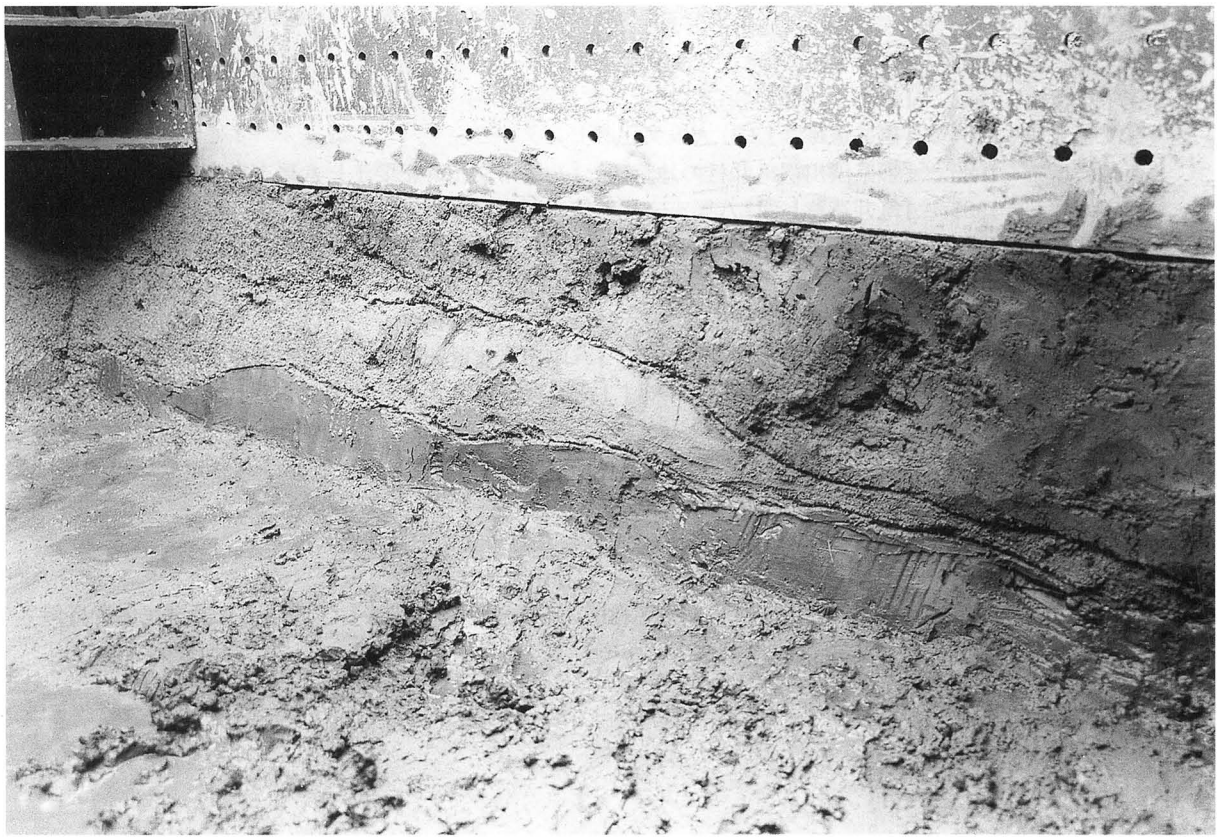


第６図　地籍図(幕末～明治時代)にみる調査地周辺図

〔参考文献〕

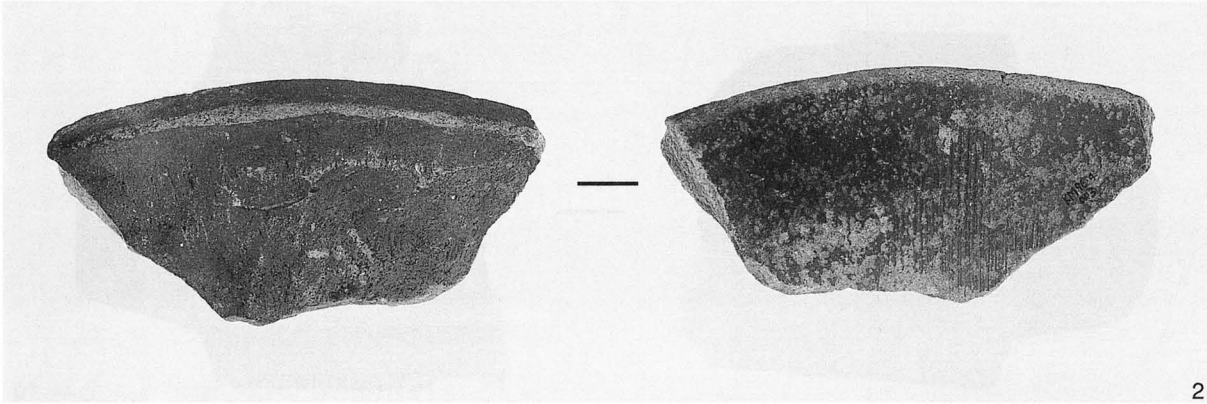
・酒井龍一他　1982　『亀井遺跡』(財) 大阪文化財センター
・赤木克視他　1983　『亀井北（その３）』(財) 大阪文化財センター
・宮崎泰史他　1984　『亀井遺跡Ⅱ』(財) 大阪文化財センター
・西村　歩　1985　「堺県渋川郡亀井村の地籍図」『八尾市文化財紀要Ⅰ』八尾市教育委員会
・近江俊秀　1989　『亀井遺跡』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1989　「10．亀井遺跡（ＫＭ90－３）」『八尾市文化財調査研究会年報』(財) 八尾市文化財調査研究会
・森井貞雄　1989　『亀井遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会
・米田敏幸　1991　「跡部遺跡発掘調査報告書」『八尾市文化財紀要５』八尾市教育委員会
・高萩千秋　1991　「Ⅰ久宝寺遺跡（第５次）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・成海佳子　1991　「11．亀井遺跡第３次調査（ＫＭ90－3）」『平成２年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・八尾市立歴史民俗資料館編　1993　『動乱の河内』　八尾市立歴史民俗資料館
・森井貞雄　1996　『亀井遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会
・八尾市立歴史民俗資料館編　1997　『古文書・絵図にみる近世の常光寺』　八尾市立歴史民俗資料館

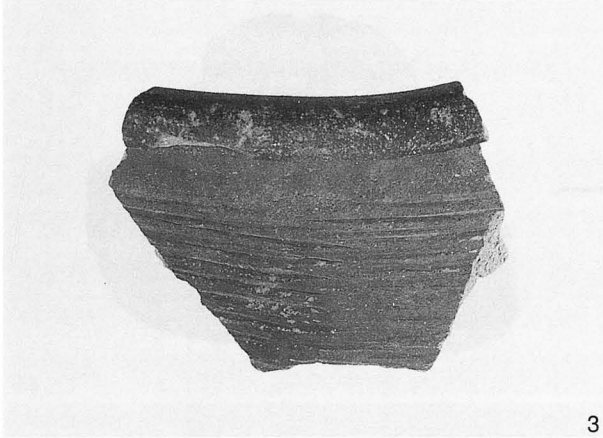
図版一

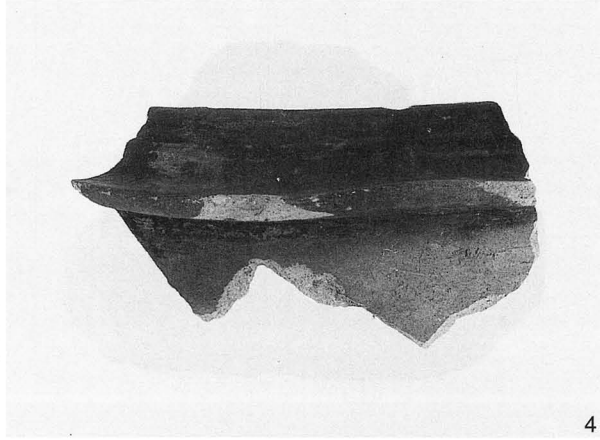


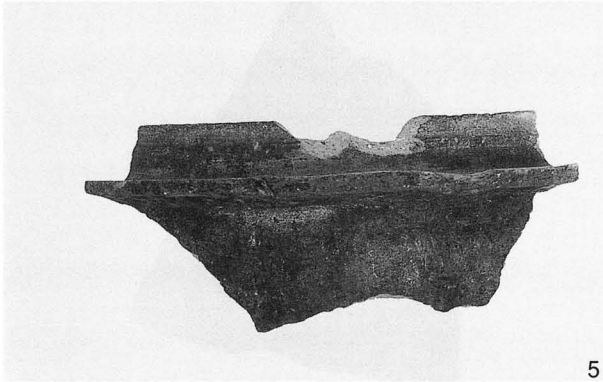
調査区西壁（北東から）

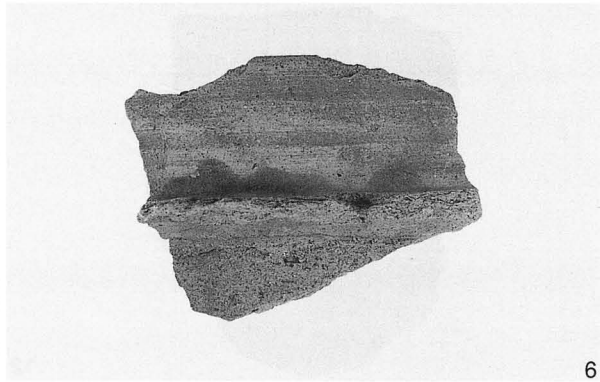
調査区西壁（南東から）

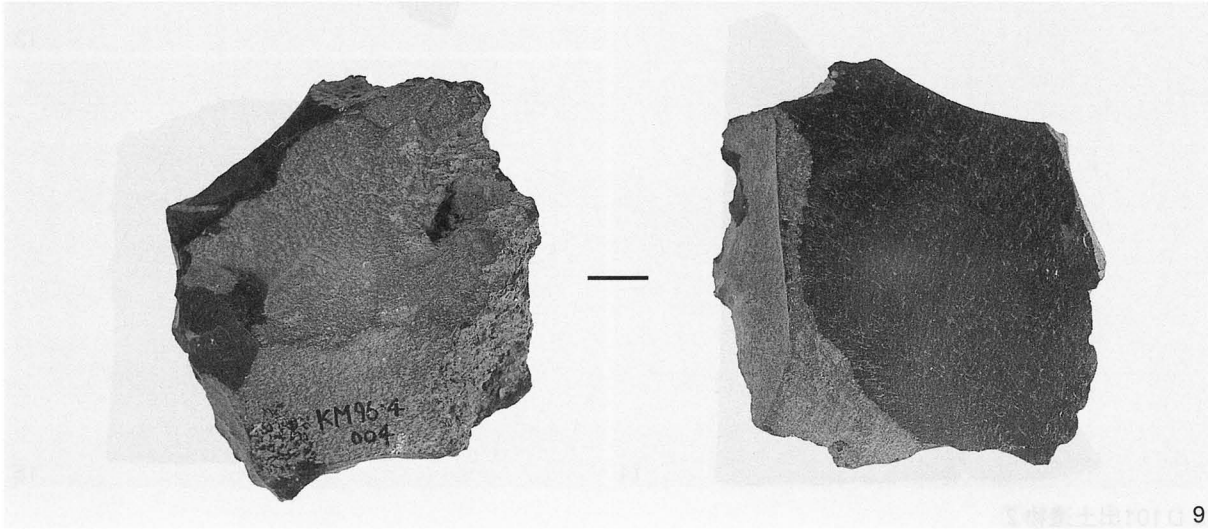




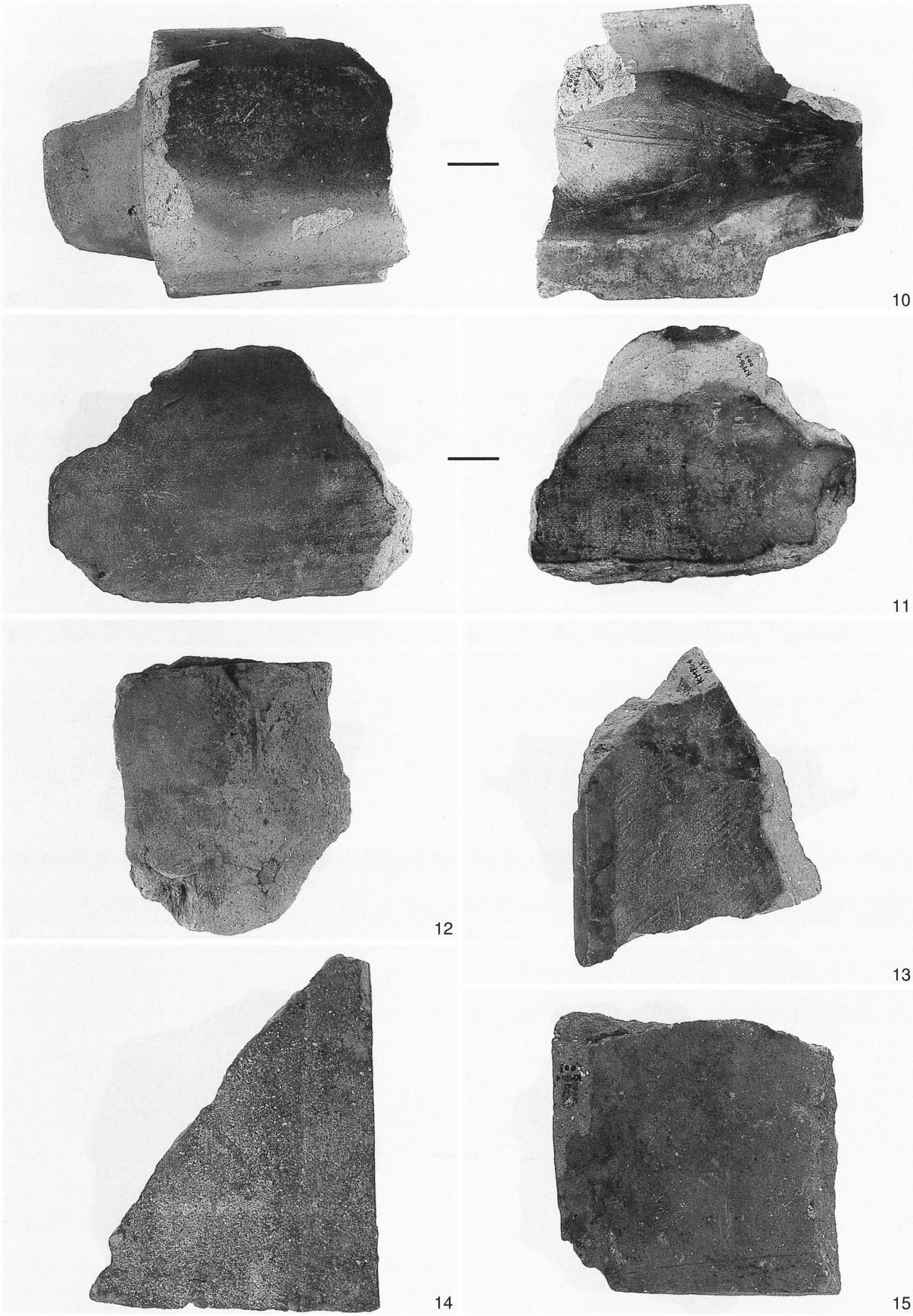








ＳＤ101出土遺物①



ＳＤ101出土遺物②

Ⅵ　萱振遺跡第21次調査（ＫＦ96－21）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市萱振町７丁目地内で実施した公共下水道工事（７－121工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本調査で報告する萱振遺跡第21次調査（ＫＦ96－21）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋55号　平成８年４月18日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成８年７月17日から９月２日（実働12日間）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は13㎡を測る。調査においては辻野優子・中谷嘉多・中村百合が参加した。

1．本書の執筆・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

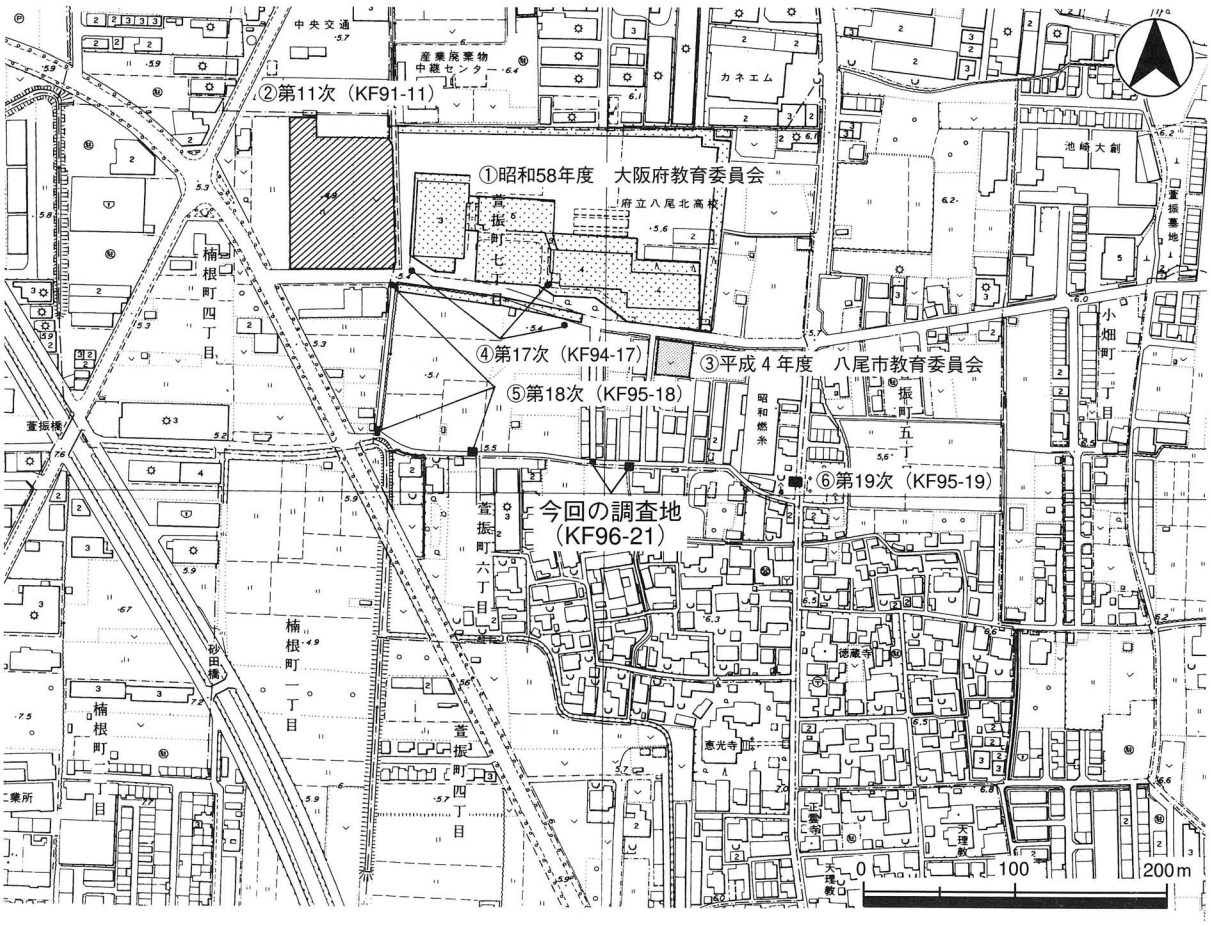
1．はじめに……37
2．調査概要……39
1）調査の方法と経過……39
2）基本層序……39
3）検出遺構と出土遺物……40
3．まとめ……41

Ⅵ　萱振遺跡第21次調査（KF96－21）

1．はじめに

萱振遺跡は、南東から北西方向に流れる旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地上に位置する。さらにその二河川のほぼ中央部にあたる最も低いところを楠根川が南東から北西方向に流下している。遺跡の推定範囲は、この楠根川右岸の萱振町を中心に東西約１㎞・南北約２㎞を測る南北方向に長い地域になる。現在の行政区画上では、緑ヶ丘１～４丁目、萱振町１～７丁目、泉町１～３丁目、桂町１～３丁目、幸町１・３・４・６丁目に所在する。当遺跡の周辺には、北西に山賀遺跡、南に東郷遺跡が隣接し、北の東大阪市域に至っては、新家遺跡・若江遺跡・瓜生堂遺跡が広がっている。

ここで当遺跡の歴史的環境をみると、北部の泉町２丁目に位置する西郡天神社には、飛鳥時代後半から奈良時代頃を中心にこの地域に勢力を持った錦織連一族の氏寺とされる「西郡廃寺」の推定地が所在する。さらに今回の調査地から東へ約100ｍ地点には、式内社「加津良神社」（写真１）があり、現在は牛頭天王と称し、疫病を治める神として祀られている。考古学的に当遺跡は現在まで、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会によって多数の調査が実施されており、その結果、弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが判明している。その中でも特



第１図　調査地位置および周辺図

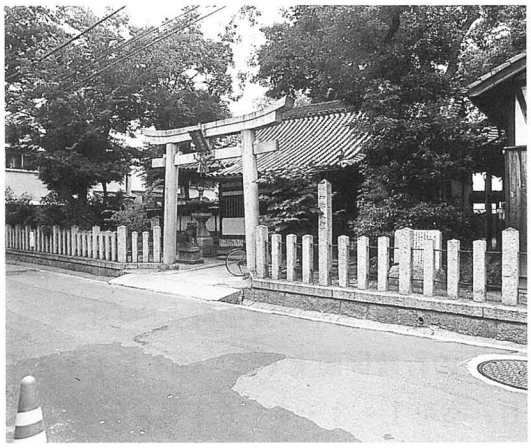


写真１　式内社「加津良神社」（南西から）

写真２　復元・保存された「萱振１号墳」

筆すべきものは、昭和57年度に当遺跡のほぼ中央部にあたる萱振７丁目において、大阪府教育委員会によって実施された府立八尾北高校建設工事に伴う調査（①）がある。（※○数字については表参照）この調査では、弥生時代前期から中世までの生活面が連綿と検出され、遺物も大量に出土した。特に古墳時代前期においては、１辺約27ｍを測る方墳となる「萱振１号墳」（写真２）が検出され、墳頂部からは靫形埴輪・鰭付埴輪・朝顔形円筒埴輪が出土した。この方墳の発見は、河内の低地部で発見された古墳のなかでも最大級であり、埴輪を含め平地における古墳の様相を究明する上で貴重な成果と言える。

周辺における調査一覧表

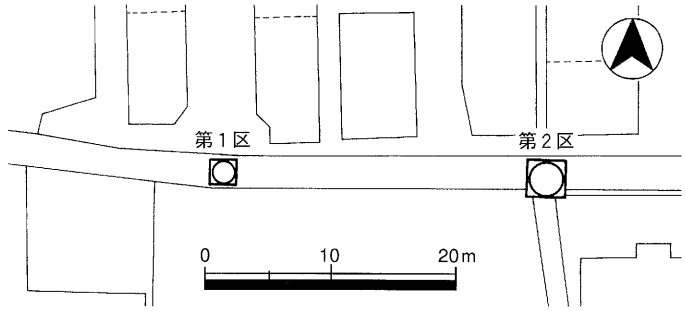
No.	調査主体	調査期間	面積（m²）	主な検出遺構	文　献
①	大阪府教育委員会	昭和58年６月～昭和59年11月	14,000	弥生時代前期－自然流路１、弥生時代中期－溝２、水田跡（大畦畔）、弥生時代後期－掘立柱建物17・井戸１・土坑26・溝26・自然流路１、古墳時代－方墳１・方形周溝墓４・土壙墓１・土器棺墓１・祭祀遺構４・井戸７・土坑30以上、奈良時代－掘立柱建物10・井戸１・溝５・自然流路１、平安時代－井戸３・火葬墓１、中世－井戸38・土坑13・溝30以上〈※古墳時代の遺構および中世の溝の数値（数字）については不確定である〉	広瀬雅信　1992『萱振遺跡　大阪府文化財調査報告書　第39輯』大阪府教育委員会
②	当調査研究会（KF91-11）	平成３年８月～９月	500	弥生時代後期末～古墳時代初頭－土坑１・溝４・小穴２・水田？、古墳時代前期－土坑３・溝３、古墳時代中期－土坑４・溝３・小穴３、近世－井戸３、時期不明－小穴３	高萩千秋　1992.9「Ⅸ　萱振遺跡第11次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告34』
③	八尾市教育委員会（92-006）	平成４年４月	10.5	古墳時代前期－小穴１、古墳時代中期～後期－溝１、近世－瓦導管	渚斎　1993.3「萱振遺跡の調査」『八尾市文化財調査報告27　平成４年度国庫補助事業　八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市教育委員会
④	当調査研究会（KF94-17）	平成７年３月	20	弥生時代後期－埋没河川、平安時代末期－水田？	成海佳子　1996「Ⅴ　萱振遺跡第17次調査」『萱振遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告52』
⑤	当調査研究会（KF95-18）	平成７年８月～11月	58	弥生時代前期－自然流路	岡田清一　1996「Ⅴ　萱振遺跡第18次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告53』
⑥	当調査研究会（KF95-19）	平成７年９月～平成８年２月	38.4	古墳時代初頭以前－自然流路、平安時代後期－溝１	西村公助　1996「Ⅵ　萱振遺跡第18次調査」『（財）八尾市文化財調査研究会報告53』

ここで今回の調査地周辺における当研究会の調査をみると、平成３年度に府立八尾北高校の西側にあたる地点で実施した第11次調査（②）で、弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての集落遺構が見つかっている。また、今回と同様に公共下水道工事に伴う調査として平成６年度に第17次（④）、平成７年度に第18次（⑤）・第19次（⑥）の３件が実施されており、弥生時代～中世に至る河川や沼沢地・水田等が複合的に確認されている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（７－121工区）に伴う発掘調査で、当研究会が萱振遺跡内で実施する第21次調査にあたる。調査対象となった立坑は西側の第１区・東側の第２区の２箇所で、双方ともライナープレートと呼ばれる軽量曲板を立て込む工法のもので、総面積は約13㎡を測る。



第２図　調査区位置図

各立坑の面積および掘削深度は、第１区が面積約４㎡・深度については工事掘削が現地表から５ｍ前後であるが、現地表から２ｍ以下は土壌改良による薬剤注入のため、平面および壁面を観察することは不可能であり、その部分については調査を断念せざるを得なかった。一方の第２区は、面積約９㎡・深度は工事掘削範囲となる現地表下4.5ｍ前後まで調査した。

掘削の方法は、各地区とも現地盤から1.0ｍ前後の盛土・撹乱層部分を重機によって排除した後、以下工事掘削深度まで層理に従い、重機と人力を併用して遺構・遺物の検出に努めた。

２）基本層序

２箇所で９層の土層を検出した。双方を対比すると、いずれも現地表から1.0ｍ前後は既設の水道・ガス管等の埋設物による撹乱および盛土による堆積層であるが、その下層の標高４～５ｍ間では様相が異なる。それは第１区が三層から成る近世期の整地層あるいは生活面の存在を示唆する堆積層であるのに対し、第２区では今回第５層とした、層厚1.6ｍ前後を測る比較的厚い砂の堆積層をみるに至った。この砂層の堆積は、周辺における既往の調査結果から平安時代～中世の時期間に埋没した河川と解釈される。

以下、検出できた各層について両地区まとめて列記する。

第１層：盛土および撹乱層。層厚および内容については既述したとおり。現地表の標高は、第１区がT.P.＋5.933ｍ、第２区がT.P.＋5.775ｍをそれぞれ測る。

※以下、第２～４層は第１区のみ検出。

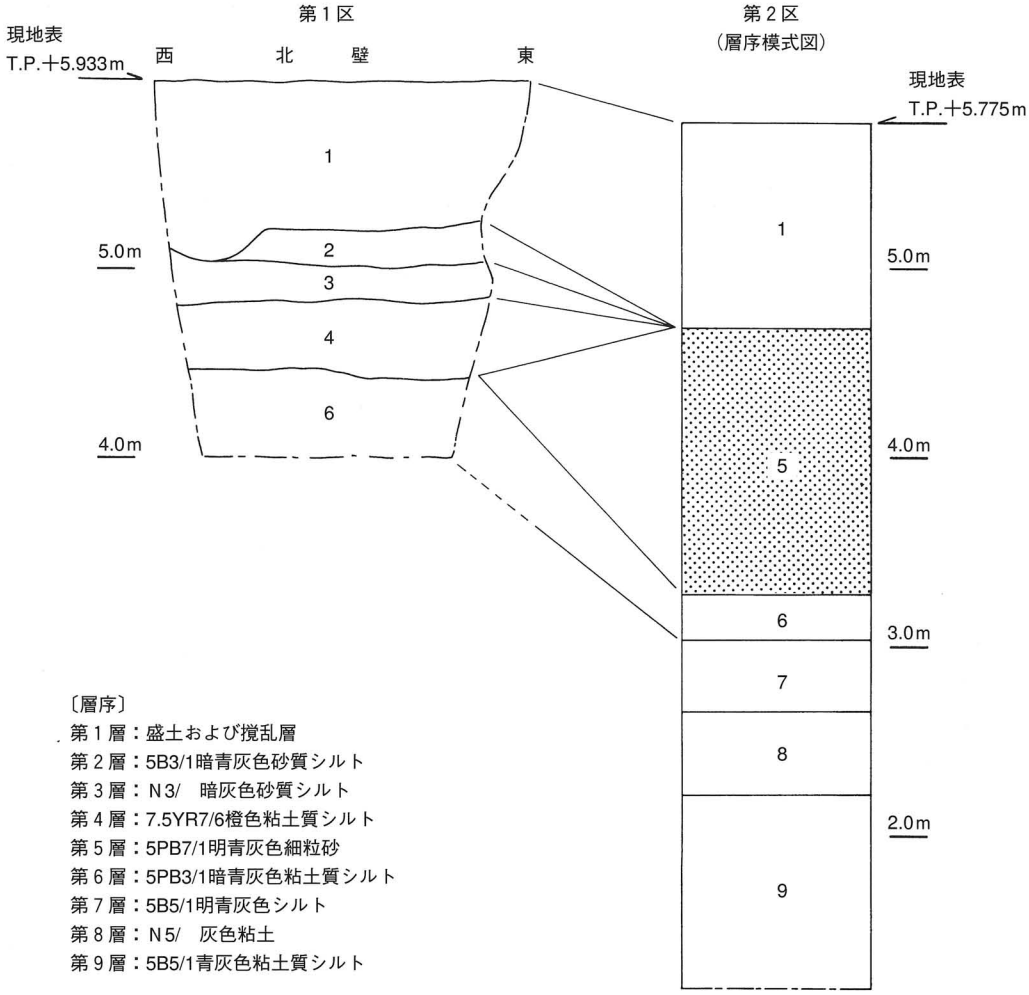
第２層：5Ｂ3/1暗青灰色砂質シルト。層厚20㎝前後。近世の国産陶磁器片を含む。

第３層：Ｎ3/暗灰色砂質シルト。層厚20㎝前後。近世の瓦片を含む。

第４層：7.5YR7/6橙色粘土質シルト。層厚30㎝前後。奈良時代の羽釜、中世の軒丸瓦・平瓦、近世の青磁・国産陶磁器のそれぞれ破片が含まれる。

第５層：5PB7/1明青灰色細粒砂。第２区のみの検出。層厚及び内容については既述したとおり。

第６層：5PB3/1暗青灰色粘土質シルト。両地区に存在するが、第１区の層厚については既述し



第３図　土層断面図

たとおり。

第７層：5B5/1明青灰色シルト。層厚30～35㎝。

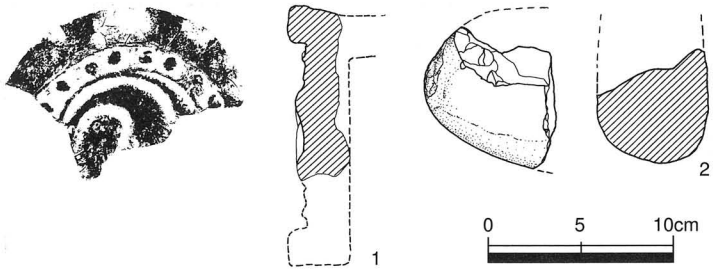
第８層：N5/灰色粘土。層厚40～45㎝。アシ等の植物遺体が混入する。

第９層：5B5/1青灰色粘土質シルト。層厚1.0m以上。

３）検出遺構と出土遺物

両地区とも遺構は検出されなかった。

遺物は、第１区からは第２～３層内で近世の平瓦・青磁・摺鉢、中世の土師皿・軒丸瓦・平瓦、奈良時代の須恵器の壺と甕のそれぞれ小破片の他、時期不明の叩き石１点が出土した。そのなかで図化できたものは、中世の軒丸瓦（１）と時期不明の叩き石（２）の２点である。軒丸瓦は三巴文で巴は太く、尾は相互に連なり、全体的に文様の隆起は大きい。また、瓦当面には離れ砂が認められる。時期的にその形態から鎌倉時代初頭頃の所産とみられる。叩き石は



第４図　第１区出土遺物実測図

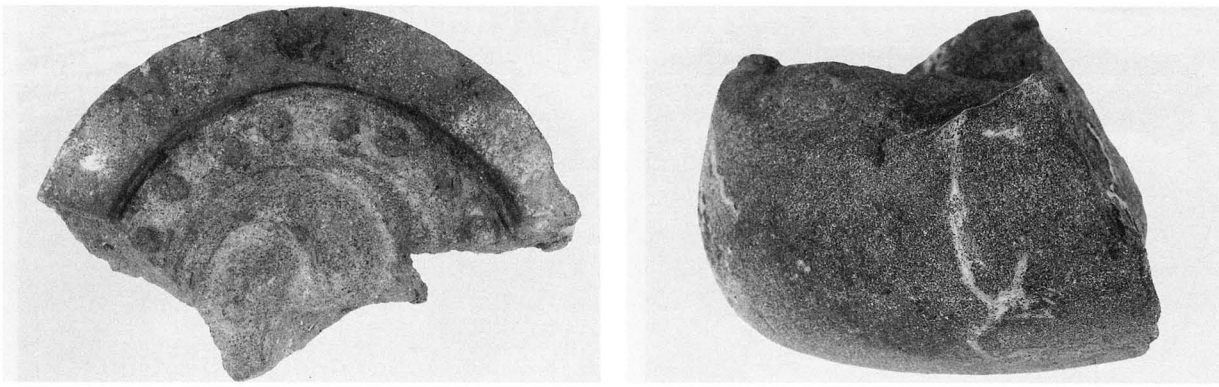


写真３　第１区　出土遺物＜軒丸瓦（左）・叩き石（右）＞

砂岩製の円礫を素材とするもので、残存する片端部には敲打痕が認められる。一方の第２区では、平安時代～中世にかけての埋没河川とみられる第５層内から、流れ込みによる弥生土器の甕の小破片が数点出土したが図化できるものはなかった。

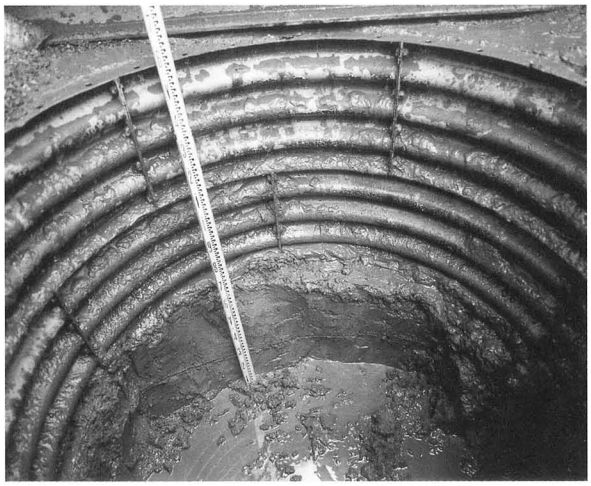
３．まとめ

今回の調査は、２箇所とも径２～３ｍのライナープレートを使用した非常に狭小な調査区であったため、結果的に土層観察と遺物採集に主眼をおくものとなった。第１区では、土質の悪条件から現地表下２ｍ前後までしか調査はできなかったが、近世の整地層とも考えられる土層(第２～４層)内に奈良時代～鎌倉時代に比定される遺物が包含されていたことは、該期の集落が付近に存在することを明示していると言えよう。さらに、三巴文の軒丸瓦をはじめ瓦類の出土は、「西郡廃寺」の寺院存続時期を考察するにあたって興味がもたれる。

一方、第２区の第５層については周辺における既往の調査から、平安時代～中世の時期間に埋没した河川と確認・判断した所為である。それは、第17次（④）の平安時代末期～鎌倉時代初頭の洪水層、第18次（⑤）の平安時代に比定される河川跡、第19次（⑥）の平安時代末期の溝１条、さらに大阪府教育委員会が実施した府立八尾北高校建設（①）に伴う調査では平安時代の井戸１基といった調査結果から、層位・レベル的にほぼ合致するものである。これらのことから少なくとも平安時代、当地周辺においては、その遺構・遺物の希薄さと河川の氾濫にみられる不安定な土地条件から察せられるように、人が生活を営む上では不向きな沼沢地、あるいは氾濫原状を呈した自然景観が想定される。また、大阪府教育委員会の府立八尾北高校建設（①）に伴う調査で中世の条里遺構に伴う大溝４条（ＳＤ8013～8016）および道路（ＳＦ8001Ａ・Ｂ）の検出、当研究会の第17次（④）・第18次（⑤）で確認されている平安時代末期に洪水によって埋没したとみられる水田耕土は、文献にも見られる平安時代末期～鎌倉時代初頭頃に形成された条里地割を傍証するものであり、今後周辺の調査の累積によってその広がりが徐々に解き明かされよう。

第１区　南壁　第１層～第４層
標高4.5m～6.0m付近（北から）

第１区　西壁と北壁　第１層～第４層
標高4.5m～6.0m付近（南東から）



第２区　南壁　第６層・第７層
標高2.5m～3.0m付近（北から）

第２区　南壁　第８層・第９層
標高1.5m～2.5m付近（北から）

調査区近景（西から）

調査風景（東から）

Ⅶ　木の本遺跡第７次調査（ＳＫ96－７）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市木の本１丁目地内で実施した公共下水道工事（８－１工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本調査で報告する木の本遺跡第７次調査（ＳＫ96－7）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋146－３号 平成８年６月14日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成８年10月１日から同月15日（実働４日間）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は52㎡を測る。調査においては岸田靖子・辻野優子・中村百合・西田真紀が参加した。

1．本書の執筆・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

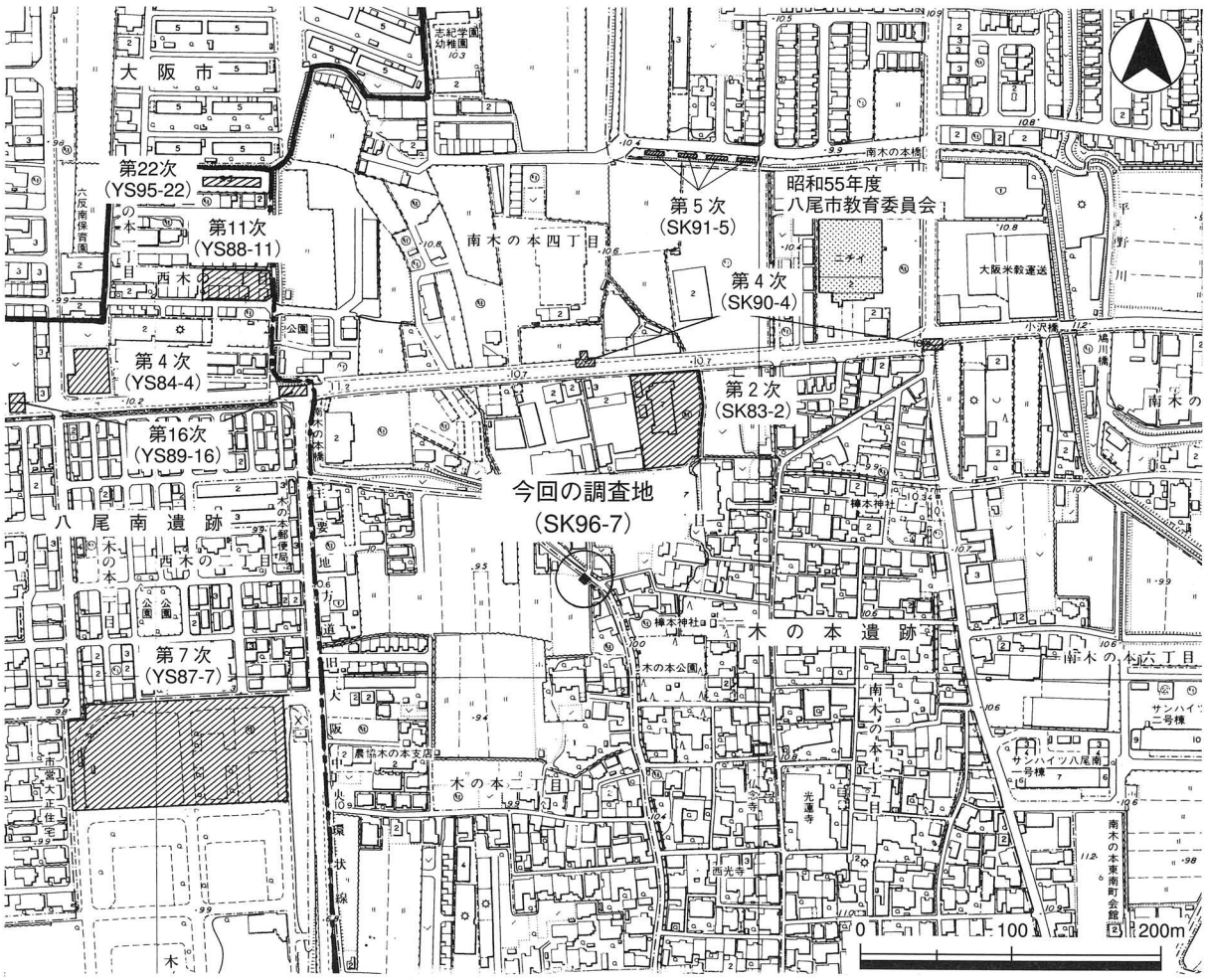
1．はじめに……43
2．調査概要……44
　1）調査の方法と経過……44
　2）基本層序……44
　3）検出遺構と出土遺物……45
3．まとめ……46

Ⅶ　木の本遺跡第７次調査（SK96－７）

１．はじめに

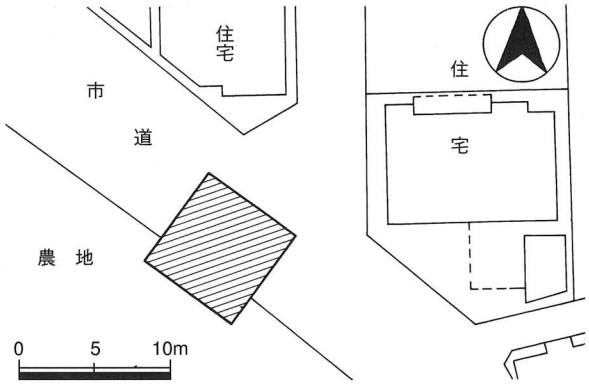
木の本遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川の沖積作用によって形成された氾濫原上に位置する弥生時代中期～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画上では、八尾市南部の木の本1丁目、南木の本２～７丁目付近一帯にあたる。

当遺跡は昭和55年度に八尾市教育委員会が南木の本４丁目において実施した調査以来、当調査研究会を含め現在まで８件を数える調査が実施されている。昭和55年度の南木の本４丁目の調査[註1]では、弥生時代中期前半頃に比定される柱穴・溝・井戸・土坑といった集落遺構とともに多量の土器類が出土した。昭和57～58年度に当調査研究会が八尾空港内で実施した第１次調査[註2]では、平安時代の条里制遺構（志紀郡条里）が検出されている。さらに昭和57年度に当調査研究会が南木の本４丁目において実施した第２次調査[註3]では、平安時代中期（10世紀頃）に比定される大量の土師器皿・坏および黒色土器椀を主とする土器集積が検出された。また、平成３年度に八尾市教育委員会が南木の本２～３丁目で実施した空港放水路改修工事に伴う調査[註4]では、古墳時代中期に比定される小穴・土坑等から韓式系土器および初期須恵器が出土している。



第１図　調査地位置および周辺図

今回の調査地から南東へ約50m地点には、延喜式に記載されるところの式内社「樟本神社」（三座の内の一社　木の本所在）がある。創建の年代は詳かではないが、用明天皇の時期（約1,400年前）に物部守屋が蘇我氏との戦争の折りに、守護神として布都大神を奉祀されたものと伝えられる。また、物部守屋が聖徳太子の軍が攻め寄った際にたてこもったとされる「稲城」が当地に築かれたと伝えられ、現在は調査地から南東へ約200m地点の光蓮寺門前に「稲城址」と刻された碑がある。これらのことから当地が物部氏とゆかりの深い土地柄であったことが窺える。



第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事（８－１工区）に伴うもので、当調査研究会が木の本遺跡内で実施する第７次調査にあたる。調査区である立坑の規模は、一辺7.2m四方の面積約52㎡を測る。掘削はすべて重機により、現地表から1.3m前後の盛土および撹乱層（水道管・ガス管等の埋設物による）部分を除去した後、以下4.2m前後の工事掘削最終面までの土層については遺構・遺物の有無を層毎に確認しながら掘り進めた。

２）基本層序

調査区内全体で15層の土層を検出した。T.P.＋6.5～8.8m間に堆積する第３・７・11層の３層の砂層は、周辺の既往の調査結果から弥生時代後期～平安時代中期にかけて概ね三度にわたる河川の氾濫によって形成された洪水層と判断される。以下、検出した各層について記述する。なお、土色は『標準土色帖』に準ずる。

第１層：盛土及び撹乱層。層厚1.3m前後。現地表の標高は、T.P.＋10.32mを測る。

第２層：10YR7/4にぶい黄橙色粘土。層厚30㎝前後。近世の国産陶磁器片を含む。当地周辺にみられる現在の水田地の層位レベルから、近世～現代にかけての作土層であった可能性が高い。

第３層：5B7/1明青灰色細粒砂。層厚10～15㎝。周辺における調査結果から平安時代中期頃の洪水層と思われる。

第４層：5B6/1青灰色粘土。層厚20㎝前後。本層上面には僅かながらヒトの足跡らしき窪みが点在する。

第５層：N6/灰色シルト質粘土。層厚10～15㎝。

第６層：5YR4/1褐灰色シルト質粘土。層厚15～20㎝。

第７層：5PB7/1明青灰色細粒砂。層厚30～50㎝。周辺の調査から、層位・レベル的に古墳時代中期～後期の洪水層と思われる。

第８層：5PB4/1暗青灰色粘土。層厚20㎝前後。

第９層：7.5YR3/2黒褐色シルト質粘土。層厚20～25㎝。腐食した樹木片が混在する。

第10層：7.5YR4/1褐灰色粘土。層厚25～30㎝前後。本層内から古墳時代前期（布留式期）に比

定される小型丸底壷１点出土。

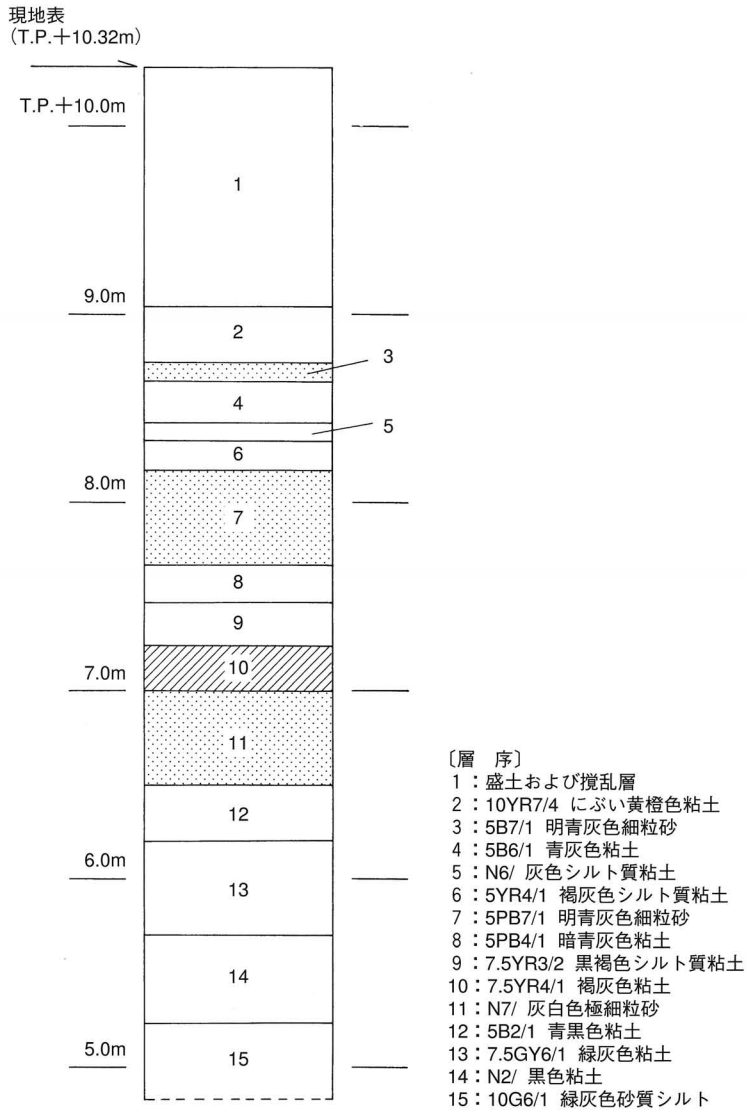
第11層：N7/灰白色極細粒砂。層厚30～50㎝。層位的に勘案して弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期）頃の洪水層と思われる。弥生時代の小型鉢の口縁部とみられる破片が１点含まれていた。

第12層：5B2/1青黒色粘土。層厚20～30㎝前後。植物遺体が含まれる。

第13層：7.5GY6/1緑灰色粘土。層厚50㎝前後。

第14層：N2/黒色粘土。層厚40～50㎝。

第15層：10G6/1緑灰色砂質シルト。層厚40㎝以上。

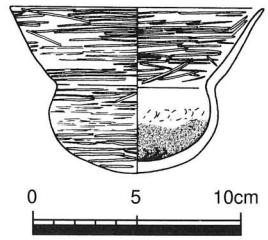


第３図　基本層序模式図

３）検出遺構と出土遺物

今回の調査では、遺構面として明確に判断される堆積層はなかったが、第４層上面（標高8.7ｍ前後）にヒトの足跡らしき窪みが稀少ながらみられた。調査区内では土層の平断面から足跡以外には畦畔らしき起伏もみられず面的に捉えなかったが、既往の調査から時期的に平安時代中期頃の水田遺構の可能性がある。

遺物は、第10層（標高7.0～7.3ｍ）から古墳時代前期の小型丸底壷１点（第４図）が出土した。精製品で、口縁部の一部は欠損しているが完形品に近い。内部には漆液が付着しており、漆液を入れる容器として使用されたものと思われる。法量は口径12.2㎝・器高8.0㎝・体部最大径8.2㎝を測る。形態は半球形の体部に上外方に内彎気味に伸びる口縁部が付き、口径は体部径を凌駕する。調整は外面ヘラミガキ、内面の口縁部はヘラミガキ・体部はユビナデおよびヘラナデを施す。色調は明褐色で、胎土中に1㎜前後の石英・長石・黒雲母を含む。形態・調整の特徴から時期的に布留式中相段階に位置付けられよう。それ以外では、第２層から近世の国産陶磁器片、第11層から弥生時代の小型鉢の口縁部とみられる破片が出土したが、図化できるものはなかった。



第４図　第10層内出土遺物実測図

3. まとめ

今回の調査では、調査地の北東約100m地点で実施した第２次調査で、平安時代中期頃の集落に伴う遺構と多量の遺物が検出されていることから、当初、本調査地においてもその集落遺構に関連する生活面が検出されるものと予想された。しかし調査の結果、層位レベルから該期に相当すると考えられる土層面では、ヒトの足跡が僅かにみられる以外、遺構・遺物は皆無であった。該期に相当する土層面は、第２次調査を含む周辺の既往の調査から、本調査地で確認した第４層にあたるものと想定される。今回面的に捉えなかったが第４層上面にみられる足跡らしき状況から、単に氾濫原状を呈していた土地というよりは、洪水によって埋没した水田遺構の可能性がある。該期の水田については、当地から南東約600m地点で実施した第１次調査において、古代条里遺構の構築方向と一致する平安時代の水田域が確認されている。この報告によれば、水田遺構を覆う洪水層を起因とした砂層内の遺物から、「平安時代中期には当調査地周辺は完全に埋没し、生産遺構としての機能が失われたものと考えられる。」と記述したうえで、さらに埋没した水田遺構は第２次調査で確認された集落と同時期であるところから、この集落に帰属するものと考察されている。今回本調査地にみられた稀少な足跡が水田遺構を示唆するものであれば、第１次調査の集落遺構および第２次調査の水田遺構と有機的に関連するものと思われるが、下水道立坑という狭小な調査区での層位的解釈で、憶測の域を出るものではない。該期における条里制の検討については今後周辺における面的な調査成果を待ちたい。

第10層から出土した古墳時代前期の小型丸底壷については、表面が摩滅気味であるうえにその出土状況が遺構に伴うものではなく、さらに本層は遺物包含層というよりは淘汰された自然堆積層とみられることなどから洪水等によって漂着したもの、いわゆる「流れ込み」による遺物と思われる。したがって、堆積層の時期的解釈については先の条里制同様に今後周辺における調査資料からの検討を要する。

第11層については、基本層序の項でも既述したように周辺における既往の調査結果から、弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期）頃の洪水層と思われるが、本層を含み第15層まではアシ等の植物遺体が混在し、ヒトの生活痕跡がみられないことから沖積地特有の河川による土砂の運搬と浸食・堆積によって形成された沼沢地であったと思われる。

註記

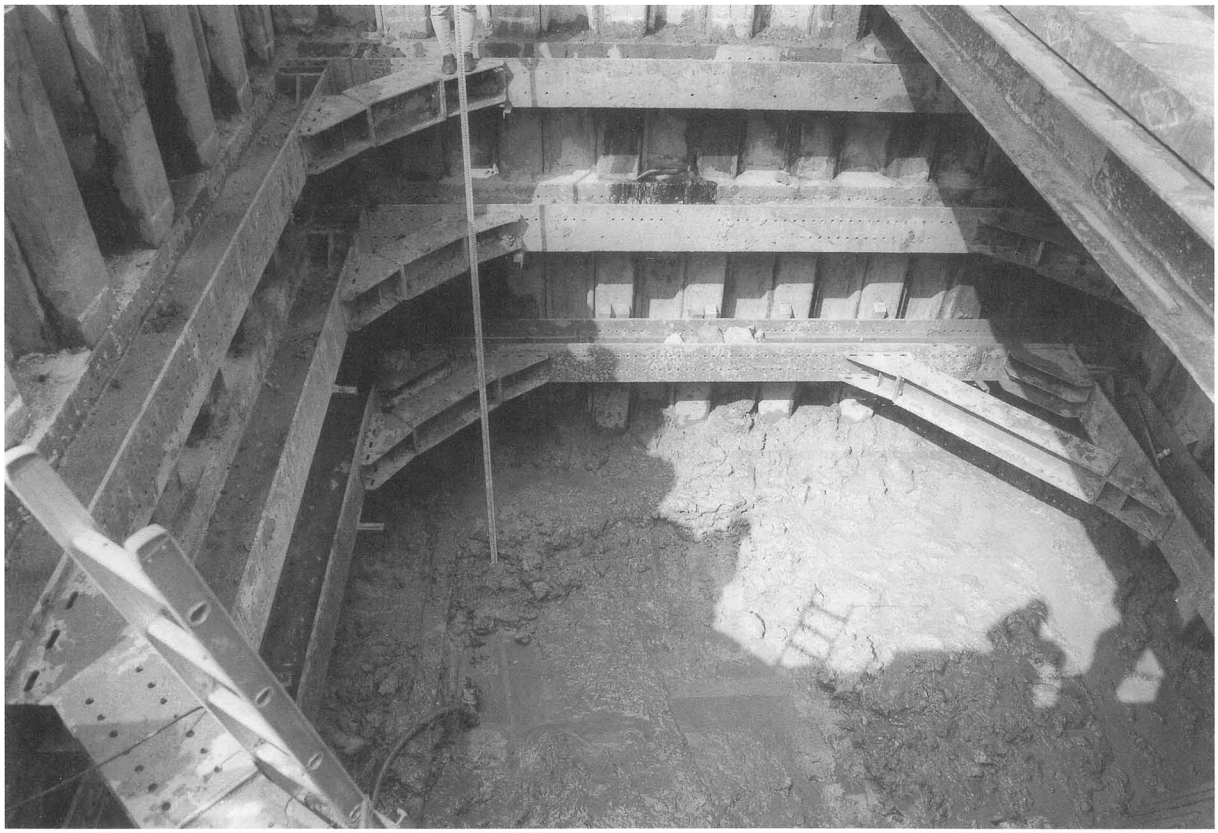
註１　原田昌則　1983.8「第３章　木の本遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告２　(財)八尾市文化財調査研究会

註２　原田昌則・成海佳子　1984「第９章　まとめ」『木の本遺跡　－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－』(財)八尾市文化財調査研究会報告４　(財)八尾市文化財調査研究会

註３　米田敏幸　1993「１．木の本遺跡　福田マンション建設に伴う発掘調査概要」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査　－その成果と概要－』(財)八尾市文化財調査研究会

註４　渕　斎　1992.3「２．木の本遺跡（90－176）の調査」『八尾市文化財調査報告26　八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告Ⅱ』八尾市教育委員会

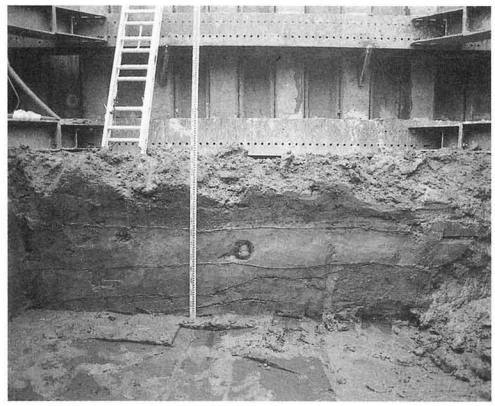
第13層上面＜標高6.2ｍ前後＞（北から）



最終面＜標高4.8ｍ前後＞（東から）

図版二

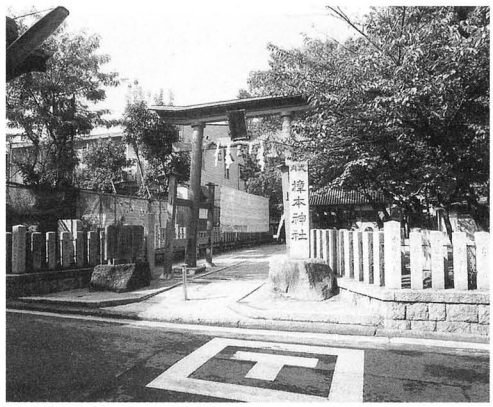
北壁＜第３層～第７層＞（南から）



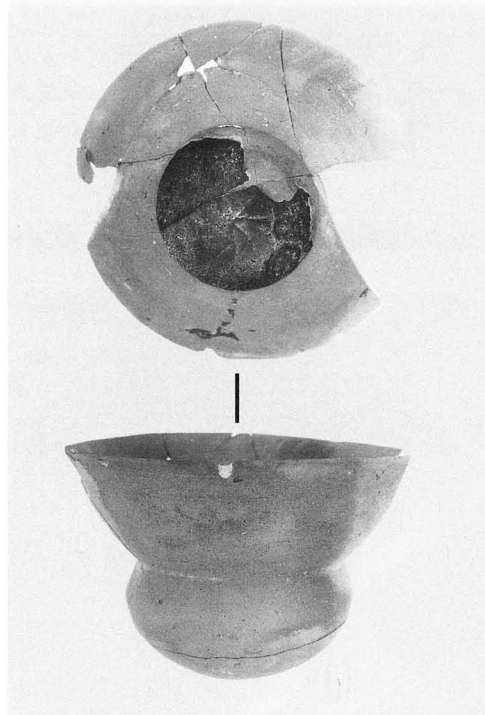
南壁＜第８層～第12層＞（北から）

南壁第10層内遺物出土状況（北から）

調査地近景（東から）



式内社「樟本神社」（東から）



第10層内出土遺物

「稲城址」碑（東から）

Ⅷ　久宝寺遺跡第21次調査（ＫＨ96－21）

例　　言

1．本書は、大阪府西久宝寺地内で実施した公共下水道工事（８－17工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本調査で報告する久宝寺遺跡第21次調査（ＫＨ96－21）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋418－３号 平成８年10月３日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成８年12月25日～平成９年１月20日（実働４日間）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は39.2㎡を測る。調査においては市森千恵子・垣内洋平・岸田靖子・八田雅美が参加した。

1．本書の執筆・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

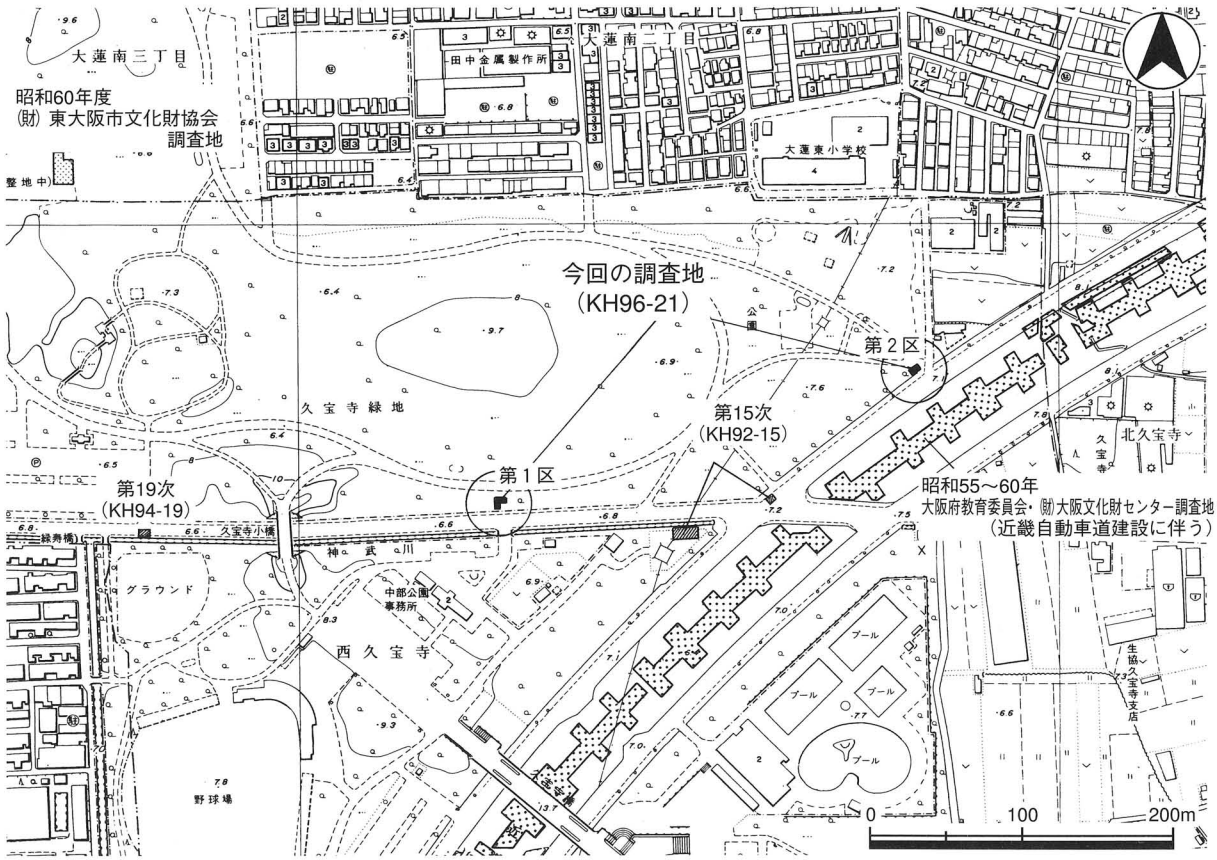
1．はじめに……49
2．調査概要……50
　1）調査の方法と経過……50
　2）基本層序……50
　3）検出遺構と出土遺物……52
3．まとめ……53

Ⅷ　久宝寺遺跡第21次調査（KH96－21）

1．はじめに

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川左岸流域に立地する沖積地で、現在の行政区画では、八尾市北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井・渋川町・跡部北の町がその範囲にあたる。周辺の遺跡では北東に佐堂遺跡、東に八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡、南に亀井遺跡・跡部遺跡が隣接している。また、西側の大阪市域内の加美遺跡は、考古学的に同一遺跡として捉えられている。当遺跡は、昭和48年度に大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センターによって実施された近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う調査[註1]にはじまり、以降現在まで（財）東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会によって数多くの調査が実施されており、その結果、縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡であることが判明している。

今回の調査地周辺における既往の調査を見ると、西側では前述の近畿自動車道に伴う調査において、縄文時代晩期の自然河川、弥生時代中期の水田、古墳時代前期～中期の掘立柱建物や井戸といった集落跡、奈良～平安時代の水田・掘立柱建物・井戸など多岐にわたる生活面とともに多量の遺物が検出されている。なかでも古墳時代中期の各遺構から初期須恵器に伴って検出された多数の韓式系土器は、朝鮮半島からの渡来人あるいは関与した人々との深い関わりを明示している。当調査研究会においては、近隣で平成４年度に第15次調査[註2]・平成６年度には今回の調査地で



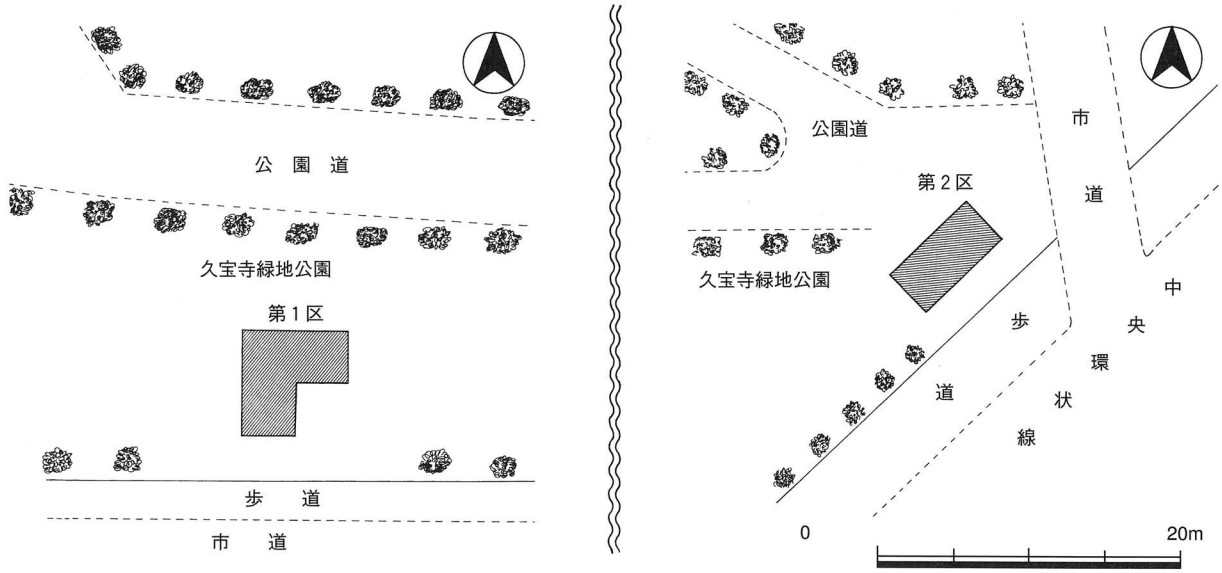
第１図　調査地位置および周辺図

ある第１区から西へ約230m地点で第19次調査の２件の調査を実施している。第15次調査は電らん管新設工事に伴うもので、ここでは遺構・遺物[註3]は検出されなかったが、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての河川の氾濫を窺わせる土層堆積を確認している。一方の第19次調査では、少量ではあるが出土した土器片から古墳時代前期とみられる埋没河川の堆積層を検出している。また、第19次調査地から北へ約240m地点の久宝寺緑地西端部では、昭和60年度に（財）東大阪市文化財協会によって実施された雨水貯溜池築造工事に伴う調査[註4]で、弥生時代中期の方形周溝墓1基が検出されている。この方形周溝墓のマウンドからは木棺３基・土器棺１基が検出されており、木棺３基の内２基については小口板・側板等の遺存状態が良く、当該期の埋葬形態を究明する上で貴重な検出例と言える。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

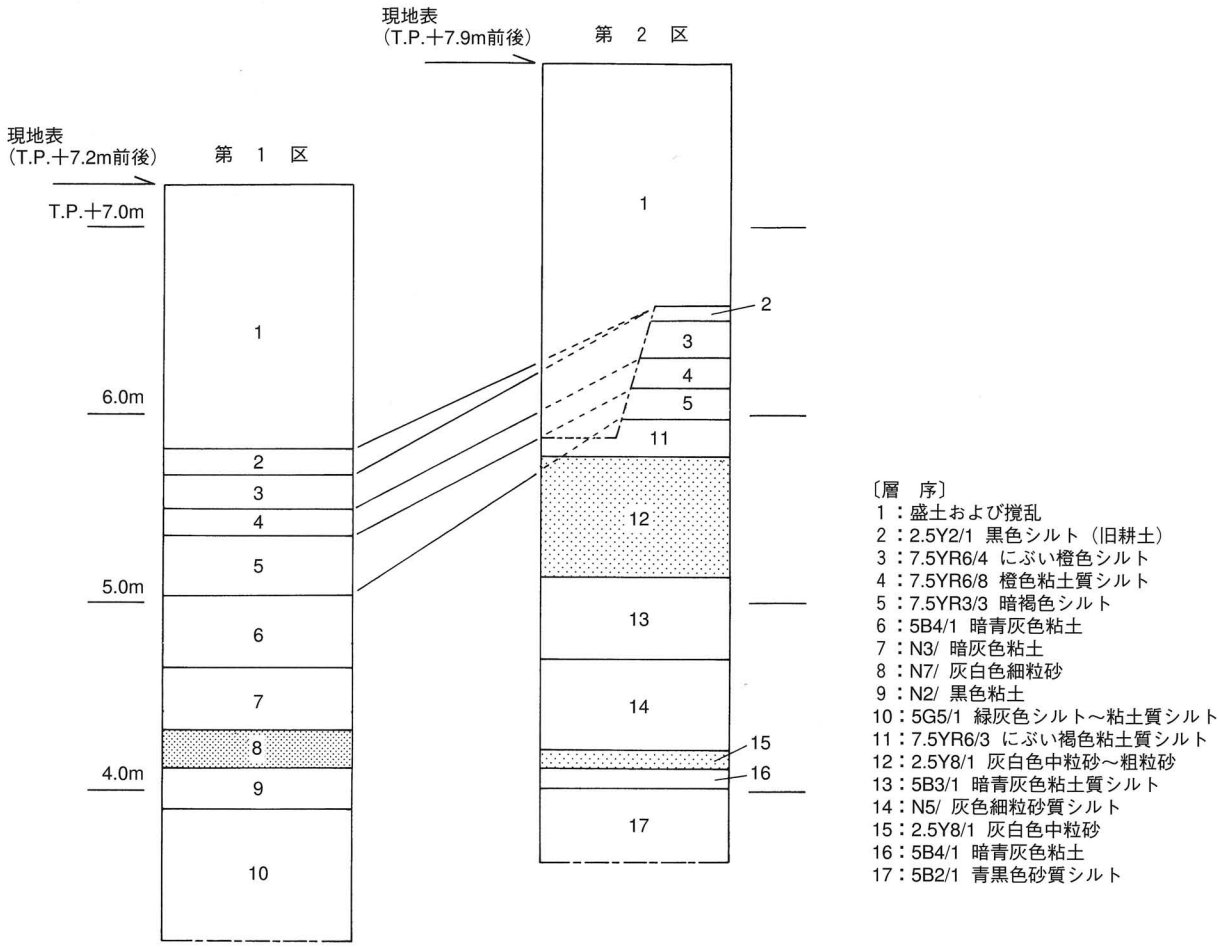
今回の発掘調査は公共下水道工事（８－17工区）に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施する第21次調査にあたる。調査対象となったのは２箇所の立坑で、久宝寺緑地中部公園事務所の北方の第１区と主要地方道大阪中央環状線北行き方面道路沿いの第２区である。規模は第１区が一辺5.6m四方で南東部がＬ字形に窪む面積23.52㎡、第２区が2.8m×5.6mの北東－南西に長い長方形の面積15.68㎡で総面積39.2㎡を測る。掘削は両地区とも現地表から1.5m前後の盛土部分を重機により除去した後、以下工事掘削深度にあたる2.5m前後の土層については層毎に遺構・遺物の有無を確認しながら重機と人力を併用し、調査を進めた。調査期間は第１区が平成８年12月25日・27日、第２区が平成９年１月16日・20日の合わせて実働４日間である。



第２図　調査区位置図

２）基本層序

土層観察について、第１区では西壁断面および北壁断面・第２区では東壁断面および南壁断面において実施し、両地区あわせて計17層の堆積層を確認した。両地区とも各層は壁面で見る限りにおいて特に目立った起伏部分はなく、ほぼ水平な堆積様相を呈する。現地表の標高値は平均で第２区がT.P.＋7.2m・第２区がT.P.＋7.9mを測り、第１区の方が0.7m前後低くなっている。両地



第３図　基本層序模式図

区の層相を照合した結果、第３層（近世）～第５層（古墳時代前期）が共通する堆積層と判断した。各土層の時期については、近畿自動車道をはじめ周辺における既往の調査資料を参考に含有遺物と層位から識別した。以下、各層について概説する。

・［第１区→T.P.＋5.1～7.2m、第２区→T.P.＋6.0～7.9mにおいて両地区とも共通する土層］

第１層：盛土および撹乱。層厚1.5～2.0m。久宝寺緑地公園造成時のいわゆる客土層である。第２区では立坑の北部約2/3は、盛土以下0.8m間に公園造成時の際に廃棄物処理の為に掘られたと思われる撹乱が見られた。この撹乱は近代の耕土から古墳時代前期に相当する土層を切っている。

第２層：2.5Y2/1黒色シルト。層厚15cm前後。緑地造成時前の旧耕土である。

第３層：7.5YR6/4にぶい橙色シルト。層厚18cm。近世にあたる土層と思われる第１区からは染付磁器椀の破片が出土した。

第４層：7.5YR6/8橙色粘土質シルト。層厚15cm前後。古墳時代中期～後期にあたる土層と思われる。第２区からは須恵器の破片が出土した。

第５層：7.5YR3/3暗褐色シルト。層厚25～30cm。古墳時代前期（布留式期）にあたる土層と思われる。第２区からは高杯や小型鉢の破片のほか焼土塊が出土した。

・［第１区→T.P.＋3.2～5.0mに堆積する土層］

第６層：5B4/1暗青灰色粘土。層厚40～45㎝。淘汰の良い堆積層である。

第７層：N3/暗灰色粘土。層厚30㎝前後。下部において植物遺体が若干含まれる。

第８層：N7/灰白色細粒砂。層厚20㎝前後。弥生時代中期頃に河川の氾濫によって堆積した洪水層と思われる。

第９層：N2/黒色粘土。層厚20㎝前後。腐植質から構成されるものとみられ、沼地状の土地景観を窺わせる。

第10層：5G5/1緑灰色シルト～粘土質シルト。層厚70㎝以上。シルトを主体とするが、水成の極細粒砂および細粒砂が挟在する。

・［第２区→T.P.＋3.6～5.0mに堆積する土層］

第11層：7.5YR6/3にぶい褐色粘土質シルト。層厚20～25㎝。上位には斑点状に酸化鉄分が付着する。

第12層：2.5Y8/1灰白色中粒砂～粗粒砂。層厚60～65㎝。ラミナの見られる比較的厚い水成層で、弥生時代後期頃の流路あるいは河川の氾濫に起因する堆積層と思われる。

第13層：5B3/1暗青灰色粘土質シルト。層厚50㎝前後。上位にはアシ等の植物遺体が見られ、かつてここが沼沢地であったことを明示する。

第14層：N5/灰色細粒砂質シルト。層厚45～50㎝。

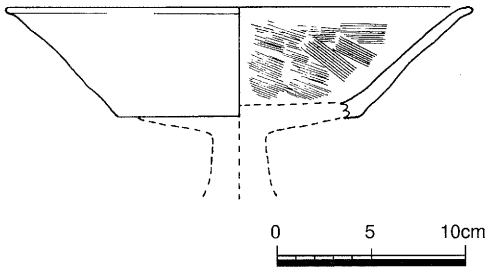
第15層：2.5Y8/1灰白色中粒砂。層厚10㎝前後。本層は、第１区の第８層（弥生時代中期頃）に対応する可能性もあり、今後の周辺における調査の累積を待って再検討したい。

第16層：5B4/1暗青灰色粘土。層厚10㎝前後。層中に黒色有機物が挟在する。

第17層：5B2/1青黒色砂質シルト。層厚40㎝以上。水成の暗緑色を僅かに帯びる。

３）検出遺構と出土遺物

両地区とも遺構は確認されなかった。出土遺物は第１区では皆無であったが、第２区では基本層序でも記述したように、僅少ながらも古墳時代前期の古式土師器・古墳時代中期～後期の須恵器・近世の陶磁器が層位的に検出できた。そのなかで残片から辛うじて図化できたものが、第５層から出土した古墳時代前期に比定される高杯（第４図）である。遺存状況は杯部約1/6で、杯部の法量は復原推定で口径24.6㎝・杯部高5.7㎝を測る。色調は乳灰褐色を呈し、胎土中には２～３㎜の石英・長石・雲母・赤色酸化粒が含まれる。形態は明瞭な段をもつ杯底部外面から口縁部が外上方へ直線的に伸び、丸味をもった口縁端部をさらに短く外側へ引き出しておさめる。調整は外面ヨコナデ・ナデ、内面ヨコナデ・ハケナデ（８本/㎝）が施され、内面には煤が付着している。形態的に布留式期新相段階に位置付けられよう。土器以外では径７㎝前後の焼土塊があり、表面に見られる高温による発泡等から、調査区付近に「野鍛冶」に関連する遺構の存在が示唆される。



第４図　第２区出土遺物実測図

3．まとめ

今回の調査では両地区とも遺構は確認されず、出土遺物も第２区から僅かに見られただけで、結果的に土層観察に主眼を置くものとなった。層位的には古墳時代前期～近世にかけて周辺における既往の調査結果とほぼ合致する。特に第２区で確認した古墳時代前期の遺物包含層は、東側の近畿自動車道関連の調査で検出されている該期の集落遺構と有機的な関係にあると思われ、くわえて焼土塊の出土は、付近に「野鍛冶遺構」の存在を窺わすものであり、今後第２区周辺の調査には注意を要しよう。弥生時代においては当調査研究会が実施した第15次・第19次の調査結果から、河川域あるいは沼沢地と判断されていることと、東側の近畿自動車道関連の調査でも水田が確認されているものの明瞭な遺構は検出されておらず、遺物の出土量も少ないことから考えて、当地は人が生活基盤を置く土地とするには不向きであったことが推察される。もっとも今回の調査も含め当調査研究会が実施した２件の調査は、すべて狭小なグリッドであるがために、調査担当者の力量不足から水田遺構を見失っている可能性も否めない。いずれにせよ近畿自動車道関連の調査でも報告されているように、弥生時代にあっては今回の第２区の東側にあたる「久宝寺遺跡北地区」は集落の外れであり、その中心は南側の「久宝寺遺跡南地区」に求められ、安定した土地条件となって集落が形成されるようになるのは古墳時代を迎えてからであろう。

註記

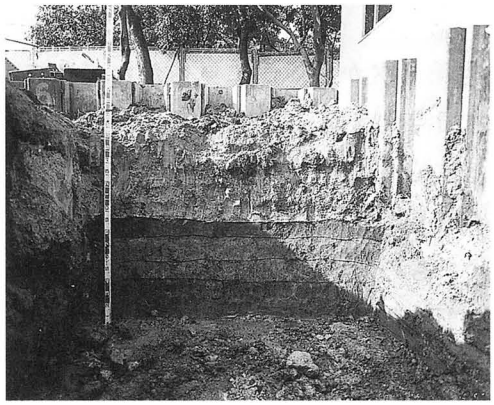
註１　中西靖人・金光正裕・寺川史郎 1987.3『久宝寺北（その1～3）　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(財)大阪文化財センター

註２　岡田清一 1993.12「Ⅻ 久宝寺遺跡第15次調査（ＫＨ92－15)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告39　(財)八尾市文化財調査研究会

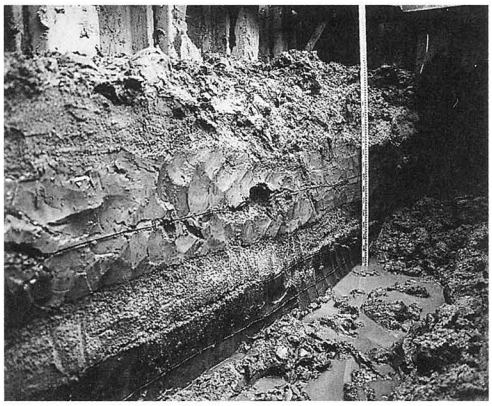
註３　坪田真一 1996.3「Ⅱ 久宝寺遺跡第19次調査(ＫＨ94－19)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告50』(財)八尾市文化財調査研究会

註４　中西克宏 1986.11『久宝寺遺跡発掘調査報告 －久宝寺緑地公園内雨水貯溜池築造工事に伴う発掘調査－』(財)東大阪市文化財協会

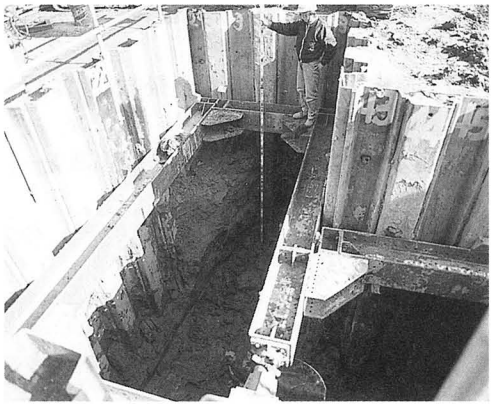
第1区（左）



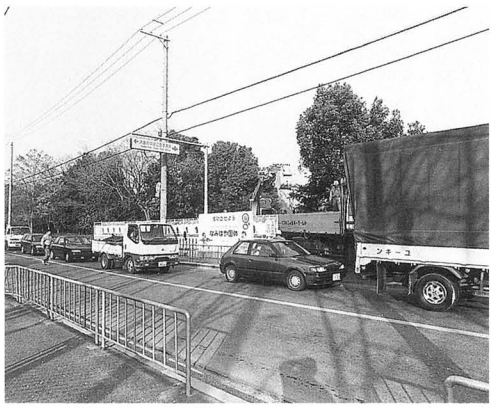
西壁面　標高5.0～7.2m付近（東から）



北壁面　標高4.0～5.0m付近（南西から）



完掘状況　最深部　標高3.6m前後（南西から）



調査区近景（南東から）

第2区（右）

南壁面　標高5.8～6.8m付近（北から）

南壁面　標高3.6～5.8m付近（北から）

完掘状況　最深部標高3.6m前後（北から）

調査区近景（南から）

Ⅸ　小阪合遺跡第33次調査（ＫＳ96－33）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市南小阪合町１丁目地内で実施した電気管路埋設の人孔・到達立坑設置工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する小阪合遺跡第33次調査（ＫＳ96－33）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋124－3号　平成８年６月26日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力(株)大阪南支店から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年11月13日から11月29日（実働４日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は約76㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中谷嘉多・中村百合・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測・図面レイアウト・トレースー中村・市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

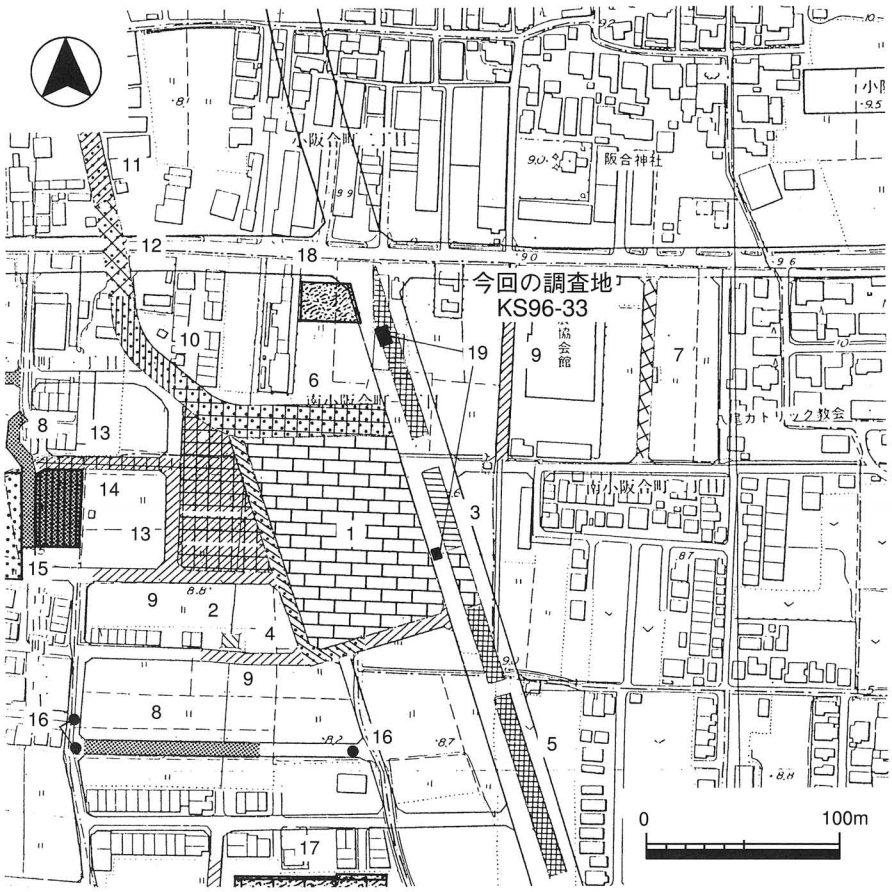
1．はじめに……55
2．調査概要……56
　1）調査の方法と経過……56
　2）基本層序……56
　3）検出遺構と出土遺物……58
　4）遺構に伴わない出土遺物……58
3．まとめ……58

Ⅸ　小阪合遺跡第33次調査（ＫＳ96－33）

１．はじめに

小阪合遺跡は八尾市の中心部に位置し、現在の行政区画では若草町、小阪合町１・２丁目、南小阪合町２・４丁目、青山町１～５丁目、山本町南７・８丁目がその範囲にあたる。地理的には、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川によって形成された沖積地上で、現標高（T.P.＋）は８～９ｍに位置しており、当遺跡範囲の中央を縦断するように楠根川が北西流している。当遺跡の周辺では西に成法寺遺跡、南に中田遺跡・東弓削遺跡、北西に東郷遺跡、南西に矢作遺跡がある。

当遺跡の発見の契機は、昭和30年の大阪府営住宅建設工事中に古墳時代の遺物が多量に出土したことによる。しかしその後、八尾市教育委員会によって、遺構確認調査や掘削工事等の立会調査が行われたが、明確な遺構は確認されなかった。昭和56年から当地域の区画整理事業が施工されることとなり、昭和57年以降南小阪合地区土地区画整理事業の関連工事に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、財団法人八尾市文化財調査研究会（以下、「当調査研究会」）により実施された。これらの調査成果から、当遺跡が弥生時代前期から近世に至る複合遺跡であることが判明した。特に古墳時代前期（庄内期～布留期）に比定される遺構及び遺物が遺跡全域で確認された。また出土遺物には他地域から持ち込まれた土器が多く含まれており、この時期、他地域との交流が盛んに行われていたことが明らかになった。



1　昭和58年度大阪府教育委員会
2　昭和59年度八尾市教育委員会
3　KS82-1　（当調査研究会）
4　KS83-2　（　〃　）
5　KS84-4　（　〃　）
6　KS84-5　（　〃　）
7　KS85-6　（　〃　）
8　KS86-8　（　〃　）
9　KS87-10（　〃　）
10　KS87-11（　〃　）
11　KS87-12（　〃　）
12　KS88-15（　〃　）
13　KS88-16（　〃　）
14　KS89-18（　〃　）
15　KS91-20（　〃　）
16　KS92-23（　〃　）
17　KS92-24（　〃　）
18　KS95-30（　〃　）
19　KS96-33（今回の調査地）

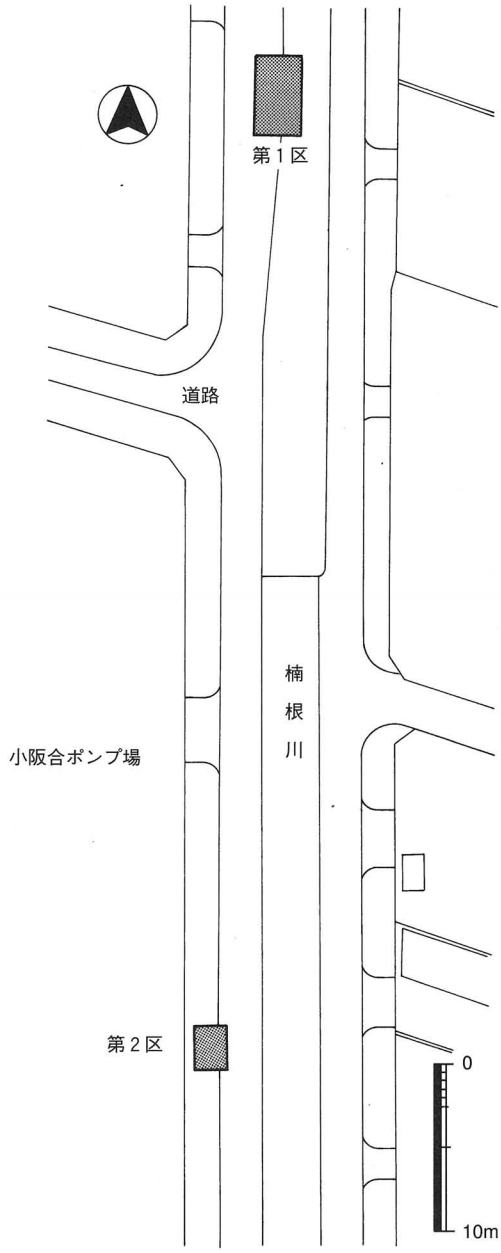
第１図　調査地位置図及び周辺図

今回の調査地周辺では、当調査研究会が行った第４次調査（ＫＳ84－４）・第５次調査（ＫＳ85－５）・第30次調査（ＫＳ95－30)、昭和58年度に大阪府教育委員会が行った小阪合ポンプ場建設工事に伴う調査、昭和62年～平成３年度に断続的に行われている府道拡張工事に伴う調査がある。これらの調査成果では弥生時代後期末～古墳時代前期の集落遺構、古墳時代中期の埴輪円筒棺、平安時代末の曲物井戸等を検出している。

２．調査概要

１）　調査の方法と経過

今回の調査は、電気管路埋設の人孔・到達立坑工事に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第33次調査にあたる。



第２図　調査区位置図

調査区は、北側の到達の立坑（No.1）を第１区、南側の人孔の立坑（No.2）を第２区と呼称した。各調査区の面積は、第１区が約54㎡、第２区が約22㎡である（第２図)。

調査は、現地表下約1.5～1.8ｍを機械掘削し、その下については機械・人力を併用して掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。

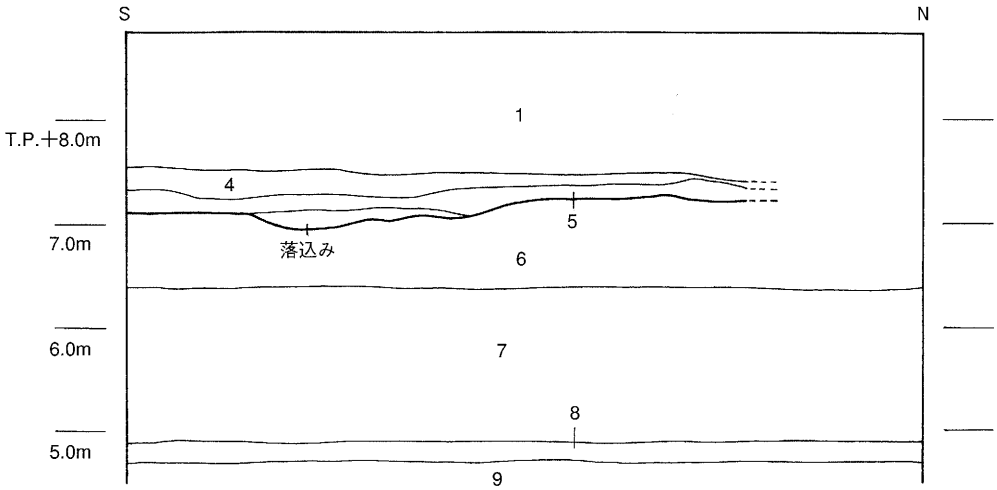
調査の結果、第１区では現地表下約1.8ｍ前後まで掘削を行ったが調査区の大部分が既往調査（第４次調査＜ＫＳ84－４＞の第５調査区）により、すでに調査済みであった。当初、調査区の西半分は残存していると思われたが、調査区西部のごく一部であった。その残存部分から古墳時代前期・中世の遺物包含層、古墳時代前期に比定される遺構を確認することができた。下層では現地表下4.5ｍ前後までの土層状況を確認した結果、河川跡と思われる層厚約1.5ｍの砂層を検出した。

第２区では現地表下2.1ｍ前後まで掘削を行った。その結果、調査区西部（約1/4）に埋設管路工事により削平された部分が南北方向に走っていた。残存する部分では中世の耕作土と思われる土層を確認した。遺物は出土しなかった。

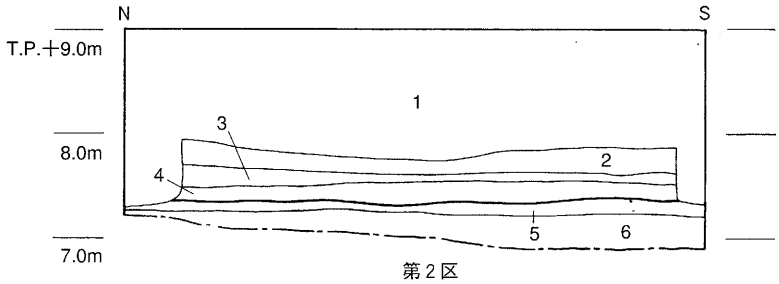
２）基本層序

今回の調査地では第３図に図示した第１区・第２区の基本層序である。

第１層　盛土。層厚110～180㎝。近年の区画整理の盛土である。



第１区



第２区

1　盛土
2　旧耕土
3　茶灰色粘質シルト
4　灰茶色～淡灰褐色粘土
5　褐灰色粘質土（第１区）
　　明茶灰色粘土（第２区）
6　灰青色粘質土（第１区）
　　灰褐色粘質シルト（第２区）
7　淡灰茶色細砂～粗砂
8　暗灰色粘土
9　灰色粘土

第３図　断面図

第２層　旧耕土。層厚約10㎝。区画整理事業で造成されるまで水田土層である。第１区は削平されていない。

第３層　茶灰色粘質シルト。層厚約10～20㎝。旧耕土の床土である。第１区は削平されていない。

第４層　灰茶色（第１区）～淡灰褐色（第２区）粘土。層厚約20～25㎝。第１区は中世の遺物包含層。２区は中世の耕作土と考えられる。

第５層　褐灰色粘質土（第１区）・明茶灰色粘土（第２区）。層厚10～15㎝。第１区は古墳時代の遺物を含む層で、第２区は無遺物である。

第６層　灰青色粘質土（第１区）・灰褐色粘質シルト（第２区）。層厚50～70㎝。古墳時代の遺構面である。

第７層　淡灰茶色細砂～粗砂（第１区）。層厚160㎝。河川跡と思われる土層である。調査区内での砂層の堆積内には土器等が含まれていない。

第８層　暗灰色粘土（第１区）。層厚20㎝。有機物を含む粘着性の強い粘土である。

第９層　灰色粘土（第１区）。層厚20㎝以上。粘着性のある粘土層である。

3）検出遺構と出土遺物

・第１区

調査区東部は既往調査（第４次調査）により発掘調査されており、古墳時代の遺構が存在する地層は大部分が埋められた層である。僅かに西壁で残存する層が残っていた。その土層を観察した結果、中世の遺物包含層、古墳時代前期の遺物包含層及び遺構と思われる落込みを確認した。

・第２区

調査区の西部では南北方向に幅約１m、深さ２m前後まで管路埋設工事により、すでに削平されていた。東部の残存部分で現地表下1.6m前後の古墳時代に比定される第５層上面まで掘削し精査を行ったが、遺構・遺物はなかった。近接する既往調査（第２次調査）の成果を参照すると、第４層が中世以降の耕作土に対応する層であることが考えられる。

4）遺構に伴わない出土遺物

第１区の第４層・第５層でごく少量出土した。第４層では古墳時代前期（布留式期）に比定される土師器の甕片、第３層では平安時代末～鎌倉時代に比定される瓦器椀の小片などを出土した。

3．まとめ

今回の調査地は小阪合遺跡範囲の北東部に位置する。調査区２箇所で小面積であった。調査の成果では第１区が既往調査（第４次調査・第７調査）の調査区と大部分が重なっており、すでに調査済みであることを確認した。しかし調査区西部でごく一部残存する部分があり、そこから古墳時代前期の遺構と思われる落込みが断面で確認することができた。

第２区は残存する調査区東部で調査を行ったが遺構・遺物は検出されなかった。既往調査で検出している中世の耕作土と思われる土層を確認し、生産域の広がっていることがわかった。

下層確認調査では、第１区で現地表下4.5mまでの土層を確認した結果、現地表下約2.5～4.0mに砂層が調査区全面に厚く堆積しているのがみられた。この砂層の堆積状況からみると、河川であったものと思われる。

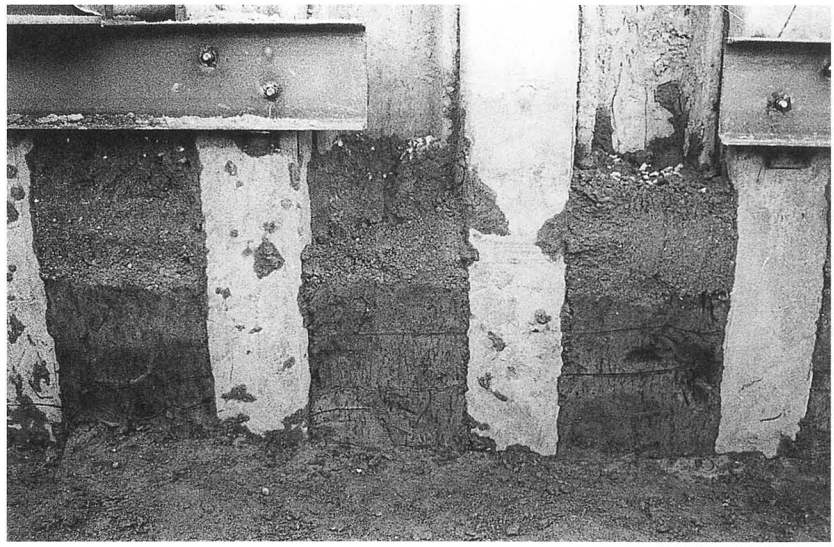
以上、調査の成果である。

参考文献

・西村公助 1986『小阪合発掘調査概要』－流域下水道等整備に伴う発掘調査－（財）八尾市文化財調査研究会報告８
・高萩千秋 1987『小阪合遺跡』－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和57年度 第１次調査〉（財）八尾市文化財調査研究会報告10
・高萩千秋 1987『小阪合遺跡』－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和58年度 第２次調査・第３次調査〉（財）八尾市文化財調査研究会報告11
・高萩千秋 1988『小阪合遺跡』－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和59年度 第４次調査報告書〉（財）八尾市文化財調査研究会報告15
・高萩千秋 1989『小阪合遺跡』－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和60年度 第６次調査報告書〉（財）八尾市文化財調査研究会報告18
・高萩千秋 1990『小阪合遺跡』－八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－〈昭和61年度 第８次　昭和62年度第10・13次　昭和63年度第16次調査報告〉（財）八尾市文化財調査研究会報告26
・渕　斎 1993.３「６．小阪合遺跡（92－067）の調査」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27　平成４年度国庫補助事業
・亀島重則 1989.３『小阪合遺跡発掘調査概要・Ⅱ』－八尾市南小阪合町所在－大阪府教育委員会

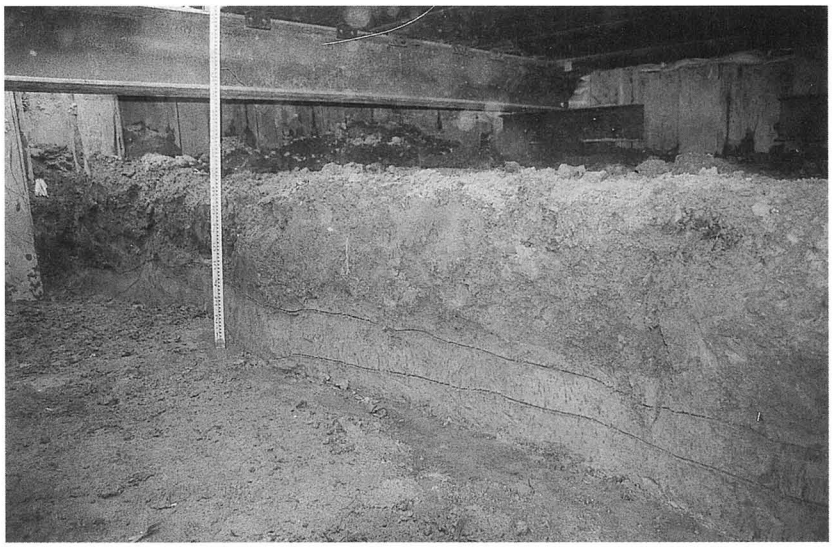
第１区全景（南から）

第１区（南から）

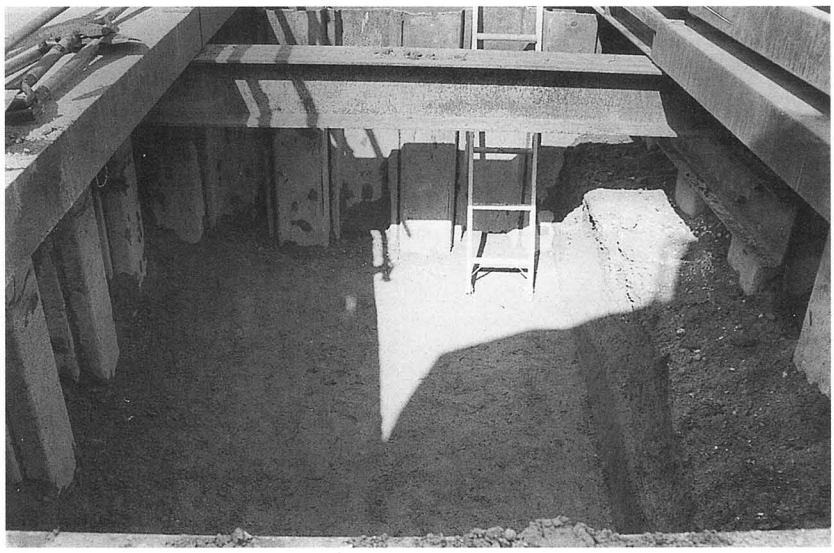


第１区西壁中央（東から）

図版二



第１区中央南北セクション（北東から）



第２区全景（南から）

第２区西壁（東から）

X　小阪合遺跡第34次調査（ＫＳ96－34）

例　　言

1．本書は、八尾市青山町１丁目、２丁目地内で実施した公共下水道工事（８－６工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する小阪合遺跡第34次調査（ＫＳ96－34）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋329－３号　平成８年９月30日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成９年１月13日から平成９年２月28日（実働12日間）にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積50.3㎡を測る。調査においては市森千恵子・垣内洋平・岸田靖子・北原清子・中村百合子・八田雅美・山内千恵子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成９年９月に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－岸田・沢村妙子、図面トレース－北原清子、遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

1．土器の胎土分析については奥田尚氏（八尾市立曙川小学校）から御教示をいただいた。

本　文　目　次

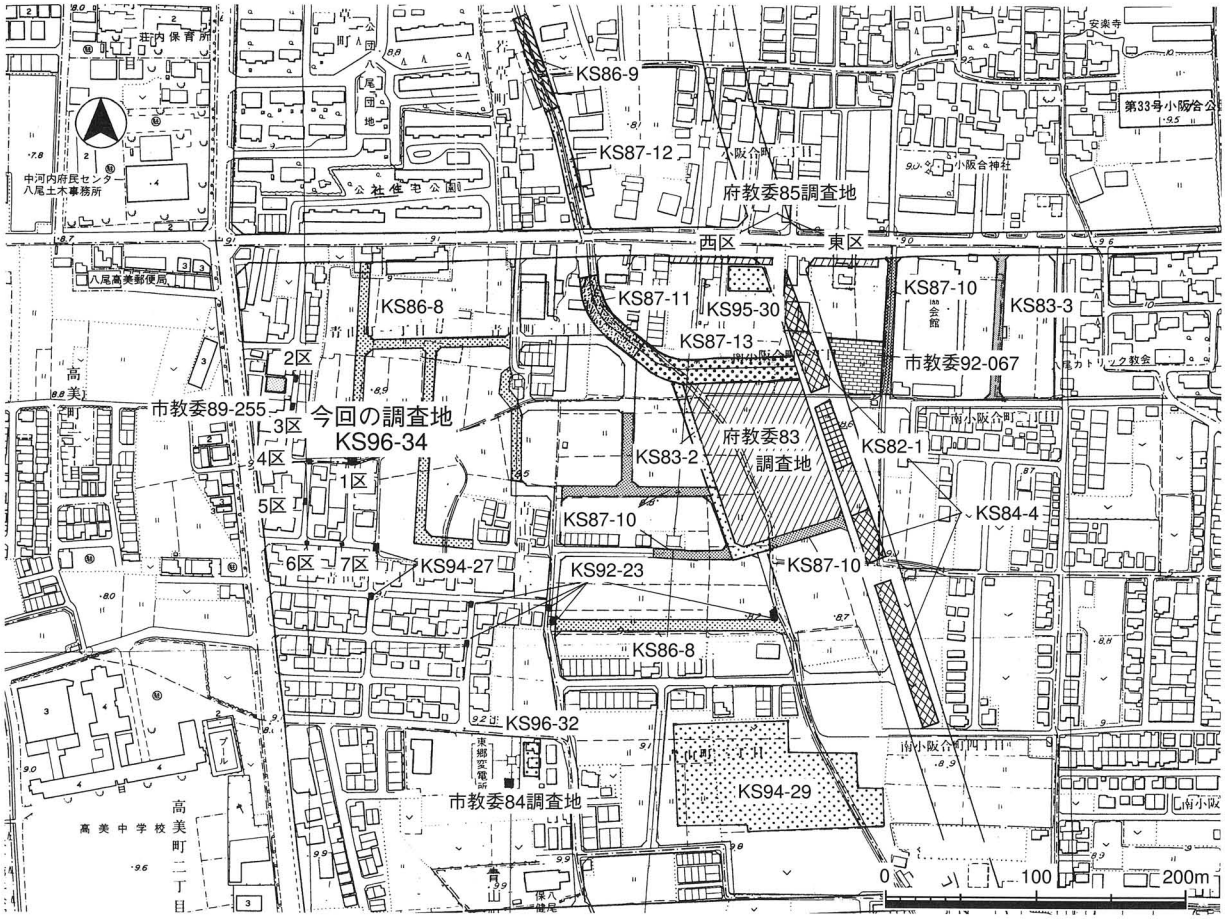
1．はじめに……61
2．調査概要……62
　1）調査の方法と経過……62
　2）基本層序……62
　3）検出遺構と出土遺物……63
3．まとめ……68

X　小阪合遺跡第34次調査（KS96－34）

1．はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央部の小阪合町１・２丁目、南小阪合町１・２・４丁目、青山町１～５丁目、若草町、山本町南７・８丁目一帯の東西0.45～１.0㎞、南北１.0㎞に拡がる弥生時代中期～近世に至る複合遺跡である。地理的には、八尾市二俣地区を基点として北西方向に流下する旧大和川主流の長瀬川と玉串川に挟まれて、南北方向に展開する低位沖積地の標高８～９ｍ付近に位置している。小阪合遺跡が存在するこの低位沖積地は、水稲耕作を生活基盤とする弥生時代前期以降、比較的安定した地形的条件を背景として数多くの遺跡が成立しており、考古学的な資料の蓄積も多い。当遺跡周辺に限っても、北西に東郷遺跡、西に成法寺遺跡、南西に矢作遺跡、南に中田遺跡が隣接している。

小阪合遺跡は昭和30年に若草町で行われた、大阪府営住宅供給公社の建築工事に際して、古墳時代の土器が多量に出土したことに端緒を発するもので、昭和57年以降は南小阪合地区を中心とする区画整理事業に伴う発掘調査が当調査研究会により継続して実施されてきた。その結果、弥生時代中期～近世に至る遺構・遺物が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。



第１図 調査地周辺図

なかでも、古墳時代初頭～前期における集落の広範な分布や、数多くの地域から搬入された土器群の存在は、当時の地域間交流の一端を知る上で貴重な資料を提供する結果となった。

今回の調査地である八尾市青山町１丁目・２丁目一帯は小阪合遺跡推定範囲の西部に位置し、第１区が第８次調査（ＫＳ86－８）の第１調査区の南端と接する他、第２区の西側では、市教育委員会が平成元年度[註1]に実施した発掘調査[註2]（89－225）、更に第７調査区の東側では第27次調査[註3]（ＫＳ94－27）が実施されている。これら一連の調査で、弥生時代後期～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、面積約28㎡を測る立坑１箇所（第１調査区）と1.5×２ｍ規模の人孔６箇所（第２調査区～第７調査区）を調査対象とした。調査に際しては、人孔部分の第２調査区～第７調査区では現地表下0.7～1.0ｍ迄を機械掘削、以下0.3ｍ前後については人力による調査を実施した。立坑を調査対象とした第１調査区では、既往調査から比較的浅い深度で遺構の存在が確認されているため、鋼矢板打設前に現地表下約１ｍ前後迄の調査を済ませ、以下については、鋼矢板打設後に調査を実施した。

調査の結果、各調査地点の現地表下1.1～1.3ｍ（T.P.＋7.8～7.6ｍ）付近に存在する第４層ならびに第５層上面で古墳時代後期・平安時代前期・近世時期の遺構を検出した。

第２図 調査区設定図

２）基本層序

調査地が分散していたが、各調査区で比較的安定した層相が確認された。ここでは、普遍的に存在した５層を摘出して基本層序とした。

第０層　客土。上面の標高はT.P.＋8.9ｍ前後。

第１層　N/灰色粘土質シルト。旧耕土。層厚0.1～0.2ｍ。

第２層　10BG6/1青灰色粘土質シルト。床土。層厚0.1～0.2ｍ。

第３層　2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト。層厚0.2ｍ。平安時代～室町時代の遺物を少量含む。

第４層　2.5GY6/1オリーブ灰色砂質シルト。層厚0.15～0.2ｍ。古墳時代後期～平安時代の遺物を少量含む。上面が中世遺構検出面。

第５層　10YR6/2灰黄褐色シルト。層厚0.1～0.3ｍ。弥生時代後期の遺物を少量含む。上面が古墳時代後期・平安前期の遺構検出面。

3）検出遺構と出土遺物

・第１区

逆「L」字状を呈する立坑部分の調査区で、南東部がマンホールの構築により削平を受けている他、北端は昭和61年度に実施した小阪合遺跡第８次調査（ＫＳ86－８）の第１調査区の南端と重複している。現地表下3.7m迄を調査対象とした。その結果、現地表下1.5m前後（T.P.＋7.3m前後）に存在する第６層上面で近世時期の井戸１基（ＳＥ－１）と古墳時代後期の溝１条（ＳＤ－１）を検出した。

ＳＥ－１

調査区の南東隅で検出した素掘り井戸である。検出部分で径1.1mを測る円形の掘方を呈するものであるが、北部がマンホールの構築により削平を受けている。第６層上面で検出したが、本来の構築面は第１層上面である。掘方はほぼ垂直に掘られており、深さ3.2mを測る。内部堆積土は第35層～第43層の９層から成るが、概ね水平堆積を基本としている。遺物は全く出土していない。構築面からみて近世時期と推定されるが、深度が深いにも拘らず井戸側が存在していない等の不明な点も多い。

ＳＤ－１

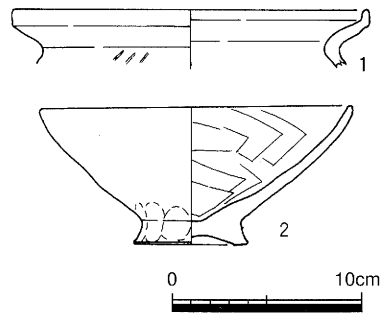
調査区の西部で検出した。検出部分では、南北方向に伸びた後、屈曲して東西方向に流路を変えている。幅0.7～1.0m、深さ0.2mを測る。埋土はシルト～粘土が優勢な４層（第26層～第29層）から成る。遺物が出土していないため、構築時期は判然としないが、既往調査結果からみて、古墳時代後期に比定される。

・第２区

現地表下1.6m迄を調査対象とした。面的には顕著な遺構は検出されなかったが、西壁および北壁で確認された第７層がN/灰白色シルトと５Ｙ7/4浅黄色シルトの互層で、出土した遺物からみて古墳時代後期の整地層の可能性が高い。

第２区遺物包含層出土遺物

第３層および第５層から出土した弥生土器２点を図化した。２点ともに弥生時代後期に比定されるもので、（１）が甕、（２）が高台を有する鉢である。（１）は「く」の字に屈曲する口縁端部が上方に大きく拡張されるもので、河内地域の弥生時代後期の土器編年で後期後半の指標とされる上六万寺式甕[註4]の特長と共通している。復原口径18.8cmを測る。（２）は上げ底の高台が付く鉢で全体の約1/2が残存している。口径16.6cm、器高7.3cm、高台径6.0cmを測る。色調は（１）が茶褐色、（２）が赤褐色で共に生駒西麓産である。



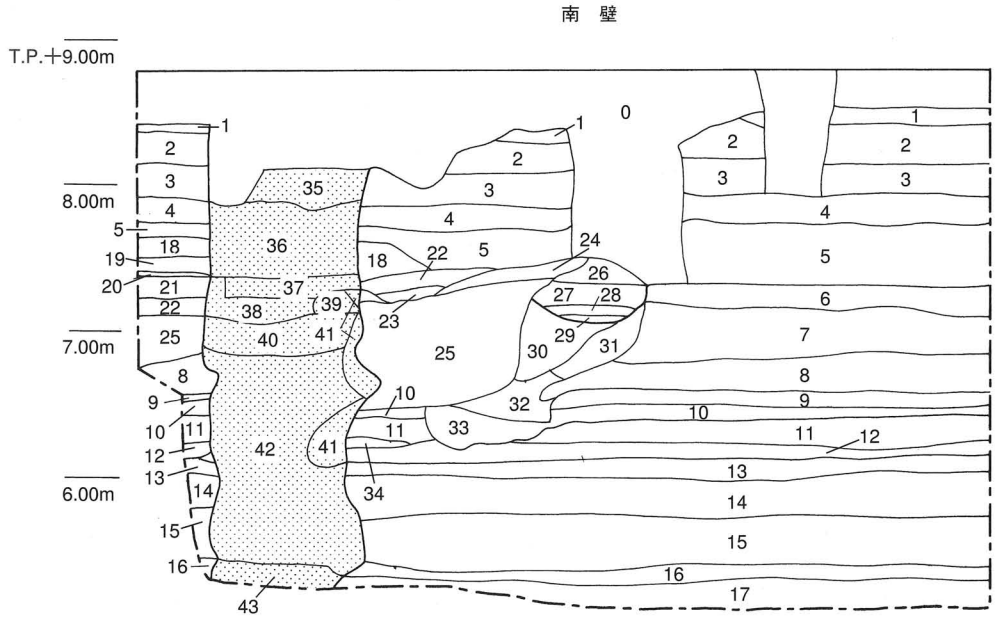
第３図　第２区遺物包含層出土遺物実測図

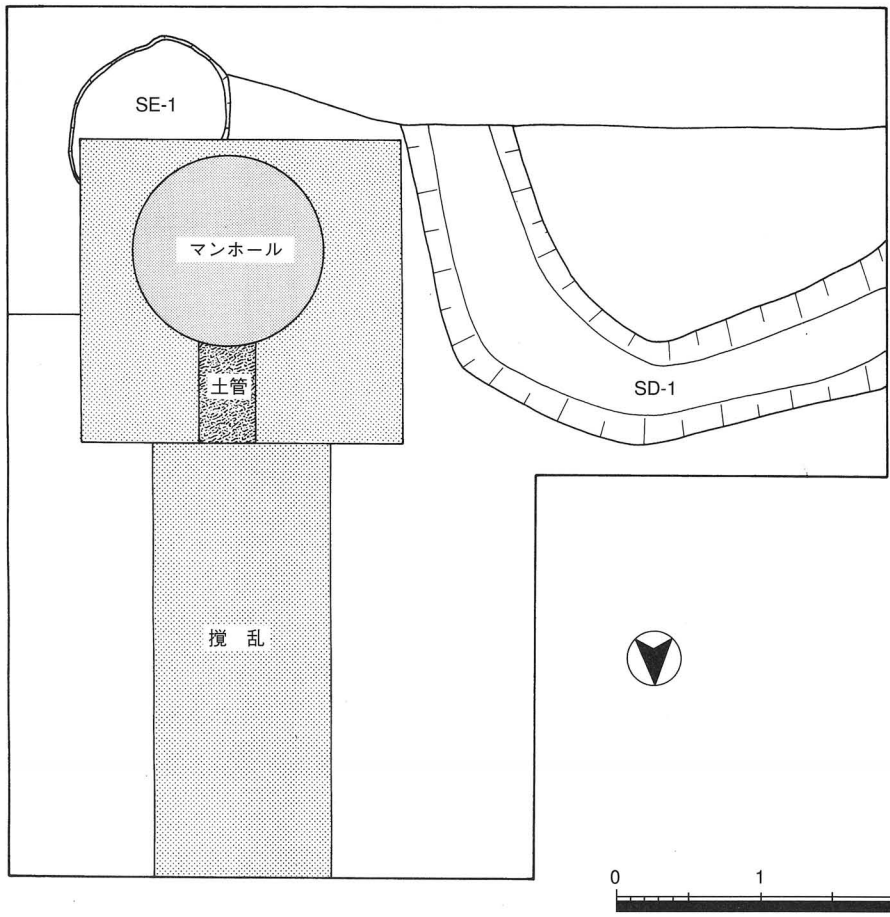
・第３区

現地表下1.35m前後（T.P.＋7.7m前後）付近に存在する第５層上面で、南北方向に伸びる時期不詳の溝１条（ＳＤ－２）を検出した。

ＳＤ－２

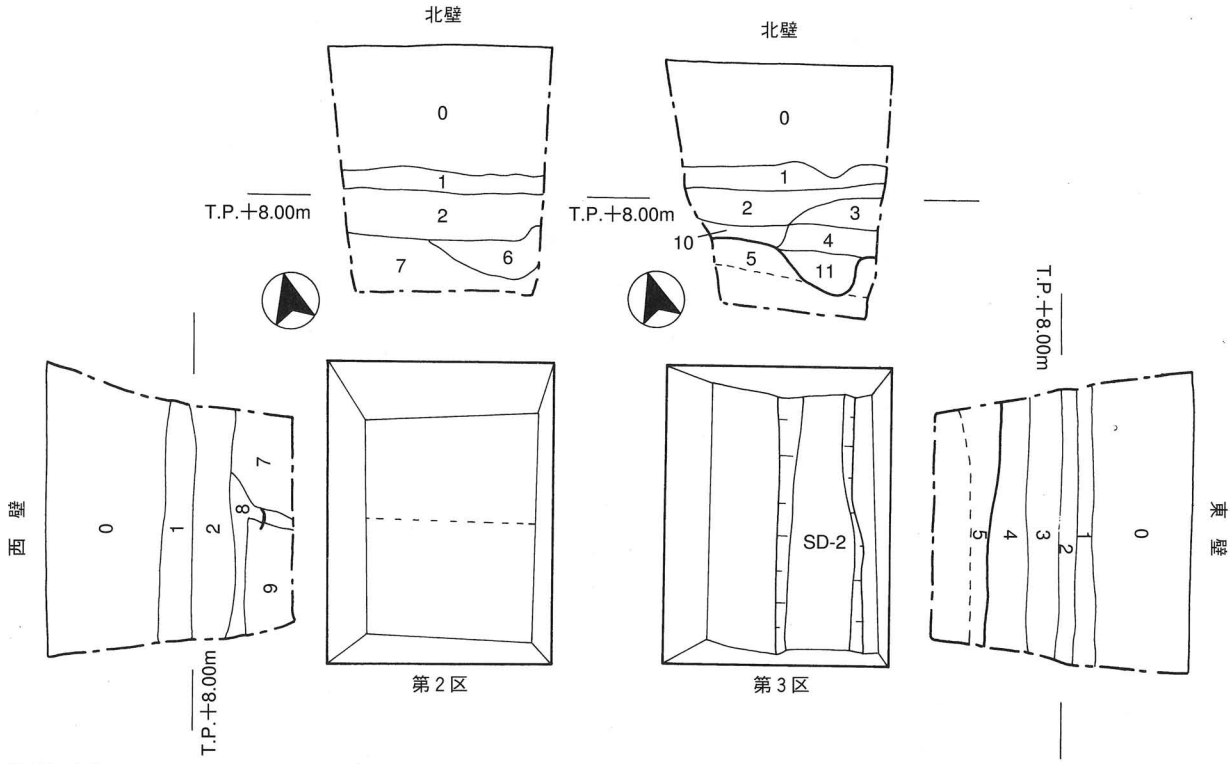
南北方向に伸びるもので、検出長1.7m、幅0.48～0.56m、深さ0.25mを測る。埋土は明緑灰色



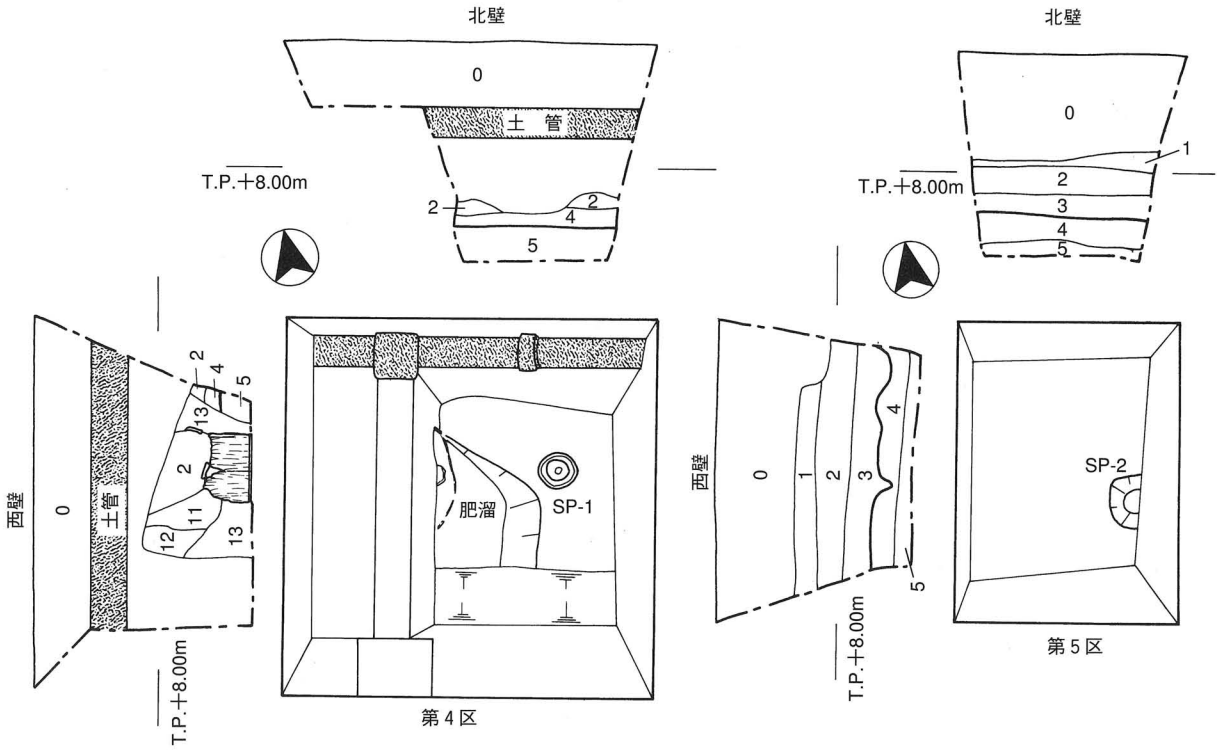


第0層　客土
第1層　N/ 灰色粘土質シルト
第2層　10BG6/1 青灰色粘土質シルト
第3層　2.5GY7/1 明オリーブ灰色砂質シルト
第4層　2.5GY6/1オリーブ灰色砂質シルト
第5層　10YR6/2 灰黄褐色シルト
第6層　5YR5/4 にぶい赤褐色粘土質シルト
第7層　5G6/1 緑灰色粘土質シルト
第8層　10G7/1 明緑灰色シルト
第9層　5G4/1 暗緑灰色粘土
第10層　10G6/1 緑灰色細粒砂混じり粘土
第11層　5BG4/1 暗青灰色粘土
第12層　5BG6/1 青灰色粘土
第13層　5BG3/1 暗青灰色粘土
第14層　5BG5/1 青灰色粘土
第15層　10BG5/1 緑灰色シルト
第16層　10BG7/1 明緑灰色細粒砂
第17層　5G5/1 緑灰色シルト混じり細粒砂
第18層　7.5YR4/1 褐灰色粗粒砂
第19層　7YR7/2 明褐灰色極細粒砂
第20層　5YR5/4 にぶい赤褐色粘土
第21層　10YR7/2 にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂
第22層　7.5YR5/2 灰褐色粗粒砂
第23層　2.5YR3/4 にぶい赤褐色細粒砂
第24層　7.5YR7/4 にぶい橙色細粒砂
第25層　5YR5/4 にぶい赤褐色粗粒砂
第26層　5YR7/4 にぶい橙色シルト
第27層　5YR7/1 明褐灰色シルト
第28層　5YR6/1 褐灰色粘土
第29層　10BG6/1 青灰色粘土質シルト
第30層　5G5/1 緑灰色シルト混じり細粒砂
第31層　5BG4/1 暗青灰色シルト混じり粘土
第32層　5BG6/1 青灰色シルト混じり粗粒砂
第33層　5BG5/1 青灰色細粒砂混じりシルト
第34層　5G7/1 明緑灰色粘土
第35層　第3層と2.5GY8/1 灰白色シルトの互層
第36層　10YR6/1 褐灰色細粒砂混じりシルト
第37層　7.5YR6/1 褐灰色細粒砂混じり粘土
第38層　10YR7/1 灰白色粘土
第39層　7.5YR4/6 褐色細粒砂
第40層　5G6/1 緑灰色細粒砂混じり粘土
第41層　7YR7/3 にぶい橙色粗粒砂
第42層　5G3/1 暗緑灰色粘土混じり粗粒砂
第43層　5BG7/1 明青灰色細粒砂

第4図　第1区平断面図（1／50）



第0層　客土
第1層　N/ 灰色粘土質シルト（旧耕土）
第2層　10BG6/1 青灰色粘土質シルト（床土）
第3層　2.5GY7/1 明オリーブ灰色砂質シルト（平安時代～室町時代の遺物を少量含む）
第4層　2.5GY6/1 オリーブ灰色砂質シルト（古墳時代後期～平安時代の遺物を少量含む）
第5層　10YR6/2 灰黄褐色シルト（古墳時代後期～平安時代の遺構構築面）
第6層　N/ 灰色砂質シルト
第7層　N/ 灰白色シルトと5Y7/4 浅黄色シルトの互層
第8層　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粗粒砂混じりシルト
第9層　2.5Y7/2 灰黄色シルト質粘土



第10層　2.5GY7/1 明オリーブ灰色砂質シルト
第11層　10GY7/1 明緑灰色砂質シルト
第12層　10BG6/1 青灰色砂質シルト
第13層　10BG7/1 明青灰色シルト質粘土

0　1　2m

第5図　第2区～第5区平断面図（1／50）

砂質シルトの単一層である。遺物は小片化した土師器・須恵器・瓦器椀等の土器類が極少量出土している。

・第４区

現地表下1.2m（T.P.＋7.6m）付近に存在する第５層上面で、時期不詳の小穴１個（ＳＰ－１）と近世時期の肥溜１箇所を検出した。

ＳＰ－１

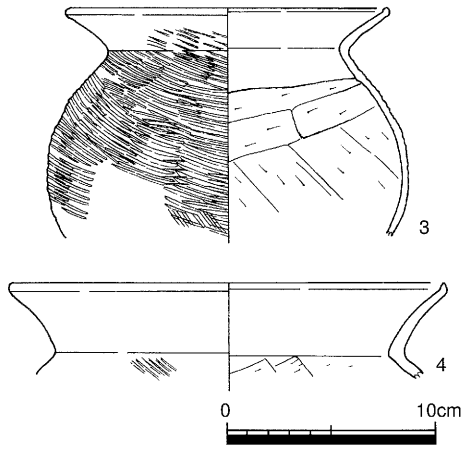
上面の形状が円形を呈するもので、径0.26㎝、深さ0.18㎝を測る。２段掘方で埋土は灰黄褐色の単一層である。遺物は出土していない。

肥溜

西壁でその一部を検出したのみで詳細等は不明である。検出部分から推定して径0.8m前後、深さ0.5m以上の桶を使用した肥溜が想定される。埋土は肥溜内部に第10層明オリーブ灰色砂質シルトが堆積している他、掘方内には第11層明緑灰色砂質シルト、第12層青灰色砂質シルト、第13層明青灰色シルト質粘土が堆積しており、遺物は掘形内に堆積する第11層から平瓦片が出土している。構築面からみて、近世時期のものと推定される。

第４区遺物包含層出土遺物

２点（３・４）を図化した。２点ともに庄内式甕である。（３）は第３層から出土した。復原口径16.5㎝を測る。口縁部が叩き出し技法により「く」の字に屈曲するもので、端部はつまみ上げられている。体部外面のタタキは左上がりで単位幅がやや太い（３本／１㎝）もので、体部中位以下にはタタキ後ハケ調整が行われている。屈曲部は丸味を持つもので、体部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまでおよんでいる。色調は淡茶褐色で、胎土中に極細粒の角閃石が多量に含まれている。形態や調整法からいわゆる「大和型庄内式甕」に分類されるものである。奥田尚氏による胎土分析によれば、胎土中に含まれている角閃石は奈良県桜井市付近の産出とされる同定結果が得られている。河内地域においては、「大和型庄内式甕」の出土は東弓削遺跡（八尾市）の２例（そのうち１例が播磨産、他不明）が知られているが、大和産の「大和型庄内式甕」[註5]が河内地域で検出されたものとしては本例が初例となる。なお、大和地域の編年によれば庄内式新相から布留式古相に対比されよう。（４）は第２層から出土した河内型庄内式甕の口縁部の小片である。復原口径21㎝を測る。体部外面に左上がりの細筋タタキが行われている。茶褐色の色調で、胎土中に多量の角閃石が含まれている。生駒西麓産である。庄内式新相～布留式古相のものであろう。



第６図　第４区遺物包含層出土遺物実測図

・第５区

現地表下1.1m（T.P.＋7.8m）付近に存在する第４層上面で、時期不詳の小穴１個（ＳＰ－２）を検出した。

ＳＰ－２

調査地の東部で検出した。東部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で南北幅

0.36m、深さ0.2mを測る。埋土は褐灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は土師器の小片が極少量出土したのみで、時期等の詳細は不明な点が多いが、第４層上面を構築面とすることから中世時期の遺構であった可能性が高い。

・第６区

現地表下1.1m（T.P.＋7.8m）付近に存在する第５層上面で、平安時代前期に比定される溝２条（ＳＤ−４・ＳＤ−５）、時期不詳の溝２条（ＳＤ−３・ＳＤ−６）を検出した。

ＳＤ−３

南北方向に伸びるもので、ＳＤ−５を切っている。検出長1.35m、幅0.32m、深さ0.05mを測る。埋土は灰色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器の小片が極少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

ＳＤ−４

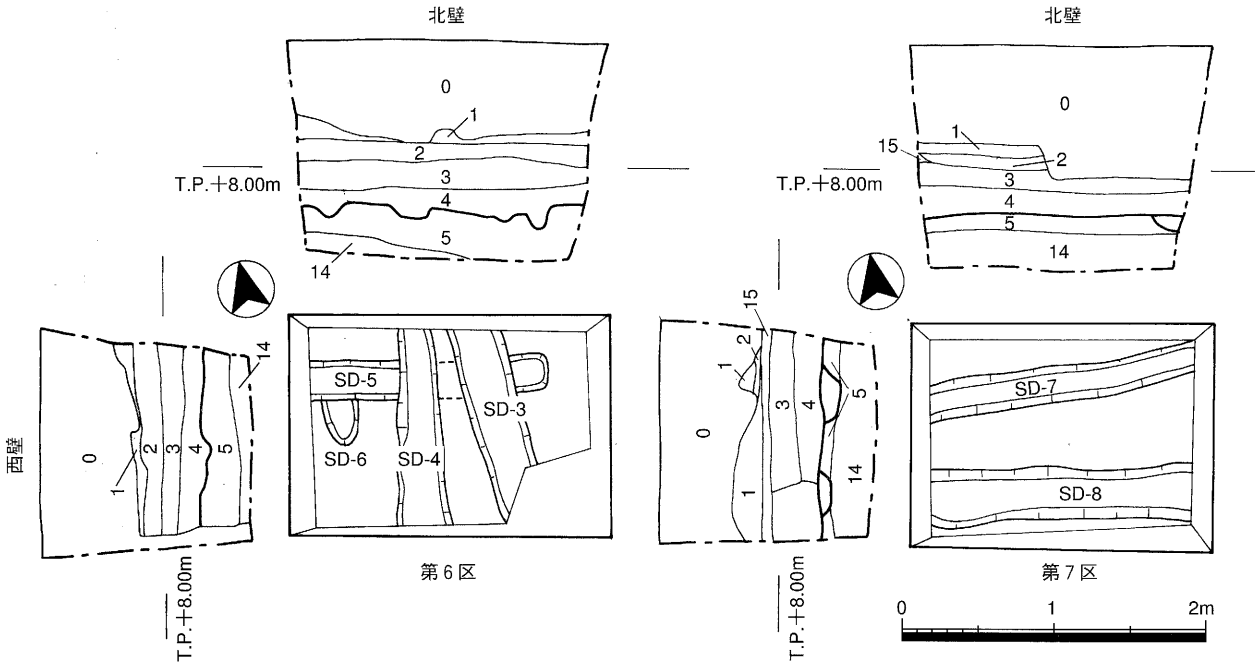
ＳＤ−３の西に並行して伸びるもので、ＳＤ−３と同様ＳＤ−５を切っている。検出長1.3m、幅0.2〜0.38m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色砂質シルトの単一層である。遺物は土師器・須恵器・丸瓦等の小片が極少量出土している。時期的には平安時代前期に比定されよう。

ＳＤ−５

東西方向に伸びるもので、ＳＤ−６を切り、ＳＤ−３・４に切られている。検出長1.54m、幅0.25m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色砂質シルトの単一層である。遺物は平安時代前期に比定される土師器杯の小片が出土している。

ＳＤ−６

調査区の西部で検出した。南北方向に伸びるもので、北部はＳＤ−５に切られている。検出長0.3m、幅0.22m、深さ0.05mを測る。埋土は灰色砂質シルトの単一層である。遺物は出土していない。



第14層　N8/ 灰白色極細粒砂
第15層　5Y6/1 灰色粘土質シルト

第７図　第６区・第７区平断面図（1/50）

・第７区

現地表下1.1m（T.P.＋7.7m）付近に存在する第５層上面で、古墳時代後期に比定される溝２条（ＳＤ－７・ＳＤ－８）を検出した。

ＳＤ－７

東西方向に伸びるもので、検出長1.76m、幅0.22m、深さ0.12mを測る。埋土は灰白色細粒砂の単一層である。土師器の小片が極少量出土したが時期等は明確にし得ない。

ＳＤ－８

ＳＤ－７の南に並行して伸びる。検出長1.7m、幅0.3～0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は灰白色細粒砂の単一層である。古墳時代後期に比定される須恵器片が極少量出土している。

３．まとめ

今回の調査は、公共下水道工事に伴う立坑・人孔を調査対象とした小規模で点的な発掘調査ではあったが、小阪合遺跡の西部における古墳時代後期・平安時代前期の集落域の動向を知る上で貴重な資料を提供する結果となった。

古墳時代後期の遺構は第１区・第３区・第７区で検出されている。既往調査では、１区に接する第８次調査（ＫＳ86－８）の第１調査区や第３区に近接する市教委89－255調査[註7]において当該期の遺構が検出されており[註6]、小阪合遺跡の西部を中心に古墳時代後期（６世紀代）の集落が存在することが明らかになった。

平安時代前期の遺構は第６区を中心に検出されている。周辺の調査では、南東約200m地点で行われた第32次調査（ＫＳ96－32）で井戸が検出されている程度で、当該期の遺構・遺物の検出例は少ないことが指摘される[註8]。これらの状況は、他遺跡とも共通した事象であり、おそらく条里施行に基づく方格地割に規制され、当該期の集落形態が集村化へと変化した結果を可視的に示すものと推定される。

なお、遺構は検出されなかったものの、遺物包含層からは古墳時代初頭～前期に比定される遺物が出土しており、既往調査で明らかなように当該期の広範な集落存在を示唆している。

一方、第４区の第３層から出土した「大和型庄内式甕」は、大和産としては河内地域で初めて確認されたものである。中河内地域では、古墳時代初頭～前期においては、活発な地域間交流を示す証として他地域から搬入された土器の出土例が顕著である。その様な状況にあって、河内産の庄内式甕が近接する大和地域の遺跡から散発的に検出されるものの、河内地域で大和産の「大和型庄内式甕」の出土を見ない点は、やや理解し難い特異な現象として考えられてきた。今回、出土した一片の「大和型庄内式甕」の存在は、当該期における「河内」と「大和」との諸問題を推考する上で一石を投じる結果となった。

写真１　調査風景

註記

註１　高萩千秋　1990「第４章 第８次調査」『小阪合遺跡－八尾市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査－＜昭和61年度第８次 昭和62年度第10・13次 昭和63年度第16次調査報告＞』(財) 八尾市文化財調査研究会報告26 (財) 八尾市文化財調査研究会

註２　岡田清一　1990「12. 小阪合遺跡（89－255）の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告Ⅰ』八尾市文化財調査報告20平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会

註３　中野篤史　1996「Ⅲ 小阪合遺跡（第27次調査）」『(財) 八尾市文化財調査研究会報告50』(財) 八尾市文化財調査研究会

註４　都出比呂志 1974「古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－」『考古学研究』第20巻 第４号

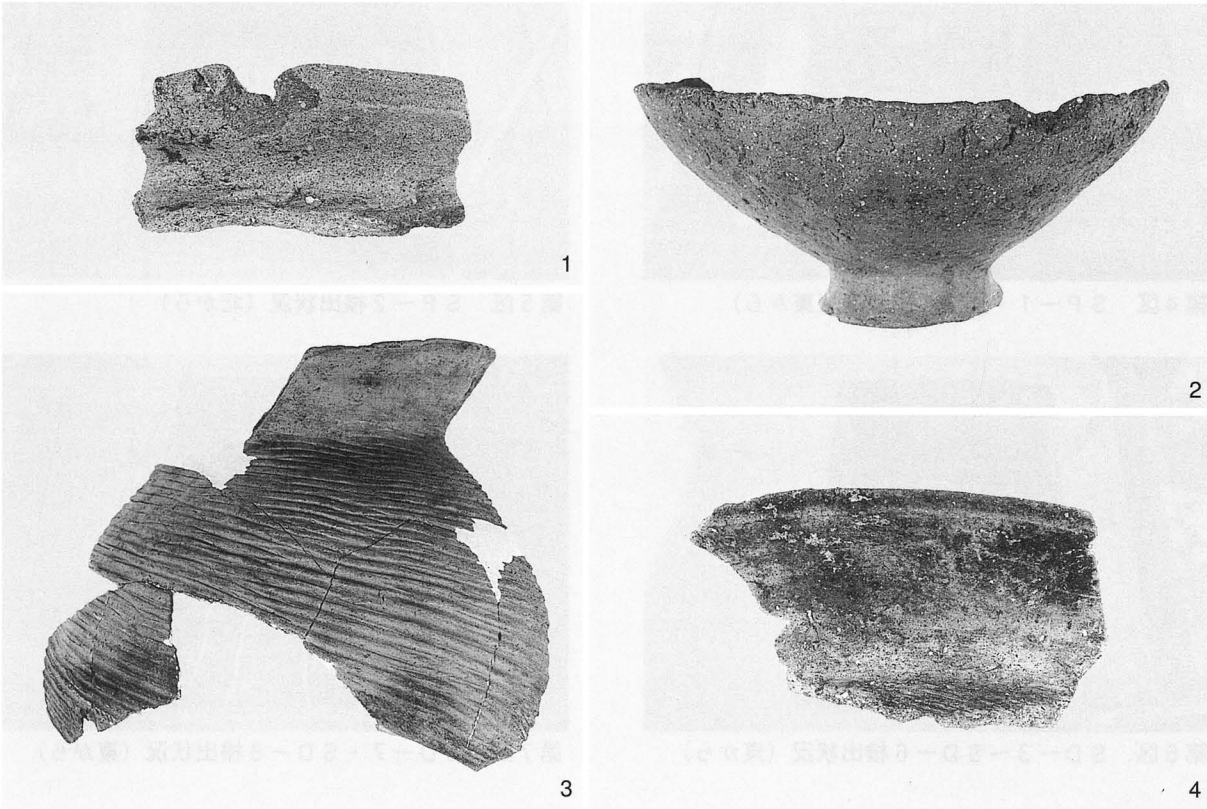
註５　原田昌則　1993「Ⅰ東弓削遺跡（第４次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会報告37 (財) 八尾市文化財調査研究会

註６　前掲註１

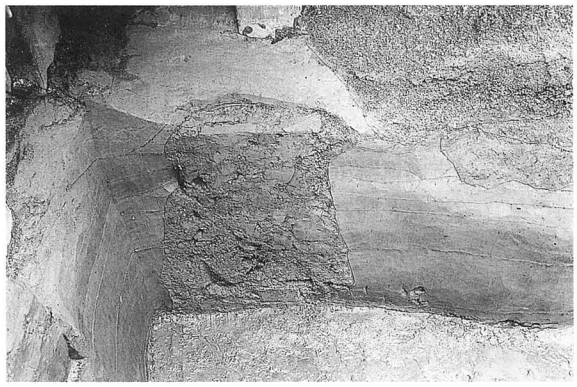
註７　前掲註２

註８　坪田真一・古川晴久　1997「13. 小阪合遺跡第32次調査（KS96－32）」『平成８年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

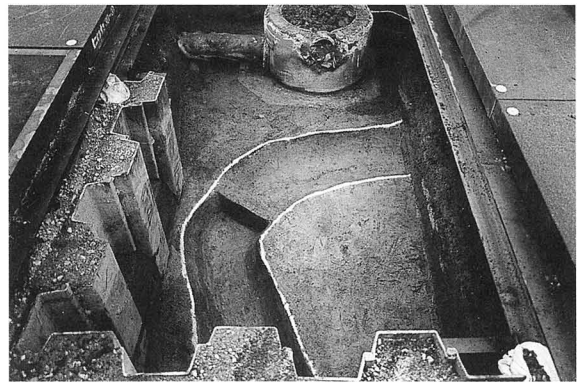
図版一



第２区（１・２）、第４区（３・４）出土遺物



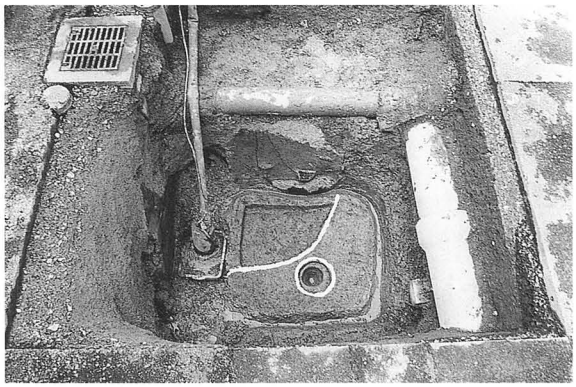
第１区　ＳＥ－１検出状況（北から）



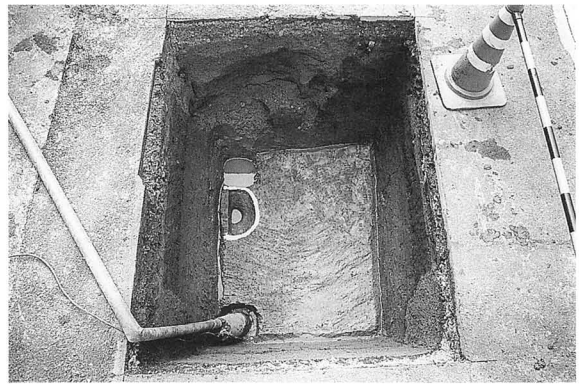
第１区　ＳＤ－１検出状況（西から）

第２区　全景（南から）

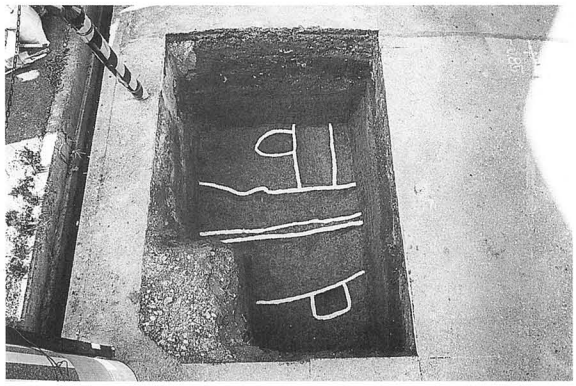
第３区　ＳＤ－２検出状況（南から）



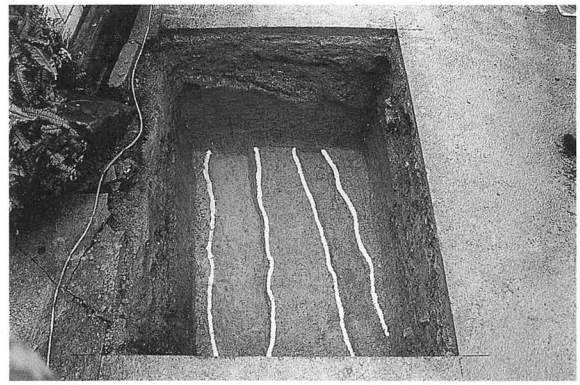
第４区　ＳＰ－１・肥溜検出状況（東から）



第５区　ＳＰ－２検出状況（北から）



第６区　ＳＤ－３～ＳＤ－６検出状況（東から）



第７区　ＳＤ－７・ＳＤ－８検出状況（東から）

XI　志紀遺跡第３次調査（ＳＩＫ96－３）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市志紀町西１丁目地内で実施した公共下水道工事（８－３工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本調査で報告する志紀遺跡第３次調査（ＳＩＫ96－３）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋147－３号 平成８年６月14日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成９年２月12日から３月10日（実働６日間）にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は43.4㎡を測る。調査においては市森千恵子・岸田靖子・中谷嘉多・中村百合が参加した。

1．本書の執筆・編集は岡田が行った。

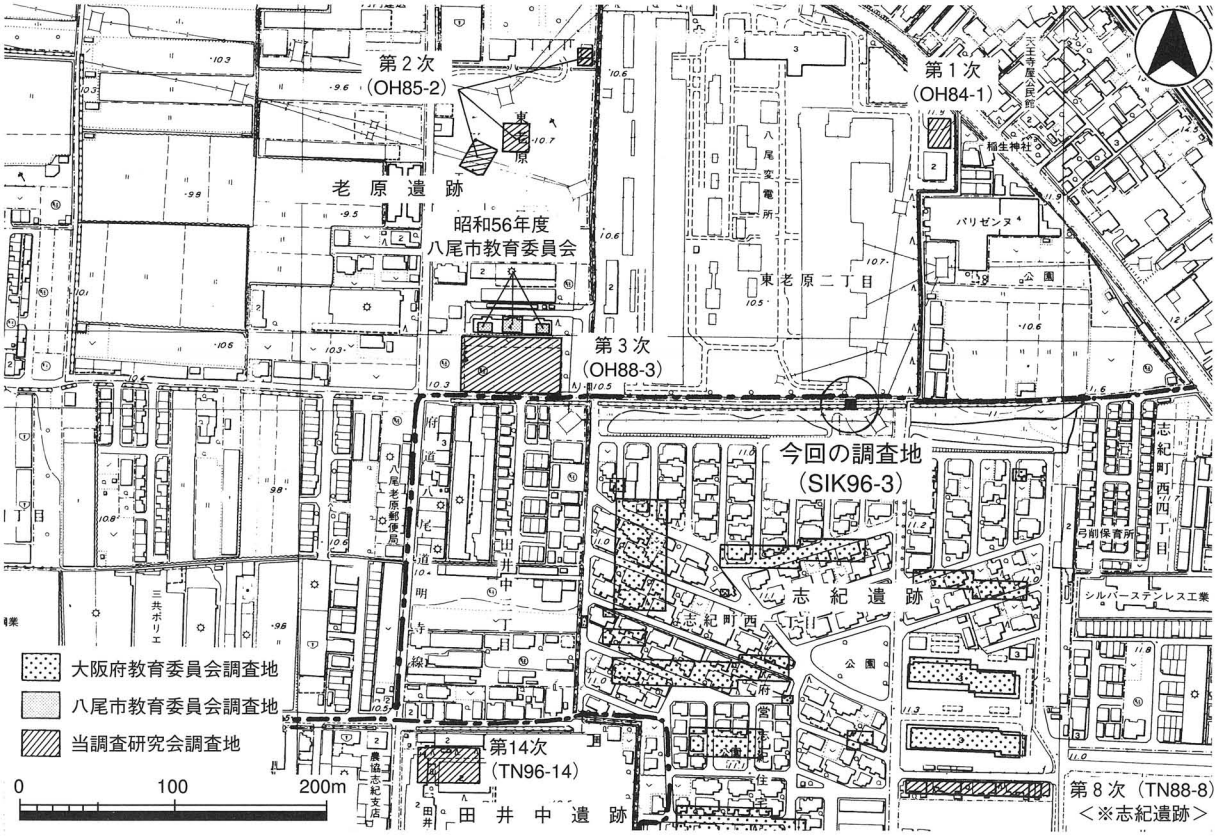
本　文　目　次

1．はじめに……71
2．調査概要……72
　1）調査の方法と経過……72
　2）基本層序……72
　3）検出遺構と出土遺物……74
3．まとめ……74

XI　志紀遺跡第３次調査（ＳＩＫ96－３）

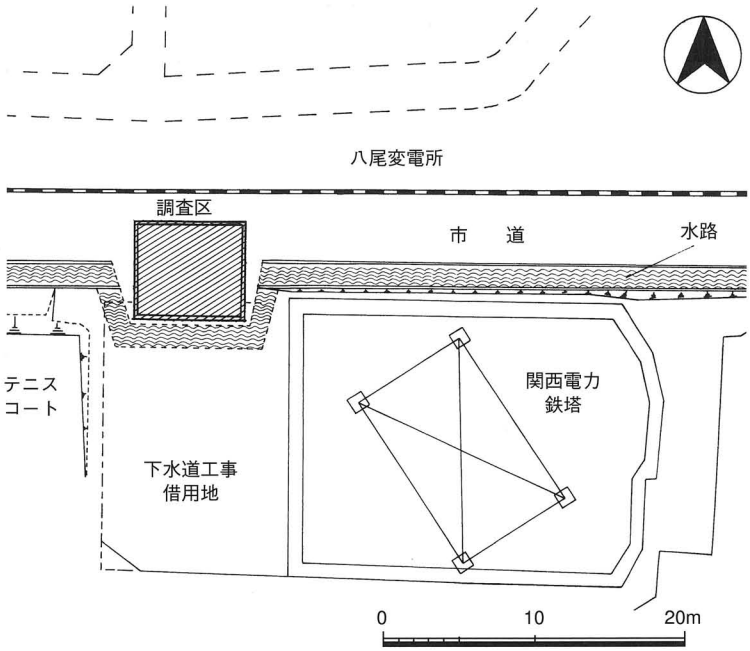
１．はじめに

志紀遺跡は八尾市南部に位置し、南東から北西方向に流れる旧大和川の主流であった長瀬川の左岸にあたり、羽曳野丘陵から北方に伸びる二本の洪積段丘に挟まれた谷状の低地に立地する。遺跡の推定範囲はおおよそ東西方向0.6㎞前後・南北方向0.7㎞前後を測り、現在の行政区画では志紀西１～３丁目一帯に所在する。当遺跡の周辺には、北および北西に老原遺跡・南および南西に田井中遺跡が隣接し、さらに南東約0.5㎞地点に弓削遺跡・北東約0.3㎞に東弓削遺跡が位置している。当遺跡内では昭和57年（1982年）より現在まで、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター・当調査研究会において、府営志紀住宅建設・合同庁舎建設・公共下水道工事等に伴う十数件の調査が実施されており、その結果、弥生時代前期から江戸時代におよぶ水田遺構が重層的に検出されている。その調査のなかでも特筆すべきものに、大阪府教育委員会の第１次調査（1983年度）で出土した藁の莚、第５次調査[註1]（1990年度）で検出した弥生時代中期の稲株跡、第６次調査[註2]（1991年度）で古墳時代後期水田跡の大畦畔から芯材として転用された梯子の出土が挙げられる。[註3]志紀遺跡で検出される水田遺構をおおまかな時代別で概観すると、弥生・古墳時代の水田が自然地形に沿った区画であるのに対し、平安・鎌倉時代では条里に沿った水田区画となっていることが面的な調査結果から窺われる。また、当遺跡の西側に隣接する田井中遺跡との関係で弥生時代から古墳時代に限ってみると、田井中遺跡で検出され



第１図　調査地位置図および周辺図

ている当該期の集落が、当遺跡内で検出されている同時期の水田遺構と有機的関係にあることは、最近の両遺跡の調査から周知されているところである。今回の調査地の近隣では、南に約100m地点で昭和63～平成元年度に大阪府教育委員会によって実施された調査[註4]（第３次調査）で、弥生時代中期後半から古墳時代後期までの大畦を基幹とする一辺４ｍから10m前後の小区画水田が検出されている。また、北方の老原遺跡内では当地から半径約250m地点内で、昭和56～60年の間に八尾市教育委員会および当調査研究会によって４件の調査[註5]が実施されており、その結果、古墳時代後期と鎌倉時代の水田・鎌倉時代前期～後期の集落跡が検出されている。



第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（８－３工区）に伴うもので、当調査研究会が志紀遺跡内で実施する第３次調査にあたる。調査対象となった立坑は南北6.4ｍ×東西7.2ｍで、実調査面積約43.4㎡を測る。掘削深度については、工事掘削最終深度が現地表から約13ｍを測るものであるが、周辺における既往の調査結果から考慮して、現地表から約８ｍまでを調査対象とした。調査の方法は現地表から1.7ｍ前後の盛土・撹乱層部分を重機により排除した後、以下約８ｍの深度まで層理に従い、機械と人力を併用して掘削・精査にあたり、遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、おおよそ標高８～９ｍ間で古墳時代の埋没河川または洪水層とみられる砂層、さらに、おおよそ標高６～７ｍ間で縄文時代晩期～弥生時代前期の沼沢地を示唆する層厚20㎝前後の黒色粘土（帯）を２条確認するに至った。

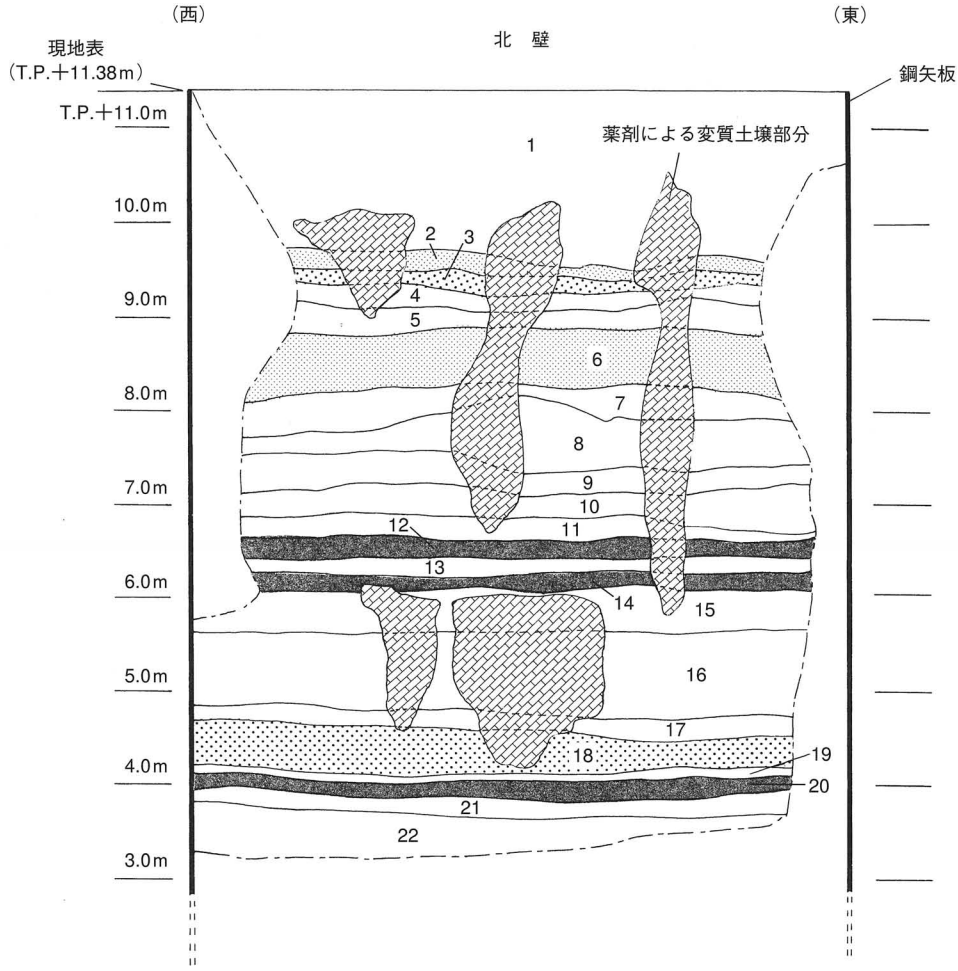
２）基本層序

現地表から1.7ｍ前後に堆積する盛土・撹乱層を含め、全体で22層の堆積層を確認した。工事上支障をきたす湧水および漏水防止の為の強力な薬注入剤によって、コンクリート化した土塊が調査区全体にブロック状に浸入しており、土層平・断面の観察および掘削は困難を極めた。特に湧水層とも言えるべき砂層はもちろんのこと、それにパックされた水田耕土の可能性がある下層の粘土層の上面にも薬剤が影響を及ぼし、畦畔はおろか足跡すら判定し難い状況であった。以下、周辺の既往の調査結果を踏まえ、確認できた22層をまとまりのある層群に大別して概説する。

第１層：層厚1.7ｍ前後。道路築造の際の盛土および電路管・工業用水管の埋設工事に伴う撹乱層である。現地表の標高は11.38ｍを測る。

第２・３層：層厚0.3～0.4ｍ。灰白色系の砂層で平安時代から鎌倉時代に比定される洪水層と考えられる。

第４・５層：層厚0.4から0.5ｍ。灰色系の砂質シルト、および粘土から成る。平安時代から鎌倉



〔層　序〕
1：盛土・撹乱層
2：N8/ 灰白色細粒砂
3：N8/ 灰白色粗粒砂
4：10BG5/1 青灰色砂質シルト
5：N4/ 灰色粘土
6：10YR7/3 にぶい黄橙色細粒砂
7：10YR6/1 褐灰色シルトと極細粒砂の互層
8：10BG5/1 青灰色シルト質粘土
9：10BG5/1 青灰色粘土
10：10BG3/1 暗青灰色シルト質粘土
11：N3/ 暗灰色粘土（黒色粘土帯Ⅰ）
12：5GY5/1 オリーブ灰色粘土
13：N3/ 暗灰色粘土（黒色粘土帯Ⅱ）
14：5GY5/1 オリーブ灰色粘土質シルト
15：2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト
16：5PB6/1 青灰色シルト質粘土
17：5PB4/1 暗青灰色砂質シルト
18：10YR7/2 にぶい黄橙色粗粒砂
19：10YR3/3 暗褐色粘土
20：N3/ 暗灰色粘土（黒色粘土帯Ⅲ）
21：5PB5/1 青灰色シルト質粘土
22：7.5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルト

第３図　基本層序模式図

時代の水田耕土に比定される可能性が強い。

第６・７層：層厚1.0～1.2m。淡い褐色系のシルトと砂層。弥生時代から古墳時代の埋没河川あるいは洪水層と思われる。

第８層：層厚0.2～0.8m。青灰色シルト質粘土。古墳時代の水田耕土が想定されるが、上層の土質が薬剤によって変質しており断定は避けたい。

第９・10層：層厚0.5～0.6m。シルト質粘土と粘土。沼沢地にみられるアシ等植物の存在を示唆する炭酸カルシウム分を多量に含む。

第11～14層：層厚0.8m前後。層厚0.2m前後の２条の黒色粘土帯と同厚規模の２層のオリーブ灰色系のシルト・粘土質シルトの互層。黒色粘土帯は、縄文時代晩期～弥生時代前期に対応する土層とみられる。

第15～17層：層厚1.4～1.6m。青灰色系のシルトとシルト質粘土。

第18層：層厚0.4～0.6m。にぶい黄褐色粗粒砂。洪水層と思われる。

第19～21層：層厚0.4m前後。層厚0.2m前後の１条の黒色粘土帯Ⅲを挟んで上下層に層厚0.1～0.2mの褐色系～灰色系の粘土層が堆積する。

第22層：層厚0.4m以上。オリーブ色系の砂質シルト。本調査の最深部になる堆積層で、最下部で標高3.2m前後を測る。

３）検出遺構と出土遺物

今回の調査では、当地が弥生時代から近世まで重層的に水田遺構が存在することが既往の調査で明白であるため、層理毎は言うに及ばず、特に後述する埋没河川あるいは洪水層の下層に堆積する粘土層上面において、綿密に精査を試みた。しかし、遺構は検出されず、時期決定できる遺物片すら見つからなかった。よって、結果的には先述の土層観察に主眼を置くこととなった。

３．まとめ

今回の調査は、下水立坑といった狭小な点的調査区であったことが遺構面を捉えられなかった要因の一つとも言えるが、それに加えて遺物も皆無であり、各土層の時期判断も既往の調査からの引用で明確さを欠く。ここで当地北側の老原遺跡をみると、八尾市教育委員会および当調査研究会が実施した４件の調査から、古墳時代後期～鎌倉時代にかけての集落遺構と生産遺構が検出されているが、本調[註5]査地に置き換えるとその土層部分にあたる標高9.5～11m付近は、現代の開発事業によって削平されているところとなり、その実態は不明である。それより下層の標高７～９mにあたる弥生時代～平安時代の生活面について、本調査の土層堆積状況と遺物量からみて、当地に集落が形成されていたとは考え難い。本遺跡内で周知されているところの水田遺構が拡がるものか、あるいは沖積地特有の生活域を見ない河川の氾濫原・沼沢地といった空閑地であったかについて、調査担当者としては南方での水田域の規模と本調査区の土層堆積状況から前者を想定したい。

註記

註１　山本彰他 1983『志紀遺跡発掘調査概要（第１次調査）』大阪府教育委員会

註２　山田隆一 1995『八尾市志紀町西1丁目所在 志紀遺跡発掘調査概要・Ⅳ －志紀流域調節池築造に伴う発掘調査－（第５次調査）』大阪府教育委員会

註３　大野薫他 1992『志紀遺跡発掘調査概要・Ⅱ（第６次調査）』大阪府教育委員会

註４　福田英人 1990「３．志紀遺跡の水田遺構」『大阪府埋蔵文化財研究会（第21回）資料 於 大阪府立労働センター』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

註５・高萩千秋他 1983「第７章 老原遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 1980・1981年度』(財) 八尾市文化財調査研究会報告２

・駒沢 敦 1985「11 老原遺跡（第1次調査）」『昭和59年度事業概要報告』(財) 八尾市文化財調査研究会報告７

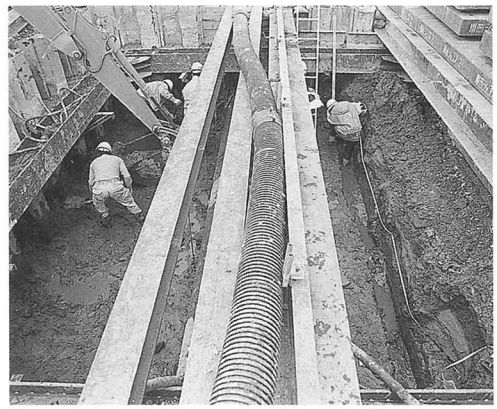
・原田昌則他 1986「５老原遺跡（第2次調査）」『昭和60年度事業概要報告』(財) 八尾市文化財調査研究会報告９

・原田昌則 1989「15 老原遺跡（第3次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財) 八尾市文化財調査研究会報告25

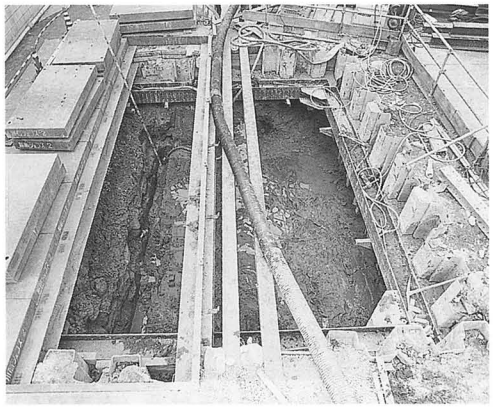
北壁東部　標高6.5～8.2m付近（南東から）

調査終了面全景　最深部標高3.6m前後（南から）

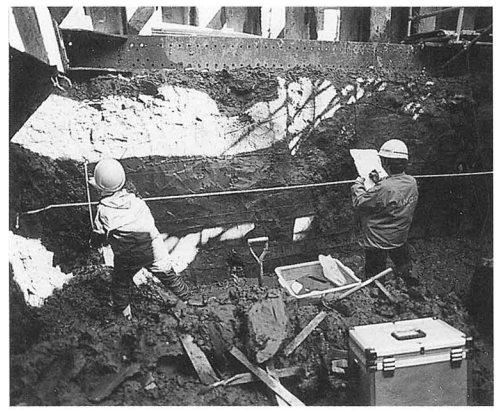
北壁面　標高8.8～9.7m付近（南東から）



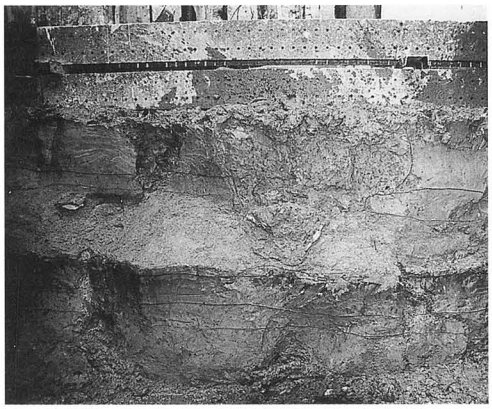
人力掘削（東から）



古墳時代水田相当面？（西から）

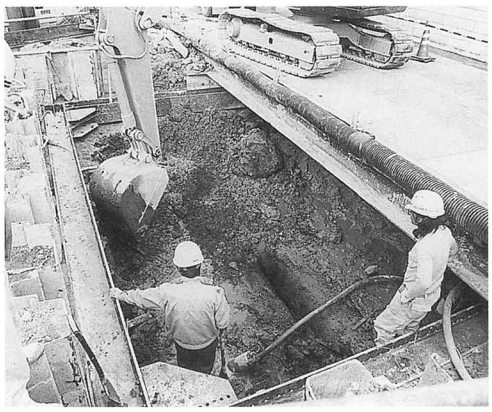


壁面土層実測風景（南西から）

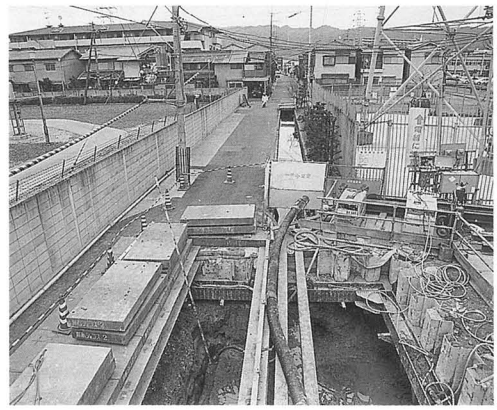


北壁面　標高3.2～5.8m付近（南から）

調査地近景（北東から）



重機掘削（南東から）



同上（西から）

XII　田井中遺跡第15次調査（ＴＮ96－15）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市田井中４丁目地内で実施した公共下水道工事（８－８工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する田井中遺跡第15次調査（ＴＮ96－15）の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋247－３号　平成８年７月17日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成８年３月12日～３月28日（実働４日間）にかけて、古川晴久を調査担当者として実施した。調査面積は、約23㎡を測る。調査においては、村井俊子が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成９年９月30日に完了した。

1．方位は、磁北である。

1．本書の執筆・編集は、古川が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……77

2．調査概要……78

　1）調査の方法と経過……78

　2）層序……79

　3）検出遺構と出土遺物……79

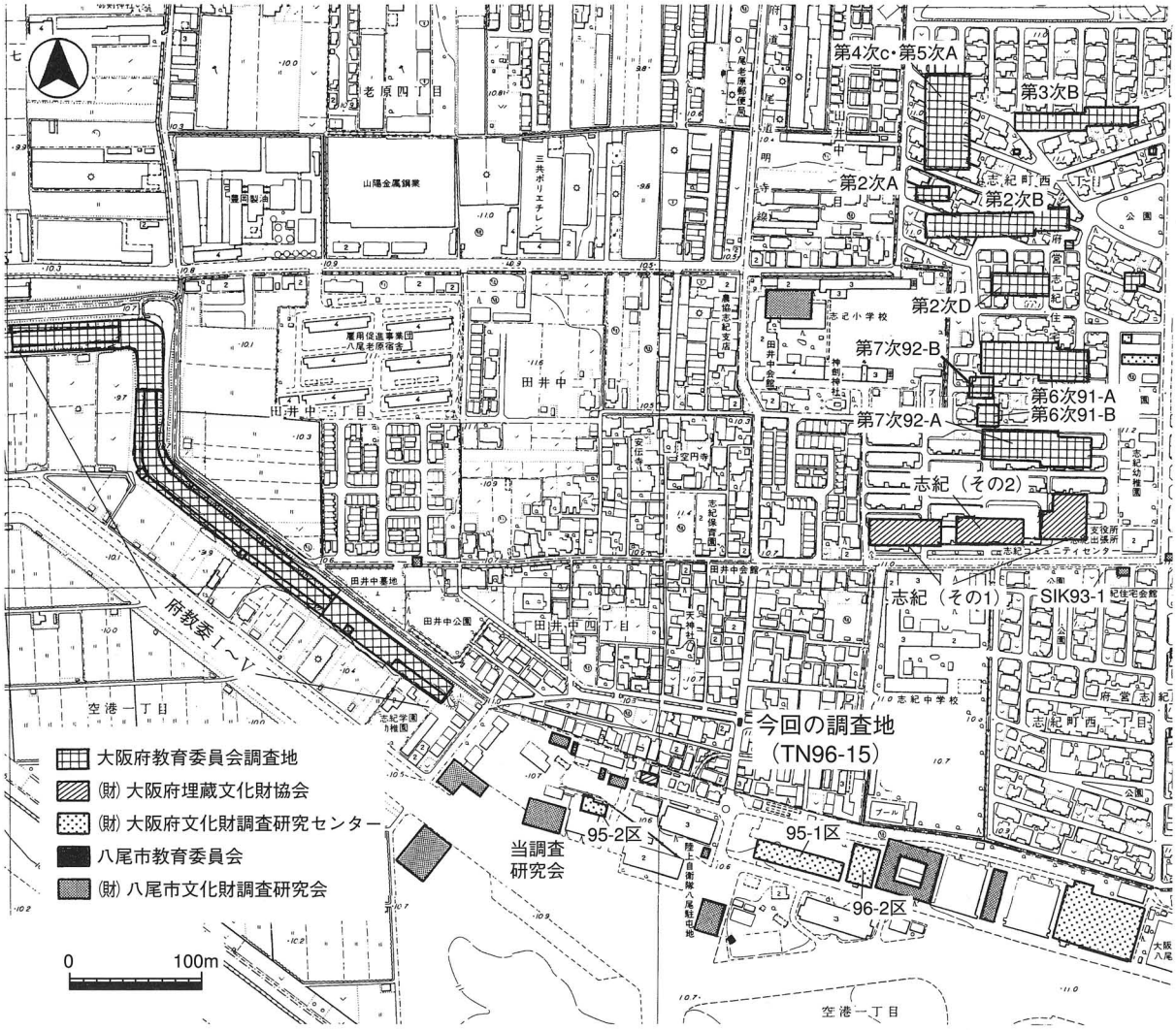
3．まとめ……81

Ⅻ　田井中遺跡第15次調査（TN96－15）

1．はじめに

田井中遺跡は、八尾市の南東部に位置し、現在の行政区画では田井中１～４丁目・空港１丁目の一部にかけて所在する。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川の左岸に位置し、羽曳野丘陵先端の低位段丘上にある。同地形上で、北に老原遺跡、東に志紀遺跡・弓削遺跡、南西に木の本遺跡が位置する。また、長瀬川の北側には、東弓削遺跡・中田遺跡が存在する。

田井中遺跡は、陸上自衛隊八尾駐屯地内での下水道工事の際、弥生土器が出土したことにより知られるようになった。昭和57（1982）年度から大阪府教育委員会、(財)大阪府埋蔵文化財協会、(財)大阪府文化財調査研究センター、八尾市教育委員会、当調査研究会による十数次の発掘調査が実施されており、縄文時代晩期から近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。



第１図　調査地周辺図

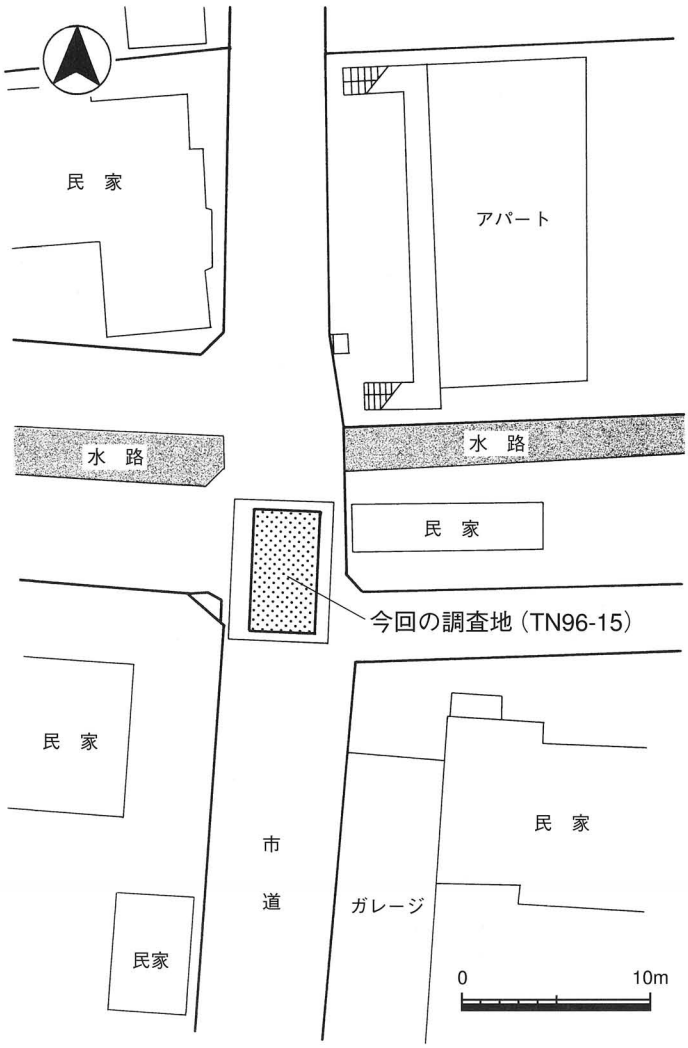
特に、八尾空港北濠の南東端と陸上自衛隊八尾駐屯地の西端を中心として、弥生時代前期の遺構・遺物が検出されている。さらに、東に約400mの調査地［志紀（その２）］では、集落をめぐっていたと考えられる弥生時代中期の大溝群が確認されたことにより、集落域は拡大したとみられる。

田井中遺跡の北東に拡がる志紀遺跡では、府営住宅の建て替えに伴う調査で弥生時代前期～中・近世にかけて水田が営まれていたことが明らかになった。これら両遺跡は、考古学的に田井中遺跡が集落域、志紀遺跡が生産域としてとらえられており、互いに関連があったと考えられている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（8－8工区）の発進立坑部分の調査で、当調査研究会が田井中遺跡内で実施した第15次調査にあたる。調査地の平面形は、東西幅約3.6m×南北幅約6.4mの長方形を呈する。調査は、市教育委員会の指示書に基づいて、現地表（T.P.＋11.64m)から約２m前後について機械掘削を実施し、それ以下３mについて人力掘削を主として行い、状況に応じて機械掘削を併用して実施した。土層断面観察のため東・南壁を残しながら掘削を行い調査を進めた。



第２図　調査地位置図

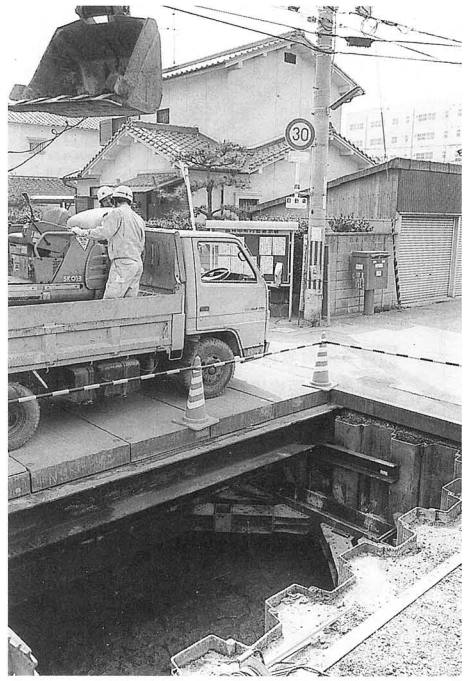


写真　調査地近景(北西から)

2）層序

第１層：現代盛土。

第２層：青灰色礫混砂質土～青灰色砂質土。層厚20～40㎝。ややしまりあり。（旧耕土）

第３層：黄橙色シルト。しまり弱い。

第４層：黄白色シルト。灰色粘土ブロックを含む。

第５層：灰オリーブ色砂質土。鉄分沈殿がみられ、層の中央に微砂混じる。

第６層：青灰色砂質シルト。しまり弱い。（洪水層）

第７層：灰色粘質シルト。鉄分沈殿がみられ、しまり弱い。（水田・小畦畔）

第８層：青灰色粘質シルト。しまりは強くなく、炭酸カルシウムを均一に含む。（水田・床土）

第９層：暗黄灰色粘質土。植物遺体・炭酸カルシウムを多く含む。（機械掘削終了面）

第10層：暗オリーブ色粘質シルト。粘性強く、植物遺体を含む。

第11層：暗褐色粘質土。

第12層：暗青灰色細砂混粘質土。粘性強く、少し炭が混じる。

第13層：暗灰黒色細砂混粘質土。層厚10～15㎝。粘性強く、ややしまる。

第14層：灰色細砂混シルト。層厚５～30㎝。ややしまりあり。

第15層：緑灰色細砂混シルト。層厚５～10㎝。ややしまりがあり、灰黒色の粘土ブロックが若干混じる。

第16層：暗緑灰色シルト。層厚５～25㎝。しまり非常に強い。

第17層：緑灰色シルト。層厚10～20㎝。しまり強い。

第18層：オリーブ灰色シルト。層中に黒雲母を均一に含み、ラミナがみられる。

第19層：薄灰色砂質シルト。細砂が混じる。

第20層：薄灰色砂質土。粗砂が若干混じる。

第21層：灰白色粗砂。しまり弱く、層中の下部に灰色粘土ブロックを若干含む。

第22層：灰オリーブ色粗砂。しまり弱く、極小礫を多く含む。

第23層：灰白オリーブ色粗砂。しまり弱く、上層よりも極小礫を多く含む。

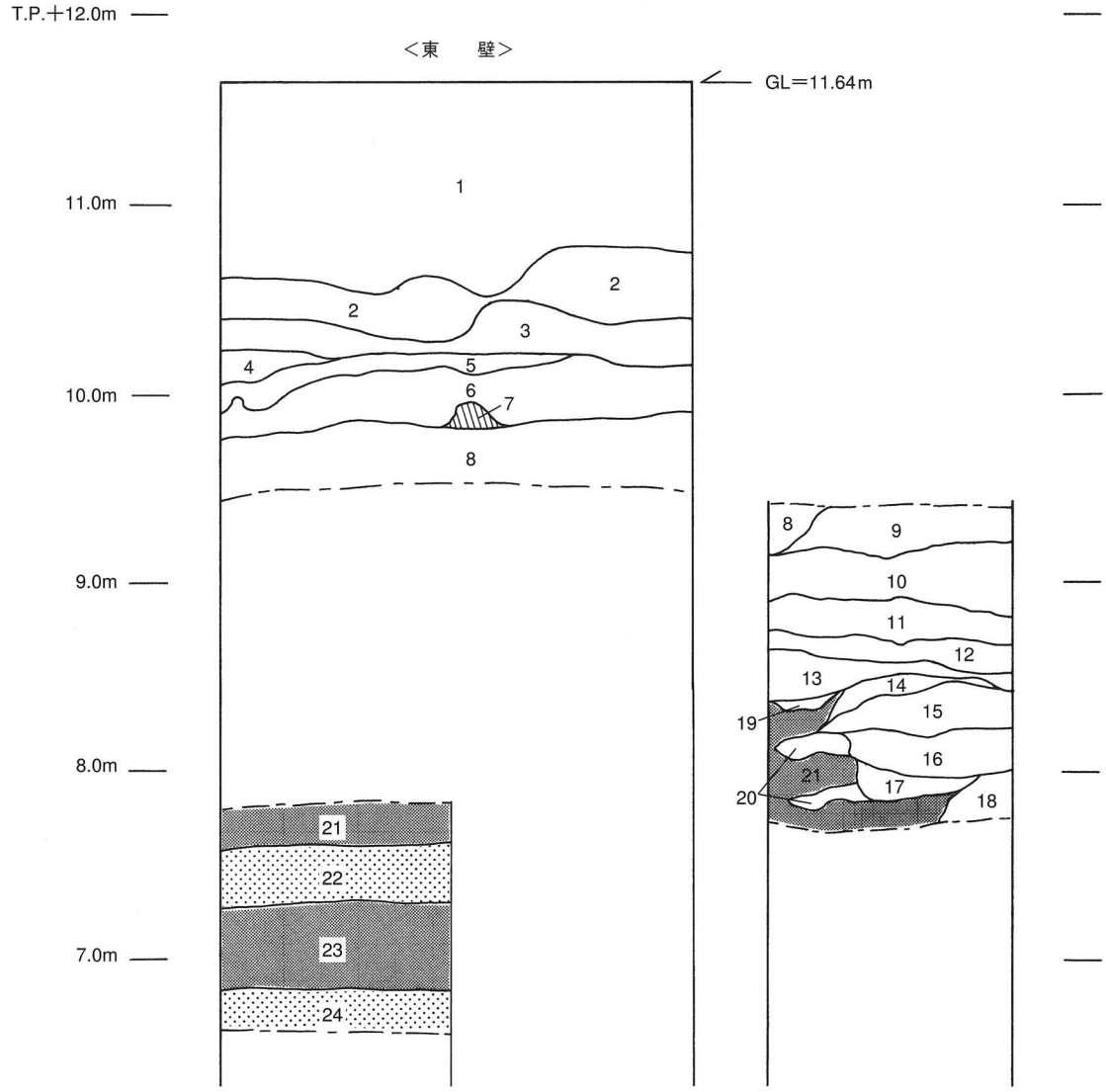
第24層：灰白色粗砂。ややしまり、中礫を若干含む。（最終掘削面）

3）検出遺構と出土遺物

機械掘削が終了した時点で東壁を観察した結果、旧耕土（第２層）から0.4m下（T.P.＋9.9m）で周辺の調査で検出されている平安時代末期～鎌倉時代前期にかけての水田面に対応する青灰色粘質シルト（第８層）を確認した。そして、東壁のほぼ中央付近で小畦畔（第７層）を１条検出した。小畦畔の形状は、断面が半円形を呈し、上面幅10.5㎝・基底幅約30㎝・高さ15㎝を測り、盛土によって造られている。今回検出した小畦畔は、調査区に対して東西方向に伸びていると考えられ、古代の条里制水田に伴う遺構と考えられる。

第８層の下部から第12層にかけては、ほぼ水平な自然堆積を示し、各層中に炭酸カルシウム・植物遺体を多く含んでいることから沼沢地状になっていたとみられる。さらに掘削を進めるとT.P.＋7.8mにおいて調査区のほぼ全面にわたって河川の埋土とみられる粗砂が現われ、最終掘削面のT.P.＋6.6mまで堆積していた。粗砂内からはローリングを受けた弥生土器（前期?）・自然

木が出土した。この河川は、土層堆積状況などから弥生時代前期以前に機能していたと考えられる。その他の出土遺物としては、何れも小片で時期を特定できるものは少ないが、第９・10・13層から弥生土器・須恵器片（杯身・甕）などが出土した。



第１層　現代盛土
第２層　青灰色礫混砂質土～青灰色砂質土（旧耕土）
第３層　黄橙色シルト
第４層　黄白色シルト
第５層　灰オリーブ色砂質土
第６層　青灰色砂質シルト（洪水層）
第７層　灰色粘質シルト（水田・小畦畔）
第８層　青灰色粘質シルト（水田・床土）
第９層　暗黄灰色粘質土
第10層　暗オリーブ色粘質シルト
第11層　暗褐色粘質土
第12層　暗青灰色細砂混粘質土
第13層　暗灰黒色細砂混粘質土
第14層　灰色細砂混シルト
第15層　緑灰色細砂混シルト
第16層　暗緑灰色シルト
第17層　緑灰色シルト
第18層　オリーブ灰色シルト
第19層　薄灰色砂質シルト
第20層　薄灰色砂質土
第21層　灰白色粗砂
第22層　灰オリーブ色粗砂
第23層　灰白オリーブ色粗砂
第24層　灰白色粗砂（最終掘削面）

第３図　土層断面図

3．まとめ

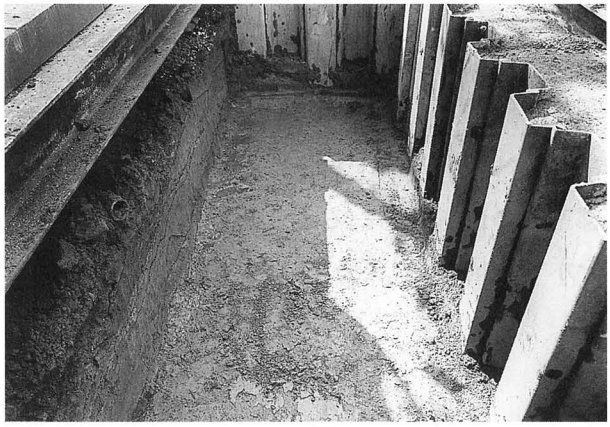
今回の調査では、弥生時代前期以前の河川、平安時代末期～鎌倉時代前期にかけての水田遺構を検出した。出土遺物は、極少量である。

弥生時代前期～中期にかけての遺構・遺物の検出が期待されたが、当地においては沖積作用の状況が認められた。また、当地は旧国郡では志紀郡三条の位置にあたることから、今回検出した水田遺構（小畦畔）は、古代の条里制水田の一端を示す遺構として注目される。

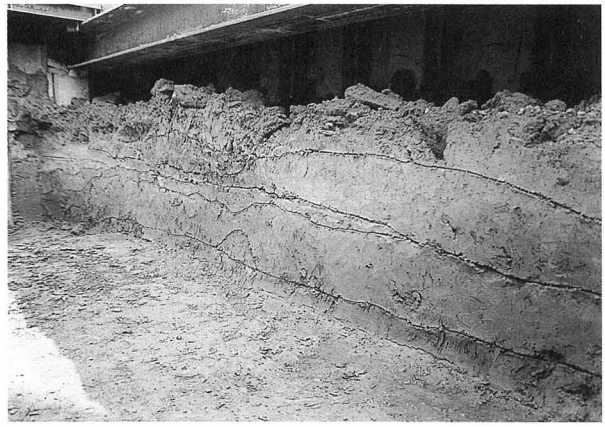
参考文献

・原田昌則　1984　『木の本遺跡（財）八尾市文化財調査研究会報告４』　（財）八尾市文化財調査研究会
・西村公助　1989　「田井中遺跡（第１～２次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』　（財）八尾市文化財調査研究会
・亀島重則　1991　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅰ』　大阪府教育委員会
・小林義孝　1992　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅱ』　大阪府教育委員会
・亀島重則　1993　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅲ』　大阪府教育委員会
・亀島重則　1994　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅳ』　大阪府教育委員会
・岡田清一　1994　「ＸＩ田井中遺跡（第13次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告42』　（財）八尾市文化財調査研究会
・秋山浩三　1995　『志紀遺跡（その３）発掘調査終了報告』　（財）大阪府埋蔵文化財協会
・西川寿勝　1995　『志紀遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第91輯　（財）大阪府埋蔵文化財協会
・西村公助　1995　「田井中遺跡（第５～７次調査）」『（財）八尾市文化財調査研究会報告46』　（財）八尾市文化財調査研究会
・岩瀬　透　1996　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅴ』　大阪府教育委員会

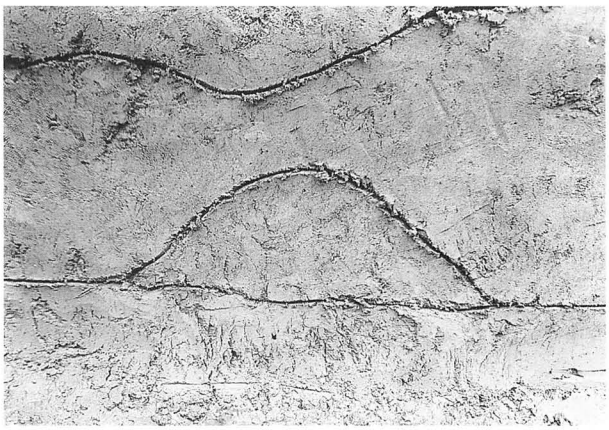
図版



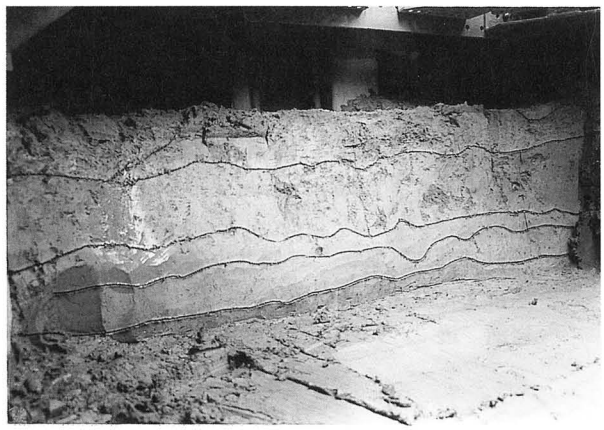
機械掘削終了面（T.P.＋9.5m）北から



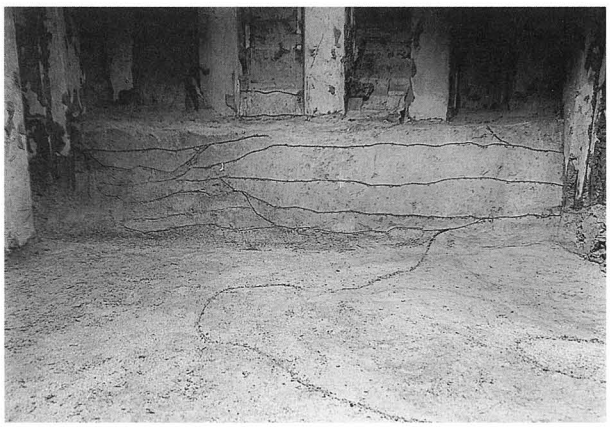
東壁土層（T.P.＋10.75～9.5m）南西から



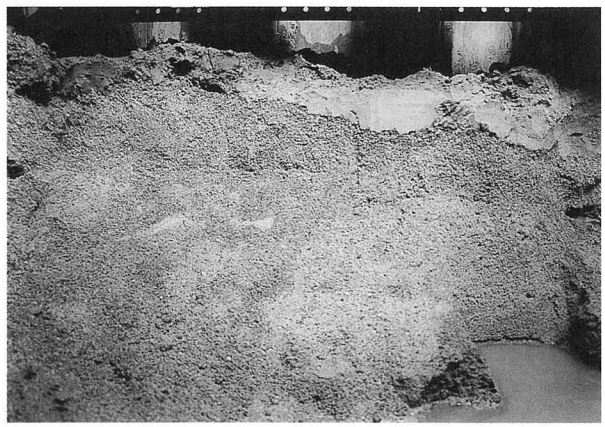
小畦畔（T.P.＋9.9m）西から



南壁土層（T.P.＋9.4～8.5m）北から



南壁土層（T.P.＋8.5～7.7m）北から



東壁土層（T.P.＋7.8～6.6m）西から

XIII　竹渕遺跡第７次調査（ＴＫ96－７）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市竹渕３・４丁目地内で実施した公共下水道工事（７－123工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本調査で報告する竹渕遺跡第７次調査（ＴＫ96－７）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋727－３号 平成８年４月10日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成８年６月28日から７月13日（実動４日間）にかけて、岡田清一・原田昌則を担当者として実施した。調査面積は37㎡を測る。

1．本書の執筆・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに…… 83

2．調査概要…… 84

　1）調査の方法と経過…… 84

　2）基本層序…… 84

　3）検出遺構と出土遺物…… 85

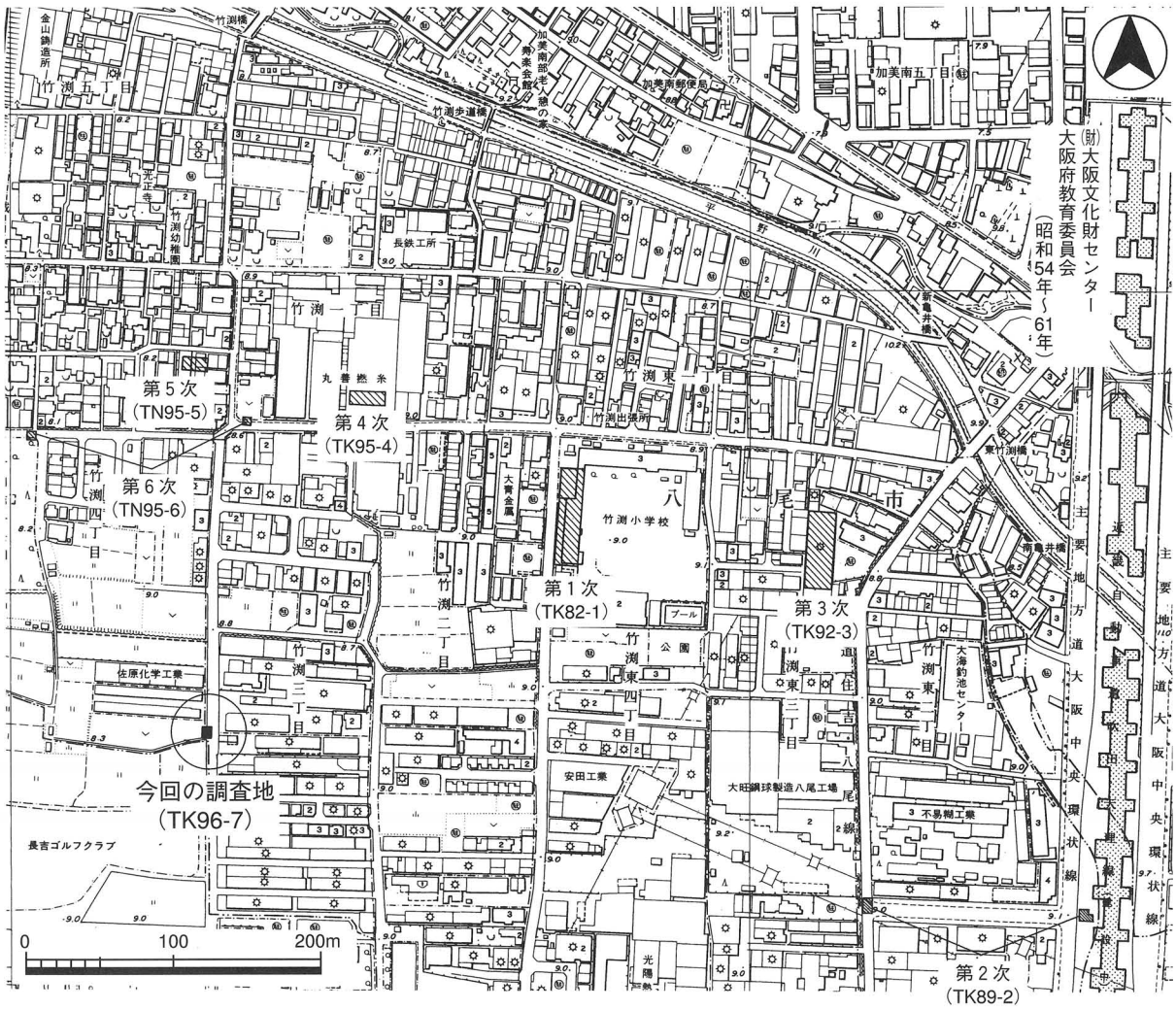
3．まとめ…… 85

XIII　竹渕遺跡第７次調査（ＴＫ96－７）

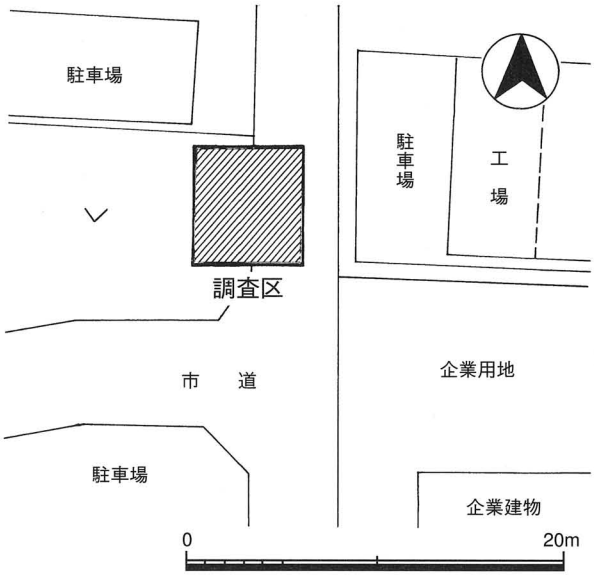
１．はじめに

竹渕遺跡は、八尾市西部で南北に走る中央環状線（近畿自動車道）の西側に位置し、遺跡の北部・南部・西部は大阪市域に接する。地理的には平野川左岸にあたる沖積地上に拡がる。遺跡の推定範囲は東西約0.6㎞・南北約0.8㎞を測り、現在の行政区画では竹渕１～５丁目・竹渕東１～４丁目に所在する。隣接する遺跡では東に亀井遺跡・北東に亀井北遺跡・北に加美南遺跡（大阪市）・南に長原遺跡（大阪市）が存在する。

本遺跡は、昭和57年に当調査研究会によって実施された市立竹渕小学校校舎増築工事に伴う調査（第１次調査＜ＴＫ82－１＞）[註1]で、古墳時代後期の竪穴住居・土壙・柱穴・溝といった集落遺構が検出されたことに端を発する。以後、八尾市教育委員会による遺構確認調査および当調査研究会による数次の調査によって、本遺跡が弥生時代前期～平安時代に至る複合遺跡であることが判明している。なかでも平成４年度に当調査研究会によって実施された竹渕東３丁目の工場建設工事に伴う調査（第３次調査＜ＴＫ92－３＞）[註2]では、古墳時代後期の方墳が1基検出されており、



第１図　調査地位置および周辺図



第２図 調査区位置図

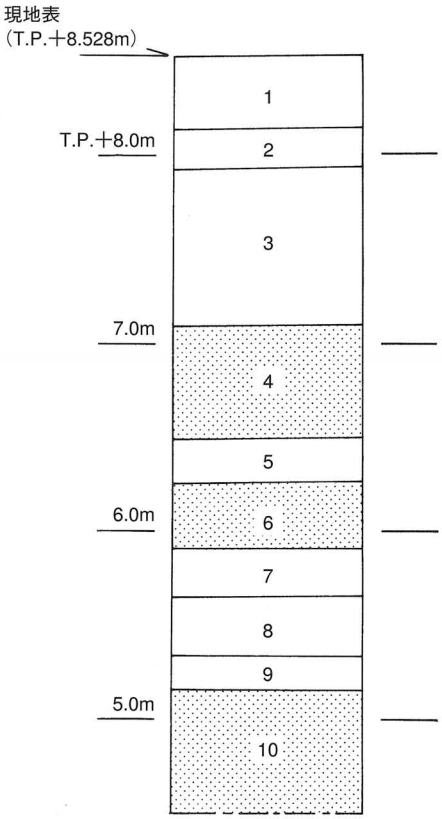
平地における墓制の在り方を解明するうえで貴重な成果といえる。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（７－123工区）に伴うもので、当調査研究会が本遺跡内で実施する第７次調査にあたる。調査対象となる立坑は南北6.4ｍ×東西5.8ｍの面積約37㎡を測る。掘削は重機と人力を併用して、現地表（T.P.＋8.5ｍ前後）から４ｍ前後を測る工事掘削深度までである。調査は調査区の大半が公道上であるため、夜間に実施することとなった。

２）基本層序



〔層　序〕
1．盛土・撹乱
2．5BG2/1 青黒色砂質シルト
3．7.5YR7/3 にぶい橙色粘土質シルト
4．5PB7/1 明青灰色極細粒砂
5．5PB4/1 暗青灰色シルト質粘土
6．N6/ 灰色細粒砂
7．5PB6/1 青灰色シルト質粘土
8．N3/ 暗灰色粘土質シルト
9．5PB7/1 明青灰色シルト
10．N8/ 灰白色細粒砂～極細粒砂

第３図 基本層序模式図

層序については、調査区内で普遍的に堆積する10層を摘出した。また、各層の解釈については前年度に本調査地から北へ約200ｍ地点で実施された第６次調査（ＴＫ95－６）[註3]の基本層序を参考にした。

第１層：盛土および撹乱。層厚0.4ｍ前後。道路築上および既存の埋設物による客土層である。

第２層：5BG2/1青黒色砂質シルト。層厚0.1～0.15ｍ。旧耕土にあたる。

第３層：7.5YR7/3にぶい橙色粘土質シルト。層厚0.5～0.8ｍ。平安時代～中世にかけての堆積層と思われる。

第４層：5PB7/1明青灰色極細粒砂。層厚0.6ｍ前後。埋没河川の堆積層と考えられる。

第５層：5PB4/1暗青灰色シルト質粘土。層厚0.2ｍ前後。

第６層：N6/灰色細粒砂。層厚0.2～0.3ｍ。河川の洪水に起因する堆積層と考えられる。

第７層：5PB6/1青灰色シルト質粘土。層厚0.2ｍ前後。下部には植物遺体が混在する。

第８層：N3/暗灰色粘土質シルト。層厚0.3ｍ前後。第６次調査結果から層位レベル的に古墳時代前期に相当する積層と推定されるが、遺物が検出されないため推測の域を出ない。

第９層：5PB7/1明青灰色シルト。層厚0.2ｍ前後。

第10層：N8/灰白色細粒砂～極細粒砂。層厚0.7ｍ以上。第６次調査の第107層および第210層に対応する埋没

河川の堆積層と考えられる。湧水が著しい。

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、遺物としては調査区南東隅の第３層7.5YR7/3にぶい橙色粘土質シルト内から中世末頃かと思われる丸瓦の破片が出土したのみで、それ以外に遺物を包蔵する土層はみられなかった。さらに断面観察する限り各層ともほぼ水平な堆積状況を示しており、遺構面を構築するような土層は確認できなかった。

３．まとめ

今回の調査では既述したように、遺跡における性格を解明できる遺構・遺物は検出されなかった。各土層の時期的解釈については第６次調査資料をもとに推測したが、標高7.0m以下最深部の標高4.5m付近に介在する河川あるいは洪水層に起因する砂層の堆積は、周辺における既往の調査から上限が古墳時代前期以降から下限が平安時代までの３時期の範疇に比定されるものと思われる。これらの堆積層から、当地が平安時代以前は度重なる河川の洪水からなる氾濫原から沼地化した土地景観であったことが想定される。また、最下層である第10層N8/灰白色細粒砂～極細粒砂とした河川を明示する堆積層は、既往の数次に亘る当遺跡内の調査結果および当地の東部に位置する近畿自動車道建設工事に伴う一連の調査結果[註4]から、層位的およびレベル的に弥生時代にまで遡る可能性もあり、今後周辺の調査データの蓄積を待ちたい。

註記

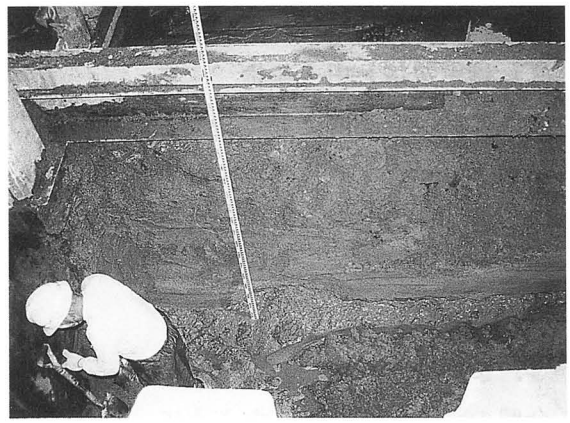
註１　高萩千秋　1989「Ⅱ 竹渕遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　1989年』（財）八尾市文化財調査研究会報告23

註２　原田昌則　1992「19.竹渕遺跡第３次調査（ＴＫ92－３）」『平成４年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

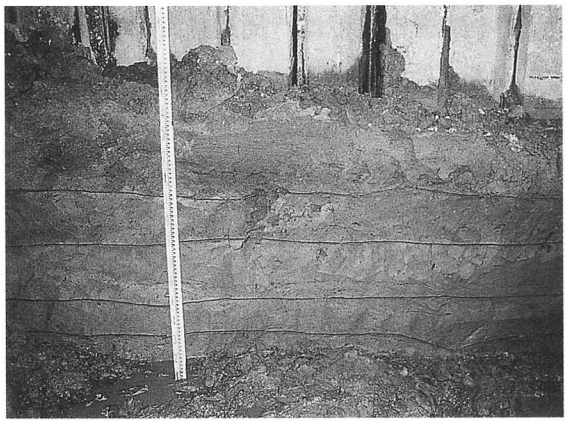
註３　原田昌則　1995「18.竹渕遺跡第６次調査（ＴＫ95－６）」『平成７年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

註４　大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター　1987『河内平野遺跡群の動態Ⅰ　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－プロローグ編－』

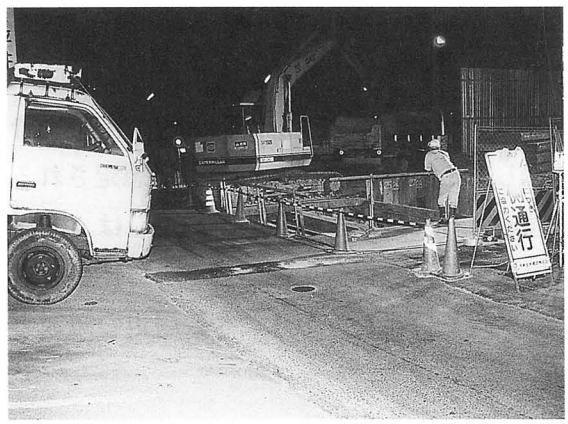
南東部　標高7.5～8.5m付近（北から）



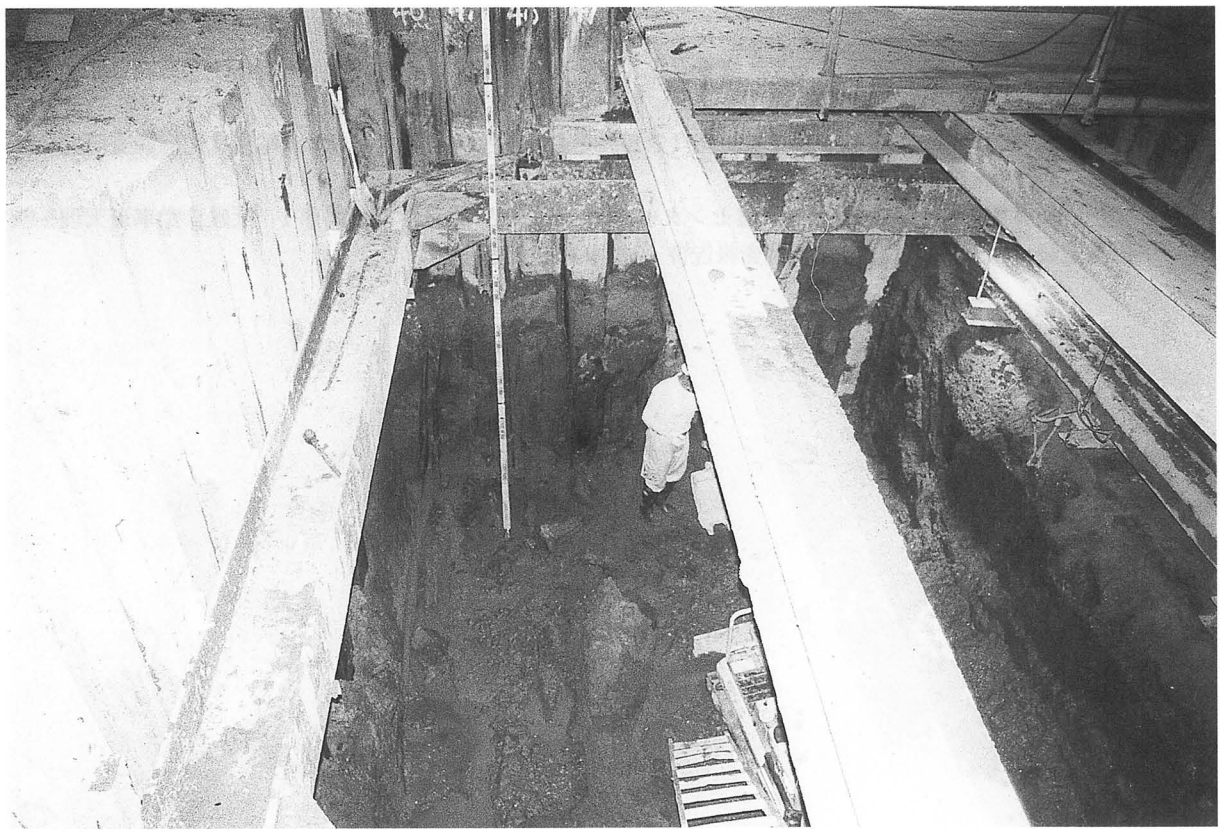
中央部東壁　標高6.0～7.5m付近（西から）



西壁中央　標高4.5～6.0m付近（東から）



調査地近景（北東から）



調査区完掘状況（南から）

XIV　東郷遺跡第52次調査（ＴＧ96－52）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市桜ヶ丘１丁目88.89.90－1番地で実施した店舗付共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第52次調査（ＴＧ96－52）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋451－３号　平成８年10月16日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が田中　昭氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年10月29日から11月12日（実働９日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は約180㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中谷嘉多・中村百合・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物復元・遺物実測・図面レイアウト・トレースー中谷・中村・市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……87
2．調査概要……88
　1）調査の方法と経過……88
　2）基本層序……89
　3）検出遺構と出土遺物……89
　4）遺構に伴わない出土遺物……95
3．まとめ……97

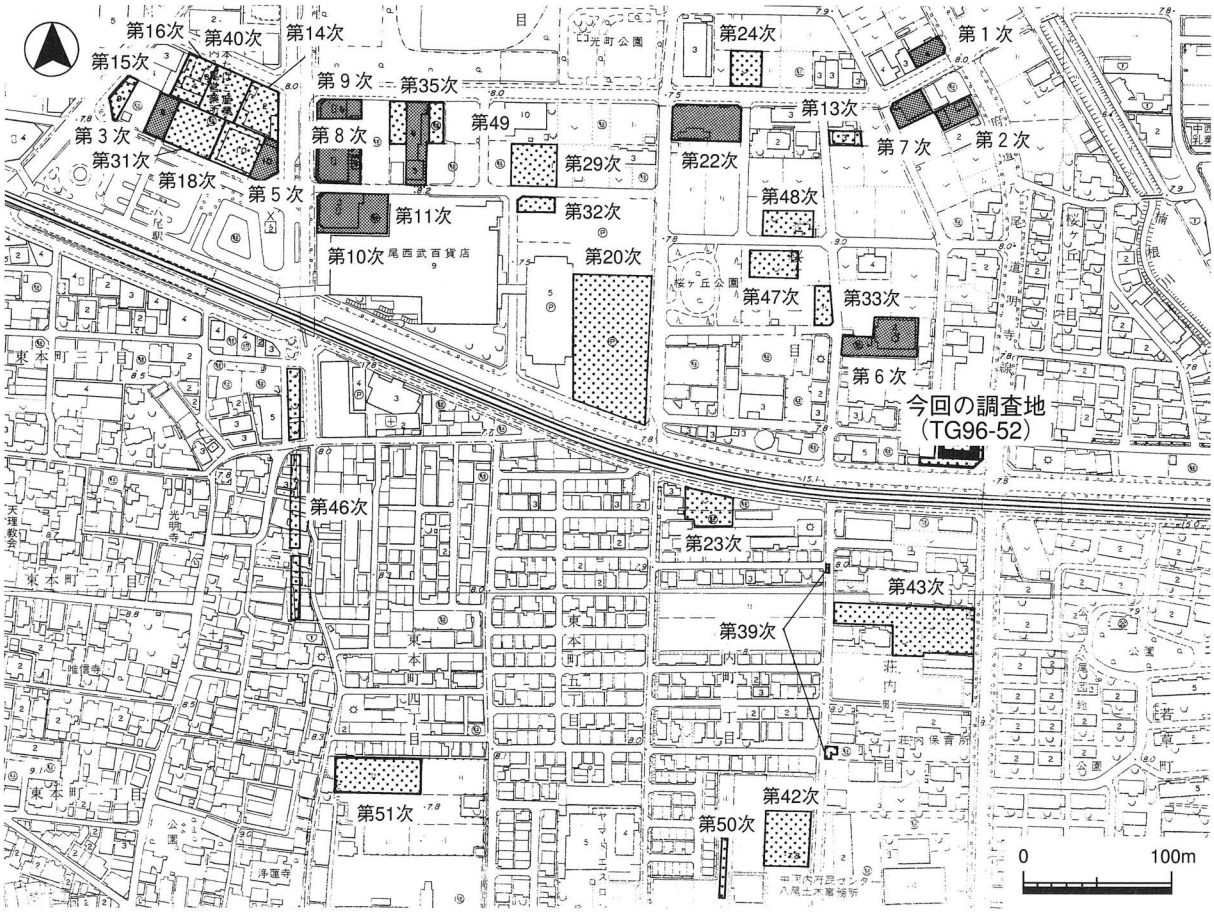
XIV　東郷遺跡第52次調査（ＴＧ96－52）

１．はじめに

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では東本町１～５丁目、北本町２丁目、光町１・２丁目、桜ヶ丘１～４丁目、荘内町１・２丁目一帯にあたる。地形的には旧大和川の主流であった玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡の周辺には東に東郷廃寺、西に久宝寺遺跡、南に成法寺遺跡、北に萱振遺跡、南東に小阪合遺跡が隣接している。

当遺跡内では現在までに八尾市教育委員会および当調査研究会によって、51件の発掘調査を実施している。その結果、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡であることが判明している。特に古墳時代初頭～前期の集落構成に関する遺構や他地域との活発な交流を示す遺物の出土などが確認されている。

今回の発掘調査は当遺跡範囲の東部付近に位置する桜ヶ丘４丁目内の店舗付共同住宅建設に伴うもので、当調査研究会が当遺跡内で実施する第52次調査である（第１図）。調査地の近隣では、平成５年度に実施した当調査研究会第43次調査（ＴＧ93－43）が南側（約100ｍ）に位置する。



第１図　調査地位置図及び周辺図

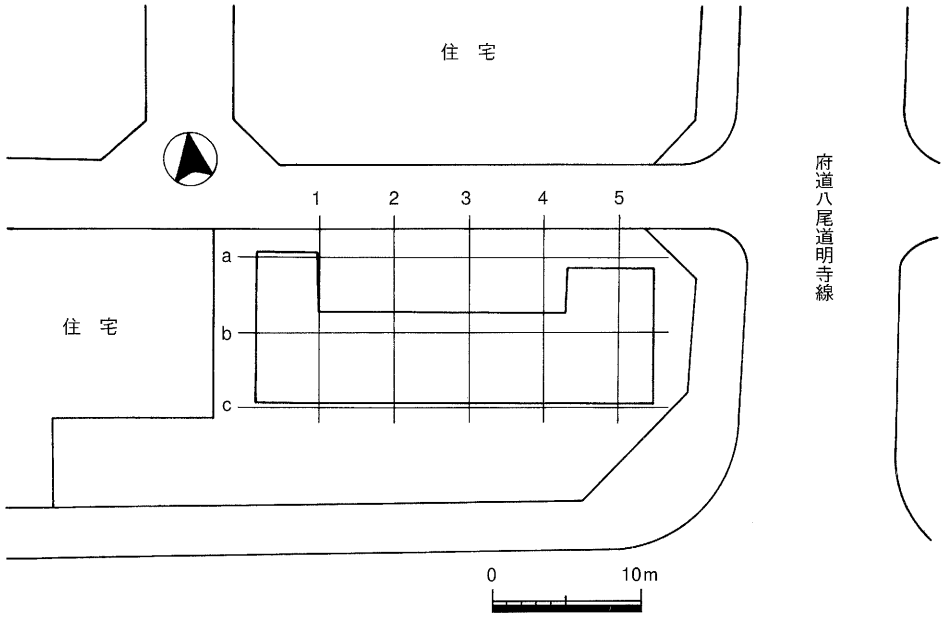
その調査では古墳時代前期～近世に比定される土坑・溝等を検出している。北部の桜ヶ丘地区では、昭和55年度から現在までに市教委及び当調査研究会で数次の発掘調査を断続的に実施している。その結果、弥生時代後期の土器集積、古墳時代前期～中期の集落遺構・方墳、奈良時代～平安時代の集落遺構などを検出している。また、この桜ヶ丘地区で平安時代中期以降、大規模な整地が行われていることが現在までの調査で確認されている。

2．調査概要

1）調査の方法と経過

調査は、建物基礎工事によって破壊される部分に調査区を設定した（第２図）。調査面積は約180㎡を測る。掘削の方法は市教委の遺構確認調査結果をもとに、現地表（T.P.＋8.1m）下0.3m前後の土層を機械により排除した後、以下0.4m前後の土層について人力掘削および精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。さらに、調査対象面の調査が終了後、調査区中央付近に下層確認トレンチを設定し、深部の地層状況を確認した。

地区割りについては、北東角の土地境界杭から南へ７m、東へ２mに任意の基準点を設定し、南北軸を磁北方向より西に８度振り調査区区画に合わせた。区画は調査区範囲を包括できる南北20m、東西30mに５m角の方眼を作成した。区名は基準点より東の南北軸から東へ算用数字１～６、基準点より北の東西軸から南へアルファベットａ～ｃを付し、交差する北西を優先として1a区～6c区を付称した。遺構や遺物の取り上げなどの記録保存を実施した。



第２図　調査区位置図及び区割り図

2）基本層序

第１層　盛土（層厚5～15cm）。調査前まで住居があり、その整地土である。現地表面はT.P.＋8.1m前後を測る。

第２層　旧耕土（層厚０～15cm）。昭和30年ごろまでの耕作土である。部分的に建物の基礎で削平されている。

第３層　灰黄褐色砂礫混じりシルト（層厚20～25cm）。耕作土の床土である。

第４層　褐灰色礫混じり粘質シルト（層厚20～40cm）。平安時代末ごろに整地された土層である。堅くしまっていた。調査区東北部では褐灰青色系に変色している。

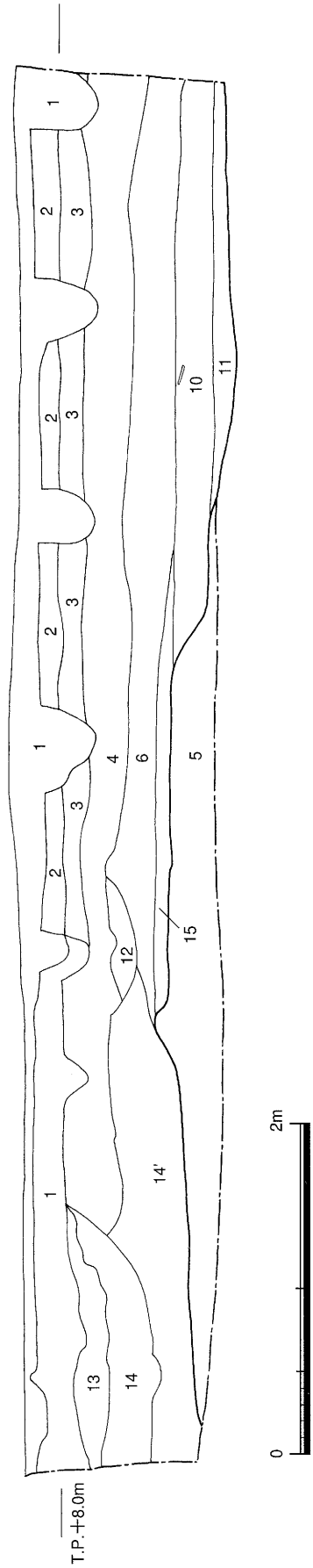
第５層　明茶灰色シルト（層厚10～20cm）。平安時代末ごろに堆積した土層で、部分的に溝状の起伏がみられる。

第６層　灰褐色礫混じり粘質シルト（層厚０～30cm）。調査区東部に堆積する土層で、奈良時代後半～平安時代初頭の遺構を検出している。

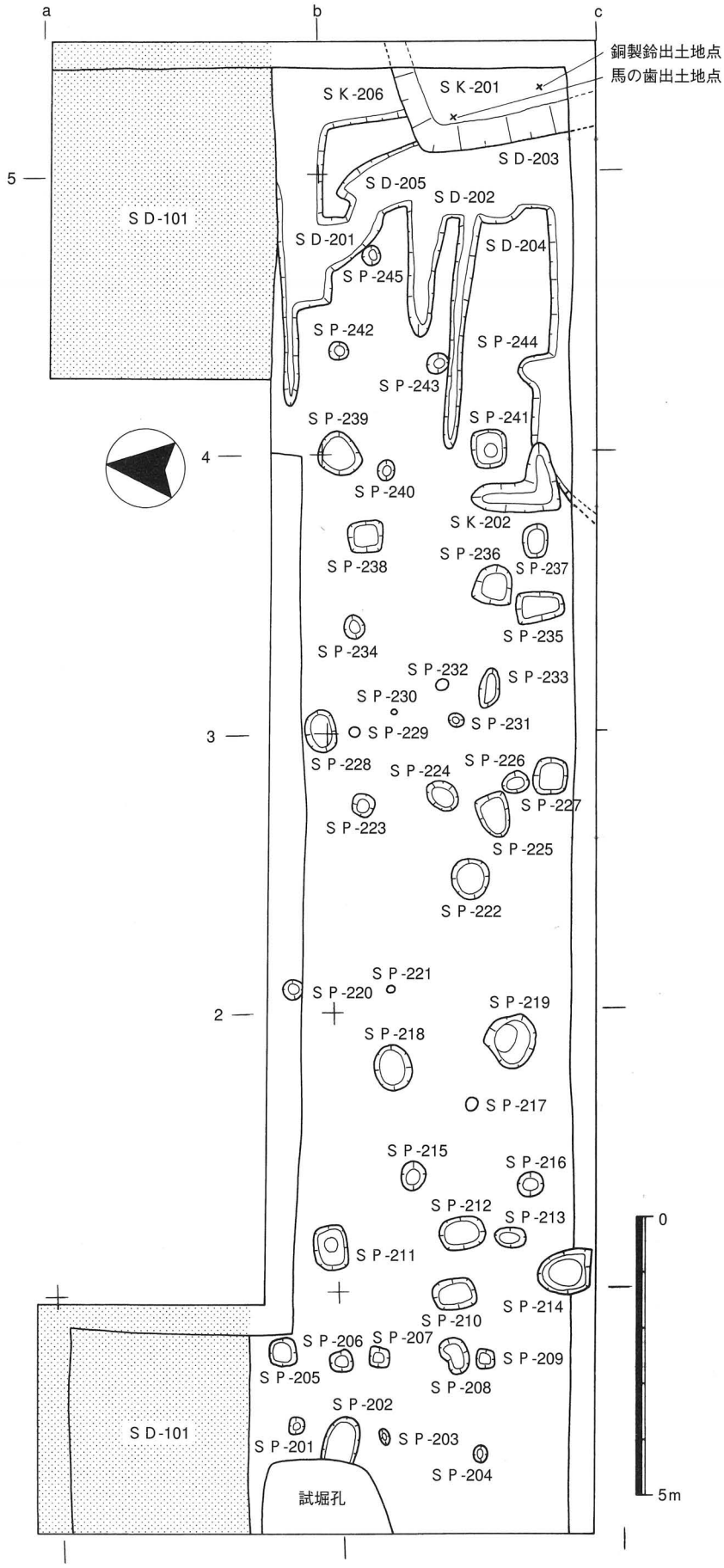
第７層　茶褐色シルト混砂礫（層厚40cm以上）。調査区全面で確認されているが、調査区西部では第５層と同一レベルで検出している。

3）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下約0.3～0.4m（標高7.8～7.9m）の第３層上面で近代の溝１条（ＳＤ－101）、第５層上面で奈良時代後半～平安時代初頭の土坑１基（ＳＫ－201）・溝６条（ＳＤ－201～ＳＤ－206）・小穴45個（ＳＰ－201～ＳＰ－245）、平安時代末期ごろの土坑１基（ＳＫ－202）を検出した。遺物は遺構及び包含層内からコンテナにして約４箱分を出土した。以下、検出した遺構について記す。



第３図　東壁断面図


a
b
c
銅製鈴出土地点
馬の歯出土地点
S K-206
S K-201
S D-203
S D-205
S D-202
S D-101
S D-201
S D-204
S P-245
S P-242
S P-244
S P-243
S P-239
S P-241
S P-240
S K-202
S P-238
S P-236
S P-237
S P-235
S P-234
S P-232
S P-233
S P-230
S P-231
S P-229
S P-228
S P-224
S P-226
S P-227
S P-223
S P-225
S P-222
S P-221
S P-220
S P-219
S P-218
S P-217
S P-215
S P-216
S P-212
S P-213
S P-211
S P-214
S P-210
S P-206
S P-207
S P-209
S P-205
S P-208
S P-202
S D-101
S P-201
S P-203
S P-204
試堀孔
5
4
3
2
0
5m

第４図　検出遺構平面図

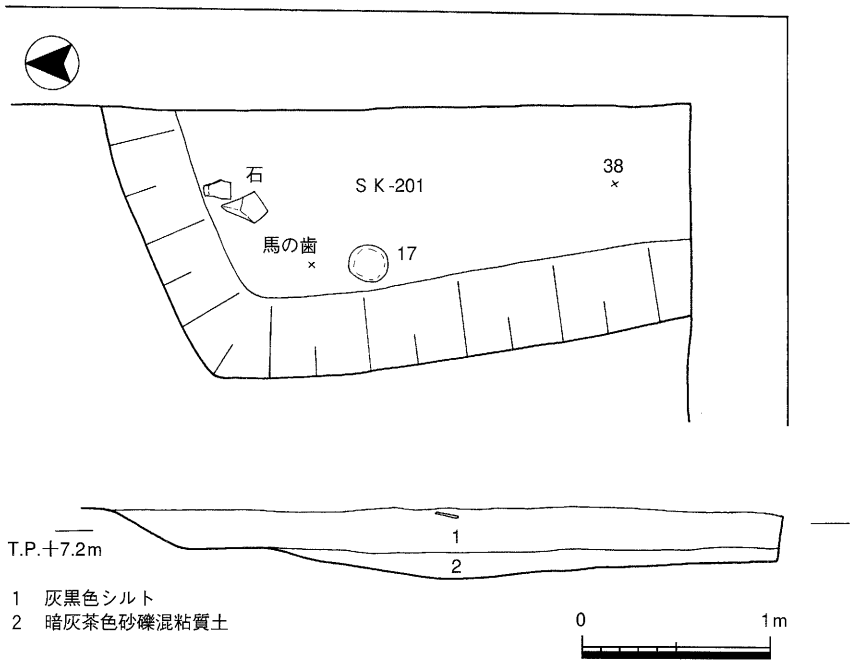
奈良時代の検出遺構

土坑（ＳＫ）

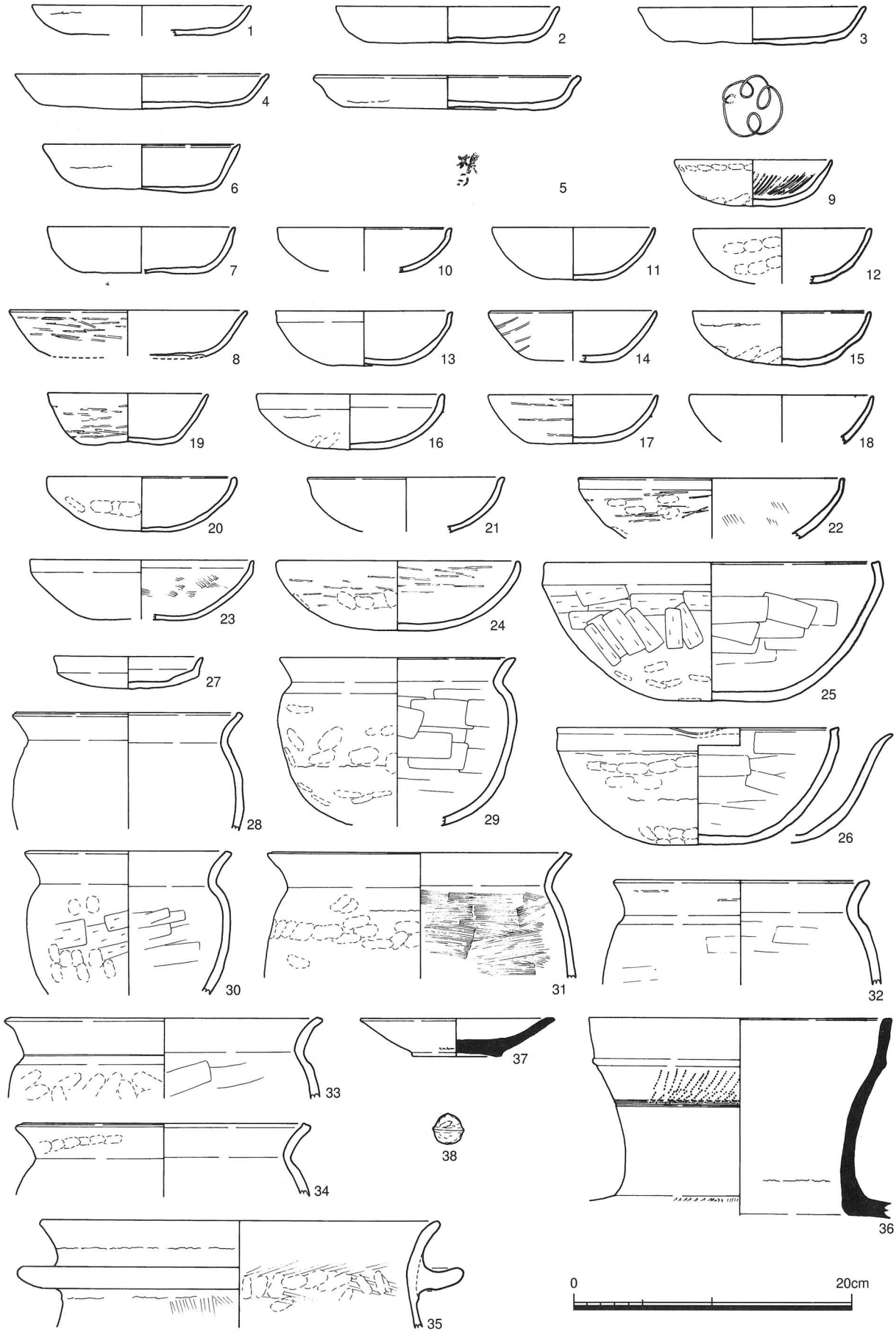
ＳＫ－201

調査区の南東部（6c区）で検出した土坑である。平面形は南東部の調査区外に至るため形状は不明であるが、検出部では方形を呈するものと思われる。西側に溝（ＳＤ－202～ＳＤ－204）が伸びる。検出部の規模は東西2.2m、南北2.4m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形を呈し、上層に灰黒色シルト、下層に暗灰茶色砂礫混粘質土が堆積する。上層では灰が多量に含まれている。下層には拳大の石２点があった。土坑内より出土した遺物は奈良時代後半～平安時代初頭に比定される土器類で、コンテナ箱にして約２箱分を数える。遺物には土師器の皿・杯、須恵器の壺・高杯、丸瓦、平瓦、銅製の鈴１点などがみられた。土師器では完形ないしは完形に近い皿・杯が出土している。また、底面付近で馬の歯の一部が出土している。

図化できた遺物は第６図に示す38点である。１～８は皿（盤）である。５は皿底面に墨書があり、「根□？」と書かれている。９～21は杯である。９は平城京Ⅲ期に比定される杯で内面に放射状ヘラミガキ、螺旋状ヘラミガキを施している。その他はヨコナデや細かいヘラミガキである。22～26は鉢である。24は内外面ヘラミガキを施す。底部外面に指押え痕が残る。27は小型杯である。28～34は甕である。35は羽釜である。36は須恵器の壷である。37は緑釉陶器の小皿で土坑の上部より出土している。38は銅製鈴である。銅鈴は八尾市内で３例目の出土である。



第５図　ＳＫ－201平断面図



第６図　ＳＫ－201出土遺物実測図

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－201～ＳＰ－245

調査区内で45個を検出した。方形、隅丸方形、円形、楕円形に分けられる。円形のものは径20㎝前後の小さいものが大半であり、柱痕のみが残存したものと思われる。その他の形状のものは径30㎝以上の大きいものである。また、大きいものには柱痕跡と思われる径20㎝前後の円形のものや根石と思われる石がみられる。

遺物は土器の小片化したものがごく少量含まれている程度で正確な時期決定は困難であるが、少数の小穴内から奈良時代後半～平安時代初頭の土師器の小片が出土していることから、これらの小穴の大半は奈良時代ごろの時期のものであろう。また、調査区南東隅では検出した奈良時代の土坑（ＳＫ－201）との関連が考えられる。

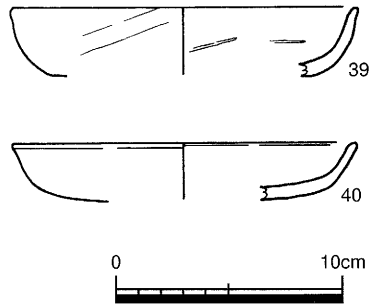
小穴一覧表

遺構番号	区名	平面形	規模		堆積土	備考
			径	深さ		
ＳＰ-201	1ｂ区	隅丸方形	24～30	14	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-202	1ｂ区	楕円形	70～80	13	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-203	1ｃ区	楕円形	20～32	12	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-204	1ｃ区	円形	20	13	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-205	1ｂ区	隅丸方形	50～54	18	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-206	1ｂ区	隅丸方形	38～40	22	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-207	1ｃ区	方形	40	20	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-208	1ｃ区	楕円形	45～60	18	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-209	1ｃ区	方形	28～38	18	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-210	1ｃ区	楕円形	55～76	28	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-211	2ｂ区	隅丸方形	61～78	32	暗灰茶色砂礫混シルト・暗灰茶色砂礫混シルト	柱痕跡有り。
ＳＰ-212	2ｃ区	楕円形	54～76	28	暗灰褐色砂礫混シルト	柱痕跡有り。
ＳＰ-213	2ｃ区	楕円形	34～55	12	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-214	2ｃ区	楕円形	78～96	27	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-215	2ｃ区	円形	48	10	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-216	2ｃ区	円形	45	18	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-217	2ｃ区	円形	20	14	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-218	2ｃ区	円形	80	20	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-219	2ｃ区	楕円形	90～92	24	暗灰褐色砂礫混シルト	柱痕跡有り。
ＳＰ-220	3ｂ区	円形	34	10	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-221	3ｃ区	円形	13	9	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-222	3ｃ区	隅丸方形	65～70	30	灰茶色粘質シルト・灰黒色粘質シルト・暗灰褐色砂礫混シルト	柱痕跡有り。
ＳＰ-223	3ｃ区	隅丸方形	38～42	10	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-224	3ｃ区	隅丸方形	53～57	10	茶灰色シルト・暗灰茶色粘質シルト	根石有り。
ＳＰ-225	3ｃ区	楕円形	58～80	36	暗灰褐色砂礫混シルト	柱痕跡有り。
ＳＰ-226	3ｃ区	楕円形	35～48	25	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-227	3ｃ区	隅丸方形	64	18	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-228	3ｂ区	楕円形	50～74	28	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-229	3ｃ区	円形	18	10	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-230	4ｃ区	円形	15	7	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-231	4ｃ区	円形	25	10	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-232	4ｃ区	円形	20	6	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-233	4ｃ区	楕円形	34～74	30	暗灰褐色砂礫混シルト	柱痕跡有り。
ＳＰ-234	4ｃ区	円形	36	35	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-235	4ｃ区	隅丸方形	68～72	20	褐灰色シルト	
ＳＰ-236	4ｃ区	隅丸方形	54～78	7	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-237	4ｃ区	楕円形	46～54	10	暗灰褐色砂礫混シルト	根石有り。
ＳＰ-238	4ｃ区	隅丸方形	50～54	21	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-239	4ｃ区	楕円形	78～80	10	暗褐灰色シルト	
ＳＰ-240	4ｃ区	円形	32	22	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-241	4ｃ区	隅丸方形	53～68	30	暗灰褐色砂礫混シルト	柱痕跡有り。
ＳＰ-242	5ｃ区	円形	33	12	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-243	5ｃ区	楕円形	33～38	16	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-244	5ｃ区	－	60	8	暗灰褐色砂礫混シルト	
ＳＰ-245	5ｃ区	円形	32	36	暗灰褐色砂礫混シルト	

溝（ＳＤ）

ＳＤ－201

調査区の北東部（5・6b区）で検出した東西方向に伸びる溝状遺構である。東部の南側ではＳＤ－205・206が合流し、北側でＳＤ－101により削平されている。西は途中で途切れている。検出長約6.5m、幅約0.2～0.7m、深さ約0.1mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は奈良時代に比定される土師器の皿（39・40）などの小片をごく少量出土している。



第７図　ＳＤ－201出土遺物実測図

ＳＤ－202

調査区の北東部（5c区）で検出した東西方向に伸びる溝状遺構である。東はＳＤ－205と合流し、西は途切れている。検出長約2.0m、幅0.4～0.7m、深さ約0.1mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は奈良時代の土器の小片をごく少量出土している。

ＳＤ－203

調査区の北東部（5c区）で検出した東西方向に伸びる溝状遺構である。東はＳＤ－205と合流し、西は途切れている。検出長約4.0m、幅0.2～0.3m、深さ約0.05mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は奈良時代の土器の小片をごく少量出土している。

ＳＤ－204

調査区の北東部（5c区）で検出した東西方向に伸びる溝状遺構である。東はＳＤ－205と合流し、西はＳＫ－202に切られている。検出長約4.5m、幅0.4～0.8m、深さ0.1～0.15mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は奈良時代の土器の小片をごく少量出土している。

ＳＤ－205

調査区の北東部（5b･c区）で検出した南北方向に伸びる溝状遺構である。北はＳＤ－201と合流し、南は調査区外に至る。溝の西側ではＳＤ－202～204が合流している。東ではＳＤ－206と合流し、ＳＫ－201に切られる。検出長約4.0m、幅0.5～0.9m、深さ約0.1mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は奈良時代の土器の小片をごく少量出土している。

ＳＤ－206

調査区の北東部（5･6b区）で検出した南北方向に伸びる溝状遺構である。北はＳＤ－201と合流し、南はＳＫ－201に切られる。溝の東側は調査区外に至る。規模は検出部で幅1.2m以上、深さ0.1mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は奈良時代の土器の小片をごく少量出土している。

平安時代後期の検出遺構

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－202

調査区の中央南付近（4c区）で検出した。平面Ｌ字形を呈する土坑状遺構である。東西50㎝、南北90㎝、深さ40㎝を測る。埋土は淡灰褐色粘質土と明茶褐色細砂混シルトのブロック土で、掘った後すぐに埋め戻した堆積状況である。遺物は出土しなかった。

近代の検出遺構

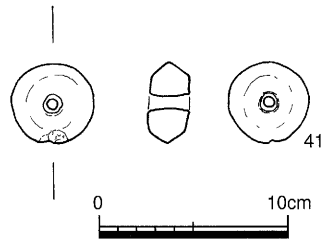
溝（ＳＤ）

ＳＤ－101

調査区の北部（1･5･6b区）で検出した東西方向に伸びる溝である。検出面は第３層上面の床土からの切り込みがみられる。溝の両方向とも調査区外に至る。検出長は西と東で約7.0m、幅2.0m、深さ約0.6mを測る。堆積土は灰色粘質土・乳灰色微砂である。遺物は出土していないが江戸時代ごろの時期のものと考えられる。

４）遺構に伴わない出土遺物

第４層・第５層内から出土している。遺物量はコンテナ箱にして約２箱分を数える。時期は古墳時代前期～平安時代前期にかけての土器類が含まれていた。図示できたものは古墳時代後期に比定される土師質の紡錘車（41）である。



第８図　遺構に伴わない出土遺物実測図

出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	法量（cm）	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備　考
1	皿 （土師器） ＳＫ-201	口径　15.6	外面はヨコナデ、ナデ、接合痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	淡橙茶褐色	３㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/5
2	同上	口径　16.2 器高　2.6	外面はナデ、底部に指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	外：淡灰茶色 内：淡灰褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	ほぼ完形
3	同上	口径　16.2 器高　2.6	外面はナデ、底部に指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	外：淡灰茶色 内：淡灰褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	ほぼ完形
4	同上	口径　18.0 器高　2.5	外面はナデ、底部に指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	外：淡灰茶色 内：淡灰褐色	５㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	3/5
5	同上	口径　18.2 器高　2.4	外面はナデ、底部に指頭圧痕残存、底面に「根□？」と墨書あり。内面にはヨコナデ、ナデ。	外：明茶灰褐色～乳灰茶色 内：淡灰褐色	２㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	完形
6	同上	口径　14.0 器高　3.5	外面はヨコナデ、ナデ後指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	乳灰茶色	３㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	2/3
7	同上	口径　13.4 器高　3.3	内外面ともにヨコナデ、ナデ。	明茶橙色	２㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	2/5
8	同上	口径　17.0	内外面ともにヨコナデ、ナデ。外面へラミガキ。	淡茶褐色	１㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	3/5
9	杯 （土師器） ＳＫ－201	口径　11.2 器高　3.3	外面はヨコナデ、ナデ後指頭圧痕残存。内面はナデ後放射状へラミガキ、見込みに螺旋状へラミガキ。	淡橙茶褐色	２㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	完形
10	同上	口径　12.4	内外面ともにナデ。	明茶灰色	２㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	1/4
11	同上	口径　11.6 器高　3.8	内外面ともにヨコナデ、ナデ。	明茶橙褐色	３㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	2/5
12	同上	口径　12.6	外面はナデ後指頭圧痕残存。内面はナデ。	明橙茶色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	1/3
13	同上	口径　12.6 器高　3.9	内外面ともにヨコナデ、ナデ。	外：明橙茶色 内：淡灰茶色	３㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/2
14	同上	口径　11.8 器高　3.6	外面はへラミガキ、ナデ。内面はナデ。	明灰橙茶色	２㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/4
15	同上	口径　12.7 器高　3.9	外面はヨコナデ、ナデ後指ナデ。内面はヨコナデ、ナデ。	外：淡灰茶褐色 内：乳灰茶色～淡茶褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	完形
16	同上	口径　13.3 器高　4.0	外面はヨコナデ、ナデ後指ナデ、接合痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	淡橙茶褐色	４㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	完形
17	同上	口径　12.0 器高　3.5	外面はへラミガキ、底部ナデ。内面はナデ。	外：明橙茶色 内：淡灰褐色	３㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	完形
18	同上	口径　13.0	内外面ともにナデ。	外：淡橙褐色 内：淡灰茶色	２㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/5

遺物番号 図版番号	器　種	法量（cm）	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備　考
19	杯 （土師器） ＳＫ-201	口径　11.4 器高　3.8	外面はヨコナデ後ヘラミガキ、底部ナデ。内面はヨコナデ、ナデ。	明茶灰色～乳灰色	3㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	完形 黒斑あり
20	同上	口径　13.4 器高　4.0	外面はヨコナデ、ナデ、指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	外：淡橙茶褐色 内：淡茶灰色	5㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	完形
21	同上	口径　14.0	内外面ともにヨコナデ、ナデ。	淡橙茶褐色	3㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/3
22	鉢 （土師器） ＳＫ-201	口径　19.0	外面はヘラミガキ、指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ハケナデ後ナデ。	淡灰茶褐色	1㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/5
23	同上	口径　16.0 器高　4.3	外面はヨコナデ、ナデ。内面はヨコナデ、ハケナデ後ナデ。	明橙茶色	2㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/5
24	同上	口径　17.2 器高　5.0	外面はヨコナデ、ナデ後ヘラミガキ、指頭圧痕残存。内面はヘラミガキ、ナデ。	外：明茶橙色 内：淡灰茶色	4㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	3/4
25	同上	口径　23.8 器高　10.0	外面はヨコナデ、ヘラミガキ後ナデ、指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ヘラナデ。	外：乳茶灰色～乳灰色 内：灰黒色～淡茶灰色	5㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/2
26	片口鉢 （土師器） ＳＫ-201	口径　20.0 器高　8.5	外面はヨコナデ、指ナデ、指頭圧痕・接合痕残存。内面はヘラナデ。	外：淡赤茶褐色 内：明褐灰橙色	3㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/3
27	小型杯 （土師器） ＳＫ-201	口径　5.0 器高　2.3	内外面ともにヨコナデ、ナデ。	淡灰茶褐色	2㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/3
28	甕 （土師器） ＳＫ-201	口径　16.0	内外面ともにヨコナデ、ナデ。	外：淡灰橙褐色 内：暗灰褐色	4㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/5
29	同上	口径　16.8	外面はヨコナデ、ナデ、指頭圧痕・接合痕。内面はヨコナデ、ナデ。	外：暗灰茶色～明橙茶褐色 内：淡橙茶灰色	4㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/3
30	同上	口径　14.0	外面はヨコナデ、ナデ、指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	外：淡橙茶色 内：暗灰褐色	3㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/4
31	同上	口径　21.0	外面はヨコナデ、ナデ、指頭圧痕・接合痕残存。内面はヨコナデ、ハケナデ。	明茶赤褐色	3㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/5
32	同上	口径　18.0	外面はヘラミガキ後ヨコナデ、ヘラナデ。内面はヨコナデ、ヘラナデ。	外：暗橙茶色 内：明橙茶色	2㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/8
33	同上	口径　22.0	外面はヨコナデ、指ナデ。内面はナデ、ヘラナデ。	暗灰茶褐色	2㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/6
34	同上	口径　20.0	外面はヨコナデ、ナデ、指頭圧痕残存。内面はヨコナデ、ナデ。	外：明橙茶色 内：暗灰褐色	3㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/8
35	羽釜 （土師器） ＳＫ-201	口径　20.0 鍔　32.0	外面は口縁～鍔ヨコナデ、他ハケナデ、接合痕残存。内面はヨコナデ、ハケナデ、指頭圧痕残存。	外：淡灰茶褐色 内：暗灰茶色～淡灰茶褐色	4㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	1/3
36	壺 （須恵器） ＳＫ-201	口径　21.8	外面は回転ナデ、列点文、二条の沈線あり、他回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。	暗緑色	密	良好	1/5
37	小皿 （緑釉陶器） ＳＫ-201	口径　21.8 器高　6.4	外面は回転ナデ、釉、底面回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。	暗緑色	密	良好	2/3
39	皿 （土師器） ＳＤ-201	口径　15.0	外面はヨコナデ、指ナデ。内面はヨコナデ、ナデ。	外：淡灰茶褐色 内：明橙茶色	1㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/4
40	同上	口径　16.4	外面はヨコナデ、指ナデ。内面はヨコナデ、ナデ。	明橙茶色	3㎜以下の砂粒を微量に含む。	良好	1/5
41	紡錘車 （土師質） 包含層	直径　4.25 厚み　2.1	ナデ。	明茶灰色～淡灰茶色	3㎜以下の砂粒を少量含む。	良好	完形

3．まとめ

今回の調査区では古墳時代初頭～近代の遺構・遺物を検出することができた。古墳時代初頭～前期の時期ものは包含層がわずかに存在するだけで、遺構はなかった。しかし、隣接の調査地では弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を検出している。調査区南部へ約100mのＴＧ93－43調査で布留式期の壺棺、北部へ約100mの昭和55年度市教委調査で布留式期の井戸、さらに北へ約50mではＴＧ89－33・ＴＧ94－47・ＴＧ96－48の調査で集落遺構を検出しており、調査地周辺はこの時期の集落域であることが想定される。

奈良時代末～平安時代初頭の時期は、建物跡と思われる柱穴群が調査区全体でみつかった。しかし小規模な調査区内であり、配列するものは調査区内では見出せなかった。また、現段階ではどのような用途であるかは不明であるが、調査区南東隅では多量の灰で埋められた土坑（ＳＫ－201）を検出している。この遺構の時期は調査区北東部約100m付近に東郷廃寺の存在が想定される。また、出土遺物においても土坑内より八尾市内で３例目になる銅製の鈴、墨書のある土器を出土している。さらに調査地の南側及び東側は現在の主要道路として活発な交通要所であるが、調査地の北側を走る東西道路は古来よりの旧道であり、その旧道に沿って調査地が立地しており、それらを考慮に入れると当地は東郷廃寺との深い関りが考えられる。

それ以降の時期については削平を受けたかは不明であるが、今回の調査では平安時代末に整地したと思われる土層を確認しただけである。

近世以降からは生産域として水田又は畑としての土地利用が昭和中頃まで続いていたものと思われる。

以上、調査の成果である。

参考文献

・高萩千秋 1981.3「東郷遺跡発掘調査概要」『八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要』八尾市文化財調査報告6 昭和55年度国庫補助事業
・原田昌則 1986「６．東郷遺跡（第20次調査）」『昭和60年度事業概要報告』(財) 八尾市文化財調査研究会報告９
・高萩千秋 1987「９．東郷遺跡（第23次調査）」『昭和61年度事業概要報告』(財) 八尾市文化財調査研究会報告14
・高萩千秋 1988「13．東郷遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財) 八尾市文化財調査研究会報告16
・高萩千秋 1988 (財) 八尾市文化調査研究会「15．東郷遺跡」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』(財) 八尾市文化財調査研究会報告16
・岡田清一 1995 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅱ　東郷遺跡(第42次調査)」『東郷遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』
・岡田清一 1995 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅲ　東郷遺跡(第45次調査)」『東郷遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』
・西村公助 1995 (財) 八尾市文化財調査研究会「Ⅳ　東郷遺跡(第46次調査)」『東郷遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』

調査区全景（西から）

調査区西部（南から）

調査区中央（南から）

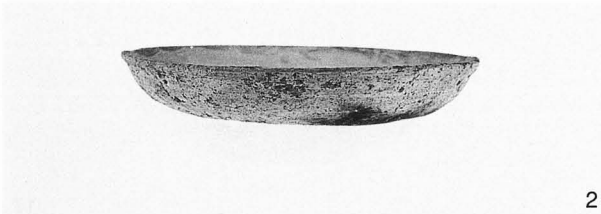
調査区東部（南から）

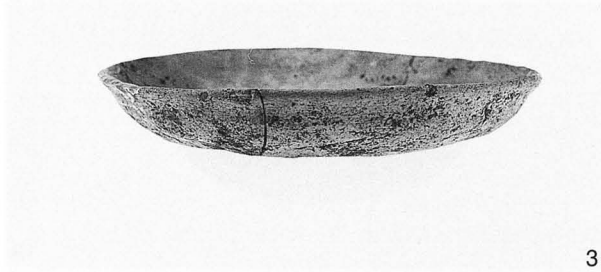
図版三

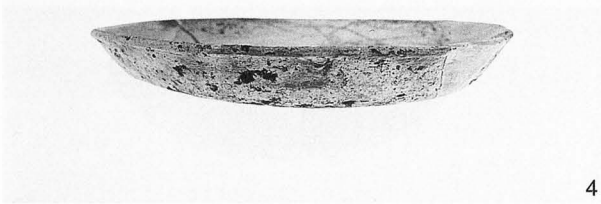
ＳＫ－201（北から）

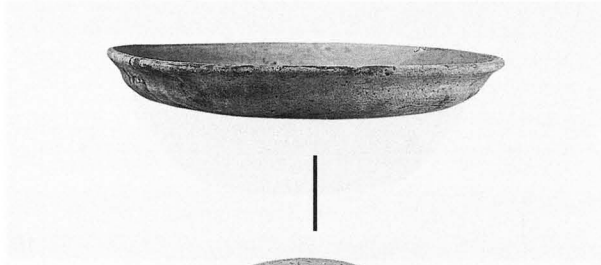
ＳＫ－201銅鈴（西から）

調査風景（西から）

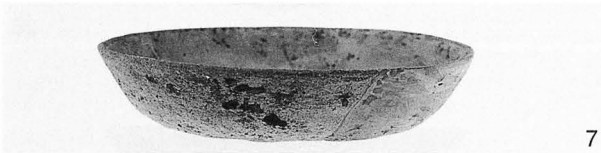

2


3

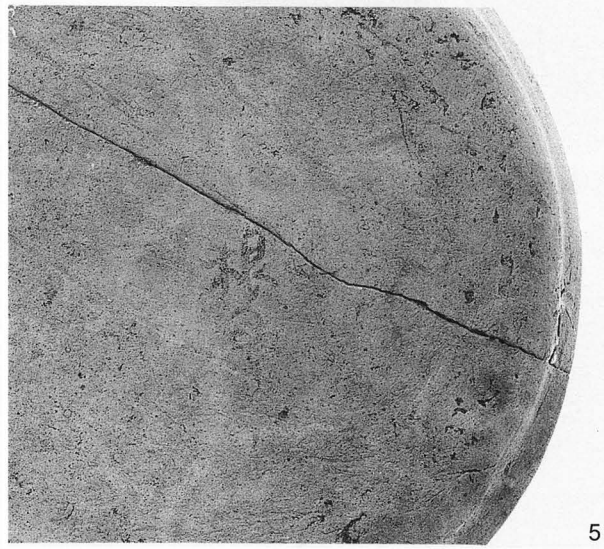

4

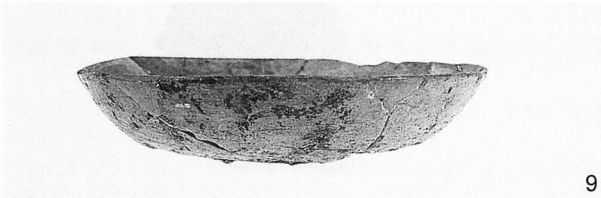


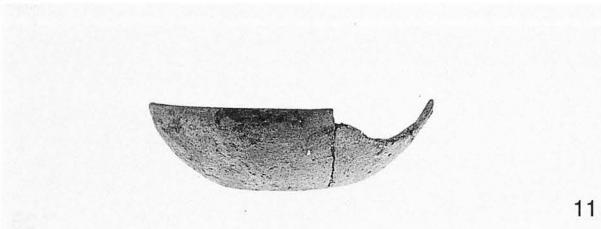
6

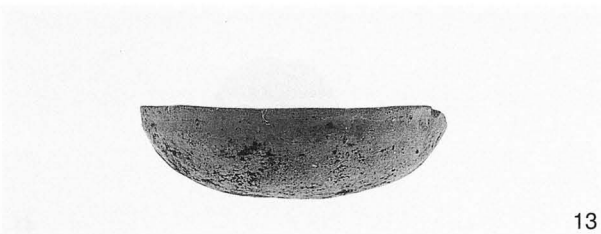

7

8


5


9


11

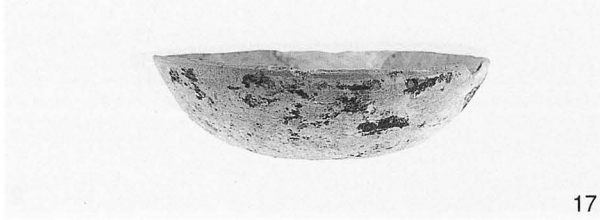

13

15

ＳＫ－201

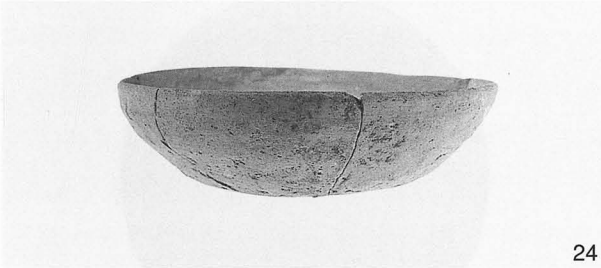
図版五

16


17

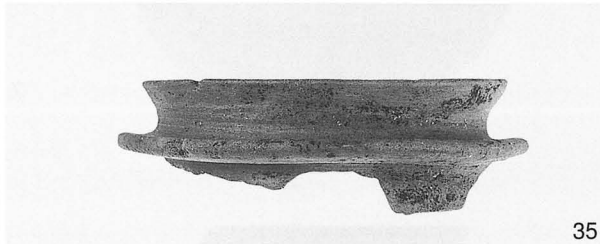
19

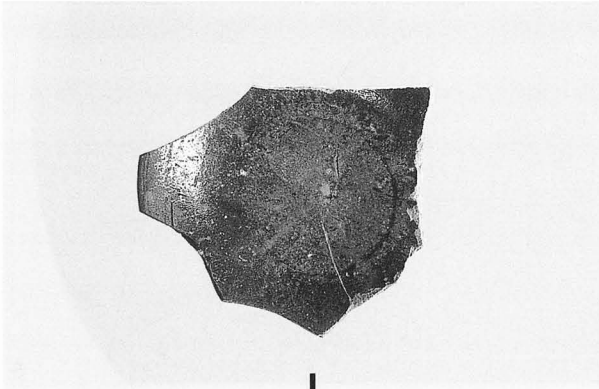
20

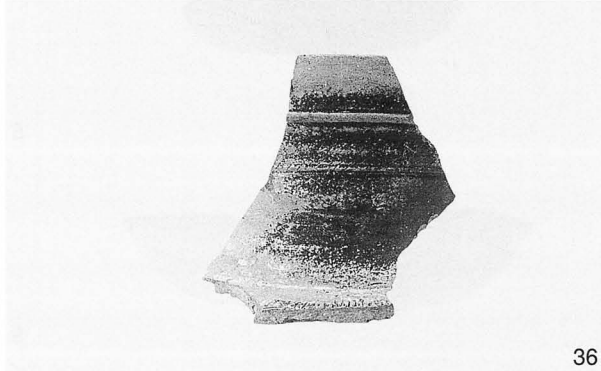

24

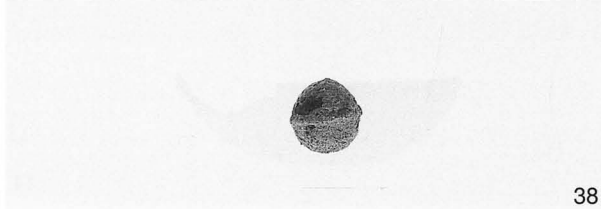
26

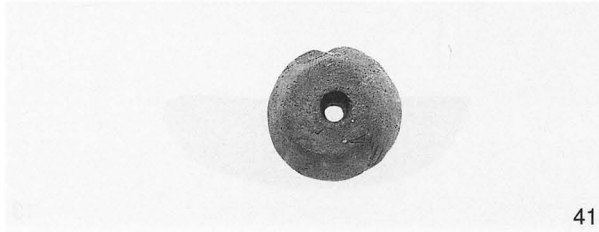
28


35


37


36


38


41

16・17・19・20・24・26・28・35～38　ＳＫ－201
41　遺構に伴わない出土遺物

XV　東郷遺跡第53次調査（TG96－53）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市北本町２丁目67－2.68で実施した個人住宅付共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第53次調査（ＴＧ96－53）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋186－3号　平成８年11月14日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が中村ヒサノ氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年12月２日から12月12日（実働８日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は約100㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中谷嘉多・中村百合・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物復元・遺物実測・図面レイアウト・トレース－中谷・中村・市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……103

2．調査概要……104

　1）調査の方法と経過……104

　2）基本層序……105

　3）検出遺構と出土遺物……105

　4）遺構に伴わない出土遺物……108

3．まとめ……111

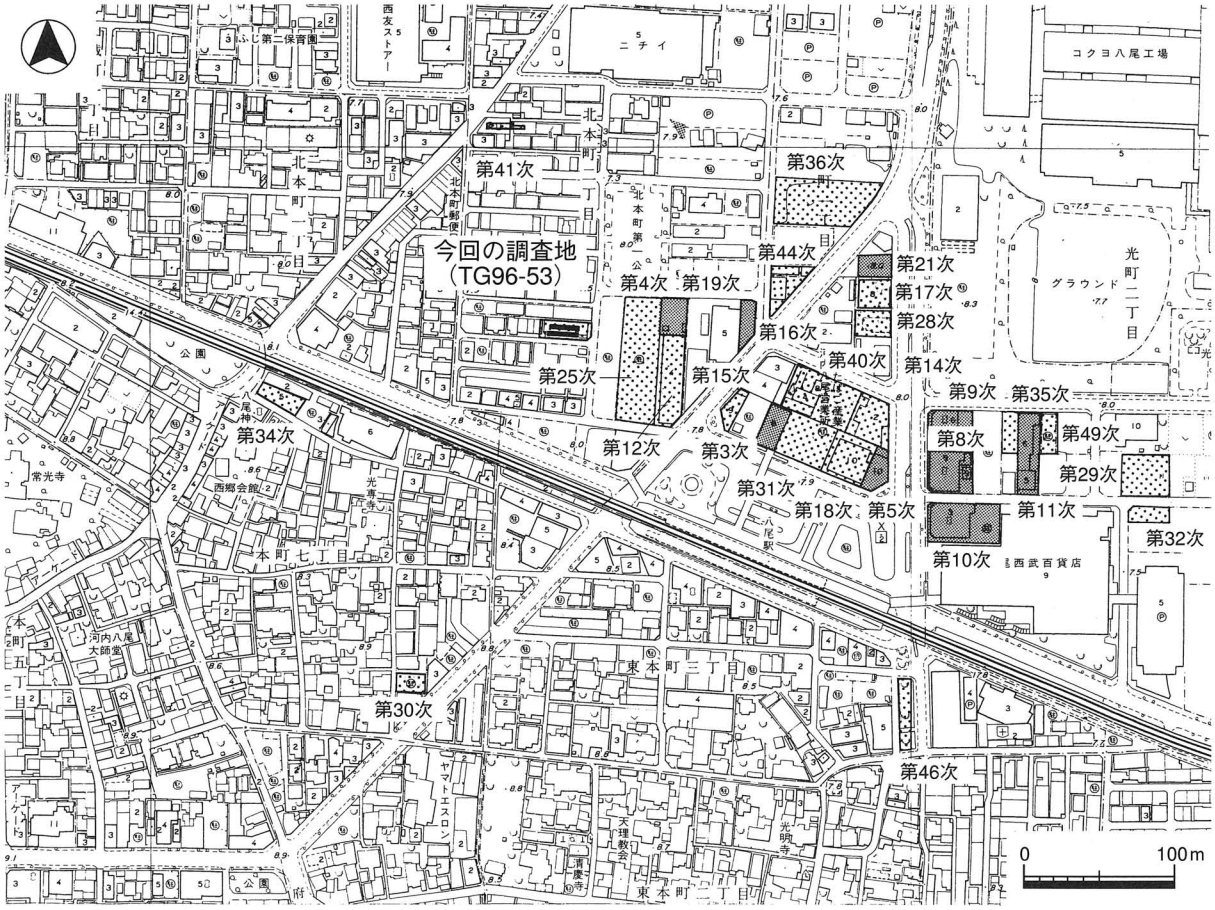
XV　東郷遺跡第53次調査（TG96－53）

1．はじめに

東郷遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では東本町１～５丁目、北本町２丁目、光町１・２丁目、桜ヶ丘１～４丁目、荘内町１・２丁目一帯にあたる。地形的には旧大和川の主流であった玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡の周辺には東に東郷廃寺、西に久宝寺遺跡、南に成法寺遺跡、北に萱振遺跡、南東に小阪合遺跡が隣接している。

当遺跡内では現在までに八尾市教育委員会および当調査研究会によって、52件の発掘調査を実施している。その結果、弥生時代中期～近世に至る複合遺跡であることが明らかになっている。特に古墳時代初頭～前期の時期は集落構成に関する遺構や他地域との活発な交流を示す遺物の出土などが確認されている。

今回の発掘調査は当遺跡範囲の西部付近に位置する北本町２丁目の個人住宅付共同住宅建設工事に伴うもので、当調査研究会が当遺跡内で実施する第53次調査である（第１図）。



第１図　調査地位置図及び周辺図

調査地の近隣では、昭和62年度に実施した当調査研究会第25次調査（ＴＧ87－25）が東側（約50m）に位置する。その調査では古墳時代前期に比定される井戸・土坑・溝、平安時代末～鎌倉時代の水田遺構等を検出している。当遺跡中央部の北本町・光町地区では、昭和56年度から現在までに八尾市教育委員会及び当調査研究会で数次の発掘調査を断続的に実施している。その結果、弥生時代中期の土器（畿内第Ⅱ～Ⅳ様式）、古墳時代前期（庄内式期～布留式期）の竪穴式住居・掘立柱建物・井戸等の集落域、方形周溝墓・土坑墓・土器棺等の墓域、平安時代末～鎌倉時代の集落遺構・生産遺構などを検出している。また、古墳時代前期に比定される出土遺物には他地域から持ち込まれたと思われる土器が多く含まれていることが確認されており、他地域との交流が盛んであったことが明らかになっている。

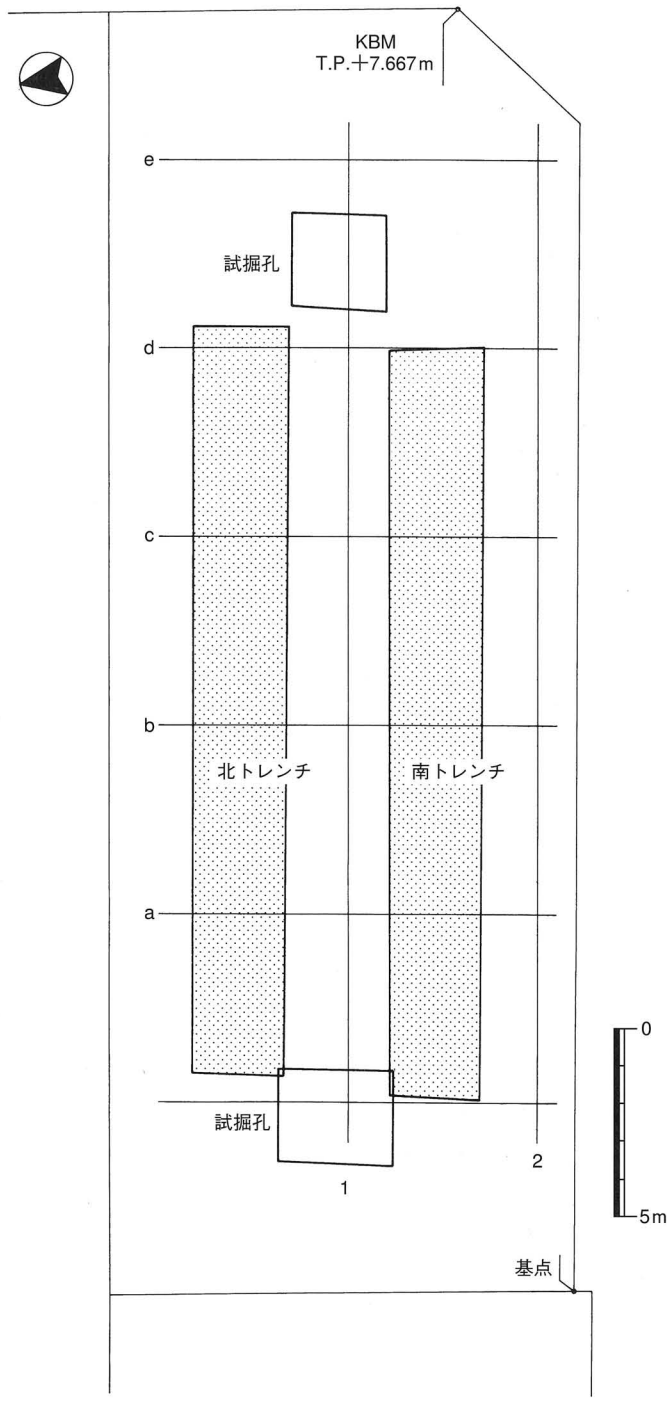
２．調査概要

１）調査の方法と経過

調査は、建物基礎工事によって破壊される部分に調査区を設定した（第２図）。調査区は幅2.5m、長さ20mの東西トレンチ２本（北トレンチ、南トレンチ）である。総面積は約100㎡を測る。

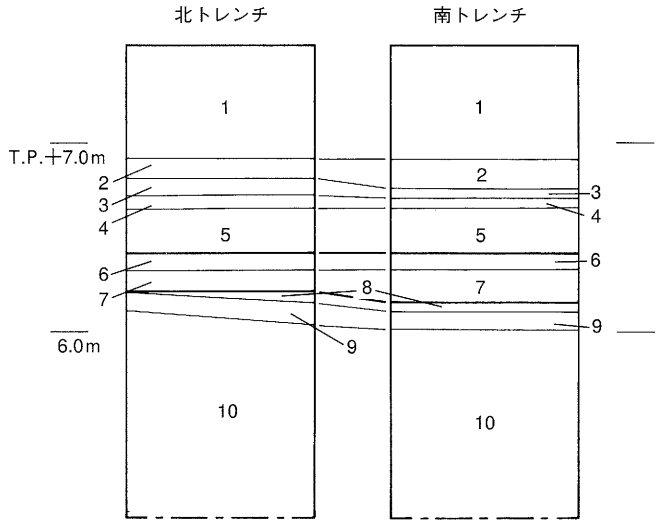
掘削の方法は八尾市教育委員会の遺構確認調査結果をもとに、現地表（T.P.＋7.6m）下1.3m前後の土層を機械により排除した後、以下0.3m前後の土層について人力掘削および精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査の掘削土は外部処理を行わず、調査地内で処理しなければならないため、トレンチ２本を順次に行うことにした。

地区割りについては、南西角の土地境界杭（基点）から東へ４m、北へ９mに任意の基準点を設定し、南北軸を調査地の区画に合わせた。区画は調査区範囲を包括できる南北15m、東西25mに５m角の方眼を作成



第２図　調査区位置図

した。区名は基準点より東の南北軸から東へアルファベットａ～e、基準点より北の東西軸から南へ算用数字1～2を付し、交差する北西を優先として1a区～2e区を付称した。遺構や遺物の取り上げ等記録保存を実施した。



第３図　柱状図

２）基本層序

第１層　盛土（層厚60㎝）。調査前まで建物（アパート）があり、その整地土である。現地表（T.P.）＋7.6m前後を測る。

第２層　旧耕土（層厚10～20㎝）。昭和30年ごろまでの耕作土である。部分的に建物の基礎で削平されている。

第３層　暗青灰色粘質土（層厚10～20㎝）。耕作土の床土である。

第４層　淡青灰茶色粘質シルト(層厚0～25㎝)。近世の遺物を含む。

第５層　淡茶灰青色細砂混粘質土（層厚10～30㎝）。平安時代末ごろに堆積した土層で、部分的に微砂～細砂が堆積する窪みがみられる。

第６層　淡褐灰色粘質土（層厚０～30㎝）。平安時代末～鎌倉時代初頭の耕作土である。

第７層　褐灰色粘質土（層厚40㎝以上）。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む土層である。

第８層　灰茶色粘土（層厚20㎝）。古墳時代前期の遺構検出面である。

第９層　灰青色～灰茶色シルト（層厚10㎝）。弥生時代後期～古墳時代前期の遺構検出面である。

第10層　灰色細砂～粗砂（層厚120㎝以上）。洪水層。市教委の遺構確認調査で確認された層である。

３）検出遺構と出土遺物

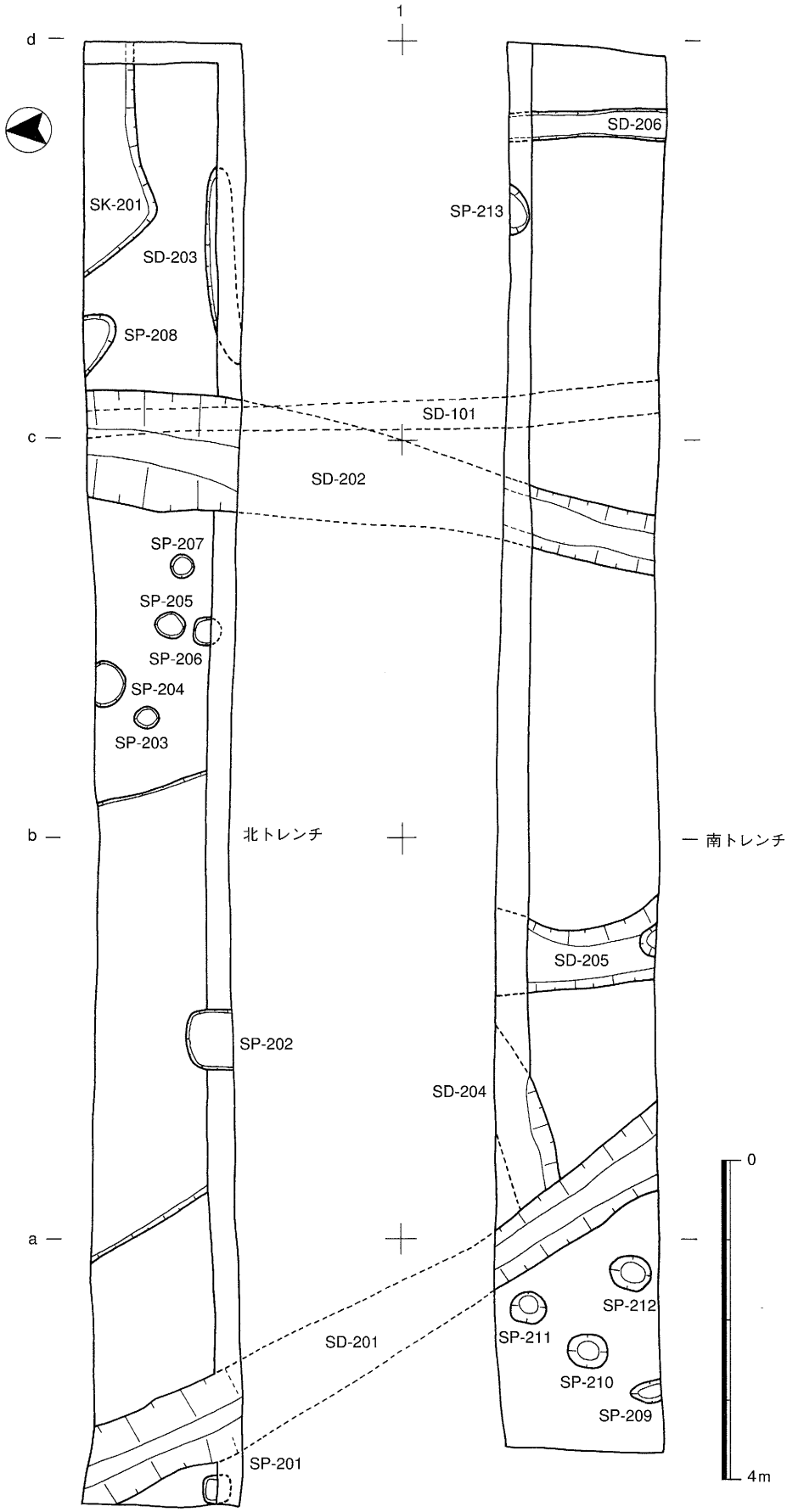
調査の結果、現地表下約1.1m（標高約7.4m）前後の第６層（水田耕作土）上面で溝１条（ＳＤ－101）、現地表下約1.3～1.4m（標高7.1～7.2m）の第８層上面で弥生時代後期～古墳時代前期の土坑１基（ＳＫ－201）・溝６条（ＳＤ－201～ＳＤ－206）・小穴13個（ＳＰ－201～ＳＰ－213）を検出した。遺物は遺構及び包含層内からコンテナにして約２箱分を出土した。以下、検出した遺構について記す。

古墳時代前期の検出遺構

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－201

北トレンチの東部（1d区）で検出した土坑である。北東部は調査区外に至る。検出部で東西


1
d
c
b
a
SK-201
SD-203
SP-208
SD-101
SD-202
SP-207
SP-205
SP-206
SP-204
SP-203
北トレンチ
SP-202
SD-201
SP-201
SD-206
SP-213
南トレンチ
SD-205
SD-204
SP-212
SP-211
SP-210
SP-209
0
4m

第4図　平面図

2.9m、南北0.8m、深さ0.1m前後を測る。断面は逆台形を呈し、暗灰色粘質シルトが堆積する。遺物は古墳時代前期の土師器の小片がごく少量出土している。図化できたのは土師器の壷（1）の底部片1点である。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－201～ＳＰ－213

北トレンチ8個・南トレンチ5個で計13個を検出した。平面形は円形、楕円形、隅円方形である。径20～70㎝、深さ10～30㎝を測る。南トレンチのＳＰ－210・ＳＰ－211は深い小穴であるが、他の小穴はほとんどが浅いものであった。遺物は古墳時代前期に比定される土師器の小片化したものがごく少量含まれている程度で正確な時期決定は困難であるが、上層の第6層が古墳時代前期の包含層、隣接で検出した溝内より古墳時代前期の土器を出土していることから、これらの小穴は古墳時代前期（布留式古相）に比定される時期のものと考えられる。ＳＰ－209から布留式甕（2）を出土している。

小穴一覧表

遺構番号	区　名	平面形	規　模		堆　積　土	備　考
			径	深さ		
ＳＰ-201	北－1ａ区	隅丸方形	34	7	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ-202	北－1ｂ区	－	76	17	灰茶色細砂混粘質土	調査区外へ
ＳＰ-203	北－1ｃ区	円形	28	10	灰茶色細砂混粘質土	
ＳＰ-204	北－1ｃ区	－	58	10	灰茶色細砂混粘質土	調査区外へ
ＳＰ-205	北－1ｃ区	楕円形	30～37	10	灰茶色細砂混粘質土	
ＳＰ-206	北－1ｃ区	円形	36	11	灰茶色細砂混粘質土	
ＳＰ-207	北－1ｃ区	円形	28	10	灰茶色細砂混粘質土	
ＳＰ-208	北－1ｂ区	－	45～60	9	暗灰褐色粘質シルト	調査区外へ
ＳＰ-209	南－2ａ区	－	20～40	8	褐灰色粘土・暗灰色細砂混じり粘土	調査区外へ
ＳＰ-210	南－2ａ区	楕円形	40～50	20	褐灰色粘土・暗灰色細砂混じり粘土	
ＳＰ-211	南－2ａ区	円形	40	28	褐灰色粘土	
ＳＰ-212	南－2ａ区	円形	42	10	暗灰色細砂混じり粘土	
ＳＰ-213	南－2ｄ区	－	65	20	暗灰色細砂混じり粘土	調査区外へ

溝（ＳＤ）

ＳＤ－201

北トレンチ1a区・南トレンチ2a･b区で検出した南南東－北北西方向に伸びる溝である。検出長は北トレンチ～南トレンチ約6.5m、幅0.2～1.1m、深さ0.3～0.4mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は古墳時代に比定される土師器片をごく少量出土している。

ＳＤ－202

北トレンチ1c･d区・南トレンチ2c区で検出したほぼ南北方向に伸びる溝である。検出長北トレンチ～南トレンチ約7.0m、幅0.4～0.7m、深さ0.2～0.3mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器の小片をごく少量出土している。図化できたものはＶ様式系の甕（3）・甕（4）・壷（5）と思われる底部片・Ｖ様式の高杯（6）である。

ＳＤ－203

北トレンチ1d区で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長約2.0m、幅0.3m前後、深さ約0.1mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は古墳時代前期の土師器の小片をごく少量出土している。図化できたものはＶ様式系の甕（７・８）の口縁部、甕（９・10）の底部片、鉢（11～13）と思われる底部片である。14は高杯の杯部片である。

ＳＤ－204

南トレンチ2b区で検出した東北東－西南西方向に伸びる溝状遺構である。西はＳＤ－201と合流し、東は調査区外に至る。北トレンチでは検出しなかった。検出長約2.0m、幅約0.8m、深さ約0.15mを測る。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物はなかった。

ＳＤ－205

南トレンチ2b区で検出したほぼ南北方向に伸びる溝である。南北ともに調査区外に至るが、北トレンチでは検出していない。検出長約2.0m、幅0.8m前後、深さ0.3～0.4mを測り、南側が深い。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は古墳時代前期の土器の小片をごく少量出土している。

ＳＤ－206

南トレンチ2d区で検出したほぼ南北方向に伸びる溝である。南北ともに調査区外に至るが、北トレンチでは検出していない。検出長約2.0m、幅0.3m前後、深さ0.1～0.2mを測り、北側が深い。堆積土は暗灰褐色粘質シルトである。遺物は古墳時代前期の土器の小片をごく少量出土している。

中世の検出遺構

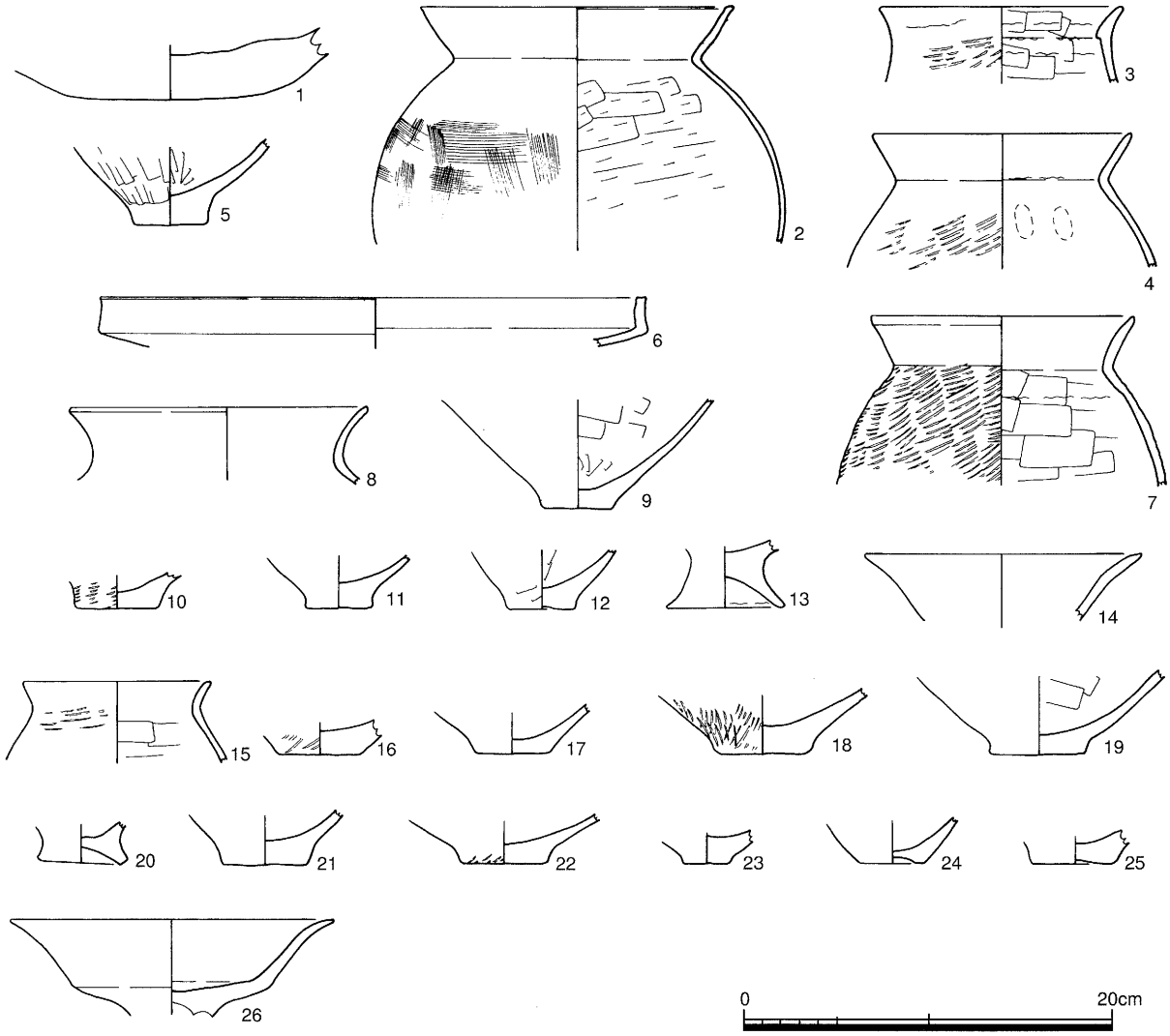
溝（ＳＤ）

ＳＤ－101

北トレンチ1d区・南トレンチ2d区で検出したほぼ南北方向に伸びる溝である。南北ともに調査区外に至る。検出長は両トレンチを合わせ約7.0m、幅0.4m前後、深さ約0.3mを測り、北側がやや深い。堆積土は淡灰褐色粘質シルトである。遺物は出土していない。この溝は水田耕作土上面から切り込んでおり、耕作に伴う排水溝や導水溝等が考えられる。

４）遺構に伴わない出土遺物

第４層・第５層・第７層に遺物が包含していた。第４層では近世時期の土器小片がごく少量出土している。第５層では平安時代末ごろに比定される土師器の小片がごく少量出土している。第７層では弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器片が出土している。図化できたものは第７層内から土器12点である。これらの土器はＶ様式系の甕・壷・高杯である。甕は15～18、壷は19～25、高杯は26である。



第５図　出土遺物実測図

出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	法量（cm）	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備　考
1	壷 （土師器） ＳＫ-201	底径　8.0	外面はヘラナデ、ハケナデ後ナデ、接合痕残存。内面はヘラケズリ。	外：淡黄灰色～黒灰色 内：暗紫茶色	６㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・石英・角閃石）	良好	底部完
2	甕 （土師器） ＳＰ-209	口径　16.8	外面は口縁部ナデ、体部ハケナデ（10本/㎝）。内面は口縁部摩耗の為調整不明瞭、体部ヘラケズリ。	外：淡灰茶色～淡茶灰色 内：淡橙茶色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・赤褐色酸化粒・角閃石）	良好	1/4　煤付着
3	甕 （土師器） ＳＤ-202	口径　13.0	外面は口縁部上部ナデ、他タタキ後ナデ、接合痕残存。内面はヘラナデ、接合痕残存。	淡橙茶褐色	５㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	1/5
4	甕 （土師器） ＳＤ-202	口径　14.0	外面は口縁部摩耗の為調整不明瞭。接合痕残存。体部タタキ（4本/㎝）。内面は摩耗の為調整不明。接合痕・指頭痕残存。	淡橙茶色～淡灰色	４㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・角閃石）	良好	1/5
5	壷？ （土師器） ＳＤ-202	底径　2.7	外面は体部ヘラナデ、底面ナデ。内面はヘラナデ、工具痕残存。	暗灰褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	底部完
6	高杯 （土師器） ＳＤ-202	口径　29.6	内外面ともに口縁部上部ナデ、他ナデ。	淡赤茶色	４㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良好	口縁部一部
7	甕 （土師器） ＳＤ-203	口径　14.2	外面は口縁部ヨコナデ、体部タタキ（５本/㎝）。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	淡灰茶色～淡橙茶色	５㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良好	1/5　煤付着
8	同上	口径　17.0	内外面ともに口縁部上部ナデ、他ナデ。摩耗の為調整不明。	外：暗灰茶橙色 内：淡黒灰色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良好	口縁部一部
9	同上	底径　3.6	外面は体部タタキと思われるが摩耗の為調整不明瞭、底面ナデ。内面はヘラナデ。	明茶灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母）	良好	底部完 黒斑有り
10	同上	底径　4.4	外面はタタキ（５本/㎝）、底面ナデ。内面はヘラナデ。	淡橙灰茶色	３㎜以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母・角閃石・石英）	良好	底部完
11	鉢（土師器） ＳＤ-203	底径　3.4	内外面ともに摩耗の為調整不明瞭。	淡橙茶色	６㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母）	良好	底部完
12	同上	底径　3.6	外面は体部摩耗の為調整不明瞭、工具痕残存、底面ナデ。内面はヘラナデ。	淡灰茶色	４㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良好	底部完
13	同上	底径　6.2	外面は脚部ナデ。内面は杯部ヘラナデ、脚部ナデ。	淡緑灰色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	1/3
14	高杯 （土師器） ＳＤ-203	口径　12.4	外面は摩耗の為調整不明瞭。内面ナデ。	淡橙乳茶色	３㎜以下の砂粒を少量含む（長石・石英・赤褐色酸化粒）	良好	杯部 1/3
15	甕 （土師器） 包含層	口径　10.0	外面は口縁部ナデ、体部タタキ後ナデ。内面は口縁部ナデ、体部ヘラナデ。	外：淡橙茶色 内：淡茶灰褐色	５㎜以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母）	良好	口縁部一部
16	同上	底径　4.2	外面はタタキ、底面ナデ。内面はナデ。	外：淡灰茶色 内：淡灰褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	底部 3/4
17	同上	底径　3.8	内外面ともに摩耗の為調整不明瞭。	外：淡灰茶色 内：明茶赤褐色	４㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石）	良好	底部 1/2
18	同上	底径　4.4	外面はタタキ（３本/㎝）、底面ナデ、接合痕残存。内面はナデ。	外：淡灰茶色 内：淡黒灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・石英）	良好	底部 1/3
19	壷 （土師器） 包含層	底径　5.0	外面はナデ。内面はヘラケズリ。	外：暗灰黒色～淡灰茶色 内：淡茶灰色	８㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石）	良好	底部完

遺物番号 図版番号	器　種	法量（cm）	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備　考
22	壷 （土師器） 包含層	底径　4.4	外面はタタキと思われるが摩耗の為調整不明瞭、底面ナデ。内面は摩耗の為調整不明瞭。	外：淡赤茶灰色 内：淡灰茶色	6㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・石英）	良好	底部 2/3
23	同上	底径　2.4	外面はナデ。内面はヘラナデ。	外：明茶灰色 内：淡灰黒色	1㎜以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母・石英）	良好	底部完
24	同上	底径　3.4	外面はタタキ、底面ナデ。内面はナデ。	乳茶灰色～乳灰色	2㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母）	良好	底部完
25	同上	底径　4.3	内外面ともに摩耗の為調整不明瞭。	外：淡黄灰茶色 内：淡灰色	2㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒・石英）	良好	底部完
26	高杯 （土師器） 包含層	口径　17.4	内外面ともに摩耗の為調整不明瞭。	明茶橙色	6㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・石英）	良好	杯部 1/3 煤付着

3．まとめ

今回の調査地は東郷遺跡の西部にあたり、調査区は東西方向に細長いトレンチ２本を平行にあけた調査であった。調査の成果では古墳時代前期～中世の遺構・遺物を検出することができた。以下、検出した時代別に成果を記す。

古墳時代前期の時期は、調査区全域で遺物包含層（第６層）が存在し、その下面より土坑・溝・小穴が検出された。これらの遺構の性格は小面積のため、明確には言えないが集落遺構の可能性がある。その理由として隣接の調査地においてこの時期の遺構を検出している。調査区から東約50ｍの第25次調査地（ＴＧ87－25）では古墳時代前期の井戸・土坑・溝、そこから東へ約30ｍの昭和55年度市教委調査地で古墳時代前期の井戸等、さらにその周辺では市教委及び当調査研究会の調査で竪穴式住居・掘立柱建物・井戸等の集落遺構を検出しており、集落域の中心と考えられている。当調査地はその西側にあたり、その集落域の西端部分にあたるものと思われる。

平安時代末～鎌倉時代初頭の時期のものは水田耕作土を確認した。この時期の水田遺構は第25次調査地（ＴＧ87－25）で検出しており、今回の調査により西への広がりを確認することができた。これらのことから当調査地の周辺では生産域としての土地利用が行われていたことは明確となった。それ以後、土層の状況から近代まで同様に生産域としていたと思われる。

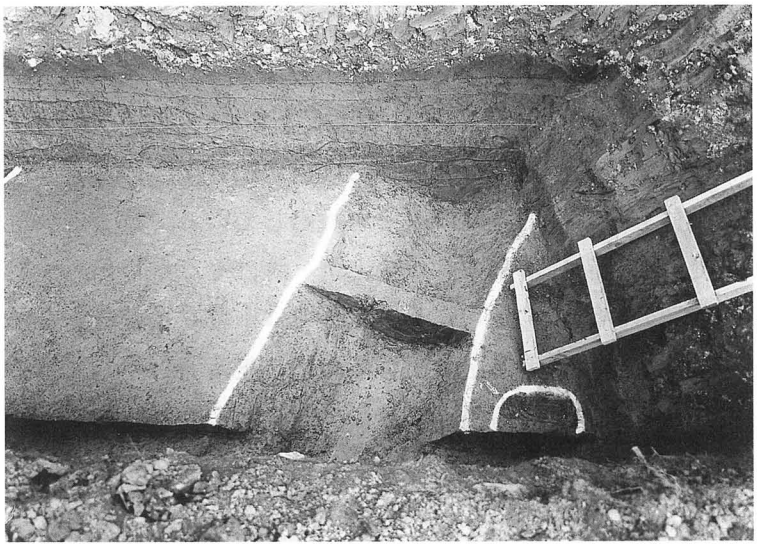
以上、調査の成果である。

参考文献

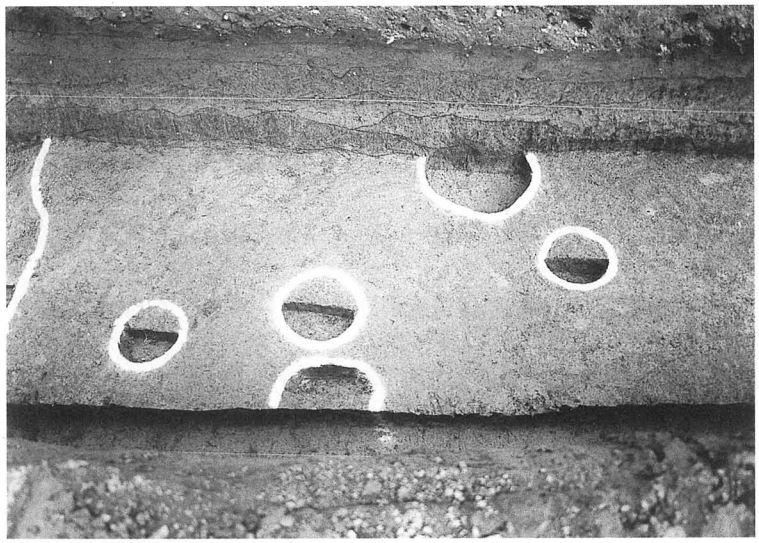
・米田敏幸・高萩千秋他 1983「第８章　東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』八尾市教育委員会
・駒沢敦 1984「２．東郷遺跡第17次調査」『昭和58年度事業概要報告』(財) 八尾市文化財調査研究会報告5 (財) 八尾市文化財調査研究会
・嶋村友子 1986「１．東郷遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・成海佳子 1988「８．東郷遺跡第36次調査（ＴＧ91－36)」『平成３年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋 1989『東郷遺跡・田井中遺跡』(財) 八尾市文化財調査研究会報告17 (財) 八尾市文化財調査研究会
・原田昌則 1991「７．東郷遺跡第34次調査（ＴＧ90－34)」『平成２年度 (財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

図版一

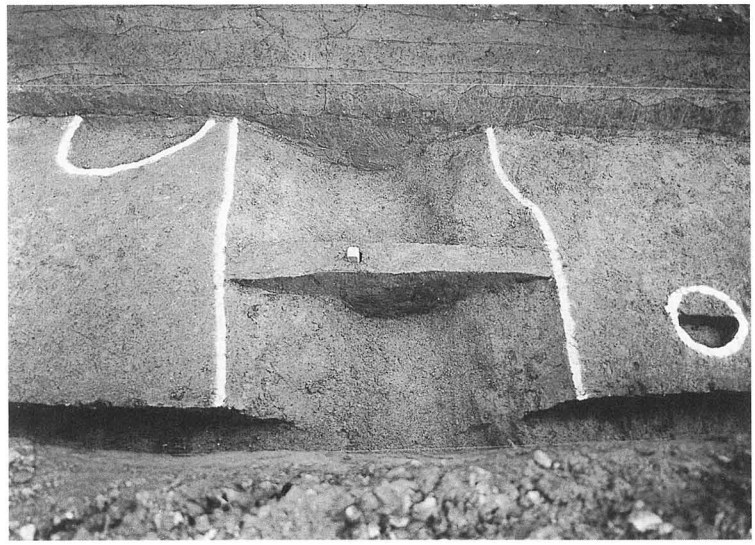
北トレンチ全景（西から）



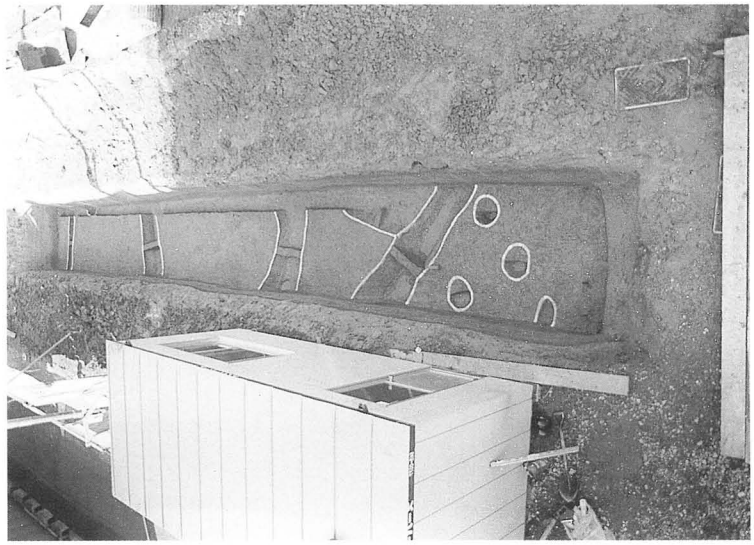
ＳＰ－201（南から）



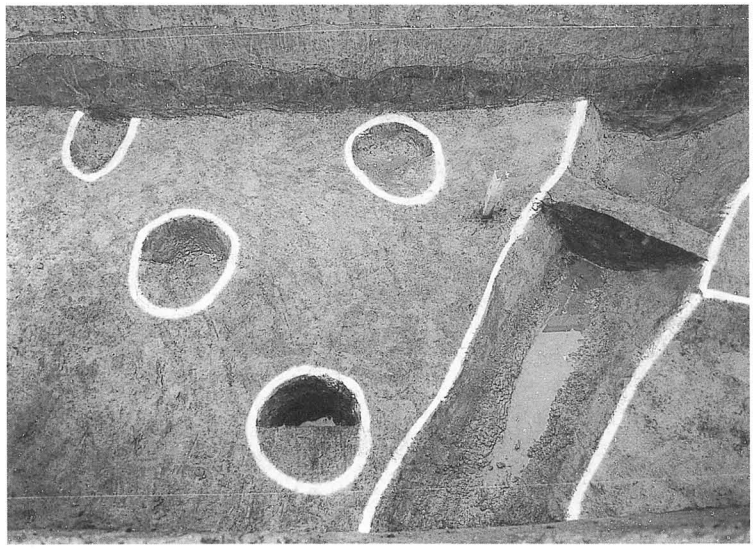
ＳＰ－203～ＳＰ－207（南から）



ＳＤ－202（南から）

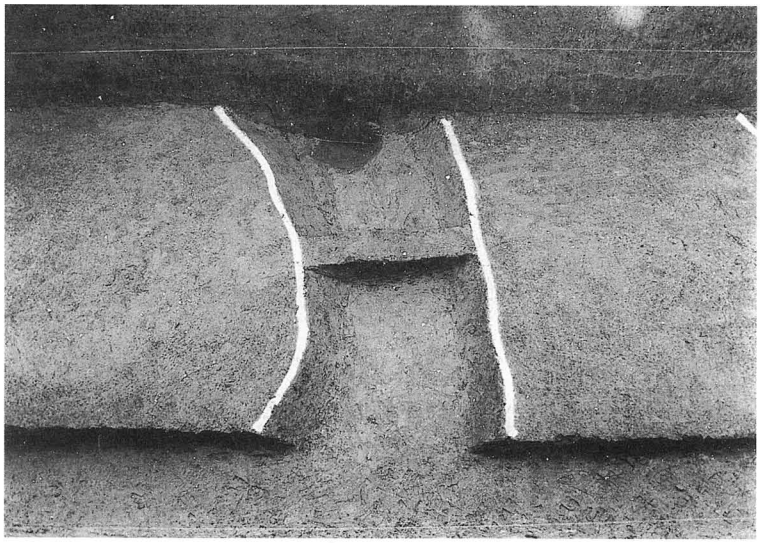


南トレンチ全景（西から）

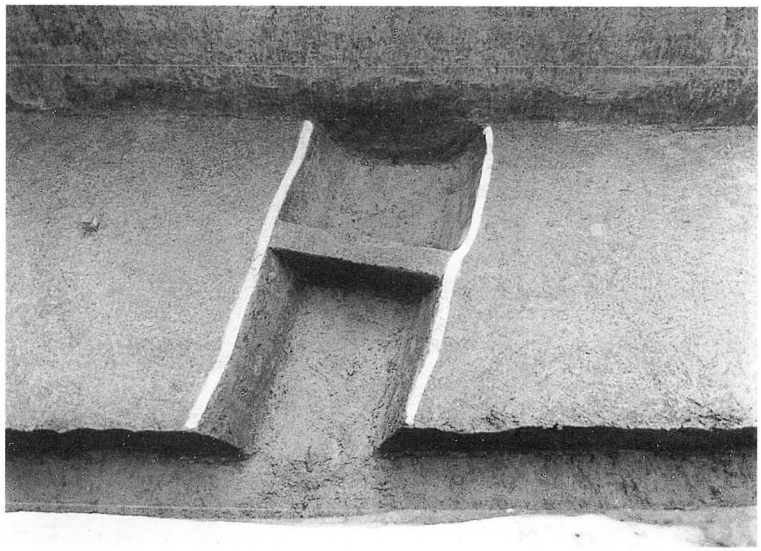


ＳＤ－201・ＳＰ－209～ＳＰ－212（北から）

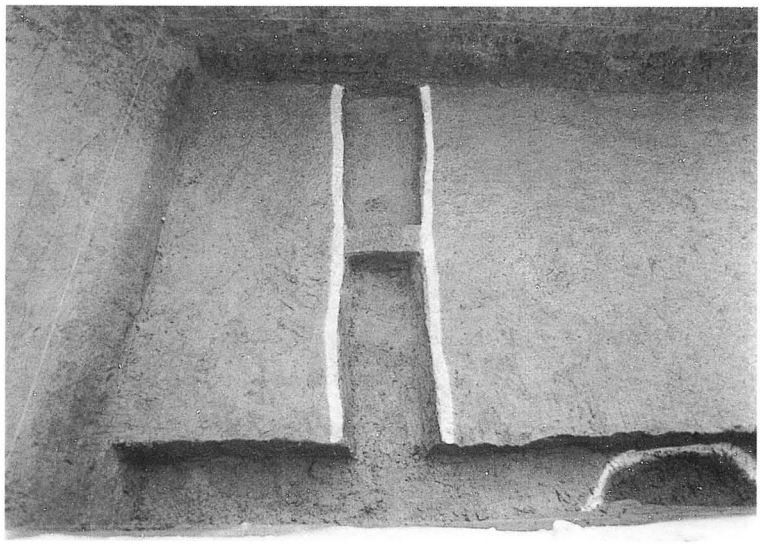
図版三



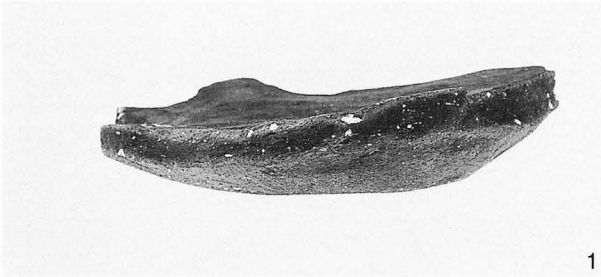
ＳＤ－205（北から）

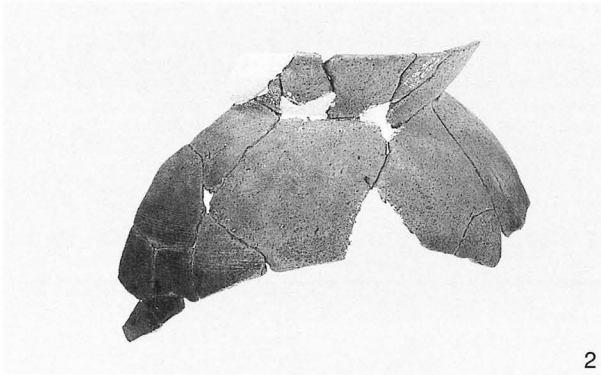


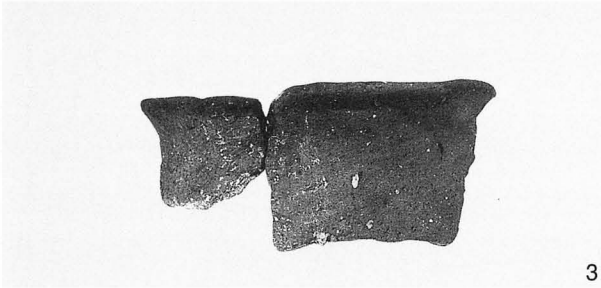
ＳＰ－202（北から）

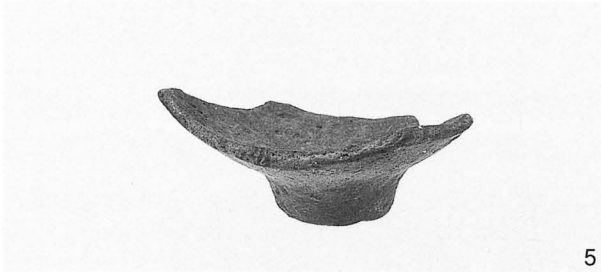


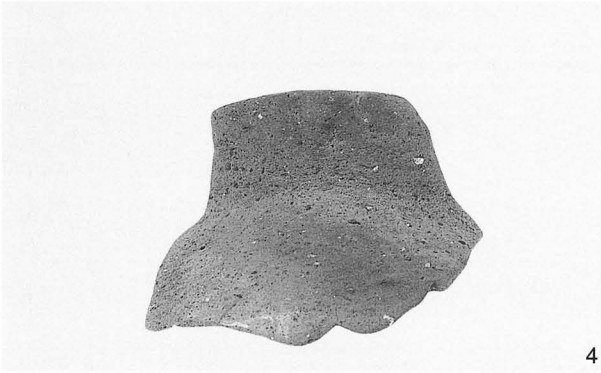
ＳＤ－206（北から）

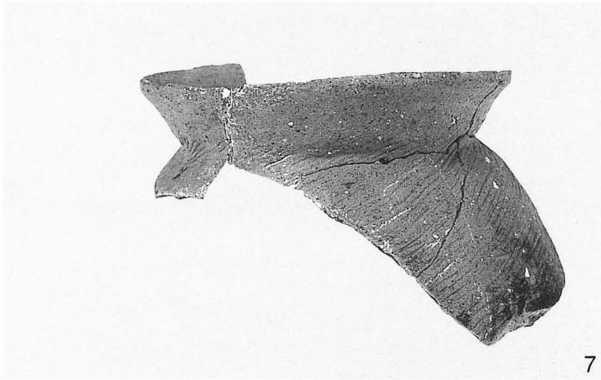

1


2

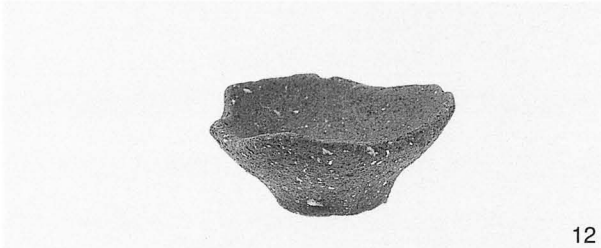

3

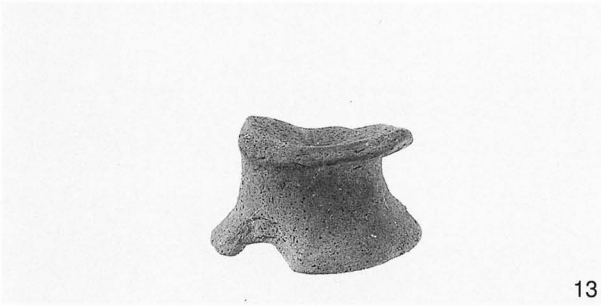

5

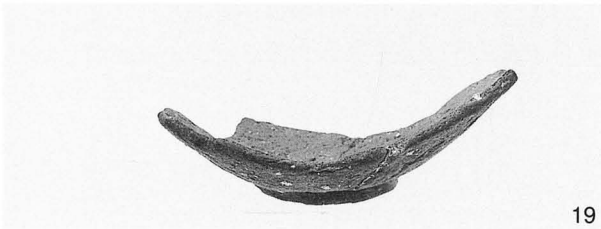

4


7

11


12


13


19

20

26

（1）ＳＫ－201、（2～6）ＳＤ－202、
（7・11～13）ＳＤ－203、19・20・26が遺構に伴わない出土遺物

XVI　中田遺跡第33次調査（ＮＴ96－33）

例　　言

1．本書は、八尾市中田１・４丁目地内で実施した公共下水道（７－62工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第33次調査（ＮＴ96－33）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋677－３号　平成８年３月８日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年４月５日から平成８年４月15日（実働５日）にかけて西村公助を担当者として実施した。調査面積は30.25㎡を測る。なお、調査においては中西明美、西村和子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子・西村（公）・中西、図面レイアウト・トレース－中西、西村（和）、西村（公）が行った。

1．本書の執筆、編集は西村公助が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……117

2．調査概要……118

　1）調査の方法と経過……118

　2）層序……118

　3）検出遺構と出土遺物……119

3．出土遺物観察表……122

4．まとめ……123

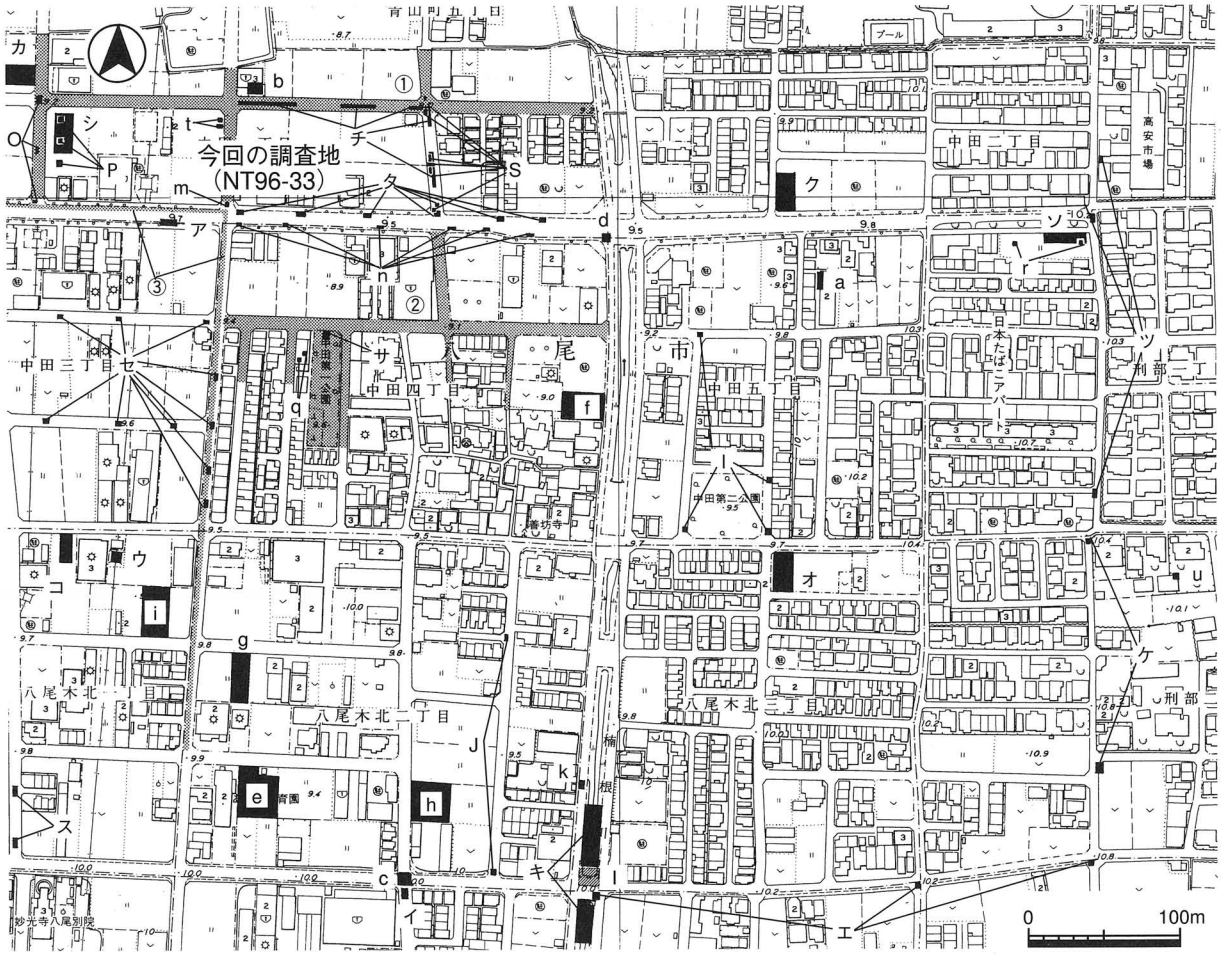
XVI　中田遺跡第33次調査（NT96－33）

1．はじめに

八尾市の中央部に位置する中田遺跡は、南東から北西方向に流れる旧大和川の主流であった長瀬川の左岸の沖積地上に位置する。同遺跡は、現在の行政区画では、中田・刑部・八尾木北にかけて存在している。

当遺跡内では、昭和47年に中田遺跡調査会が区画整理に伴った発掘調査を行って以来現在までに数十件の発掘調査を実施している。そのなかでも、今回の調査地の南約５ｍ地点で八尾市教育委員会が行った下水道工事に伴う発掘調査[註1]（92－598）では、平安時代末期の井戸を検出している他、弥生時代後期から近世に至るまでの遺構の検出や遺物の出土が報告されている。[註2]

当遺跡の周囲には、北に弥生時代中期以降近世に至るまでの集落遺構が検出されている小阪合遺跡、西に弥生時代後期の集落遺構を検出している矢作遺跡、南に弥生時代中期から近世に至るまでの集落遺構を検出している東弓削遺跡が隣接している。



第１図　調査地周辺図

調査地点	調査主体	所在地	面積(m²)	調査原因	調査期間	文献	発行	発行年	備考
ア	研究会（NT89-2）	中田２～４	70	公共下水道	891013～891127	(財)八尾市文化財調査研究会報告28	(財)八尾市文化財調査研究会	1990.12	
イ	研究会（NT89-4）	八尾木北５	95	公共下水道	891212～900118				
ウ	研究会（NT90-5）	八尾木北１-37-２	80	送電鉄塔建替	901126～901204				
エ	研究会（NT90-6）	八尾木北３・刑部２	180	公共下水道	910108～910216				
オ	研究会（NT91-7）	八尾木北３-340他	90	共同住宅建設	910517～910527	(財)八尾市文化財調査研究会報告34	(財)八尾市文化財調査研究会	1992.9	
カ	研究会（NT91-9）	中田１-３	294	共同住宅建設	911205～911218				
キ	研究会（NT92-10）	八尾木北３	450	河川改修工事	921026～930122	平成４年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告	(財)八尾市文化財調査研究会	1993.3	
ク	研究会（NT92-12）	中田２-405	120	共同住宅建設	930119～930130				
ケ	研究会（NT92-15）	刑部２	35	公共下水道	930308～930415	(財)八尾市文化財調査研究会報告56			
コ	研究会（NT93-16）	八尾木北１-33他	170	共同住宅建設	930517～930527	(財)八尾市文化財調査研究会報告43	(財)八尾市文化財調査研究会	1994.1	
サ	研究会（NT93-23）	中田４-118	64	防火水槽	940301～940304				
シ	研究会（NT94-26）	中田１-20他	200	共同住宅建設	940704～940715				
ス	研究会（NT94-27）	八尾木北６-19	160	共同住宅建設	941107～941122				
セ	研究会（NT95-29）	中田３-50	44	公共下水道		平成７年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告	(財)八尾市文化財調査研究会	1996.5	
ソ	研究会（NT95-31）	刑部１-183・184	120	共同住宅建設	951106～951115				
タ	研究会（NT96-33）	中田１・４	30.25	公共下水道	960405～960415	平成８年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告			今回の調査地
チ	研究会（NT96-35）	中田１	110	公共下水道	970207～970307	平成８年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告			
ツ	研究会（NT97-36）	刑部１丁目・中田２丁目	28	公共下水道	H090527～				
a	市教育委員会	青山町３・中田５他		遺跡範囲確認	740726～740903	中田遺跡・中田遺跡調査報告Ⅱ	八尾市教育委員会	1975.3	
b	市教育委員会	中田１-39		倉庫・事務所	810227～810306	八尾市文化財紀要２	八尾市教育委員会	1986.12	
c	市教育委員会	八尾木北５他		公共下水道	871214～880311	八尾市文化財調査報告18	八尾市教育委員会	1988.3	
d	市教委（89-393昭和63年）	中田４	21.28	公共下水道	890222～890223	八尾市文化財調査報告21	八尾市教育委員会	1990.3	
e	市教委（89-484）	八尾木北２-41-２	8	倉庫・事務所	900112				
f	市教委（90-540）	中田４-142の一部	6	共同住宅建設	900801				
g	市教委（90-427）	八尾木北２-15-13	4	工場付住宅	901120				
h	市教委（90-412）	八尾木北２-56-２	9	共同住宅建設	901211				
i	市教委（90-520）	八尾木北１-40他	8	工場建設	910123				
j	市教委（91-353）	八尾木北２	8	公共下水道	911210	八尾市文化財調査報告28	八尾市教育委員会	1993.3	
k	市教委（91-354）	八尾木北２		公共下水道	911213				
l	市教委（91-503）	中田５-75-107	16	公共下水道	920109・27				
m	市教委（92-312）	中田１		公共下水道	921124～921126				
n	市教委（92-598）	中田１～４	15.75	公共下水道	930311～930316	八尾市文化財調査報告30	八尾市教育委員会	1993.3	
o	市教委（93-355）	中田１・３		公共下水道	931112～931216				
p	市教委（94-14）	中田１-20他			940513	八尾市文化財調査報告31	八尾市教育委員会	1995.3	研究会（ＮＴ94-26）調査地
q	市教委（95-260）	中田４-117-４			960731	八尾市文化財調査報告33	八尾市教育委員会	1995.3	
r	市教委（95-149）	刑部１-183.184			961018	八尾市文化財調査報告33	八尾市教育委員会	1995.3	研究会（ＮＴ95-31）調査地
s	市教委（95-470）	中田１		公共下水道	951113・14・27・28・960119	八尾市文化財調査報告36	八尾市教育委員会	1997.3	
t	市教委（96-510）	中田１-28		公共下水道	961108	八尾市文化財調査報告36	八尾市教育委員会	1997.3	
u	市教委（96-487）	刑部２-177		公共下水道	961114	八尾市文化財調査報告36	八尾市教育委員会	1997.3	
Ⅰ	大阪府教育委員会	中田１・八尾木北５		公共下水道	85年度	10　中田遺跡発掘調査概要	大阪府教育委員会	1986.3	
①	中田遺跡調査会	中田１		区画整理	721016～7303	2　中田遺跡〈北区〉発掘調査概要	中田遺跡調査会		
②	中田遺跡調査会	中田４	5073	区画整理	730501～7309	3　中田遺跡〈南区〉発掘調査概要	中田遺跡調査会		
③	中田遺跡調査センター	中田１・３・４		電話線埋設	731103～740129	4　中田遺跡・中田遺跡調査報告Ⅰ	中田遺跡調査センター	1974.5	

第１表　中田遺跡調査一覧表

２．調査概要

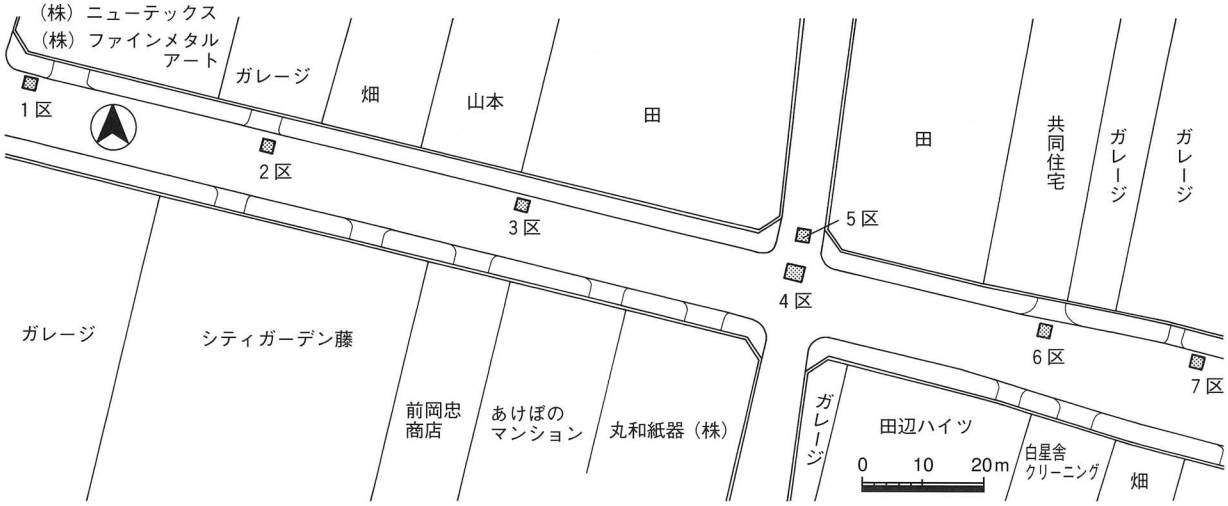
１）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（７－62工区）に伴って破壊が予測される人孔７個所（１区～７区）を対象に実施した。現地表面から1mまでを機械により掘削し、以下0.7～1.0mは人力掘削による調査を実施した。

写真1　調査地周辺（西から）

２）層序

第０層は近代の盛土である。この層は各調査区で確認できた。なお、今回の調査地での現在の標高は１区では、T.P.＋9.9mで、7区ではT.P.＋9.55mで西から東へ徐々に低くなる。第０層を取り除くと、各調査区には旧耕土が存在しており、近世から近代まで水田及び畑として利用していた土地であったことがわかる。以下は各調査区で層位が異なるので一概には言えないが、標高T.P.＋8.9m～T.P.＋8.0m前後に弥生時代から中世にいたるまでの遺物包含層や遺構が存在している結果がえられた。



第２図　調査区設定図

３）検出遺構と出土遺物

１区

第４層上面（T.P.＋8.6m）で土坑１基（SK－101）を検出した。

SK－101

調査区内の北東端で検出した。検出した平面の形状は半円形で、径0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は、10ＹＲ5/1褐灰色粘土である。内部からは鎌倉時代の土師器の羽釜（１）、須恵質の鉢（２）、砥石（３）が出土した。

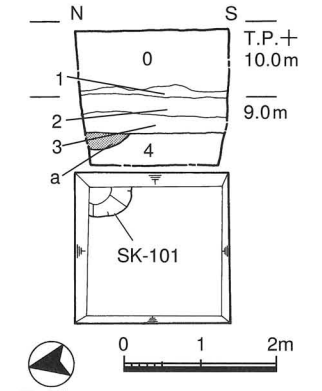
（１）は内傾し、くの字に丸く短く外反する口縁部である。（２）は外反して立ち上がり端部は上方向につまみ上げて尖りぎみに終わる口縁部である。（３）は幅の狭い面に１面のみ使用した痕跡が見られる。

２区

第３層上面（T.P.＋8.7m）で土坑１基（SK－201）を検出した。

SK－201

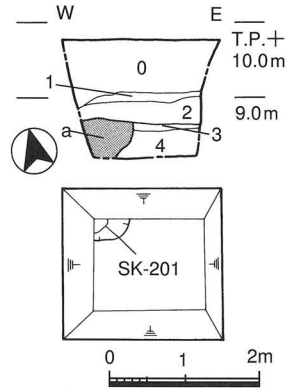
調査区内の北西端で検出した。検出した平面の形状は半円形で、径0.4m、深さ0.5mを測る。埋土はN4/ 灰色細砂混粘土で、内部からは鎌倉時代の土師器皿（４）、土師器羽釜の破片が出土した。



1区　層序
0　盛土
1　旧耕土　5B4/1　暗青灰色細砂混粘土
2　10YR6/1　褐灰色シルト混粘土
3　10YR4/6　褐色細砂混粘土
4　N4/　灰色粘土
　上面で土坑を１基検出

a　土坑（SK-101）内埋土　10YR5/1　褐灰色粘土
　植物遺体含む

第３図　１区平断面図



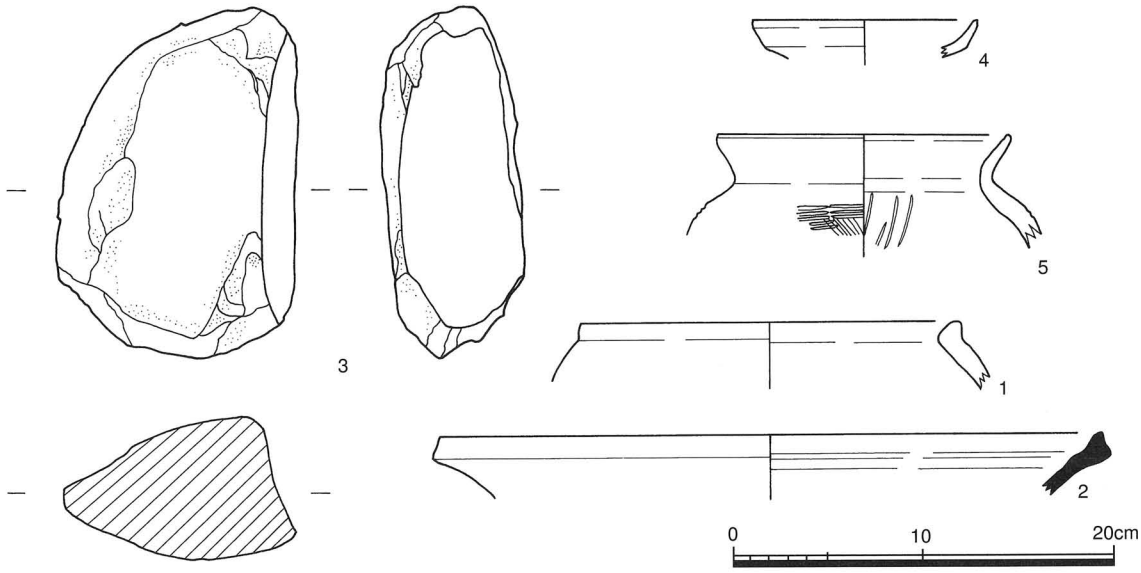
2区　層序
0　盛土
1　旧耕土　5B4/1　暗青灰色細砂混粘土
2　10YR4/4　褐色細砂混粘土
3　10YR4/1　褐灰色粘土　上面で土坑を１基検出
4　10YR5/6　黄褐色細砂

a　土坑（SK-201）内埋土　N4/　灰色細砂混粘土

第４図　２区平断面図

３区

第４層上面（T.P.＋8.5m）で調査を行ったが、遺構の検出はなかった。



第５図　１区SK－101（１～３）　２区SK－201（4）　３区第３層（5）出土遺物実測図

遺構に伴わない出土遺物

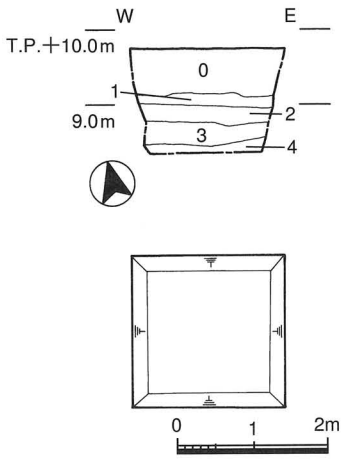
第３層内からは弥生時代後期の甕（５）が出土していることから、調査した面はこの時代以前の面であると思われる。

４区

第４層上面（標高T.P.＋8.6m）で河川１条（NR－401）を検出した。

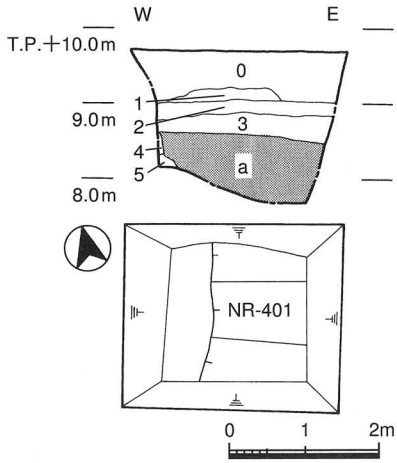
NR－401

南北方向に伸びる自然河川で、河川の西肩を検出した。検出した幅は約2.0m、深さ約0.9mを測る。埋土は10ＹＲ5/6黄褐色細砂で、内部からの遺物の出土はなかった。弥生時代後期以降から平安時代まで機能していたと推定される。



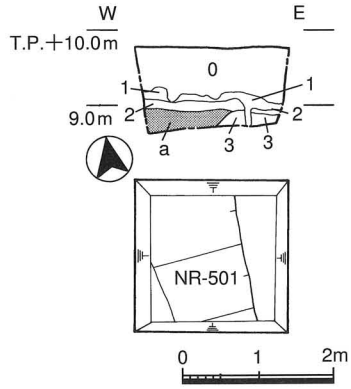
３区　層序
0　盛土
1　旧耕土　N3/　暗灰色細砂混粘土
2　10YR6/1　褐灰色シルト混粘土
3　10YR4/4　褐色細砂混粘土
4　10YR3/1　黒褐色細砂

第６図　３区平断面図



４区　層序
0　盛土
1　旧耕土　N3/　暗灰色細砂混粘土
2　2.5Y2/1　黒色粗砂粘土
3　10YR3/1　褐色細砂混粘土
4　10YR5/6　黄褐色細砂
5　5G5/1　緑灰色シルト質粘土
a　河川（NR-401）内埋土　10YR5/6　黄褐色細砂

第７図　４区平断面図



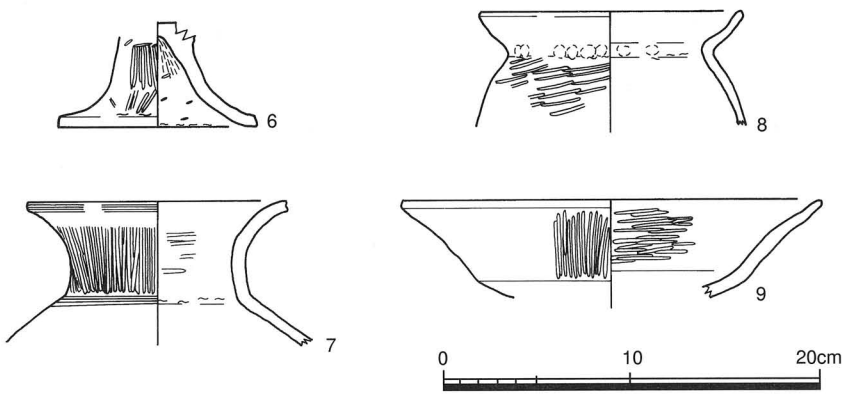
５区　層序
0　盛土
1　旧耕土　N3/　暗灰色細砂混粘土
2　10YR3/1　黒褐色粘質粗砂
3　10YR5/6　黄褐色細砂混粘土　上面で河川を１条検出

a　河川（NR-501）内埋土　10YR5/6　黄褐色細砂

第８図　５区平断面図

遺構に伴わない出土遺物

第４層からは弥生時代後期の台付壷（６）の裾部が、第5層からは弥生時代後期前半頃の壷（７）の口縁部と甕（８）の口縁部が出土した。（７）は口縁端面に擬凹線を、頸部に直線文を施す。



第９図　４区第４層（6）第５層（7･8）　５区第２層（9）出土遺物実測図

写真２　４区第５層（7）出土遺物

５区

第３層上面（標高T.P.＋8.9m）で河川1条（NR－501）を検出した。

NR－501

南北方向に伸びる自然河川で、河川の東肩を検出した。検出した幅は約1.5m、深さ約0.9mを測る。埋土は10ＹＲ5/6黄褐色細砂で、内部からの遺物の出土はなかった。南隣に隣接している４区では、同じ河川と推定できる西肩を検出した。

遺構に伴わない出土遺物

第２層からは弥生時代後期の高杯（９）が出土した。

６区

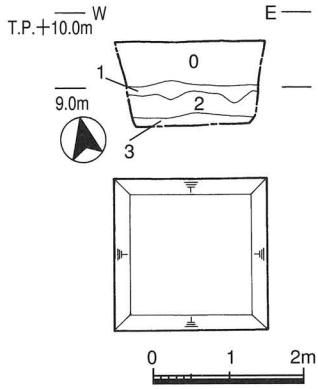
第３層上面（標高T.P.＋8.6m）で調査を行ったが遺構の検出はなかった。

７区

第３層上面（標高T.P.＋8.6m）で土坑１基(SK－701)を検出した。

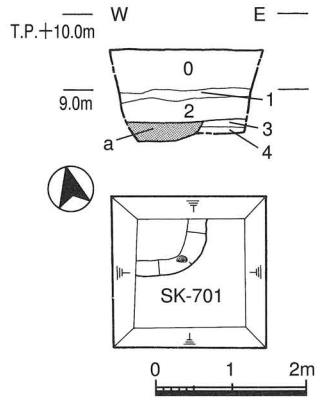
SK－701

検出した平面の形状は半円形で、径0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は10ＹＲ3/1黒褐色細砂混粘土で、鎌倉時代の土師器小皿（10）、瓦器椀（11）が出土した。（11）は高台が退化している。見込みに平行線の暗文を施し、内面のヘラミガキは渦巻き状のものである。



６区　層序
0　盛土
1　旧耕土　5B2/1　青黒色細砂混粘土
2　10YR5/6　黄褐色シルト混粘土
3　10YR6/6　明黄褐色シルト

第10図　６区平断面図



７区　層序
0　盛土
1　旧耕土　5B4/1　暗青灰色細砂混粘土
2　N3/　暗灰色細砂混粘土
3　10YR3/4　暗褐色シルト混粘土　上面で土坑を１基検出
4　10YR7/6　明黄褐色細砂混シルト

a　土坑（SK-701）内埋土　10YR3/1　黒褐色細砂混粘土

第11図　７区平断面図

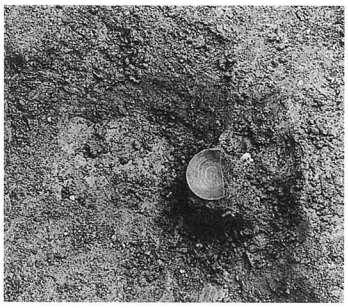


写真３　７区SK－701内遺物出土状況（西から）

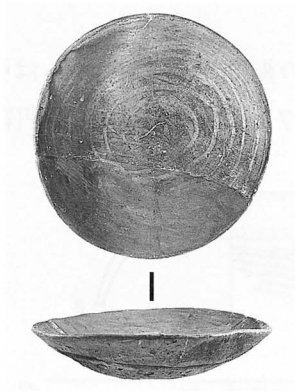
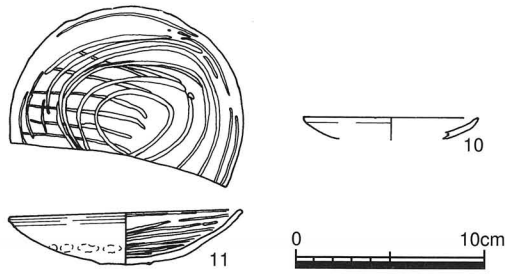


写真４　７区SK－701（11）出土遺物



第12図　7区SK－701（10・11）出土遺物実測図

３．出土遺物観察表

遺物番号	調査区	遺構名	包含層	種類	器種	口径	器高	底径	裾径	形態・調整	色調	胎土	焼成
1	１区	ＳＫ-101		土師器	羽釜	19.8				口縁部内外面ヨコナデ。	橙色	粗	良好
2	１区	ＳＫ-101		須恵器	鉢	34.4				口縁部内外面回転ナデ。	灰色	密	良好
3	１区	ＳＫ-101			砥石					研磨した面は一辺である。	灰色		
4	２区	ＳＫ-201		土師器	皿	11.6				口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	にぶい橙色	粗	良好
5	３区		３層	弥生土器	甕	15.2				口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タタキ目のちハケ。内面ヘラナデ。	橙色	1～3mm程度の砂粒含む。	良好
6	４区		４層	弥生土器	台付壷				10.4	裾部内面ナデ。接合痕と工具痕あり。外面ヘラミガキ。	淡茶灰色	３ｍｍ以下の砂粒含む。	良好
7	４区		５層	弥生土器	壷	13.4				口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面ヘラミガキ。体部内外面ナデ。口縁部端面に擬凹線を、頸部に直線文を施す。	淡灰茶色	７ｍｍ以下の砂礫粒多量に含む。	良好
8	４区		５層	弥生土器	甕	13.6				口縁部内外面ヨコナデ、指押えあり。体部外面タタキ目、内面ナデ、指押えあり。	淡茶灰色	３ｍｍ以下の砂粒多量に含む。	良好
9	５区		２層	弥生土器	高杯	22.0				杯部内面ヘラミガキ、ヨコナデ、外面ヘラミガキ。	黄橙色	２ｍｍ程度の砂粒含む。	良好
10	７区	ＳＫ-701		土師器	小皿	9.2				口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	にぶい橙色	粗	良好
11	７区	ＳＫ-701		瓦器	椀	12.2	2.9			口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラミガキ、見込みに平行線の暗文を施したのち渦巻き状のヘラミガキを施す。体部外面ナデ。指頭圧痕あり。	黒灰色	密	良好

4．まとめ

４区と５区で検出した河川は、南北方向に流れており幅約2.0m程度の小規模なものであることがわかった。弥生時代後期以後から河川として機能していたと推定される。また、同区からは弥生時代後期前半頃の遺物が出土していることから同時期の集落が調査地の近辺に存在している可能性が高いと思われる。

１区・２区・７区で検出した土坑は、鎌倉時代のものであることがわかった。７区で検出した土坑内から出土した瓦器椀は12世紀後半頃に比定でき、同時期の集落が今回の調査地に存在している結果が得られた。南に隣接している平成4年度の八尾市教育委員会調査地[註2]では、平安時代末期の井戸を検出しており、このことより平安時代末期から鎌倉時代に至るまで今回の調査地周辺で集落が営まれていたと推定できる。また、昭和63年度の八尾市教育委員会調査地[註3]では、15世紀頃の井戸を検出していることから、集落はその頃まで継続している可能性も考えられる。

註記

註１　山本昭　1974.5『中田遺跡』中田遺跡調査報告Ⅰ 日本電信電話公社大阪東地区管理部地下線埋設工事に伴う調査 中田遺跡調査センター
山本昭　1975.3『中田遺跡』中田遺跡調査報告Ⅱ 昭和49年度国庫補助事業中田遺跡範囲確認調査 八尾市教育委員会

註２　消　斎他　1994.3「6.中田遺跡（92-598）の調査」『八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告30 平成5年度公共事業 八尾市教育委員会

註３　米田敏幸他　1990「１.中田遺跡（88-393）の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告21　平成元年度公共事業　八尾市教育委員会

参考文献

・坪田真一　1997「25.中田遺跡第35次調査（ＮＴ96－35）」『平成8年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
・消　斎他　1994.3「６.中田遺跡（92-598）の調査」『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告30 平成５年度公共事業 八尾市教育委員会
・消　斎他　1997.3「16.中田遺跡（95-470）の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告36 平成8年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
・原田昌則他　1987「萱振Ａ遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要』昭和61年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告13
・寺沢薫・森岡秀人編著　1989『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

写真５　１区（東から）

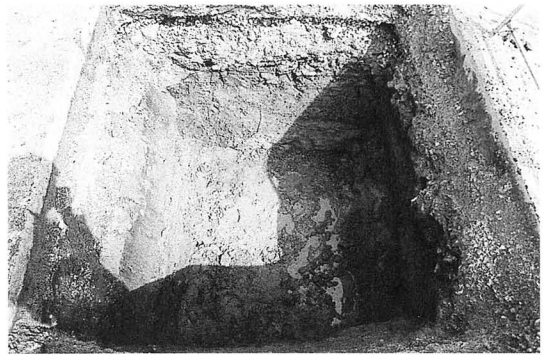


写真６　２区（南から）

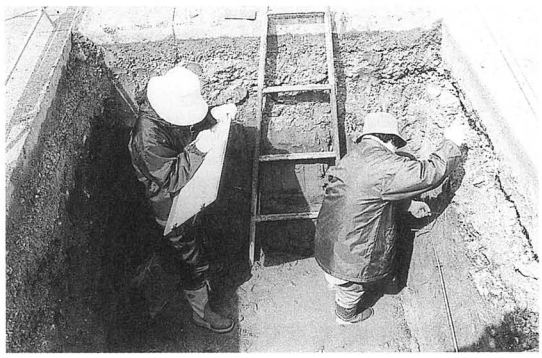


写真７　２区調査状況（東から）

写真８　３区（南から）

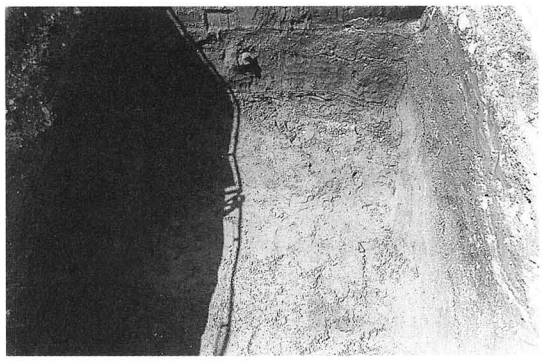


写真９　４区（南から）

写真10　５区（南から）

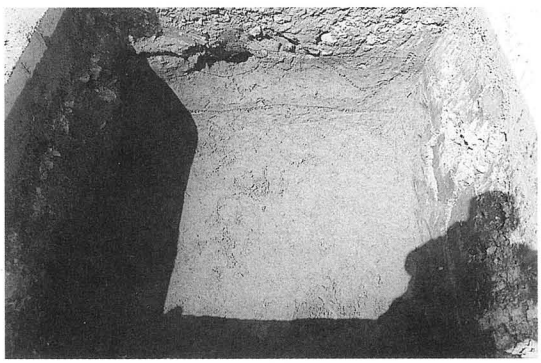


写真11　６区（南から）

写真12　７区（南から）

XVII　中田遺跡第34次調査（ＮＴ96－34）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市八尾木北６丁目地内で実施した公共下水道（７－83工区）工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第34次調査（ＮＴ96－34）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋159－３号　平成８年７月５日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年７月22日から７月25日（実働４日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は約60㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中谷嘉多・中村百合・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物復元・遺物実測・図面レイアウト・トレース－中谷・中村・市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……125

2．調査概要……126

　1）調査の方法と経過……126

　2）検出遺構と出土遺物……126

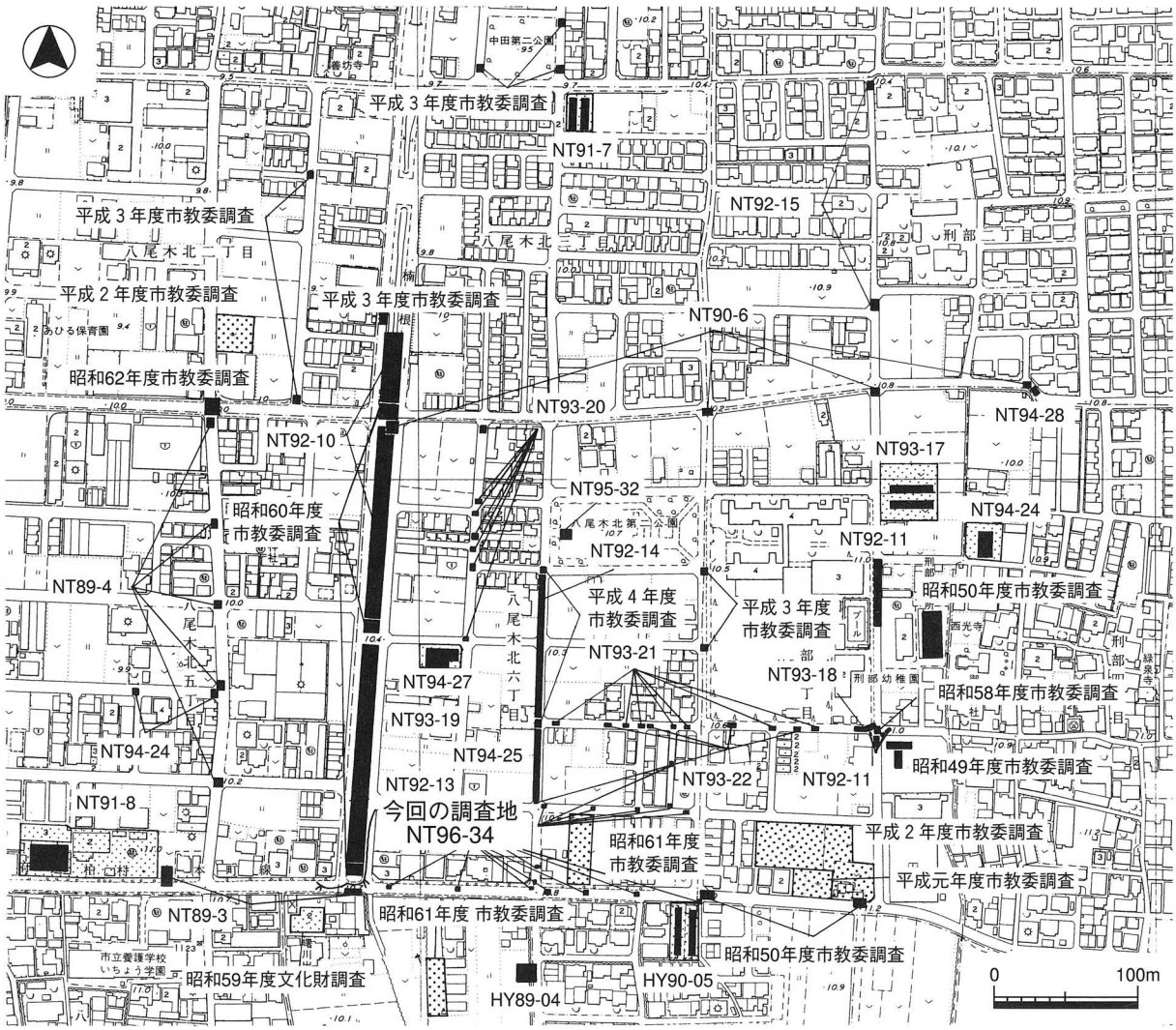
3．まとめ……132

XVII　中田遺跡第34次調査（NT96－34）

1．はじめに

中田遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1～5丁目・刑部1～4丁目・八尾木北1～6丁目の範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地する。同一沖積地上では西に矢作遺跡、南に東弓削遺跡、北に小阪合遺跡が接している。

当遺跡の契機は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡である。以後、中田遺跡調査会・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により断続的に発掘調査が実施され、弥生時代前期～近世にかけての複合遺跡であることが確認されている。特に、これらの調査成果では古墳時代前期の時期を中心としたものが遺跡全般で検出されている。



第１図　調査地位置図及び周辺図

今回の調査地は中田遺跡範囲の南部に位置する。この周辺では、北部の調査区に近接する南北道路上で、当調査研究会による公共下水道工事に伴う調査（ＴＮ92－14・ＮＴ94－25）が実施されており、主に古墳時代前期の集落遺構が検出されている。さらにその周辺では第１図に示すように数十次の発掘調査が実施されており、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が多数検出されている非常に密な地域であることが指摘できる。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道第7－83工区工事に伴うもので、当調査研究会が中田遺跡範囲内で行った第34次調査にあたる。調査区は下水管埋設により破壊される人孔部分（マンホール）を対象に設定し、調査を実施した。規模は2×2mのグリッド15ヶ所（No.1～4・8～15・18・20・21）である（＊No.5～7・16・17・19の6ヶ所についてはすでに埋設工事により破壊されていることが事前に確認されており、調査対象から除外している）。

調査に際しては、現表土（T.P.＋10.8～11.0m）下1.4～2.4mまでを機械と人力の併用で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、大半の調査区は既往の埋設（水道管・ＮＴＴ管・ガス管・下水管等）工事により現地表下約1.5～2.1mの土層が削平されていた。一部分の調査区で地層の状況が確認される程度である。

２）検出遺構と出土遺物

調査の結果、古墳時代前期～平安時代末に至る遺構・遺物を検出した。以下、隣接する調査区ごとにまとめて記す。

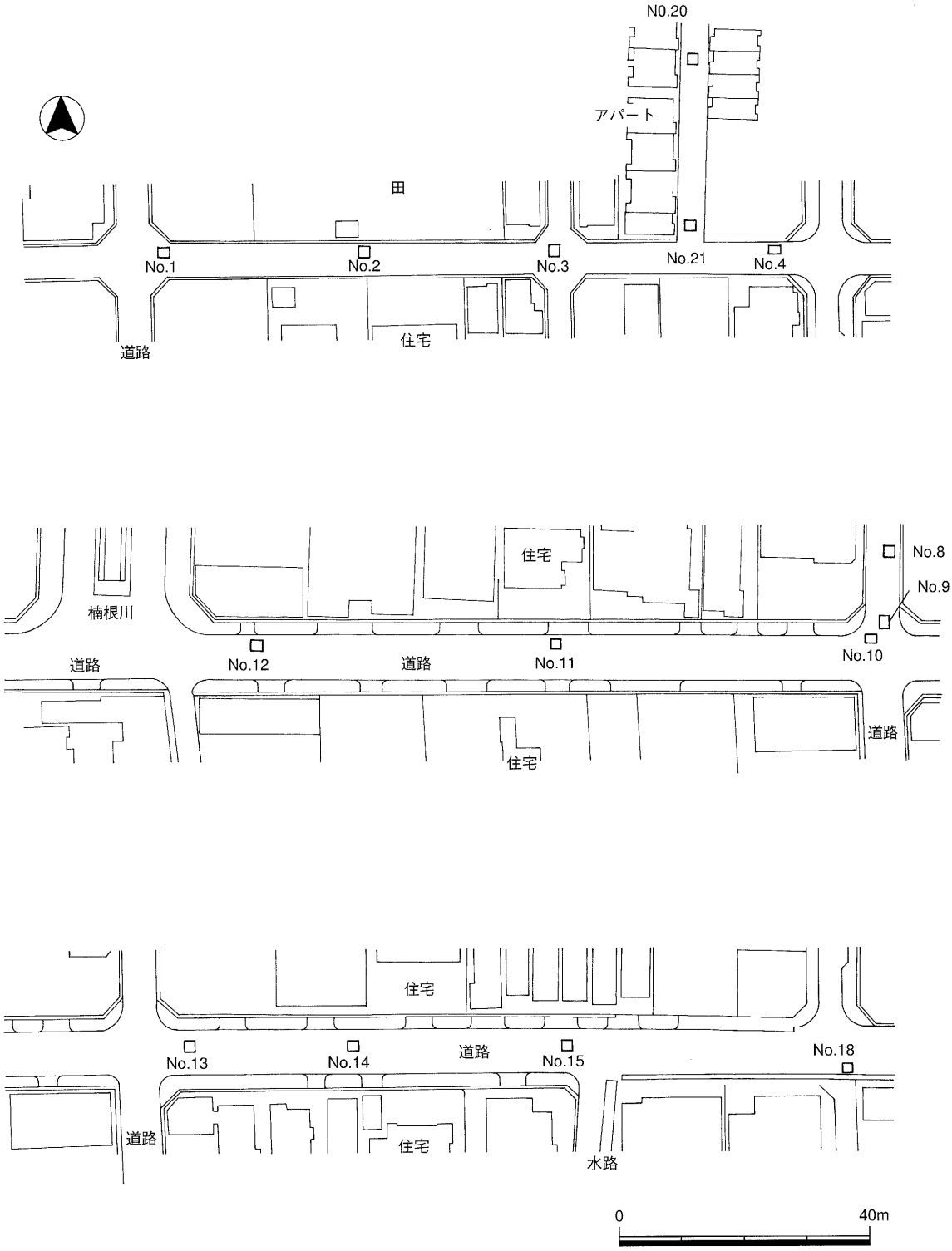
◆No.1～4・20・21

No.1～4は東西道路の北側で、これらの調査区の南側には下水管、北側には水道管が埋設されており、大部分が削平されていた。No.1・2の調査区は現地表（10.8m前後）下約1.6mまで掘削した。すべて削平されていた。深部については壁面部分が埋設の盛土で崩壊のおそれがみられたので掘削を断念した。No.3は現地表（10.8m前後）下約1.5mまで掘削した。No.2・3の調査区と同じく大部分は削平されていたが、北西側の一部でかろうじて残っていた。No.4は現地表（10.9m）下約1.5m前後まで掘削した。大部分は削平されていたが、北部で東西幅40cm程度がかろうじて残っていた。No.20・21はNo.3とNo.4の中間から北へ伸びる南北道路である。調査区は道路の中央に設定した。調査区の中央には南北方向の水道管が埋設されていた。No.20ではさらに枝管が２本あり、東と西方向に伸びており、上層は削平されていた。下層については水道管があり掘削できなかった。No.21では枝管が西に１本伸びており、東側の半分を現地表（11.0m）下約1.6mまで掘削した。その結果、氾濫による砂層の堆積がみられた。

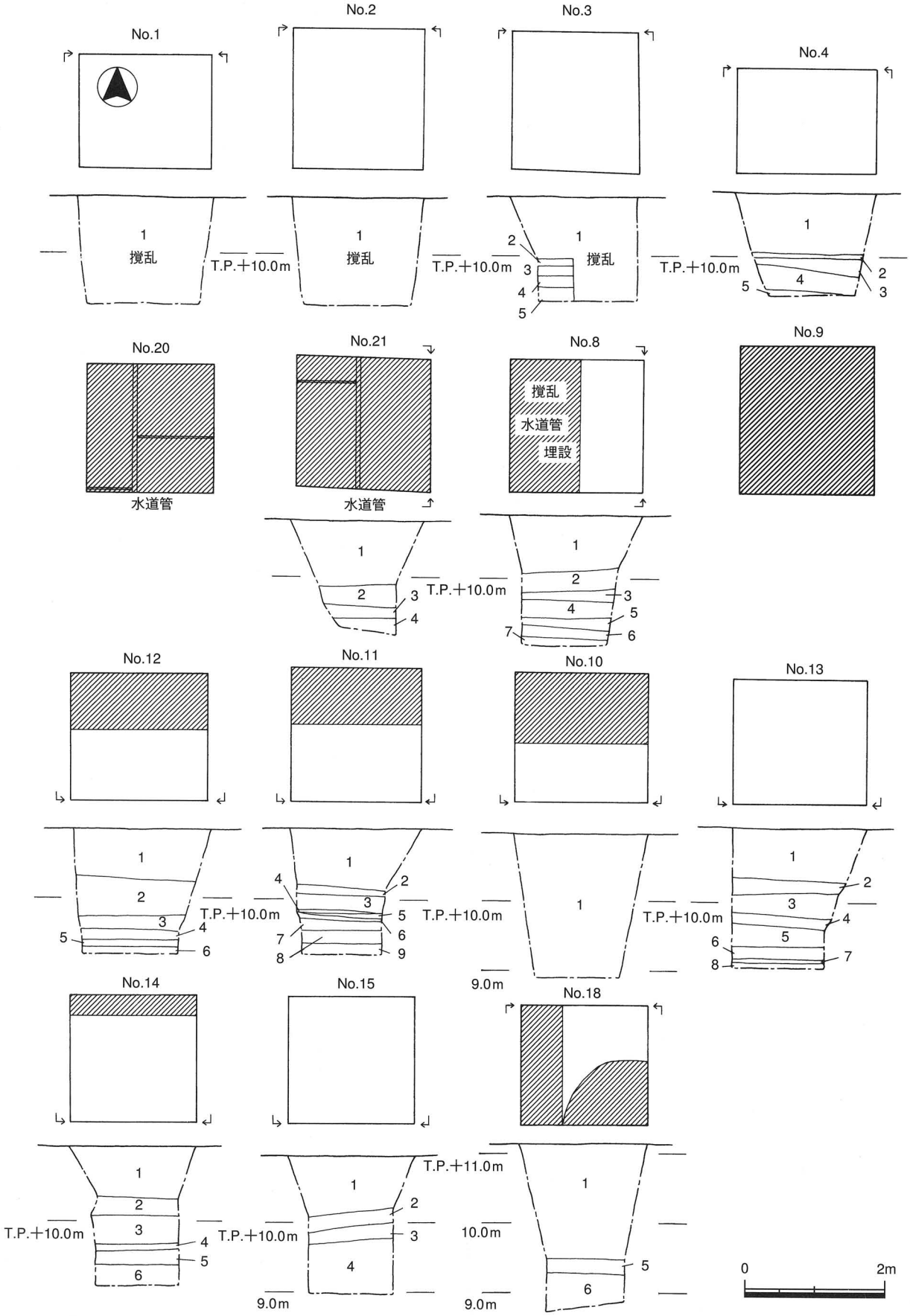
層序

第１層　盛土・攪乱。層厚0.8～1.4m。上部はアスファルト・道路基礎がある。上面の標高はT.P.＋10.8～11.0mである。

第２層　旧耕土。層厚0.1～0.2m。（No.3・4・21）昭和45年以降の区画整理事業の造成されるまで耕作されていた。


N0.20
アパート
田
No.1
No.2
No.3
No.21
No.4
道路
住宅
住宅
No.8
No.9
楠根川
No.12
No.11
No.10
道路
道路
道路
住宅
住宅
No.13
No.14
道路
No.15
No.18
道路
住宅
水路
0
40m

第２図　調査区位置図


No.1
No.2
No.3
No.4
1
撹乱
T.P.＋10.0m
2
3
4
5
No.20
No.21
No.8
No.9
水道管
撹乱
水道管
埋設
6
7
No.12
No.11
No.10
No.13
8
9
No.14
No.15
No.18
T.P.＋11.0m
10.0m
9.0m
0
2m

第３図　平断面図

第３層　床土。層厚0.2～0.25m。（No.3・4・21）

第４層　乳灰茶色～淡灰色微砂～細砂。層厚0.4～0.5m。（No.2・4・21）平安時代末時代ごろの氾濫で堆積した土層である。

第５層　乳茶灰色細砂（No.2）・淡灰色粘土（No.4）。層厚0.2m前後。褐色の斑点がみられる。

◆No.8・9～14

No.8・9はNo.1の西側に交差する南北道路で、南側へ約40mのところにあたる。道路の東側に調査区を設定した。調査区の西側半分では水道管の埋設により削平されていた。また東側にはNTT管の埋設があった。さらにNo.9の調査区では南側に水道管が埋設されており、すべて削平されていた。No.8の調査区ではかろうじて東半分が残っていた。現地表下約1.85mまで掘削した。現地表下約1.6mで平安時代末の水田耕作土と考えられる土層（第6層）を検出した。その下第７層は遺物の包含を確認することができなかったが、隣接調査（NT94－25）の成果からみて古墳時代前期の包含層と考えられる。No.10～12はNo.9の南側に交差する東西道路（柏村南本町線）である。これらの調査区はNo.9の調査区より西側の道路で、道路の北側沿いに調査区を設定した。調査区では北側に旧道路の側壁、南側にNTT管の埋設により削平されていた。No.10はNo.9の調査区より南西約4mに位置し、現地表（10.8m）下2.1mまで掘削した。調査区の北半分には旧道路の側壁、南側にはNTT管が埋設されており、調査区内はすべて削平されていた。No.11はNo.10の調査区より西約50mに位置し、現地表下約1.8mまで掘削した。現地表下約1.4～1.6mで平安時代末の水田耕作土と考えられる土層（第６層）を検出した。No.12はNo.11の調査区より西約40mに位置し、現地表下約1.8mまで掘削した。現地表下約1.5mで平安時代末の水田耕作土と考えられる土層（第５層）を検出した。No.13はNo.10の調査区より東約10mに位置し、現地表下約2.0mまで掘削した。この調査区では埋設による削平はなかった。現地表下約1.7mで平安時代末の水田耕作土と考えられる土層（第５層）を検出した。その下約0.4mの第７層は古墳時代前期の包含層であることが確認できた。しかし、第８層上面では遺構はなかった。No.14はNo.13の調査区より東約30mに位置し、現地表下約2.0mまで掘削した。北側はNTT管の埋設により削平されていた。現地表下約1.5mで平安時代末の水田耕作土と考えられる土層（第５層）を検出した。

層序

第１層　盛土・攪乱。層厚0.8～1.2m。

第２層　旧耕土（No.8～13・15）・旧表土（No.14）。層厚0.5～0.2m。

第３層　明茶灰色細砂（No.8）・淡灰茶色～淡灰褐色砂質土（No.10～14）。層厚0.5～0.2m。

第４層　淡灰色粘土（No.8）・茶灰色シルト～微砂（No.12・13）・淡茶灰色細砂（No.10・11・14・15）。層厚0.5～0.2m。褐色の斑点がみられる。

第５層　淡灰青色微砂（No.8・10・11）・乳茶灰色～明褐色礫混じり細砂（No.12・15）・灰色粘土（No.13・14）。層厚0.5～0.2m。褐色の斑点がみられる。

第６層　青灰色粘土（No.13）・暗灰色粘土（No.8・11・12）。層厚0.5～0.2m。炭化物を含む。

第７層　暗灰色礫混じり粘土（No.13）。層厚0.5～0.2m。青灰色～淡灰色粘土（No.8・11・12・14）。層厚0.5～0.2m。褐色の斑点がみられる。古墳時代前期の遺物をごく少量

含む。

第８層　暗青灰色粘土（Ｎｏ.11・12）・青灰色粘質シルト（Ｎｏ.13)。層厚0.5～0.2m。

◆Ｎｏ.15・18

Ｎｏ.15・Ｎｏ.18はＮｏ.14の東側に位置する。Ｎｏ.15はＮｏ.14の調査区から東へ約35mに位置し、現地表（約10.9m）下約2.0mまで掘削した。この調査区では埋設工事による削平はなかった。現地表下約1.3mで平安時代末ごろの洪水層の砂層（第４層）が厚く堆積していた。その層の上部に２枚の丸瓦（１・２）を出土した。丸瓦は調査区南西角の壁面で南北方向に土管の筒のように重なった状態で検出した。この丸瓦は平安時代末に比定されるものである。１は黒灰色の色調で、凹面には布目痕、凸面にはヘラナデがみられる。２は長さ40㎝、幅20㎝を測る大型のもので淡褐色の色調をしている。凹面には細かい布目痕が残り、凸面にはヘラナデがみられる。

Ｎｏ.18はＮｏ.15の調査区から東へ45mに位置し、道路の南側に設定した。調査区の南側には近代井戸のコンクリート壁、西側には水道管の埋設により体部分が削平されていた。現地表（約10.9m）下約2.4mまで掘削したが、約1.6m前後まで埋設工事により削平されていた。現地表下約2.0mで土師器の小片を含む層（第６層）を確認した。隣接する既往調査のデータから古墳時代前期の土層と考えられる。しかし、その下の第７層上面では遺構はなかった。

層序

第１層　盛土。層厚0.9～1.6m前後。

第２層　旧耕土（Ｎｏ.15)。層厚0.2m。

第３層　淡灰褐色細砂混微砂（Ｎｏ.15)。層厚0.2m前後。

第４層　乳茶灰色礫混微砂（Ｎｏ.15)。層厚0.8m以上。平安時代末の氾濫による堆積土。

第５層　淡灰色粘土（Ｎｏ.18)。層厚0.2m前後。

第６層　青灰色粘土（Ｎｏ.18)。層厚0.55m前後。土師器片を含む。

第４図　No.15出土丸瓦実測図

3．まとめ

今回の調査では、古墳時代前期から平安時代末にかけての土層および遺物を検出した。しかし、大部分の調査区は公共の埋設工事により削平を受けており、詳細なデータを得ることができなかった以下、既往調査の成果を踏まえて調査区の成果を概括する。

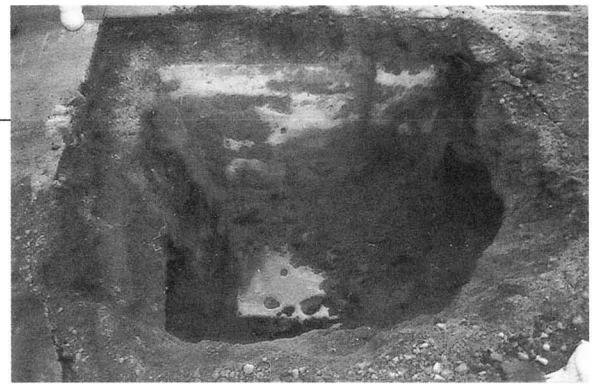
古墳時代前期に比定される土層を確認した。この時期のものは当調査区から南西へ約30～140mの第14次調査（ＮＴ92－14）・北西へ約140～200mの第26次調査（ＮＴ94－26）で古墳時代前期（布留古相）の集落遺構が検出されている。また、西へ約130mの第10次調査（ＮＴ91－10）では瓦質土器を含む布留式土器を出土した溝状遺構を検出している。さらに、当調査区周辺では庄内期～布留期にかけての集落遺構に関連する遺構・遺物が確認されており、当地の西側周辺は集落域であることが言えるであろう。

平安時代末の遺構としては、水田耕作土を検出した。この時期は当地周辺では生産域であったことが第14・18・20次調査で検出されており、その広がりが確認できた。集落域については当調査区から東へ約300mの第25・29・30次で検出されている。

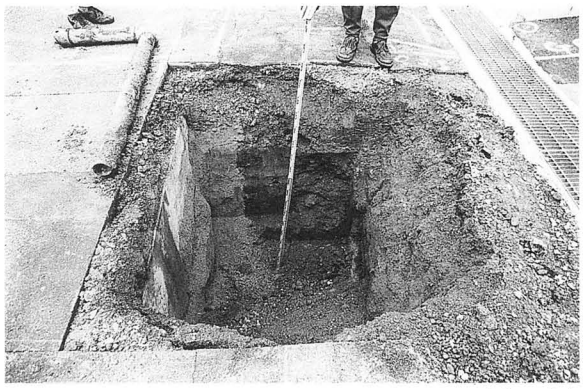
以上、当地周辺の調査成果の状況である。

参考文献
・高萩千秋 1994「Ⅴ　中田遺跡第21次調査（ＮＴ93－21）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』(財)八尾市文化財調査研究会
・嶋村友子 1988「８．中田遺跡（86－532）の調査」『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告17　八尾市教育委員会
・坪田真一 1990「16．中田遺跡（ＮＴ89－3）の調査」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』八尾市文化財調査報告28 (財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1990「17．中田遺跡（ＮＴ89-4）の調査」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』八尾市文化財調査報告28 (財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1992「Ⅱ中田遺跡（第３・４次調査）」『平成４年度　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』八尾市文化財調査研究会報告35 (財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1993「Ⅶ　中田遺跡（ＮＴ92－11）第11次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告 39 (財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1993「Ⅸ　中田遺跡（ＮＴ92－13）第13次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告 39 (財) 八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋 1994「Ⅱ　中田遺跡第17次調査（ＮＴ93－17）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』(財)八尾市文化財調査研究会
・成海佳子 1994「Ⅲ　中田遺跡第18次調査（ＮＴ93－18）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』(財)八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1994「35　中田遺跡第19次調査（ＮＴ93－19）」『平成５年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋 1994「Ⅳ　中田遺跡第20次調査（ＮＴ93－20）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』(財)八尾市文化財調査研究会
・西村公助 1994「Ⅵ　中田遺跡第22次調査（ＮＴ93－22）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』(財)八尾市文化財調査研究会
・原田昌則 1995「22.中田遺跡第25次調査（ＮＴ94－25）」『平成６年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・岡田清一 1995「23.中田遺跡第26次調査（ＮＴ94－26）」『平成６年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
・坪田真一 1995「24.中田遺跡第27次調査（ＮＴ94－27）」『平成６年度　(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

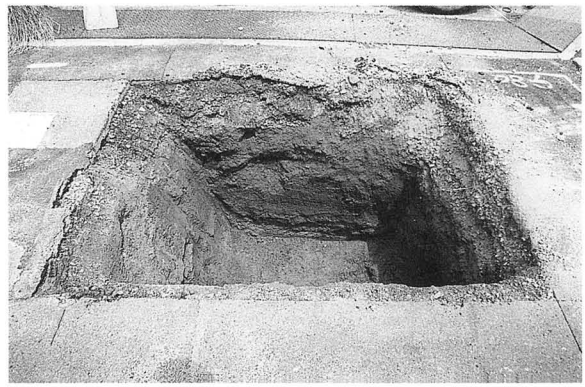
No. 1（南から）



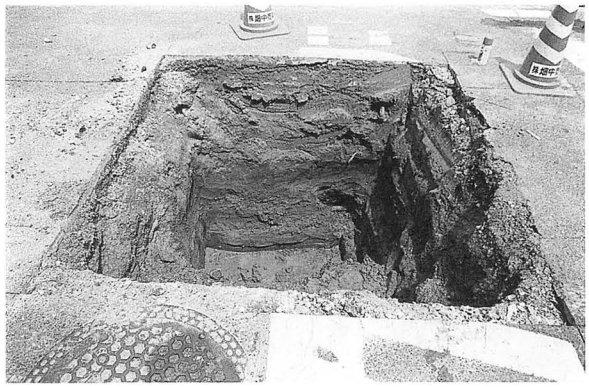
No. 2（南から）



No. 3（東から）

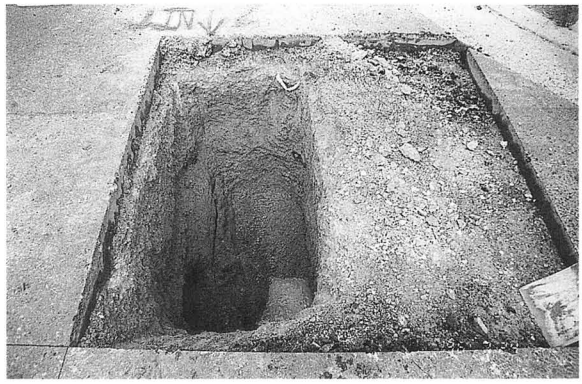


No. 4（南から）



No. 8（西から）

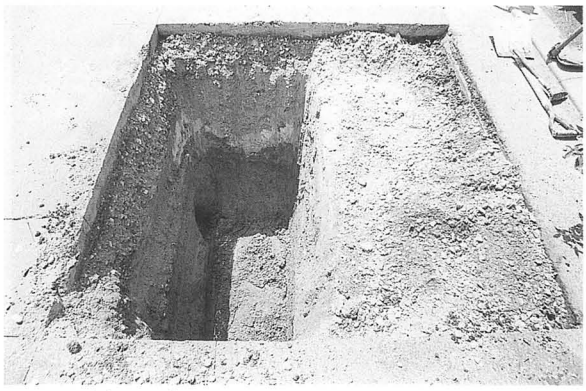
No. 9（南から）



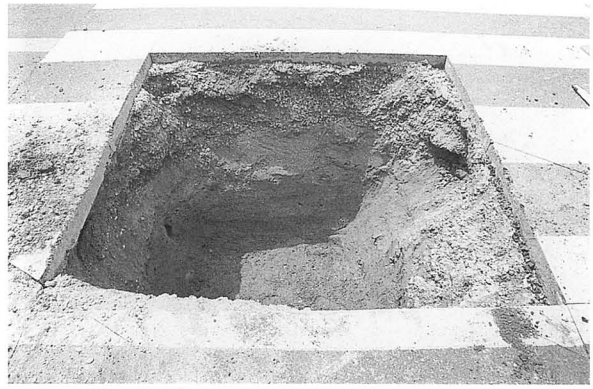
No.10（東から）

No.11（東から）

図版二



No.12（東から）

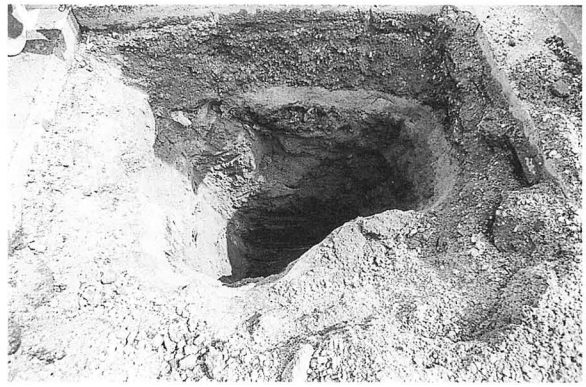


No.13（北から）

No.14（北から）

No.15（北から）

No.15　丸瓦出土状況（東北から）

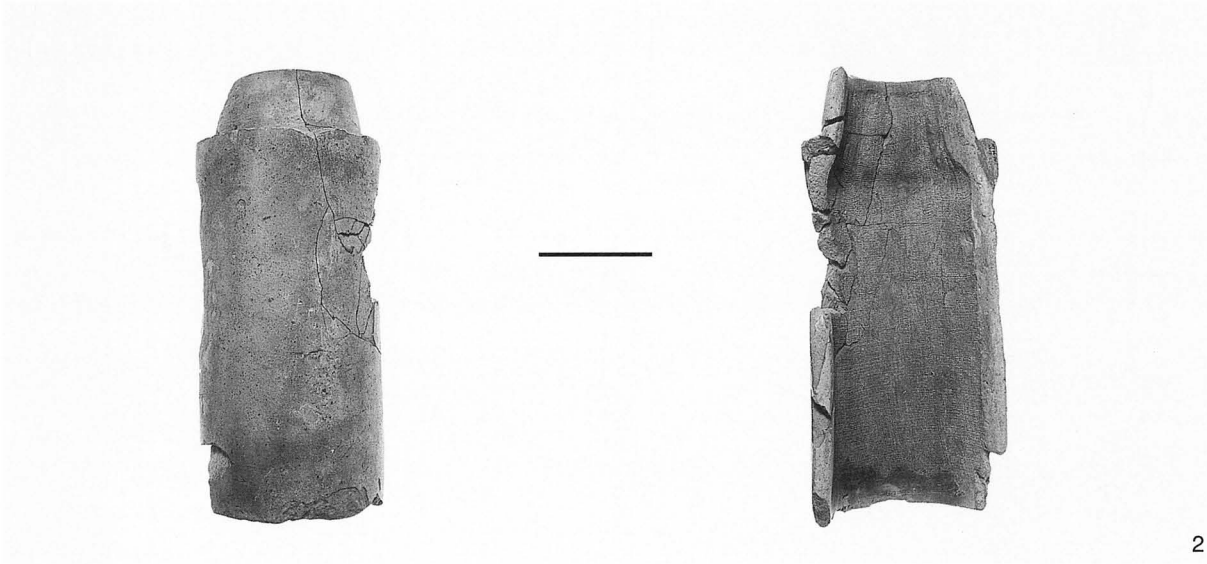


No.18（北から）

No.20掘削状況（北から）

No.21（南から）

1



2

XIII　水越遺跡第６次調査（ＭＫ96－６）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市服部川５丁目７番地～12番地で実施した特別養護老人ホーム建設工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する水越遺跡第６次調査（ＭＳ96－６）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋332－3号　平成８年８月19日）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が樋口廣司氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年８月26日から９月４日（実働６日）にかけて、高萩千秋が担当者として実施した。調査面積は約140㎡を測る。なお、調査においては八田雅美・中谷嘉多・中村百合・市森千恵子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物復元・遺物実測・図面レイアウト・トレース－中谷・中村・市森が行った。

1．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

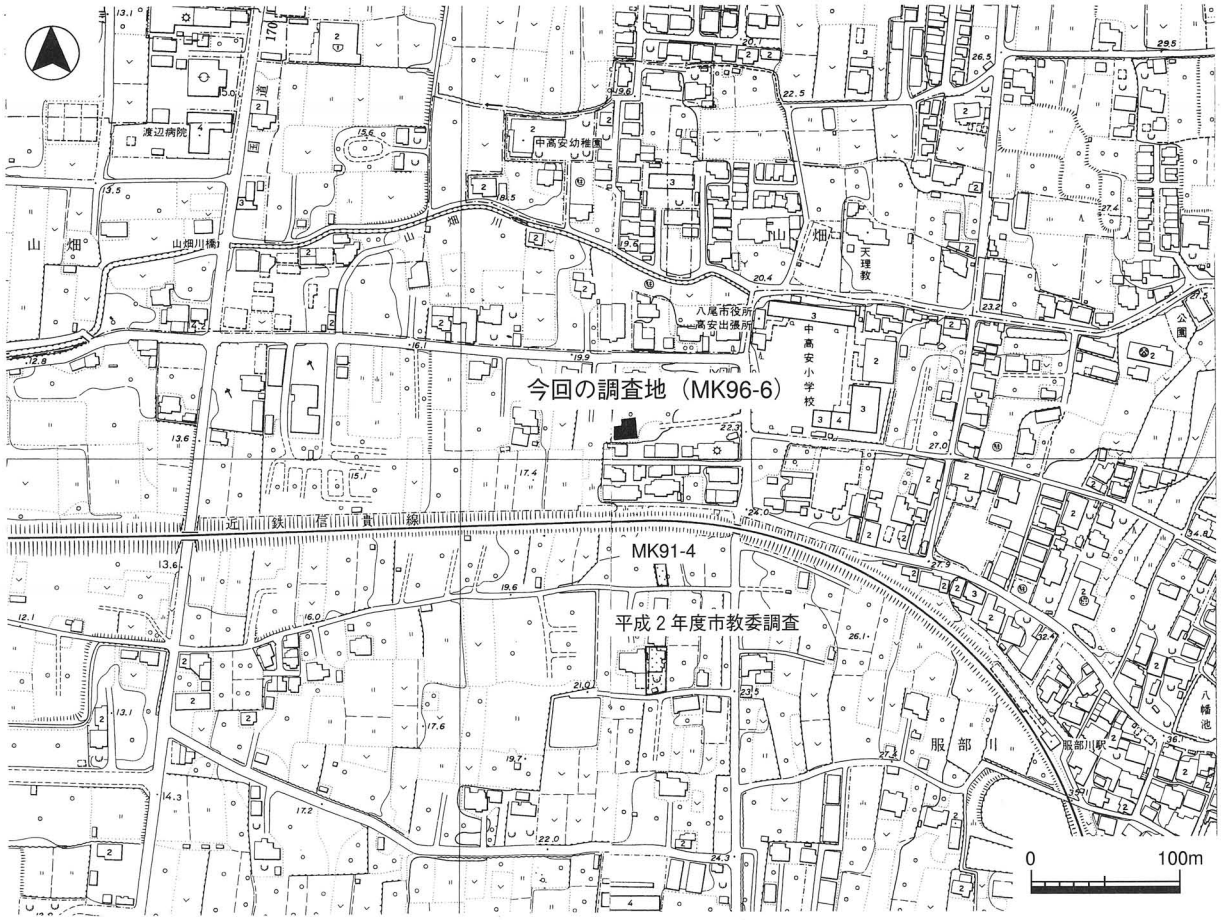
1．はじめに……137
2．調査概要……138
　1）調査の方法と経過……138
　2）基本層序……139
　3）検出遺構と出土遺物……142
3．まとめ……146

XⅢ　水越遺跡第６次調査（ＭＳ96－６）

１．はじめに

水越遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では水越・千塚・大窪・服部川の一帯に存在する縄文時代～近世に至る複合遺跡である。地形的には生駒山地西麓から河内平野に続く標高15～20ｍの扇状地の先端上に立地し、北に太田川遺跡・大竹遺跡、南に郡川遺跡が接しており、東側には高安古墳群が拡がっている。

当遺跡の契機は、大正９年に清原得巌氏が石鏃を採集したことがきっかけである。その後も昭和５年９月に当遺跡内で地元の子供によって採集されたという勾玉研磨用の砥石、さらに千塚地区を中心に各種の石器類をはじめ、滑石製小玉・管玉の未製品などが採集されている。これらを清原氏が所蔵していることが大阪府教育委員会により確認されている。また昭和９年２月に当遺跡西方を南北に走る東高野街道で道路の改修工事が行われ、現在の市立高安中学校の西側の字一里外にあたる地点で掘削した際、現地表下約0.6ｍの地層（黒褐色土）内から弥生時代後期に比定される弥生土器が発見された。



第１図　調査地位置図及び周辺図

発掘調査では、昭和53年度に大阪府教育委員会が八尾市千塚の府立清友高等学校新築工事に伴う調査を行った結果、弥生時代中期～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。以後、当遺跡内では大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会の各機関により数次の発掘調査が行なわれた。これらの調査成果から、縄文時代～近世にわたる遺跡であることがわかってきた。

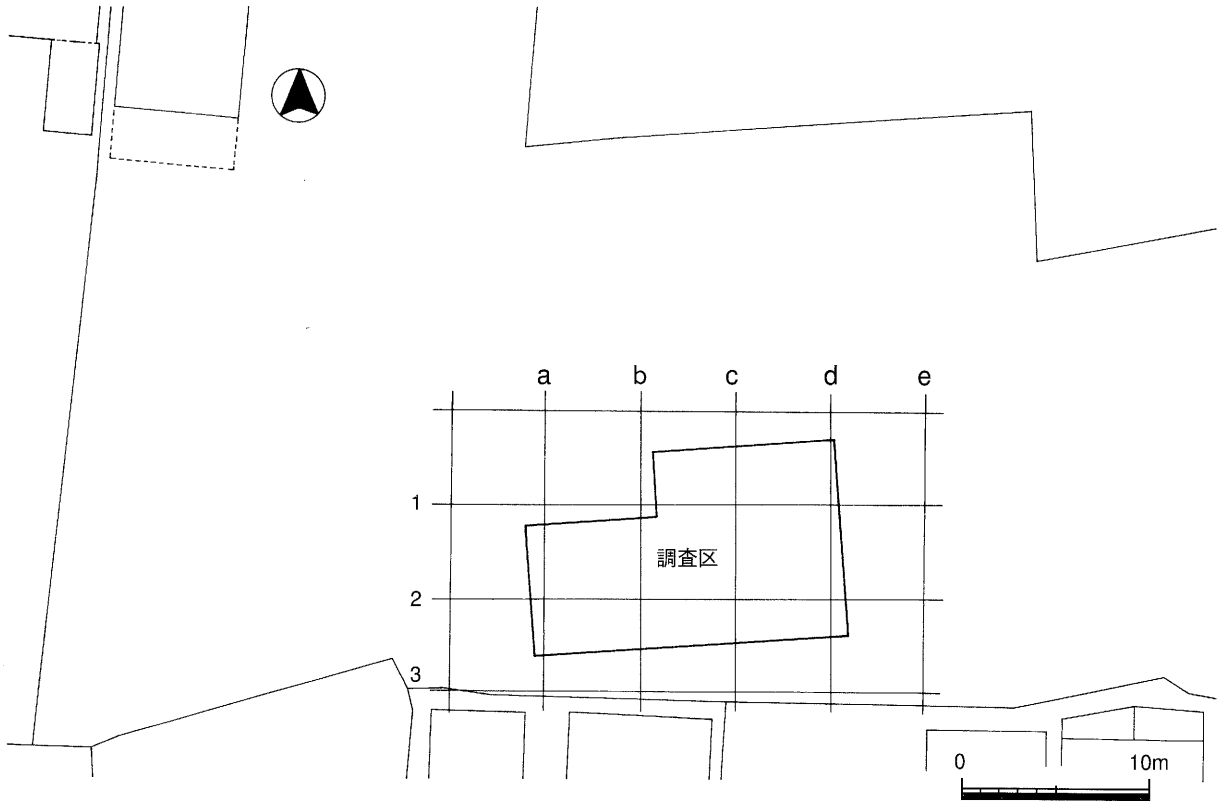
今回の調査地付近では、南側約100mで平成３年度に当調査研究会が実施した第４次調査（ＭＫ91－４）、南側約150mで平成２年度に八尾市教育委員会が実施した遺構確認調査（90－559）で弥生時代後期の集落域に伴う遺構や遺物を検出している。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は特別養護老人ホーム建設工事に伴うもので、当調査研究会が水越遺跡の範囲内で行った第６次調査（ＭＫ96－６）にあたる。調査では地下施設工事により破壊される部分を対象に調査区を設定し、調査を実施した。面積は約140㎡である。

調査区の区割りについては南西の土地境界線より北へ５ｍに任意の基点を設け、磁北方向に合わせ、南北軸を設定した。それを基にして調査区範囲を賄える東西20m、南北15mの５ｍ区割りを設定した。設定した一区画を５ｍ四方とし、北西隅の交点を基準に東西軸は算用数字（１～３）、南北軸はアルファベット（a～e）を付した。なお、地区名は北西の一区画の南東に交差する東西軸・南北軸から1a～3e区を付称した。標高については旧東高野街道の東側にあったＫＢＭ２＝T.P.＋13.647mを使用した。



第２図　調査区位置図

調査に際しては、現表土（T.P.＋20.5～20.6m）下0.7～0.9mまでを機械で掘削し、以下0.2～0.5mの土層については人力掘削を実施して遺構・遺物の検出に努めた。なお、設計変更が行われ、当初の調査区予定地より西端になり市教委の遺構確認調査のデータを参考にして掘削したが、予測以上に掘削深度が深くなったため、残土処理などの諸条件を考慮した。その結果、調査区西部の一部の掘削を一旦保留した。再度調査終了後、その部分について幅２mトレンチを設定して掘削、調査した。

調査の結果、現表土下0.9～1.3mで弥生時代後期末に比定される遺物包含層を検出した。その上面では奈良時代～平安時代ごろの洪水で堆積したと思われる砂層がみられた。遺物包含層下面では弥生時代後期末の遺構を検出した。さらに下層の状況を確認するため、調査区一部を掘削したが、弥生時代後期以前の洪水の堆積と思われる砂礫層を検出した。出土遺物は調査区内の遺構及び遺物包含層からコンテナ（600×400×200㎜）にして２箱分を数える。

２）基本層序

第１層　表土・攪乱。層厚0.1～0.4m。調査前まで植木を植えており、第３層～第４層の地層付近まで部分的に削平されている。上面の標高は20.5～20.6mである。

第２層　床土。層厚0.1～0.25m。

第３層　淡褐色微砂。層厚0.2～0.3m。さらっとした土層で中世から近世の堆積土と思われる。

第４層　灰褐色細砂混粘質土。層厚0.1～0.2m。細砂が少量含まれる層で、中世ごろの土層と思われる。

第５層　明茶灰色細砂混粘質土。層厚0.1m前後。調査区の東部にみられる土層である。奈良～平安時代の洪水層と思われる。

第６層　明茶灰色細砂。層厚0.05～0.2m。調査区中央にみられる土層で、西端へ行くに従い厚く堆積する。奈良～平安時代の洪水層と思われる。

第７層　淡茶灰色砂質土。層厚0.2m前後。調査区中央より西部にみられる土層で、西端へ行くに従い厚く堆積する。奈良～平安時代の洪水層と思われる。

第８層　茶灰色砂礫混細砂。層厚0.15m前後。調査区西部中央よりにみられる土層で、西端へ行くに従い厚く堆積する。奈良～平安時代の洪水層と思われる。

第９層　暗灰褐色細砂（９’灰黒色細砂）。層厚0.1m前後。褐色の斑点がみられる。調査区西端にみられる土層で、西端へ行くにつれ厚く堆積する。

第10層　暗灰色砂礫混粘質土。層厚0.2m前後。褐色の斑点がみられる。調査区西端にみられる土層で、西端へ行くに従い厚く堆積する。

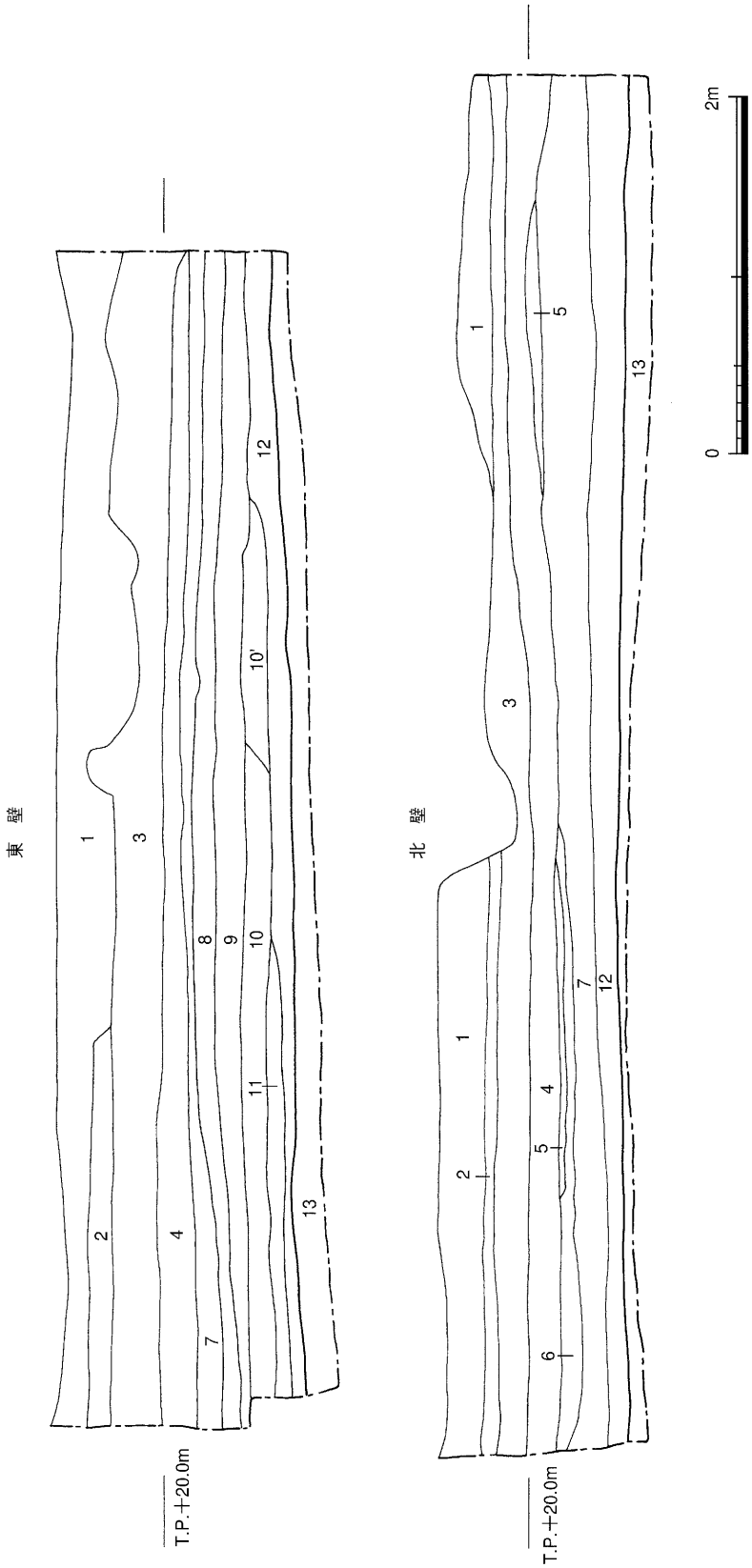
第11層　暗褐灰色粘土混細砂～暗灰褐色細砂混じり粘土。層厚0.15m前後。古墳時代前期の遺物をごく少量含まれている。調査区中央より東側に広がる。

第12層　黒褐色砂礫混じり細粘質土。層厚0.1～0.25m。弥生時代後期末の土器片を含む。暗褐色の斑点がみられる。調査区内の東側では厚く遺物の包含が多い。逆に西側では薄く遺物の包含が希薄であった。

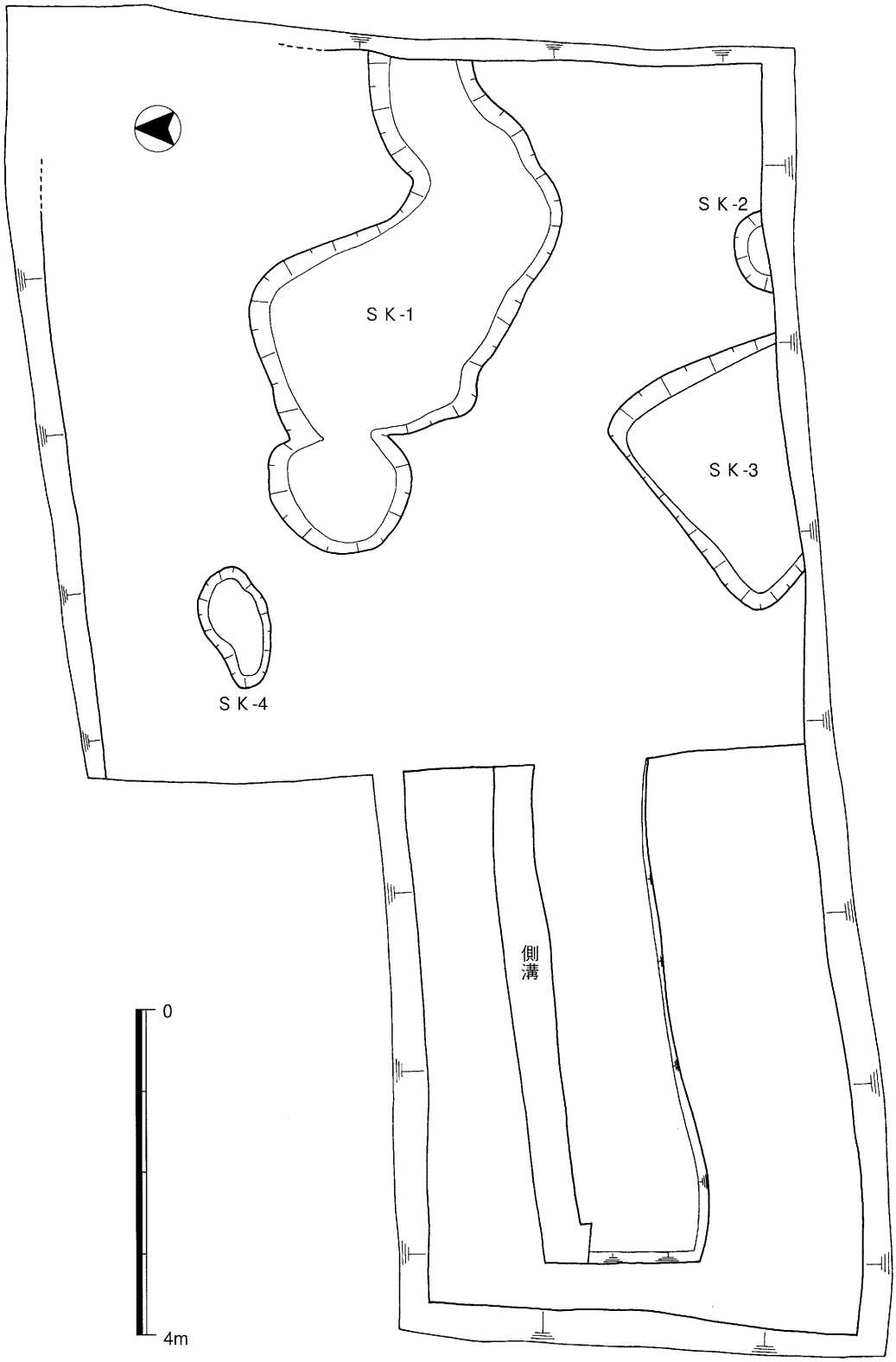
第13層　灰黒色粘土。層厚0.2m前後。この上面より弥生時代後期末の遺構が切り込まれている。このベース面は東側と西側で高低差が最大約0.4mである。標高では東端19.6m、

西端19.2mを測る。

第14層　灰色砂礫混じり細砂。層厚0.3m以上。調査区北東部角で確認した。弥生時代後期以前の洪水による堆積と思われる。



第３図　断面図



第４図　平面図

3）検出遺構と出土遺物

調査の結果、第13層上面の調査区東部で弥生時代後期末に比定される土坑４基（ＳＫ－１～４）を検出した。以下、各遺構について記す。

ＳＫ－１

調査区の中央東部で検出した土坑である。平面形は不定形を呈し、東壁の調査区外に至る。検出部の規模は長径約6.5m、短径1.5～3.1m、深さ0.2～0.4mを測る。断面は逆台形を呈し、西側が深い。堆積土は炭を含む黒褐色細砂混じり粘土の一層である。西側の深部では拳大の石（径10～15cmの花崗岩）が４個含まれていた。この石は埋めた形跡や整列していないが人為的に持ち込まれたものと思われる。

遺物は土坑内部から弥生時代後期末（畿内第Ｖ様式）に比定される土器片をコンテナにして約１箱分出土した。図化できたものは12点である（個々の法量・調整等については出土遺物観察表を参照）。

１～６は壷である。大きく外反し、端部が肥厚するもの（１・２）と端部が丸く終るもの（３）、端部が外傾する面をもつもの（４～６）に分けられる。

７～16は甕である。８は外反し、端部をつまむ。体部外面に３分割のタタキ目がみられる。９・10は外反し、外傾する面をもつ小型の甕である。11は端部を大きくつまみ上げている。外面頸部にハケナデが残る。12は口縁端部が丸く終り、体部に張りがない小型の甕である。14・15は突出気味の平底をもつ甕。16は突出した平底をもつ甕である。

17～25は鉢で、17・18は突出気味の平底をもつもの。19は突出した平底をもつもの。20・21は突出した上げ底をもつ小型の鉢で、21には外面にタタキ目が残る。22・23は有孔鉢で、突出した平底に焼成前に開けられた穿孔がある。24・25は器壁の薄い杯部で、25は口縁部が内湾している。26は高杯である。断面半月形の杯部に低い脚部をもつ。27は不明土器である。拳ほどの大きさで河原石のような形状を呈しており、内部が空洞に成っている。

ＳＫ－２

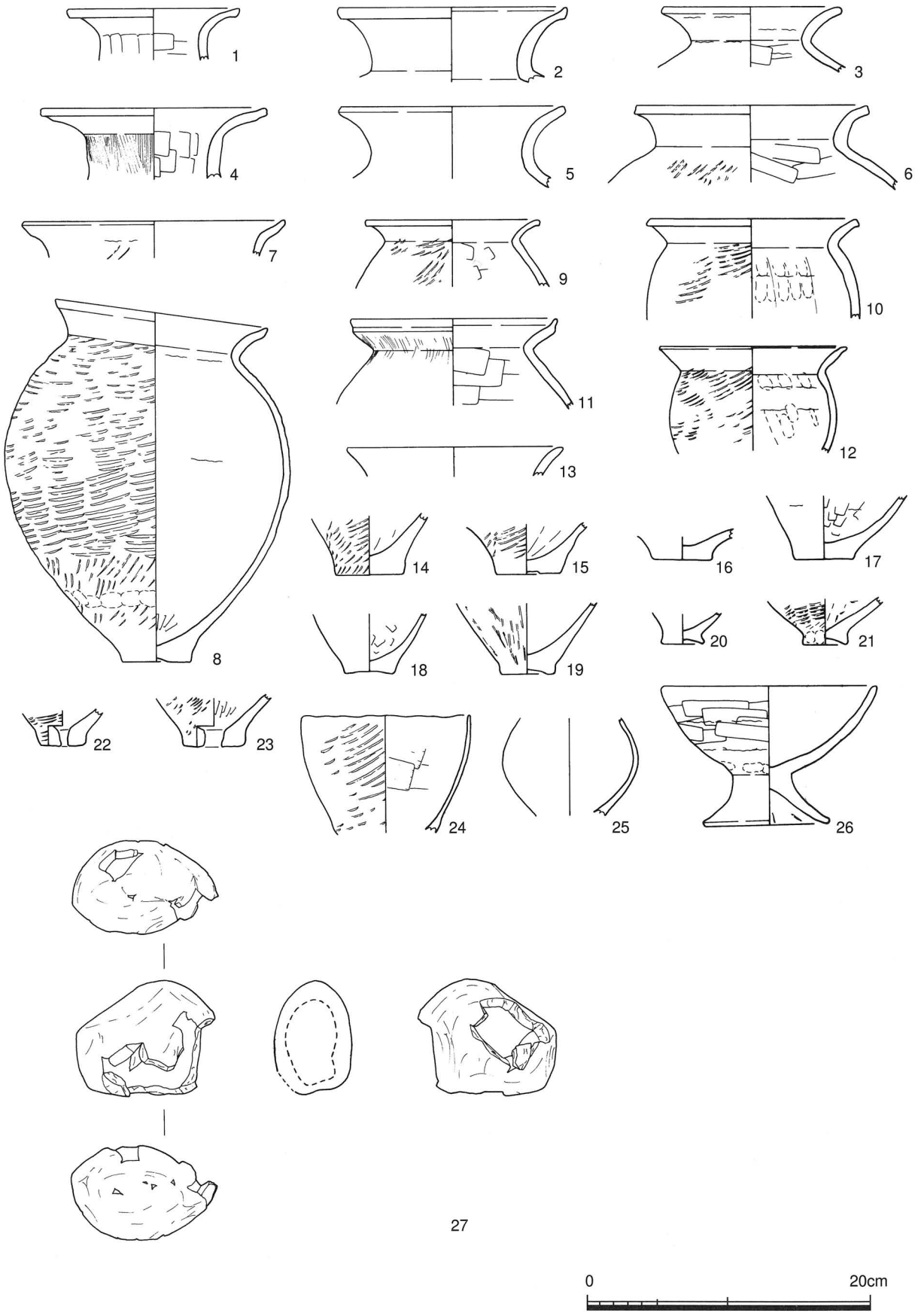
ＳＫ－１の南部で検出した土坑である。平面形は検出部で半円形を呈し、南側は南壁の調査区外に至る。規模は東西径約1.0m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形を呈し、黒褐色粘質土が堆積する。遺物は出土しなかった。

ＳＫ－３

ＳＫ－２の西部で検出した土坑である。南半部は南壁の調査区外に至る。規模は東西約3.0m、深さ0.2m前後を測る。断面は逆台形を呈し、黒褐色粘土が堆積する。底面は平坦である。遺物は土坑内部から弥生時代後期末に比定される土器の小片をごく少量出土している。

ＳＫ－４

ＳＫ－１の北西部で検出した土坑である。平面形は西東方向に長い楕円形を呈する。検出部の規模は長径約1.3m、短径約0.7m、深さ約0.3mを測る。断面は逆台形を呈し、黒灰色粘土が堆積する。遺物は土坑内部から弥生時代後期末に比定される小片をごく少量出土している。



第５図　ＳＫ－1出土遺物実測図

出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	法量（cm）	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備　考
1	壷 （土師器） ＳＫ-1	底径　8.0	外面はヘラナデ、ハケナデ後ナデ、接合痕残存。内面はヘラケズリ。	外：淡黄灰色～黒灰色 内：暗紫茶色	６㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・石英・角閃石）	良	底部完
2	同上	口径　16.8	外面は口縁部ナデ、体部ハケナデ（10本/㎝）。内面は口縁部摩耗の為調整不明瞭、体部ヘラケズリ。	外：淡灰茶色～淡灰茶色 内：淡橙茶色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・赤褐色酸化粒・角閃石）	良好	1/4　煤付着
3	同上	口径　13.0	外面は口縁部上部ナデ、他タタキ後ナデ、接合痕残存。内面はヘラナデ接合痕残存。	淡橙茶褐色	５㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	1/5
4	同上	底径　2.7	外面は体部ヘラナデ、底面ナデ、。内面はヘラナデ、工具痕残存。	暗灰褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	底部完
5	同上	口径　14.0	外面は口縁部摩耗の為調整不明瞭。接合痕残存。体部タタキ（4本/㎝）。内面は摩耗の為調整不明。接合痕・指頭痕残存。	淡橙茶色～淡灰色	４㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・角閃石）	良	1/5
6	同上	口径　29.6	内外面ともに口縁部上部ナデ、他ナデ。	淡赤茶色	４㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良好	口縁部一部
7	甕 （土師器） ＳＫ-1	口径　14.2	外面は口縁部ヨコナデ、体部タタキ（５本/㎝）。内面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	淡灰茶色～淡橙茶色	５㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良好	1/5　煤付着
8	同上	口径　17.0	内外面ともに口縁部上部ナデ、他ナデ。摩耗の為調整不明。	外：暗灰茶橙色 内：淡黒灰色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良好	口縁部一部
9	同上	底径　3.6	外面は体部タタキと思われるが摩耗の為調整不明瞭、底面ナデ。内面はヘラナデ。	明茶灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母）	良好	底部完 黒斑有り
10	同上	底径　4.4	外面はタタキ（５本/㎝）、底面ナデ。内面はヘラナデ。	淡橙灰茶色	３㎜以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母・角閃石・石英）	良好	底部完
11	同上	底径　3.4	内外面ともに摩耗の為調整不明瞭。	淡橙茶色	６㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母）	良好	底部完
12	同上	底径　3.6	外面は体部摩耗の為調整不明瞭、工具痕残存、底面ナデ。内面はヘラナデ。	淡灰茶色	４㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石・赤褐色酸化粒）	良	底部完
13	同上	底径　6.2	外面は脚部ナデ。内面は杯部ヘラナデ、脚部ナデ。	淡緑灰色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良	1/3
14	同上	口径　12.4	外面は摩耗の為調整不明瞭。内面ナデ。	淡橙乳茶色	３㎜以下の砂粒を少量含む（長石・石英・赤褐色酸化粒）	良好	杯部 1/3
15	同上	口径　10.0	外面は口縁部ナデ、体部タタキ後ナデ。内面は口縁部ナデ、体部ヘラナデ。	外：淡橙茶色 内：淡茶杯褐色	５㎜以下の砂粒を微量に含む（長石・雲母）	良好	口縁部一部
16	同上	底径　4.2	外面はタタキ、底面ナデ。内面はナデ。	外：淡灰茶色 内：淡灰褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	底部 3/4
17	鉢 （土師器） ＳＫ-1	底径　3.8	内外面ともに摩耗の為調整不明瞭。	外：淡灰茶色 内：明茶赤褐色	４㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石）	良好	底部 1/2
18	同上	底径　4.4	外面はタタキ（３本/㎝）、底面ナデ、接合痕残存。内面はナデ。	外：淡灰茶色 内：淡黒灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・石英）	良好	底部 1/3
19	同上	底径　5.0	外面はナデ。内面はヘラケズリ。	外：暗灰黒色～淡灰茶色 内：淡茶灰色	８㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石）	良好	底部完

遺物番号 図版番号	器　　種	法量（cm）	調整・技法等の特徴	色調	胎土	焼成	備　考
20	小型鉢 （土師器） ＳＫ-１	底径　3.0	外面はタタキ（５本/cm）、指頭圧痕残存、底面指ナデ。内面はヘラナデ、工具痕残存。	外：淡橙茶褐色 内：灰褐黒色	５㎜以下の砂粒を含む（長石・石英）	良好	底部完
21	同上	底径　3.0	外面はタタキ後ナデ。内面はヘラナデ、底面に穿孔一つ有す。	外：淡赤茶褐色 内：灰黄褐色	３㎜以下の砂粒を多量に含む（長石・雲母・角閃石）	良	底部完
22	有孔鉢 （土師器） ＳＫ-１	底径　4.2	外面はタタキ後ナデ。内面はヘラナデ、底面に穿孔一つ有す。	明茶褐色	３㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母）	良好	底部完
23	同上	口径　11.8	外面は口縁端部ナデ、他タタキ（３本/cm）。内面はヘラナデ。	明橙褐色～灰褐色	５㎜以下の砂粒を含む（長石・雲母・角閃石・チャート）	良好	2/3
24	鉢 （土師器） ＳＫ-１	－	外面は剥離の為調整不明瞭。内面はヘラナデと思われるが摩耗の為調整不明。	外：淡灰茶褐色～淡橙茶褐色 内：淡灰茶褐色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・赤褐色酸化粒・角閃石）	良	2/3
25	同上	口径　14.8 底径　8.6 器高　9.8	外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、接合痕・指頭痕残存、高台部ナデ。内面は口縁～体部ナデ、高台部ナデ。	淡灰茶褐色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・石英・赤褐色酸化粒）	良好	ほぼ完形
26	高杯 （土師器） 包含層	－	ナデ	淡灰茶色	３㎜以下の砂粒を微量に含む（長石）	良好	
27	？ （土師器） ＳＫ-１	底径　4.6	外面はタタキ（５本/cm）、底面ヘラナデ。内面はヘラナデ。	赤褐茶色～暗灰茶褐色	４㎜以下の砂粒を少量含む（長石・雲母・角閃石）	良好	底部完

3．まとめ

今回の調査地は東西に長い敷地で東と西の高低差が約２ｍを測る扇状地上に位置する。調査区はその西端である低い部分にあたる。さらに東側の道路面と東部の敷地面では約２ｍの段差がみられる。標高では道路面が約24.5ｍ前後、西部の調査区で約20.5ｍ前後であった。調査の成果では、弥生時代後期末から中世に至る遺構・遺物を検出することができた。以下、既往調査の成果を踏まえて調査区の成果を概括する。

弥生時代後期末の時期の遺構は、市教委が実施した確認調査で調査地全域に存在することが確認されている。近接の調査でも当地より南側約100ｍの地点では当調査研究会が実施した第４次調査（ＭＫ91－４）、さらに南側へ約150ｍの地点では市教委が行った平成２年度調査（90－559）で同時期の遺構・遺物を検出している。また当地より南西約500ｍでは当調査研究会が実施した第５次調査（ＭＫ95－５）においても弥生時代後期の土器が調査区東側で顕著に認められており、集落域が東に拡がることを予知している。これらのことから、この時期の生活面が広範囲に存在することが推測される。

古墳時代前期の時期は、布留式土器の小片をごく少量含む地層（第11層）を検出しているが、ベース面となる土層はみられなかった。周辺の調査では北部へ約600ｍの地点で行った第２次調査、南西部へ約500ｍの地点で行った第５次調査で同時期のものを検出している程度であり、隣接地での状況は不明である。

奈良時代～平安時代の時期は調査区西部で検出している層序の第５層～第８層がそれにあたる。これらの土層は洪水などによって一時的に堆積したと思われる堆積状況である。当地の南側約100ｍの第４次調査では南東－南西方向に伸びる奈良時代の河川の流路跡を検出している。さらに南側約150ｍの平成２年度市教委調査でも河川の流路跡を検出しており、この時期、当地周辺では幾度となく洪水が繰り返されていたことがうかがえる。

鎌倉時代以降の時期は層序の第３層～第４層の土層がそれに対応すると思われる。土層内部には遺物や礫などが含まれていないことから、農耕地として開墾していたものと考えられる。土質や地形などから想定して畑として利用していた可能性が強い。

なお、調査区の北東角一角で下層状況の確認を行った。砂礫層が厚く堆積している状況から、弥生時代後期以前に洪水などによって形成された河川の流路であると思われる。

以上、当地周辺の調査成果の状況である。

参考文献

・(財)大阪文化財センター 1976「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』季刊第２巻・第２号・通巻第６号
・大阪府教育委員会 1978「府立清友高等学校新築工事に伴う発掘調査現地説明会資料」
・八尾市役所 1988「考古編」『八尾市史（前近代）本文編』増補版
・近江俊秀 1989「９．水越遺跡（63－354）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告20 昭和63年度公共事業　八尾市教育委員会
・米田敏幸 1989「８．水越遺跡（63－196）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告20 昭和63年度公共事業　八尾市教育委員会
・吉田野々 1991「７．水越遺跡（90－559）の調査」『八尾市内遺跡平成２年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告22　八尾市教育委員会
・吉田野々 1994「15．水越遺跡（92－602）の調査」『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告29 平成5年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・西村公助 1990「８．水越遺跡（ＭＫ89－2)」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』八尾市文化財

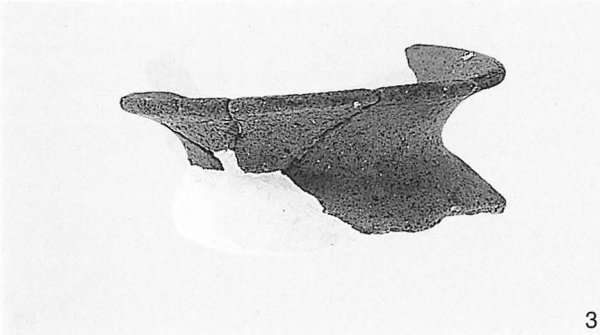
調査報告28　平成４年度公共事業　（財）八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋 1990「９．水越遺跡（ＭＫ89－3）」『八尾市文化財調査研究会年報　平成元年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告28　（財）八尾市文化財調査研究会
・西村公助 1983「第２章　水越遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和56・57年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告3　（財）八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋 1992「Ⅷ　水越遺跡第４次調査（ＭＫ91－4）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告34　八尾市教育委員会
・高萩千秋 1989「Ⅰ　水越遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告－水越遺跡・竹渕遺跡・恩智遺跡－』（財）八尾市文化財調査研究会報告23　（財）八尾市文化財調査研究会
・坪田真一・成海佳子 1995「27．水越遺跡（第５次調査）」『平成７年度（財）八尾市文化財調査研究会報告』（財）八尾市文化財調査研究会

図版一

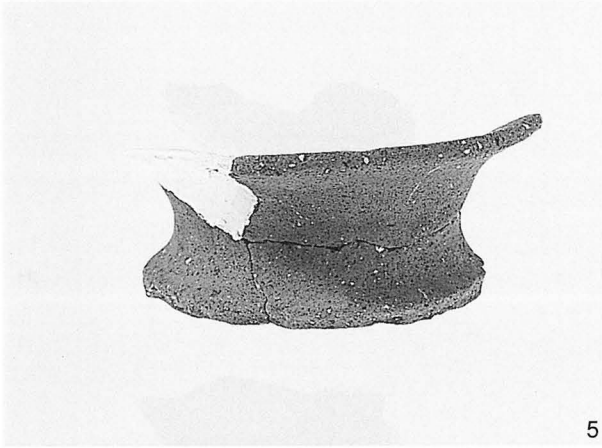
調査区全景（東から）

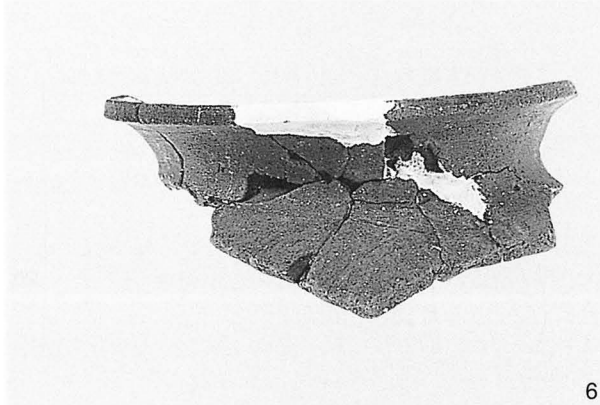
調査区東部（北西から）

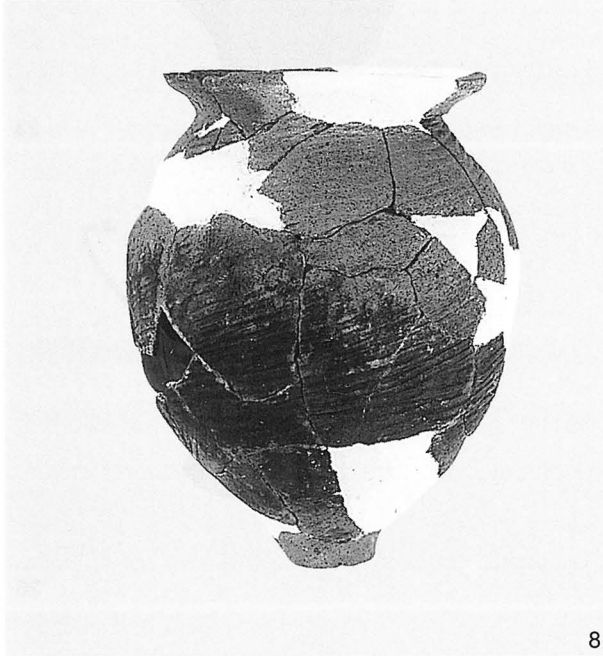
調査区西部（南から）

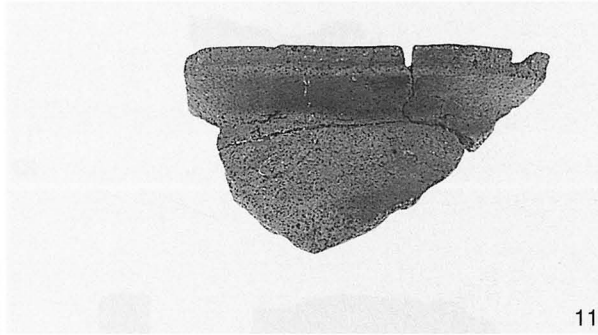

3

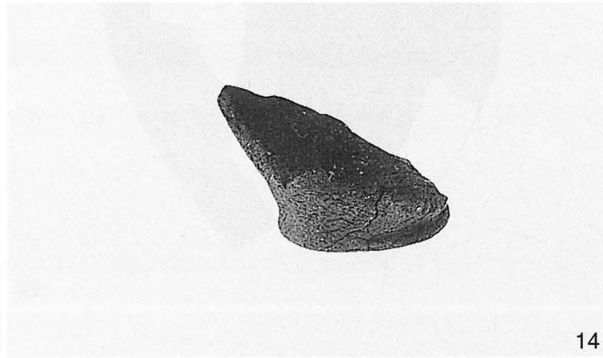
4

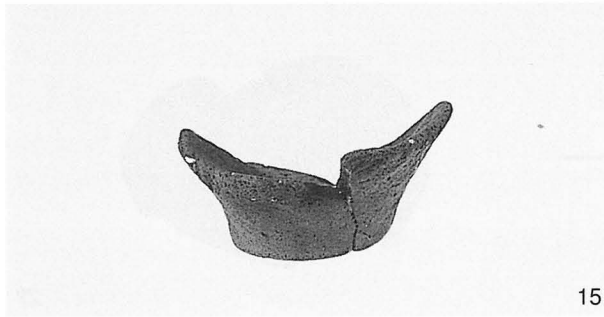

5

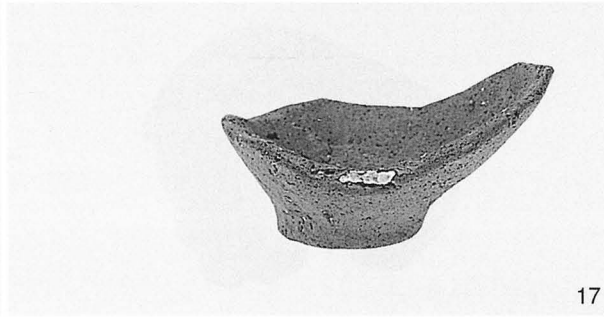

6


8


11

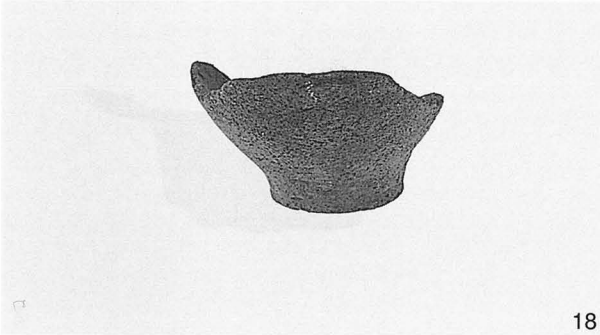

14

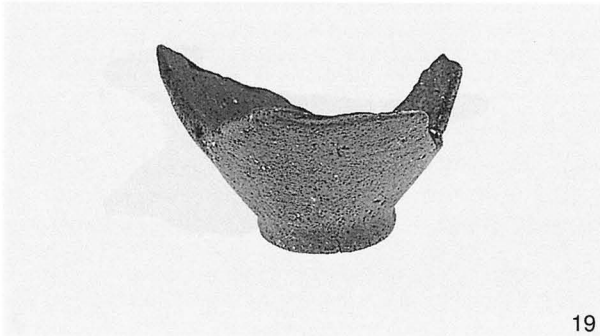

15

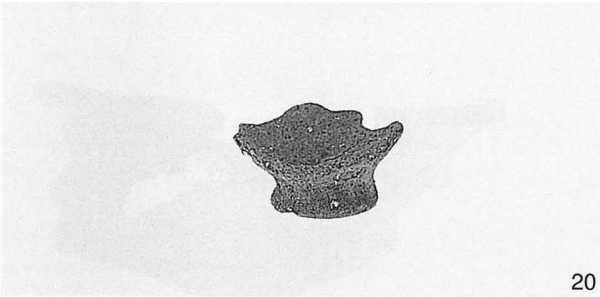

17

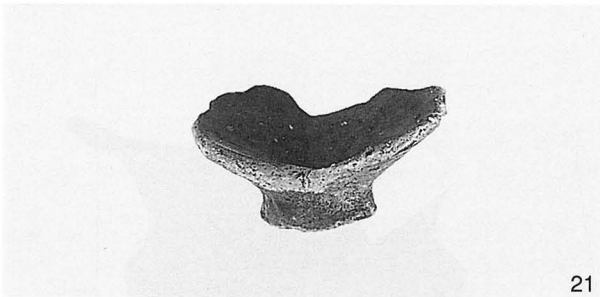
ＳＫ－１

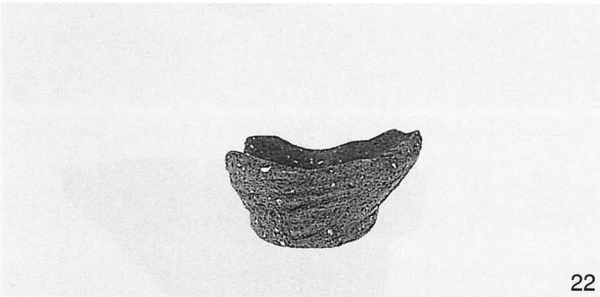
図版三


18

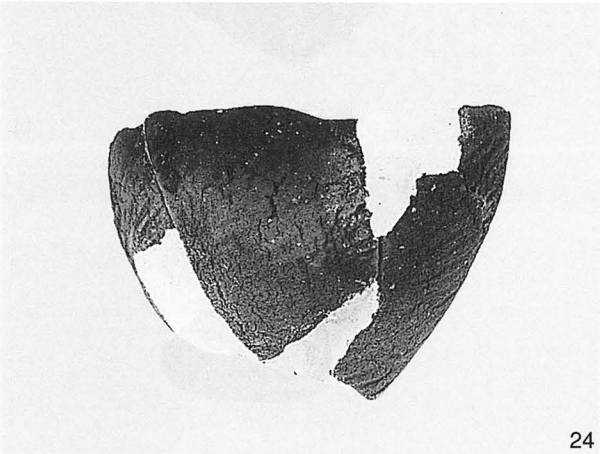

19


20

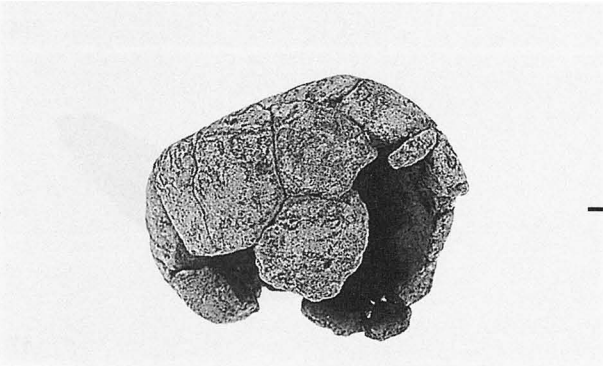

21

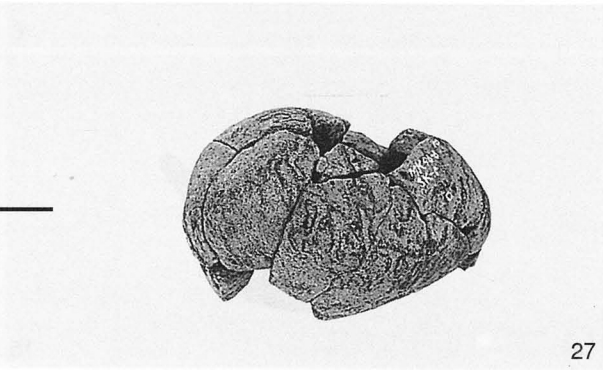

22

23


24

26




27

ＳＫ－１

XIX　山賀遺跡第４次調査（ＹＭＧ96－４）

例　　言

1．本書は、八尾市山賀町４丁目53番３号で実施した変電所建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する山賀遺跡第４次調査（ＹＭＧ96－４）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋658号　平成８年２月13日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力株式会社大阪南支店 支店長 堀田浩三から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年７月１日から平成８年７月26日（実働20日間）にかけて原田昌則・森本めぐみを担当者として実施した。面積300㎡を測る。調査においては岸田靖子・辻野優子・西田真紀が参加した。

1．内業整理は、現地調査終了後、随時実施し平成９年９月に完了した。

1．本書作成に関わる業務は、遺物実測－森本、図面トレース－北原清子、遺物写真－原田が行った。

1．本書の執筆・編集は原田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……151

2．調査概要……152

　1）調査の方法と経過……152

　2）基本層序……153

　3）検出遺構と出土遺物……153

　4）遺構に伴わない遺物……159

3．まとめ……159

XIX　山賀遺跡第４次調査（ＹＭＧ96－４）

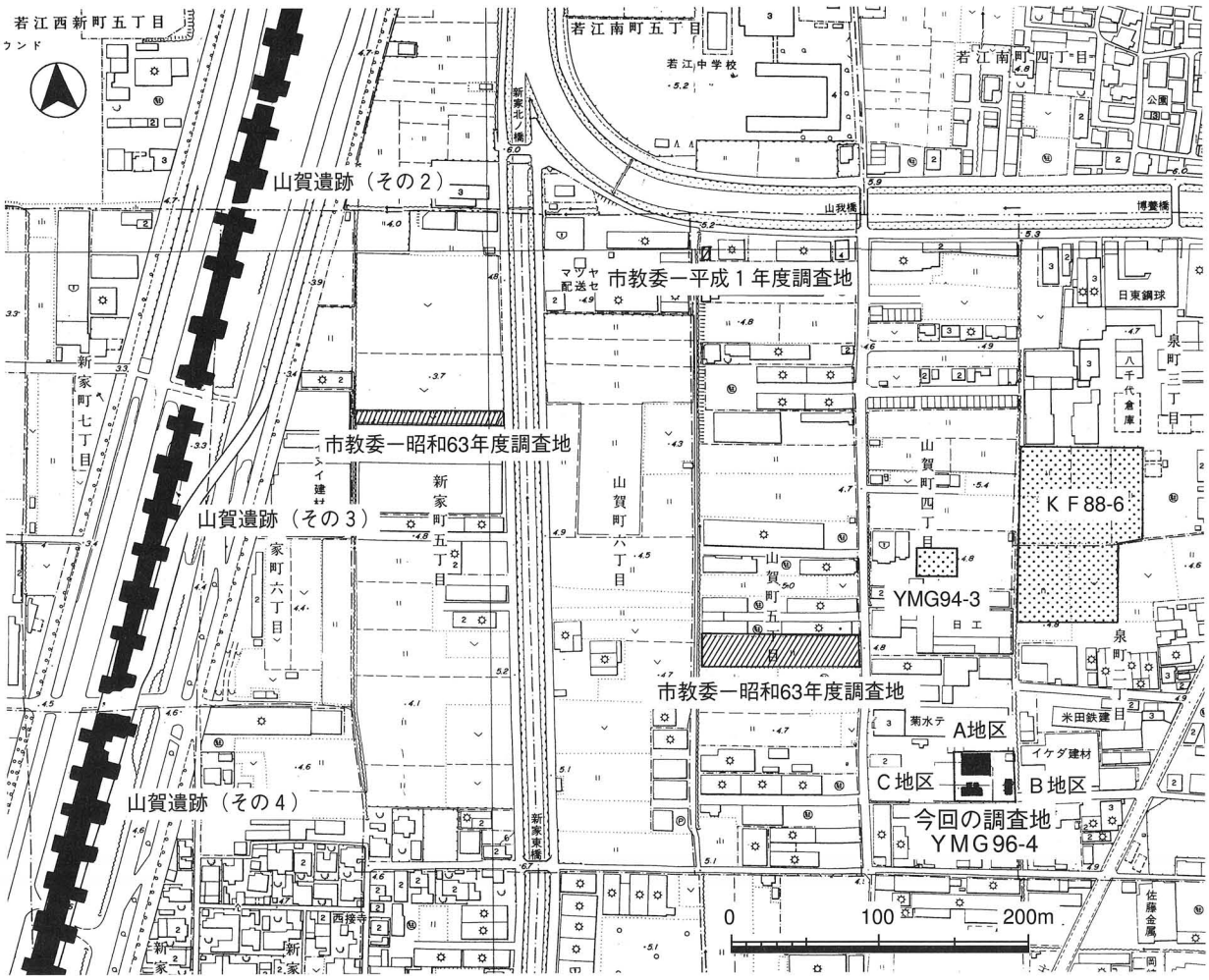
１．はじめに

山賀遺跡は、旧大和川の本流であった長瀬川・玉串川をはじめとする数多くの中小河川の沖積作用により形成された河内平野中央部の海抜４～５ｍに展開する複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市北西部の新家町１～８丁目・山賀町１～６丁目、東大阪市若江西新町５丁目・若江南町４～５丁目の東西0.85㎞、南北1.0㎞がその範囲とされている。

山賀遺跡は、昭和46年に東大阪市域で行われた楠根川改修工事により発見された遺跡である。その後、昭和54～60年に実施された近畿自動車道路建設に伴う調査の結果、縄文時代～近世に至る複合遺跡として認識されるようになってきた。なかでも、弥生時代前期中段階の集落の存在は、河内平野の稲作導入期の動向を知る上で貴重な資料を提供している。

山賀遺跡周辺では、東に萱振遺跡・西郡廃寺、西に小若江北遺跡（東大阪市）、南に美園遺跡、北に若江北遺跡（東大阪市）、北西に上小阪遺跡（東大阪市）が位置している。

山賀遺跡では、既に当調査研究会により３次にわたる調査が実施されている。なかでも、山賀町４丁目34－１・35－１で平成６年度に実施された第３次調査（ＹＭＧ94－３）では、現地表下



第１図 調査地周辺図

約３ｍ前後で弥生時代前期の遺構・遺物が検出されており、近畿自動車道建設に伴う山賀遺跡（その３）の調査を含めて広範囲に及ぶ集落域が想定されるに至っている。今回発掘調査を実施した山賀町４丁目53番３号は遺跡範囲の西部に位置し、平成６年度に実施された第３次調査（ＹＭＧ94－３）地の南約150ｍに位置している。

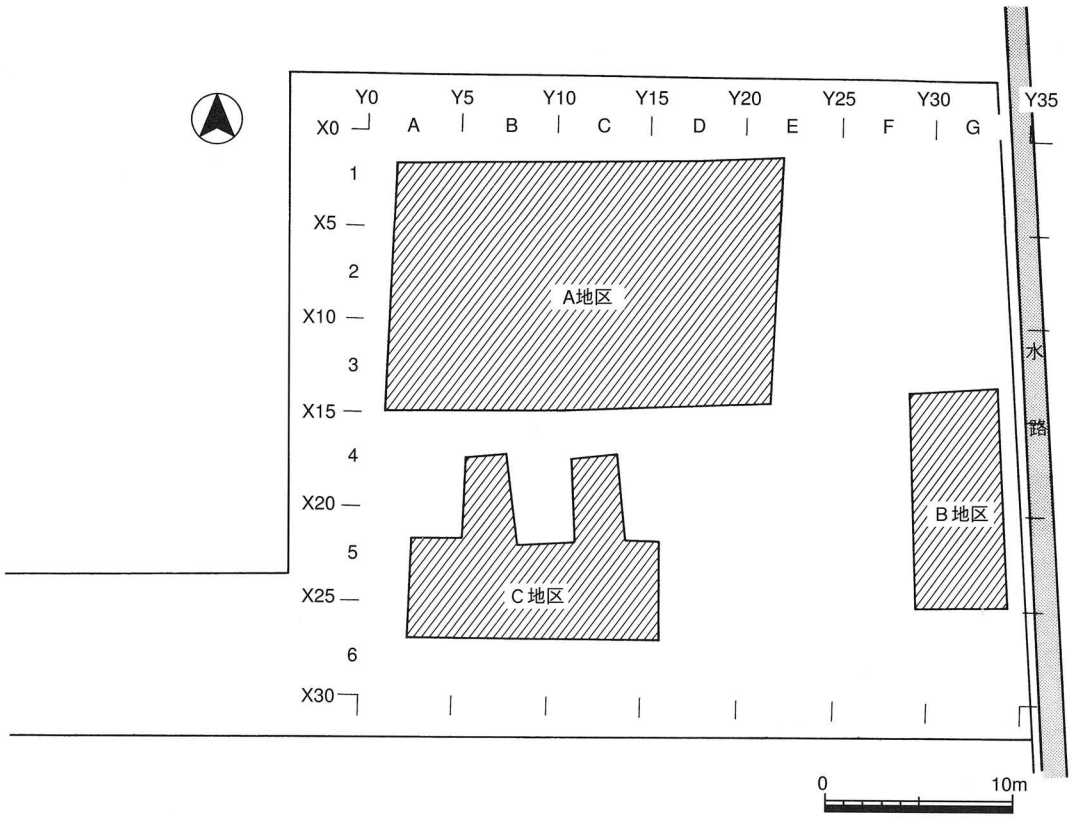
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は変電所建設に先だって実施したもので、３箇所の変電所施設（屋外機器基盤・貯溜槽・ケーブルピット）を調査対象地とした。調査区名については、Ａ地区（屋外機器基盤）、Ｂ地区（貯溜槽）、Ｃ地区（ケーブルピット）と呼称した。Ａ地区は調査地の北部に設定した調査区で、東西幅19.0ｍ、南北幅11.5ｍを測る。Ｂ地区は東部に設定した調査区で、東西幅3.5ｍ、南北幅10.5ｍを測る。Ｃ地区はＡ地区の南部に設定した調査区で、東西幅11.5ｍ、南北幅3.5ｍで、北側に東西幅1.0ｍ、南北幅5.0ｍを測る突出部が２箇所存在している。３箇所の総調査面積は約300㎡である。

調査地の地区割については、調査地の北西隅のＸ０・Ｙ０地点を基点として東西35ｍ、南北30ｍにわたって設定した。一区画の単位は５ｍ四方で、東西方向はアルファベット（西からＡ～Ｇ）、南北方向は算用数字（北から１～６）で示し、地区の表示は１Ａ区～６Ｇ区と呼称した。地点の表示には、東西線（Ｘ０～Ｘ30）・南北線（Ｙ０～Ｙ35）の交点の数値を使用した。掘削に際しては、現地表下約1.3ｍ前後までを機械掘削した後、以下0.3ｍについては、人力掘削を行い遺構・遺物の検出に努めた。調査はＢ地区→Ｃ地区→Ａ地区の順で実施した。

調査の結果、Ａ地区では、現地表下1.2～1.5ｍ（標高3.5ｍ前後）付近に存在している第５層上



第２図　調査区設定図

面で、古墳時代前期・古墳時代後期末・平安時代前期～後期に比定される土坑５基（ＡＳＫ－１～ＡＳＫ－５）、溝２条（ＡＳＤ－１・ＡＳＤ－２）、小穴２個（ＡＳＰ－１・ＡＳＰ－２）を検出した。さらに、約0.1～0.3m下部の第６層上面を調査対象にしたが、遺構は検出されなかった。Ｂ地区では、現地表下1.5～1.6m（標高3.3m前後）付近に存在している第６層上面を調査対象にしたが、遺構は検出されなかった。Ｃ地区では、現地表下1.4～1.5m（標高3.5m前後）付近に存在している第６層上面で平安時代後期の溝３条（ＣＳＤ－１～ＣＳＤ－３）、古墳時代後期末と平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定される小穴21個（ＣＳＰ－１～ＣＳＰ－21）を検出した。出土遺物は遺構および第４層・第５層から出土しており、量的にはコンテナ１箱程度である。

２）基本層序

第０層　現代客土。層厚50㎝。上面の標高はT.P.＋5.0mを測る。

第１層　N4/0灰色粘土質シルト。旧耕土。層厚10～20㎝。

第２層　10ＧＹ6/1緑灰色粘土質シルト。床土。層厚10～20㎝。

第３層　５ＧＹ6/1オリーブ灰色～２.５Ｙ5/4黄褐色粘土質シルト。層厚10～30㎝。酸化鉄・マンガンを含む。

第４層　10ＹＲ6/6明緑褐色粘土質シルト。（Ａ地区の一部２.５Ｙ6/3にぶい黄色細粒砂）層厚10～20㎝前後。酸化鉄・マンガンを含む。古墳時代後期末・平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺物を少量含む。

第５層　10ＹＲ4/1褐灰色粘土～10Ｙ5/1灰色シルト。層厚３～30㎝前後。（Ｂ地区のみ炭化した植物遺体を含む。）古墳時代後期末・平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺物を少量含む。

第６層　N6/0灰色粘土。層厚５～30㎝。酸化鉄・植物遺体を含む。

３）検出遺構と出土遺物

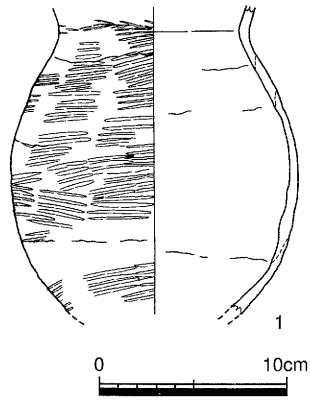
Ａ地区

Ａ地区では第５層上面（第１面）、第６層上面（第２面）の計二面を調査対象としたが遺構が検出されたのは第１面のみである。第１面では、古墳時代前期［布留式古相］（ＡＳＫ－１）、古墳時代後期末（ＡＳＫ－２）、平安時代前期（ＡＳＫ－５）、平安時代後半～鎌倉時代初頭（ＡＳＤ－１・２）の４時期にわたるの遺構が検出された。

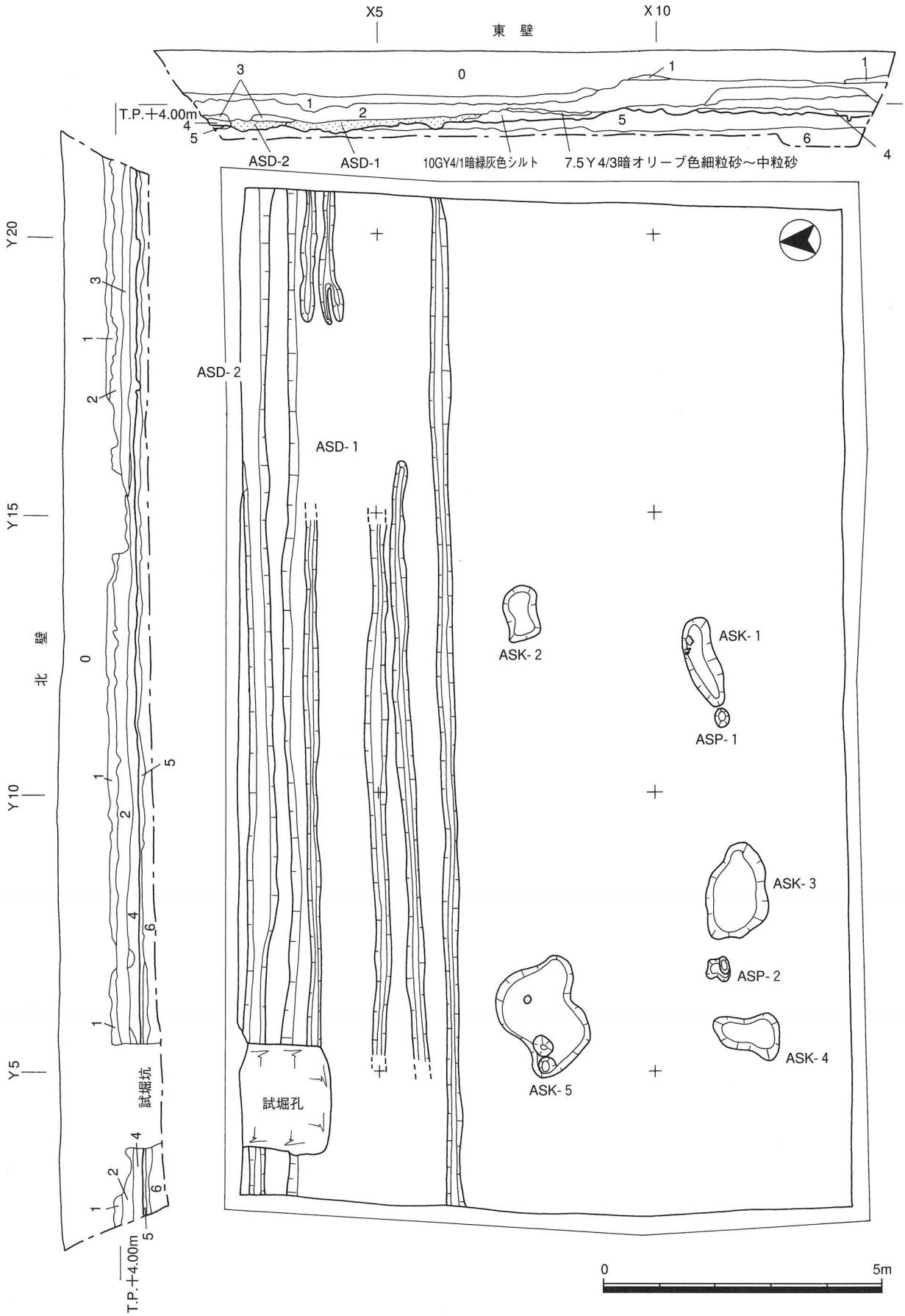
土坑（ＡＳＫ）

ＡＳＫ－１

３Ｃ区で検出した。東西幅1.65m、南北幅0.6m、深さ0.08mを測る東西方向に長い土坑である。埋土は上層の灰色砂質土と下層の灰色粘土質シルトから成る。遺物は遺構北東部の肩部付近から土師器甕（１）が出土している。（１）は長胴形の体部を持つ土師器甕で口縁部が叩き出し技法により成形されている。外面のタタキ調整の方向は、分割成形に沿って、最下部と体部上半から頸部が右上がりで、その他は水平方向である。色調は淡赤褐色で、胎土中にやや大粒で角のあるチャート・長石が多量に含まれている。形態や胎土の特長から摂津系の甕と推定される。帰属時期は古墳時代前期（布留式古相）に比定され



第３図 ＡＳＫ－１
出土遺物実測図



第４図　Ａ地区 第５層上面検出遺構平断面図（1/100）

よう。

ＡＳＫ－２

２Ｃ区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.95ｍ、南北幅0.6ｍ、深さ0.07ｍを測る。埋土は灰色シルトの単一層である。遺物は須恵器の小破片が1点出土したが、形状や時期は不明である。

ＡＳＫ－３

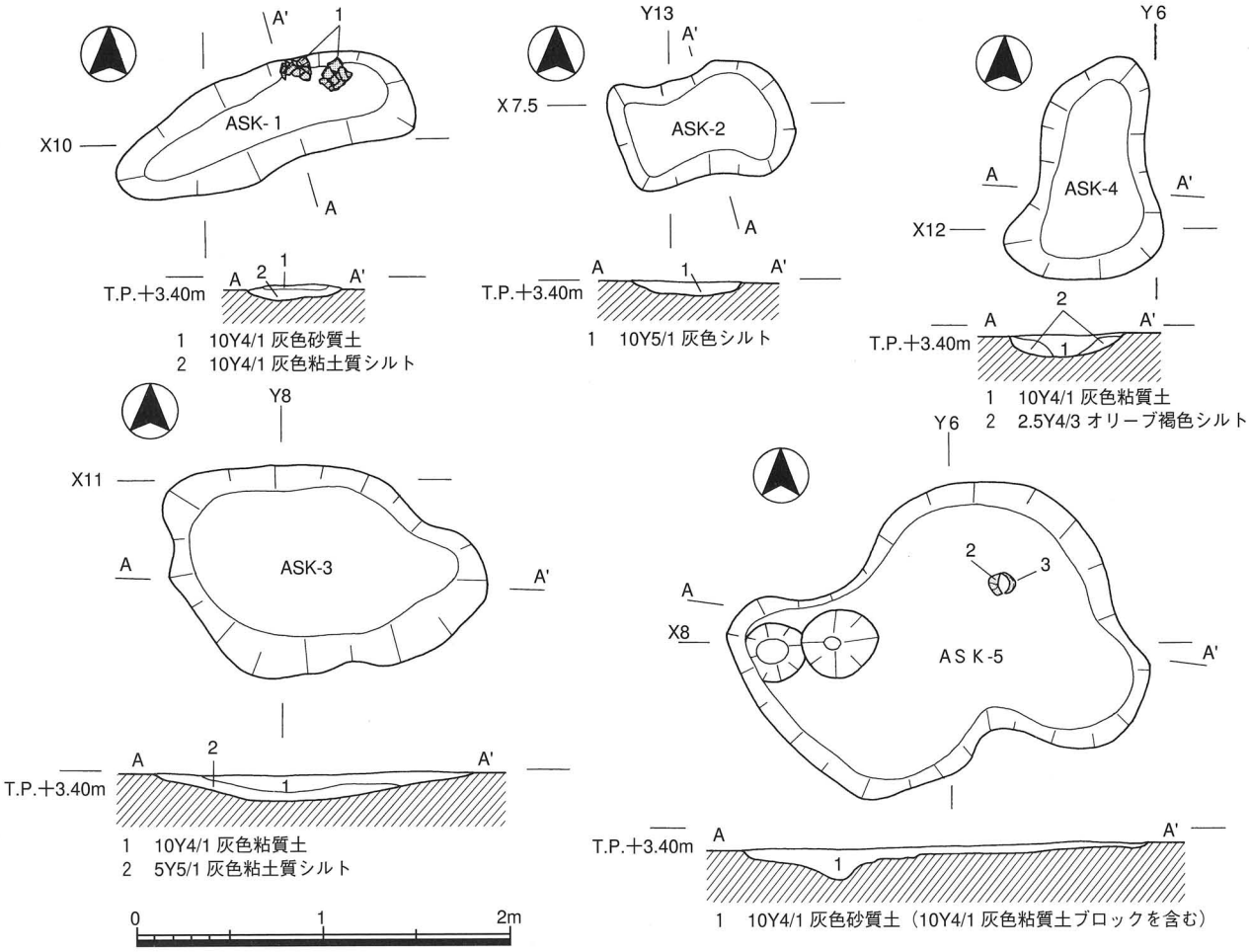
３Ｂ区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.7ｍ、南北幅1.15ｍ、深さ0.13ｍを測る。埋土は上層の灰色粘質土と下層の灰色粘土質シルトの二層から成る。遺物は出土していない。

ＡＳＫ－４

３Ｂ区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅0.6ｍ、南北幅1.2ｍ、深さ0.11ｍを測る。埋土は灰色粘質土とオリーブ褐色シルトの二層から成る。遺物は出土していない。

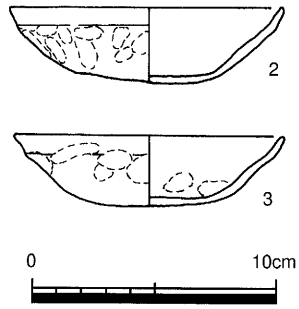
ＡＳＫ－５

２Ｂ区で検出した。不定形を呈し、東西最大幅2.2ｍ、南北幅1.5ｍ、深さ0.18ｍを測る。西部底の２箇所に小穴が存在している。埋土は灰色粘質土のブロックを含む不均質な灰色砂質土の単一層である。遺物は北東部分で、土師器杯（２）を上に土師器杯（３）を下にして合わせ口にされた状態で検出されており、何らかの目的をもって埋置されたものと推定されるが、内部からは遺物は出土していない。２点ともに粗製品で、法量は（２）が口径11.1㎝、器高3.0㎝、（３）が



第５図　ＡＳＫ－１～ＡＳＫ－５平断面図

口径10.9㎝、器高2.9㎝を測る。底部は平坦で、体部は指頭圧成形により外反気味に斜上方に伸びるが、体部上半付近のヨコナデにより明瞭な段を形成している。２点ともに、器面が風化しており調整は不明瞭であるが、体部の中位以下が指頭圧成形、口縁部内外面にはヨコナデ調整が行われたものと推定される。色調はともに淡茶褐色で、胎土には微細な砂粒が散見される。近江俊秀氏による河内地域中南部の古代末期から中世時期の土器編年に従えば、２点の土師器杯は土師器杯Ｂに分類されるもので、平安時代前期後半（10世紀前半～中葉）の指標とされる八尾市木の本遺跡ＳＷ－02出土遺物と共通した特長を示している。

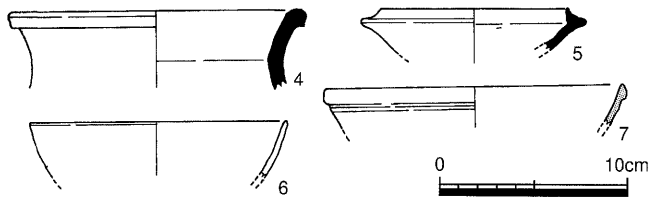


第６図ＡＳＫ－５
出土遺物実測図

溝（ＡＳＤ）

ＡＳＤ－１

調査区の北側を東西に伸びる溝である。検出長18.3m、南北幅3.0m、深さ0.2～0.35mを測る。底面では底面より切り込む６条の小溝が検出されている。埋土は灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は、古墳時代後期末の須恵器、平安時代後期～鎌倉時代前期の土師器、白磁、黒色土器、瓦器椀等の小片化した土器類が少量出土している。そのうち、４点（４～７）を図化した。（４）は須恵器広口壷である。復原口径15.5㎝を測る。頸部は外反して上外方に伸びるもので、外側に肥厚して丸味を持って終わる口縁端部中位に段が形成されている。古墳時代後期（６世紀後半）の所産である。（５）は須恵器杯身で、復原口径9.9㎝を測る。立ち上がりが内傾して短く伸びるもので、田辺編年のＴＫ217型式（７世紀前半）に比定される。（６）は瓦器椀で、1/12程度が残存する小破片である。内外面ともにローリングを受けており器面調整は不明である。13世紀代の所産と推定される。（７）は小さい玉縁状口縁を有する白磁碗である。胎土は純白できめが細かいもので、釉は薄く施釉されており釉色は乳灰色である。森田・横田分類の白磁碗Ⅱ類に分類されるもので、11世紀中葉～12世紀初頭に比定される。（４・５）の夾雑遺物を除けば、遺構の存続時期は鎌倉時代初頭時期が想定される。



第7図　ＡＳＤ-1出土遺物実測図

ＡＳＤ－２

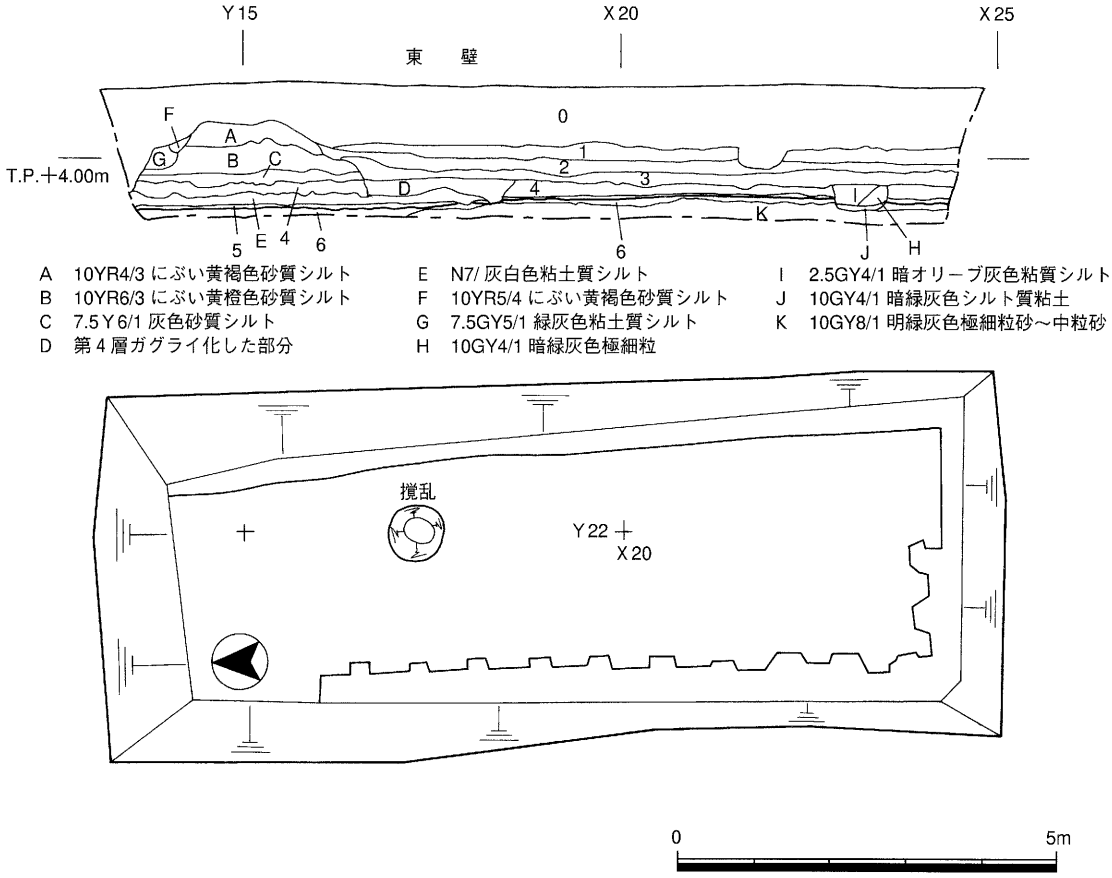
ＡＳＤ－１の北側に並行する形で検出した。検出長18.2m、南北幅0.6m、深さ0.06～0.1mである。須恵器、土師器の小破片が少量出土している。この遺構は第4層上面から切り込んでいるため、第５層上面で検出したＡＳＤ－１の構築時期である鎌倉時代初頭以降が推定される。

小穴（ＡＳＰ）

小穴はＡＳＰ－１・２を３Ｃ区と３Ｂ区で検出した。埋土は灰色粘土質シルトの単一層で、柱根・遺物とも出土していない。

Ｂ地区

Ｂ地区では、現地表下1.5～1.6m（標高3.3m前後）付近に存在している第６層上面を調査対象



第８図　Ｂ地区第６層上面平断面図（1/100）

にしたが、遺構は検出されなかった。なお、断面観察においては、北部で客土による整地以前に存在した道路状遺構が確認されている。

Ｃ地区

Ｃ地区は第６層上面を調査対象とした。検出された遺構は主に古墳時代後期末と平安時代後期～鎌倉時代初頭の二時期に分けられる。

溝（ＣＳＤ）

ＣＳＤ－１

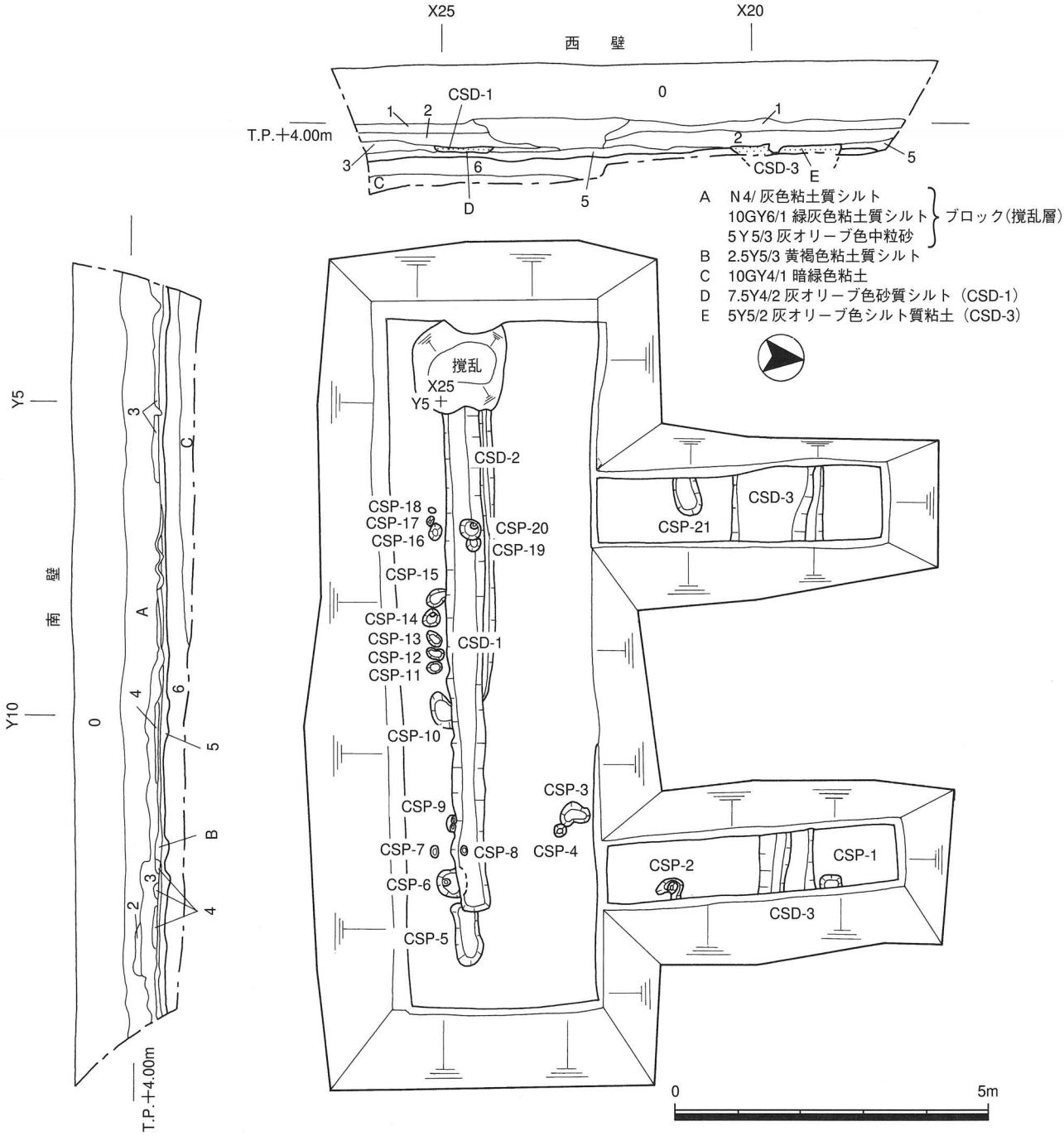
調査区の南側を東西に伸びる溝である。検出長8.1m、南北幅0.6m、深さ0.08mを測る。埋土は灰オリーブ色砂質シルトの単一層である。遺物は須恵器・瓦器椀・土師器小皿の小破片が少量出土した。

ＣＳＤ－２

５Ａ・Ｂ区で検出した。ＣＳＤ－１に切られている。検出長4.7m、南北幅0.2m、深さ0.04mを測る。遺物は6世紀末～7世紀初頭の土師器の杯身の小破片が出土した。

ＣＳＤ－３

東西の突出部で検出した。東西方向に伸びるもので、検出長6.8m、南北幅（東側）0.9m、（西側）1.4m、深さ0.18～0.25mを測り、東突出部の方が幅がやや狭くなっている。埋土は灰オリーブ色シルト質粘土の単一層である。遺物は須恵器、土師器、瓦器・瓦質三足釜等の破片が少量出土したが図化し得たものはない。



第９図　Ｃ地区第６層上面検出遺構平面図（1/100）

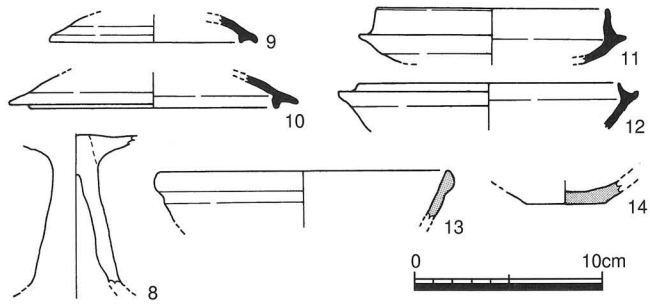
小穴（ＣＳＰ）

小穴は合計で21個（ＣＳＰ－１～ ＣＳＰ－21）検出した。散発的な分布を示すが、ＣＳＤ－１の南側に東西方向に列状に並ぶＣＳＰ－11～ＣＳＰ－18については、柵列状の性格が推定される。上面の形状で区別すれば、円形を呈するものと不定形を呈するものがあり、規模は径0.1ｍ～0.8ｍ、深さ0.05～0.25ｍである。埋土は褐灰色粘土質シルト・灰白色粘土質シルト・オリーブ灰色シルト質粘土に分けられる。遺物が出土したのはＣＳＰ－２・６・13・15・16・20であ

る。ＣＳＰ－15から瓦器椀の小破片が一点出土した以外は、土師器の小破片である。遺物の出土状況から褐灰色粘土質シルト埋土をもつ小穴（ＣＳＰ－２～４・７・19・20・21）が古墳時代後期末、その他の埋土をもつ小穴は平安時代後期～鎌倉時代初頭のものと思われる。なお、ＣＳＰ－20で柱穴の痕跡が確認されている。

４）遺構に伴わない遺物

第４層・第５層が遺物包含層で、第４層からは須恵器・土師器・瓦器椀、第５層からは瓦器椀・土師器の土釜・高杯、古墳時代後期末の須恵器等が出土しているが、いずれも小破化したものが大半で量的にも少ない。７点（８～14）を図化した。図化したうち（８）の土師器高杯がＣ地区第５層から出土した以外は、Ａ地区の第４層から出土している。（８）は土師器高杯である。全体にローリングを受けており器面調整は不明である。胎土は精良で、赤褐色系の色調を呈する。（９・10）は須恵器杯蓋の小破片である。完形であれば宝珠つまみを有し、口縁部内部にかえりを持つものである。色調は（９）が灰白色、（10）が淡青灰色で（10）の外面には灰かぶりが認められる。２点ともにＴＫ－217型式（７世紀前半）に対比される。（11・12）は須恵器杯身の小破片で残存率はともに1/10程度での小破片である。立ち上がりが直上に伸びる（11）と内傾して短く伸びる（12）がある。前者がＴＫ10型式（６世紀中葉）、後者がＴＫ217型式（７世紀前半）に比定される。（13）は玉縁口縁を有する白磁碗である。胎土は黒色の細粒が入るものの緻密で、釉は薄めに施釉されており、釉色は灰白色を呈する。森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類に分類される。（14）は白磁皿で復原底径4.1㎝を測る。底部がやや上げ底状になるもので、見込み部と体部の境に沈線状の段を有する。釉はきわめて薄く、黄色味の強い白色を呈する。森田・横田分類の白磁皿Ⅵ類に分類される。２点ともに11世紀中葉～12世紀初頭に比定される。



第10図　包含層出土遺物実測図

３．まとめ

今回の調査では、古墳時代前期［布留式古相］、古墳時代後期末（６世紀末）、平安時代前期、平安時代後期～鎌倉代前期に比定される遺構・遺物を検出した。

古墳時代前期［布留式古相］の集落としては、ＡＳＫ－１が唯一で遺物包含層中からも当該期に比定される遺物が出土していないことから集落の中心から離れた位置であったようである。なお、本調査地の北東約80ｍで実施された第７次調査（ＫＦ88－７）で当該期の集落が検出されており、それらに有機的に関連した遺構であると推定される。

古墳時代後期末の遺構としては、Ｃ地区で検出した小穴（ＣＳＰ－２～４・６・８・19～21）とＡ地区の土坑（ＡＳＫ－１・２）がそれに該当する。しかし、遺構密度が粗く、さらに明瞭な包含層を形成するに至っていない点は、比較的短期間の集落であったことが推定される。なお、同時期の集落が第７次調査（ＫＦ88－７）で検出されており、両者間の有機的な関係が想定されるとともに、調査地の東部約150ｍに存在した西郡廃寺（錦織寺）の造営を推進した錦織氏の動

向を推定する上で一助となろう。

平安時代前期の遺構としては、唯一、Ａ地区でＡＳＫ－５を検出している。遺構内から出土した２個の土師器杯は、口を合わせて重ねた状態で埋納されたことが確認でき、祭祀的な要素の強い遺構であった可能性が高い。

平安時代後期～鎌倉時代初頭の遺構は、Ａ地区およびＣ地区で検出されており、Ｃ地区で検出された小穴群を除けば、溝状遺構に限定される。これらの溝状遺構は農耕に関連した遺構と推定され、当該期においては当地一帯が生産域としての土地利用が計られていたようである。

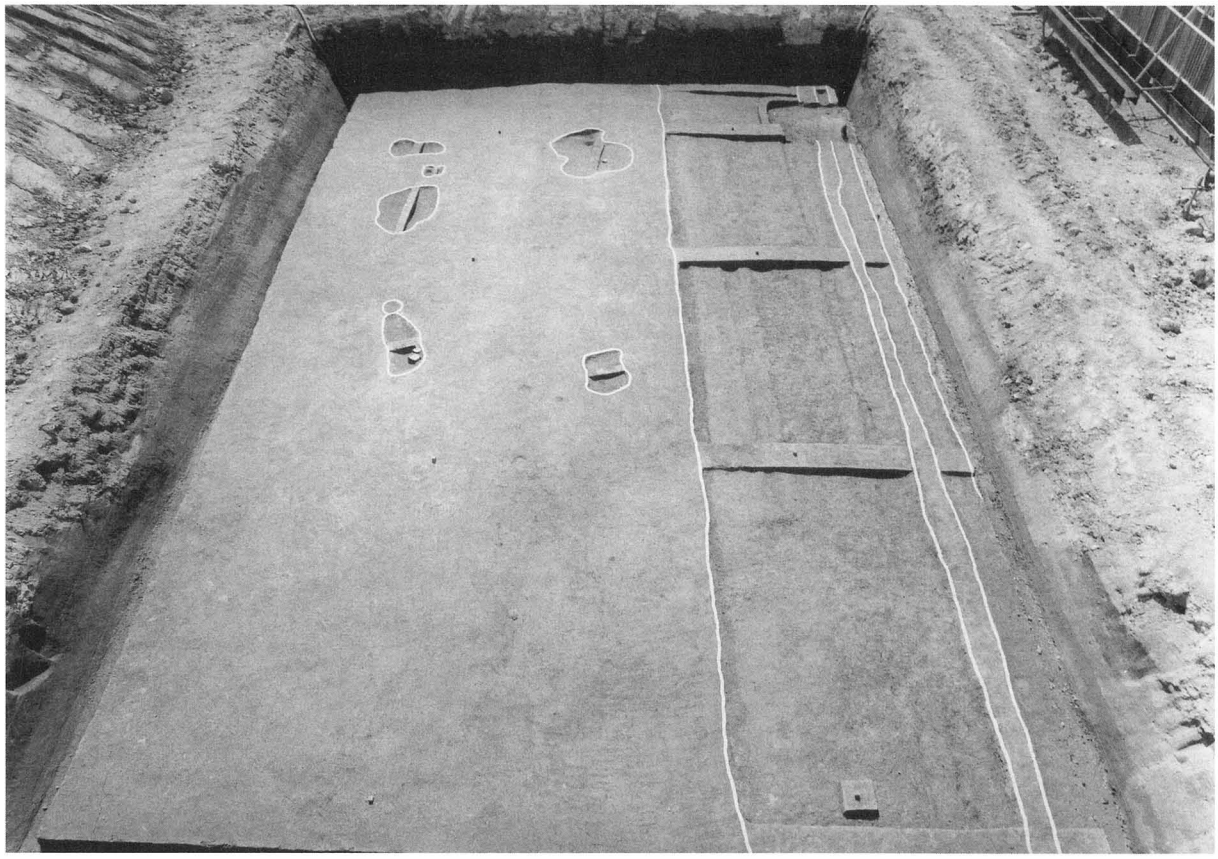
参考文献

・近江俊秀・岡田清一1989「河内南部における古代末期から中世の土器の諸問題」－木の本遺跡ＳＷ－02出土遺物を中心として－『八尾市文化財紀要４』八尾市教育委員会文化財室

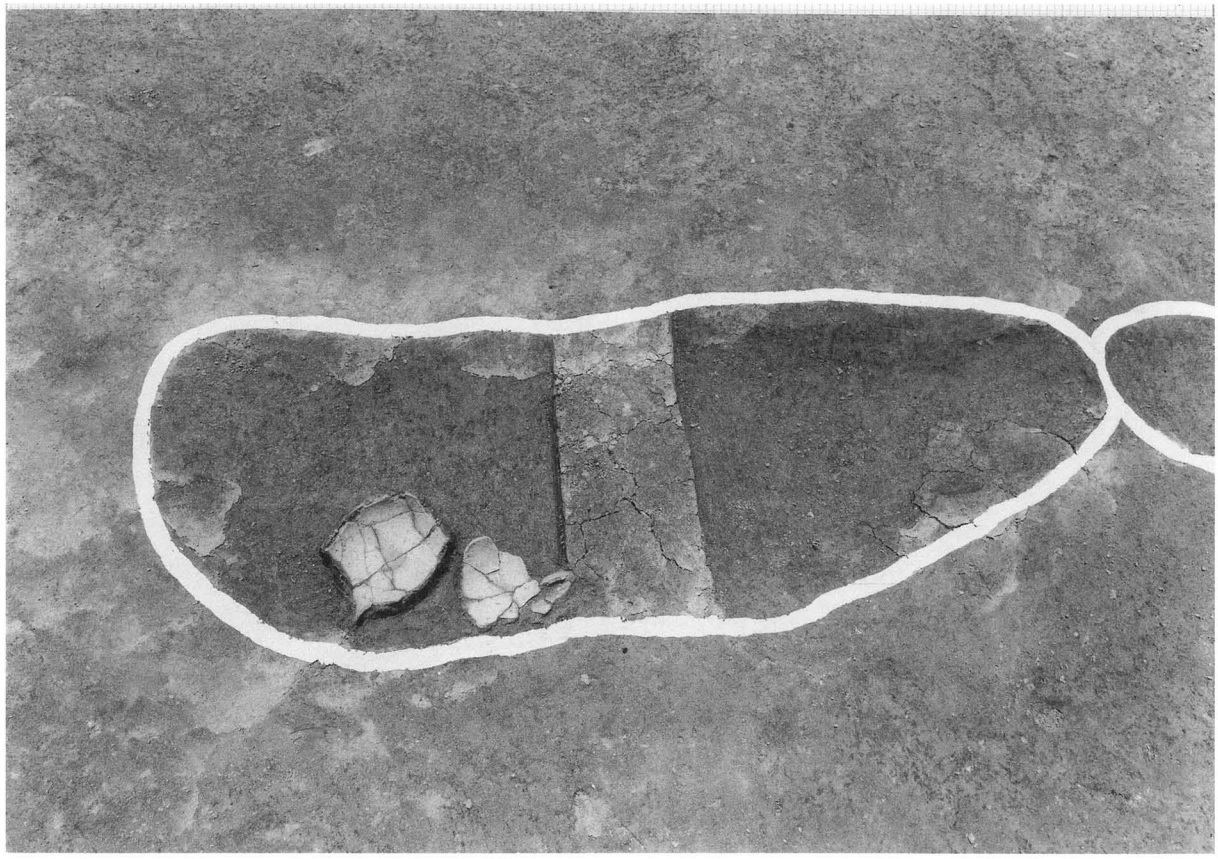
・田辺昭三1966『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園考古学クラブ

・横田賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集４』

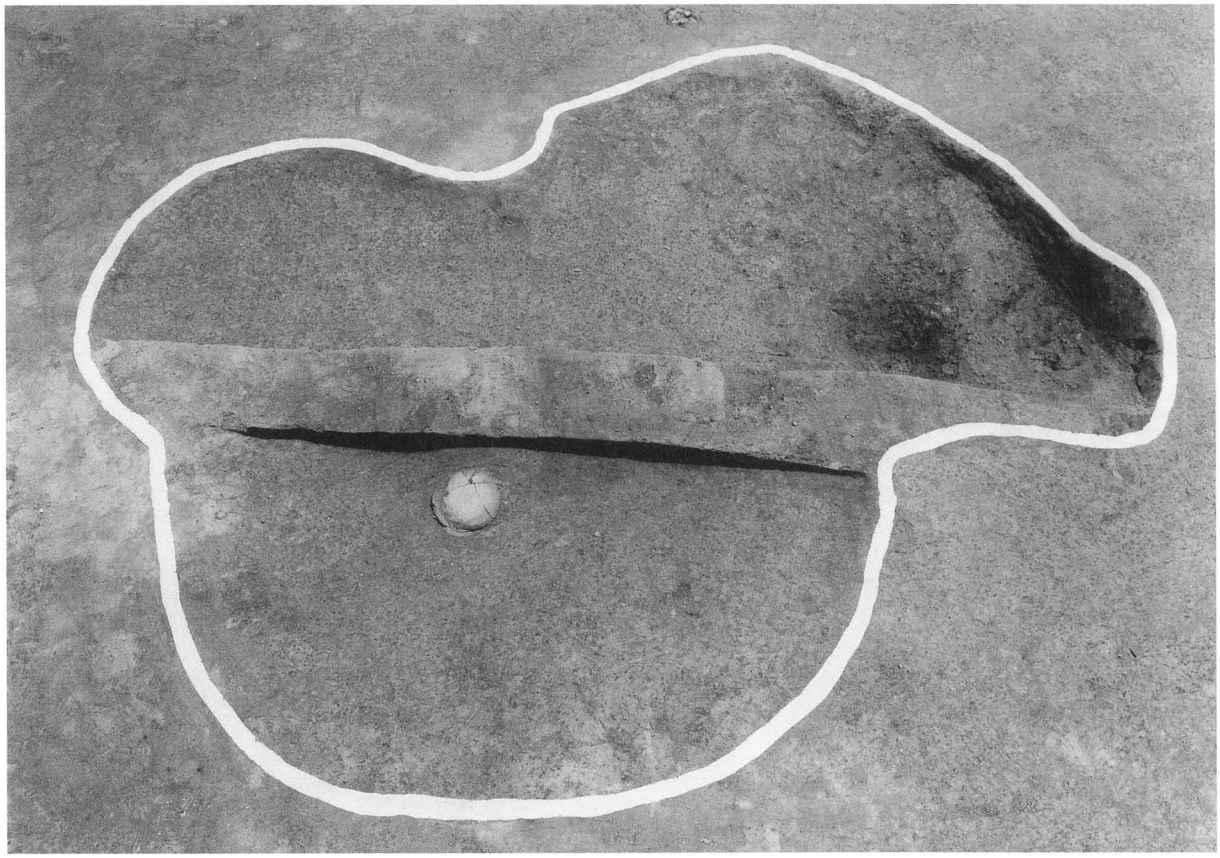
・原田昌則1989「２．萱振遺跡（第７次調査：泉町２丁目56他）」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財) 八尾市文化財調査研究会報告25 (財) 八尾市文化財調査研究会



Ａ地区第５層上面検出遺構（東から）



ＡＳＫ－１検出状況（北から）



ＡＳＫ－５検出状況（北から）

Ｂ地区第６層上面（南から）

Ｃ地区第６層上面検出遺構（北から）

ＡＳＫ－１（1）、ＡＳＫ－５（2・3）出土遺物

Ⅸ　山賀遺跡第５次調査（YMG96－５）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市新家町５・６丁目地内で実施した公共下水道工事（８－５工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する山賀遺跡第５次調査（ＹＭＧ96－５）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第埋139－３号　平成８年６月14日)に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成９年１月７日から平成９年１月23日にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は約43.2㎡である。

1．内業整理は、現地調査終了後随時行い、平成９年９月に終了した。

1．現地調査および内業整理に参加した調査補助員は以下のとおりである。
垣内洋平・岸田靖子・辻野優子・山内千恵子

1．本書の執筆・編集は森本が行った。

1．本書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版　標準土色帖（1996）』による。

本　文　目　次

1．はじめに……165
2．調査概要……166
　1）調査の方法と経過……166
　2）基本層序……166
　3）検出遺構と出土遺物……168
3．まとめ……169

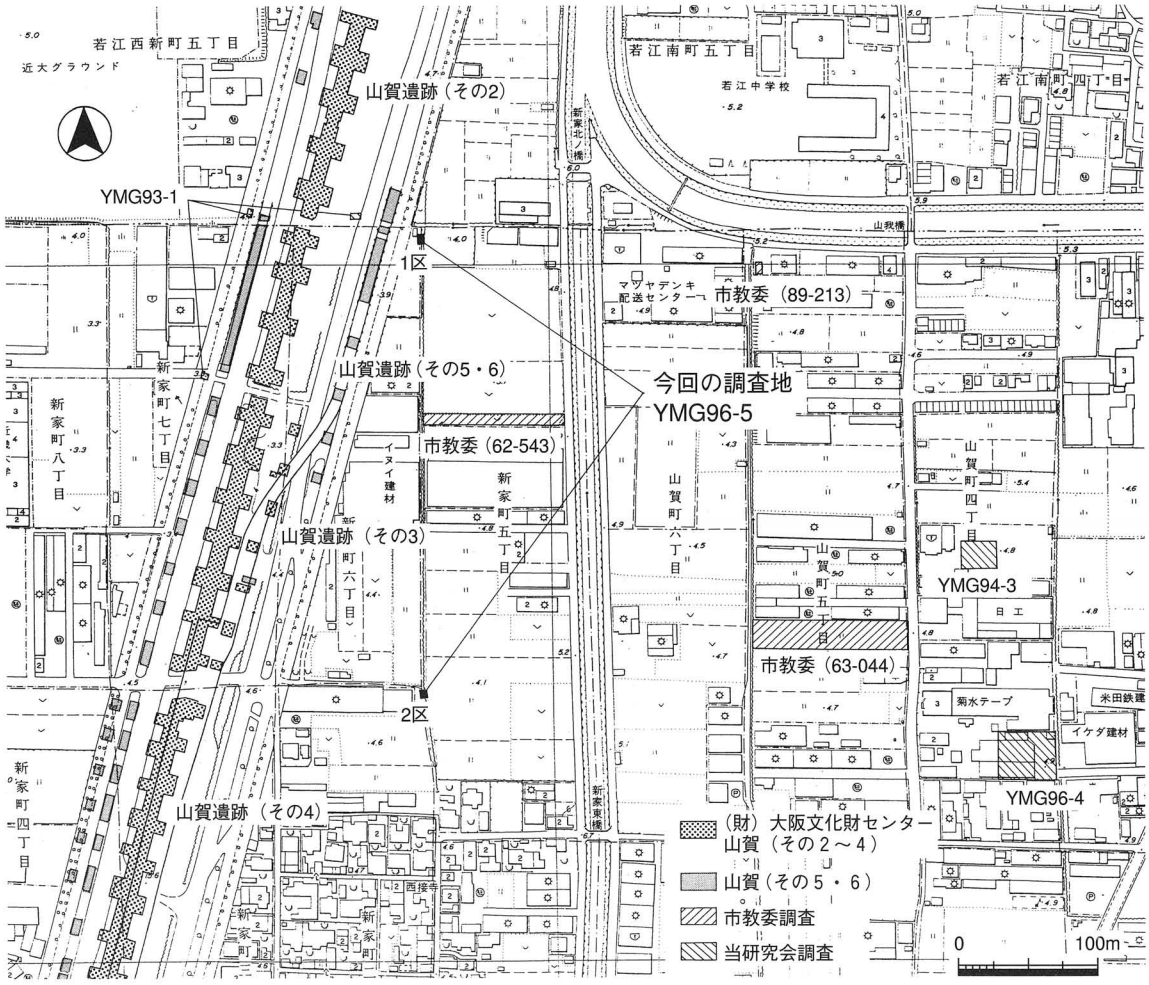
Ⅸ　山賀遺跡第５次調査（ＹＭＧ96－５）

１．はじめに

山賀遺跡は、八尾市北西部に位置し、現在の行政区画では新家町、山賀町、東大阪市若江西新町、若江南町の東西0.85㎞、南北1.0㎞がその範囲である。旧大和川の本流であった長瀬川・玉串川をはじめとする数多くの中小河川の沖積作用により形成された河内平野中央部の複合遺跡である。

当遺跡では、(財)大阪文化財センターにより、近畿自動車道建設に伴う大規模な調査(昭和54～60年)が行われている。その結果、縄文時代～近世に至る複合遺跡として認識されるようになった。なかでも、弥生時代前期では大規模な集落が確認されている。

山賀遺跡は、当調査研究会により４次にわたる調査が実施されている。なかでも、第３次調査（ＹＭＧ94－３）では、現地表下約３ｍ前後で弥生時代前期の遺構・遺物が検出されており、近畿自動車道建設に伴う山賀遺跡（その３）の調査を含めて広範囲に及ぶ集落が想定されるに至っている。第４次調査(ＹＭＧ96－４)では古墳時代後期末の集落と平安時代後期～鎌倉時代初頭の生産遺構が確認された。また、新家町5丁目の市教委の調査（62－543）でも弥生時代前期の土器が少量であるが出土している。



第１図　調査地周辺図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（8－5工区）に先立って実施したもので、当調査研究会が行った山賀遺跡内での第5次調査にあたる。調査対象は立坑2箇所で北側の発進立坑を1区、南側の到達立坑を2区とした。

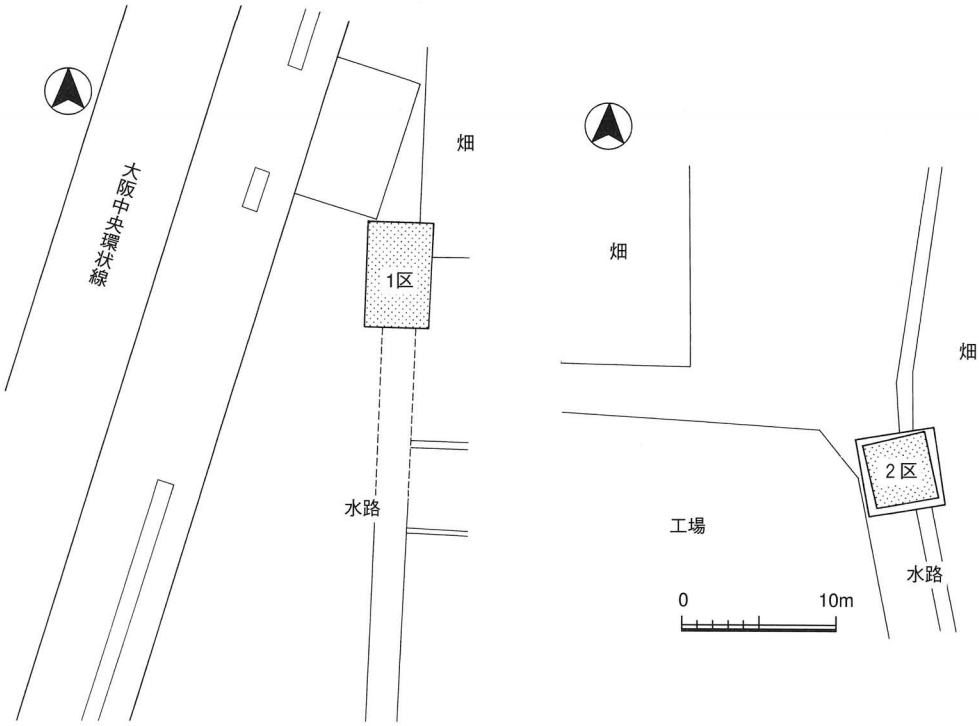
1区は東西幅4m、南北幅6.8m、面積は約27.2㎡を測る。2区は東西幅4m、南北幅4m、面積は約16.0㎡を測る。2箇所の調査総面積は約43.2㎡である。

1区は現地表下約1.5mまで水路によって削平されていたため、以下を最終掘削面である現地表下6.0m（T.P.－1.0m）まで掘削した。2区は覆工板設置により現地表下約1.5mが掘削されていたため、以下を最終掘削面である現地表下5.2m（T.P.－0.5m）まで掘削した。平成9年1月7日から掘削を開始し、1月23日ですべての調査を終了した。実働日数は11日間である。両区とも機械掘削と人力掘削を併用し、遺構・遺物の検出に努めた。

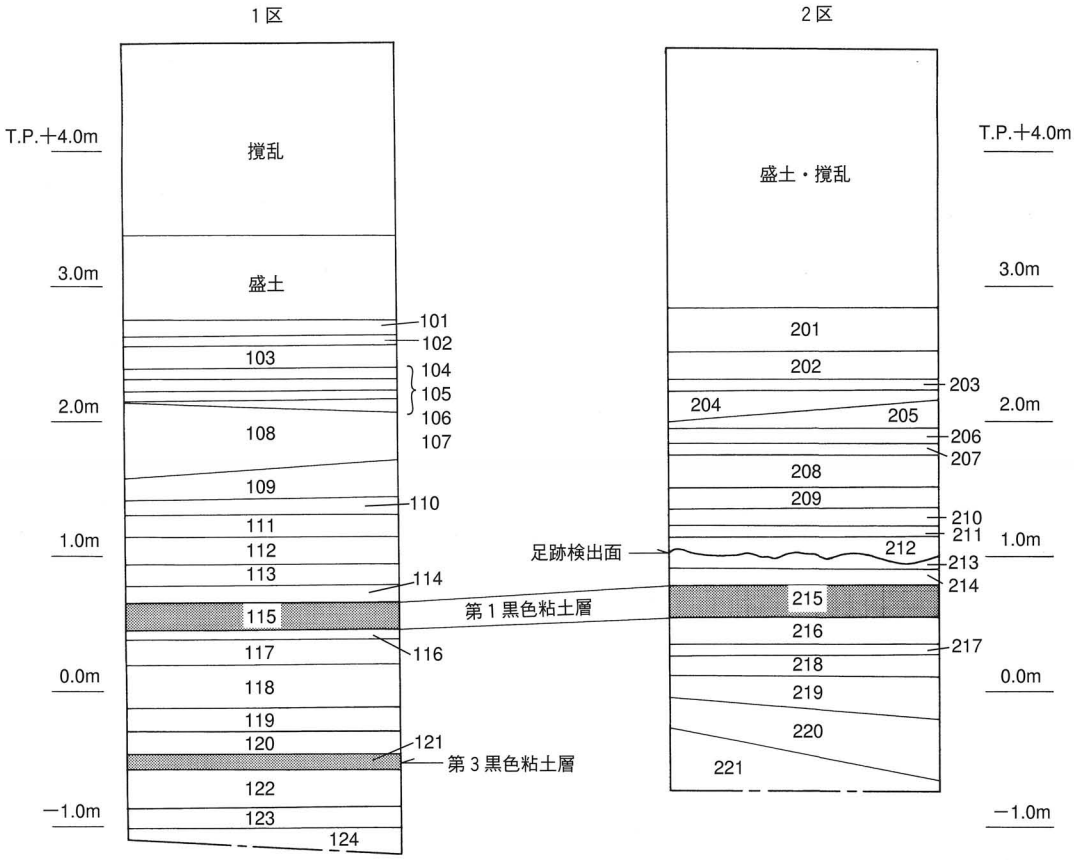
2）基本層序

1区では24層を確認した。確認した土層のなかからT.P.＋0.4～0.7m付近で緑黒色粘土層（115層）を、T.P.－0.4～－0.6m付近から緑黒色粘土層（121層）を観察した。115層は（財）大阪文化財センターが調査した山賀遺跡（その1）～（その5・6）で観察された第1黒色粘土層に相当する。この層は弥生時代前期に比定されている。また、121層は同じく縄文時代後期に比定される第3黒色粘土層に相当する。

2区では21層を確認した。確認した土層のうち、T.P.＋0.6～0.8m付近で黒色粘土層（215層）を観察した。215層は1区で観察した115層と同じく、第1黒色粘土層に比定できる。2区では第3黒色粘土層とおもわれる層は確認できなかった。



第2図　調査区設定図



1区

101　５Ｙ4/3暗オリーブ色細砂（鉄分含む）
102　7.5GY5/1緑灰色粘質土（シルト含む）
103　7.5GY4/1暗緑灰色粘土
104　10GY4/1暗緑灰色粘土（炭化物が帯状堆積）
105　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土（鉄分含む）
106　５BG3/1暗青灰色細砂混じり粘質土
107　7.5GY4/1暗緑灰色粘質シルト
108　５Ｙ7/3～7.5Ｙ8/1浅黄～灰白色細砂～中粒砂（ラミナ有）
109　7.5GY5/1緑灰色微砂～細砂（炭化物の薄層有）
110　５Ｇ4/1暗緑灰色粘土
111　５Ｇ3/1暗緑灰色粘土（炭化物含む）
112　５GY4/1暗オリーブ灰色細～中粒砂（植物遺体多く含む）
113　7.5GY5/1緑灰色粘土（微砂を中位に含む）
114　５Ｇ4/1暗緑灰色粘土
115　５Ｇ1.7/1緑黒色粘土（第１黒色粘土層）
116　7.5GY4/1暗緑灰色粘質シルト
117　7.5GY4/1暗緑灰色シルト
118　10GY4/1暗緑灰色シルト
119　10GY4/1暗緑灰色シルト（微～細砂を帯状に含む）
120　10GY4/1暗緑灰色粘土
121　５Ｇ1.7/1緑黒色粘土（第３黒色粘土層）
122　7.5GY3/1オリーブ黒色粘土（植物遺体の薄層含む）
123　10Ｙ3/1オリーブ黒色粘土（微～中粒砂含む）
124　10Ｙ3/1オリーブ黒色微～中粒砂

2区

201　５Ｙ7/1浅黄色中～粗粒砂（鉄分沈着）
202　7.5GY4/1暗緑灰色粘土（炭化物含む）
203　7.5GY2/1緑黒色粘土（炭化物多く含む）
204　2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混じり粘土（植物遺体・炭化物含む）
205　10Ｇ3/1暗緑灰色粘土（植物遺体少量含む）
206　５GY3/1暗オリーブ灰色細砂混じり粘土
207　2.5GY4/1暗オリーブ灰色微～細砂
208　10GY3/1暗緑灰色粘質土（植物遺体・炭化物を多く含む）
209　10GY3/1～7.5Ｙ5/2暗緑灰色～灰オリーブ色混じりのシルト
210　５Ｇ2/1緑黒色粘土（植物遺体を多く含む）
211　５Ｇ3/1暗緑灰色粘土（植物遺体を含む）
212　2.5GY4/1暗オリーブ灰色微～粗粒砂
213　2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土（炭酸カルシウム粒を多く含む）
214　7.5GY4/1暗緑灰色粘土
215　N2/1黒色粘土（植物遺体を含む）（第１黒色粘土層）
216　10GY5/1緑灰色粘土
217　５BG3/1暗青灰色粘土
218　10GY4/1暗緑灰色粘土
219　10Ｙ4/1暗緑灰色シルト混じり粘土
220　５GY5/1～2.5GY4/1緑灰色～暗オリーブ灰色シルト～粘質シルト（ラミナ有）
221　7.5Ｙ7/3～7.5Ｙ5/1浅黄色～灰色微～中粒砂（ラミナ有）

第３図　基本層序模式図（東壁Ｓ＝1/50）

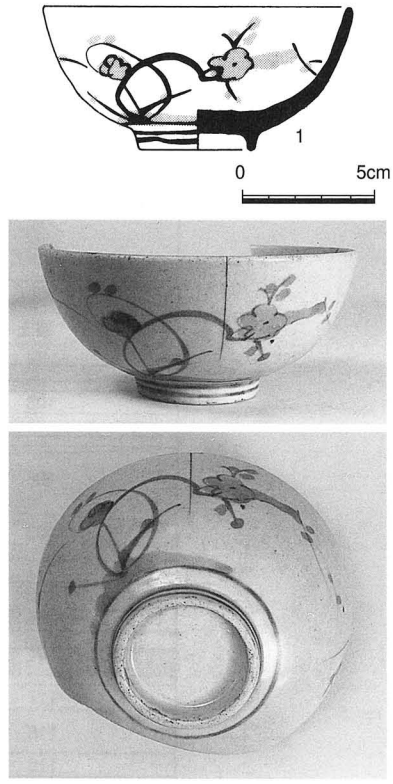
3）検出遺構と出土遺物

〈１区〉

基本層序は第３図のとおりである。現地表面はT.P.＋4.8m前後を測る。

T.P.＋2.5～2.2m付近から土管を確認した。これは当調査区西約20m地点の『山賀（その5･6)』2区で検出された暗渠の続き（1944年に埋設）と思われる。

遺構は、最終掘削時に確認した近世井戸（ＳＥ－１）のみである。桶枠井戸で井戸側の下二段が残存していた。下段は高さ約90㎝、厚さ約３㎝、幅８～14㎝の板材22本から成り、直径約70㎝を測る。井戸側の上端はT.P.＋0.3m付近から検出されており、下段の先端は124層・微～中粒砂層(縄文時代後期以前)の湧水層まで達していた。検出した井戸側36本中11本の内側に墨痕が認められたが、文字かどうかの判読は不可能であった。埋土内からは近世の陶磁器類６点が出土した。第４図－１は肥前磁器で下段の井戸側埋土内から出土した。草花文で見込み部は蛇の目釉剥ぎを行っている。その他、114層から土器が１点出土しているが、小破片のため器形・時期とも不明である。

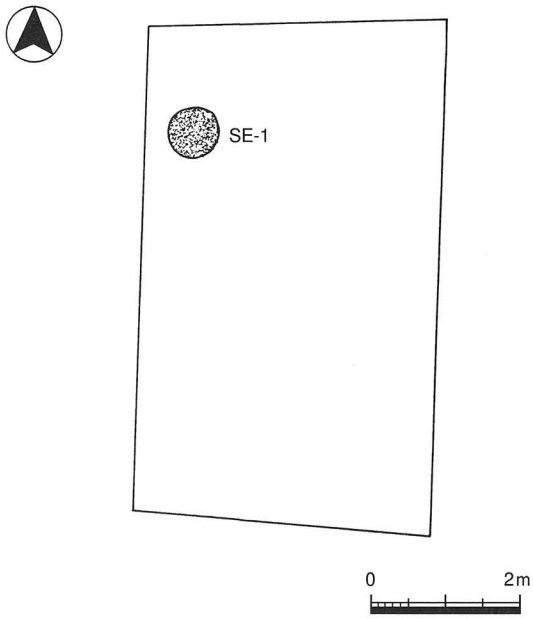


第４図　SE-1出土遺物

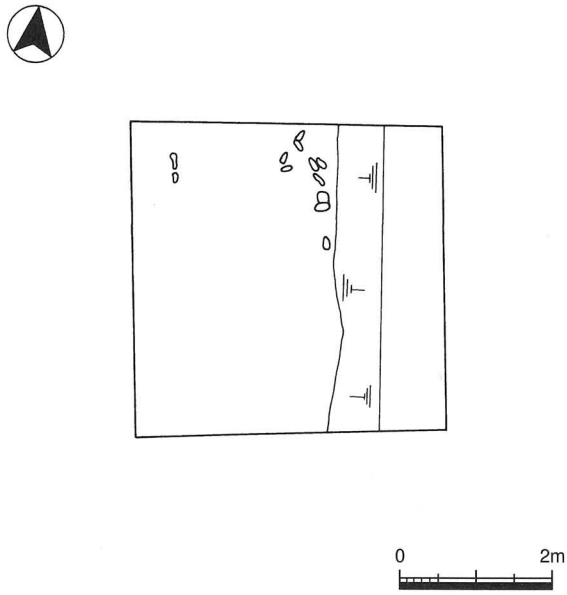
〈２区〉

基本層序は第３図のとおりである。現地表面はT.P.＋4.3m前後である。

２区では炭化物や自然木等の植物遺体を含む層が多く、208層からは木根とおもわれる自然木を検出した。また212層の微～粗粒砂を取り除いた213層上面に足跡らしき砂の落ち込みを検出した。その他の遺構は検出されなかったが、210層から２点、211層から３点、213層から１点の土器の破片が出土した。いずれも小破片であり、器形・時期とも不明である。



第５図　１区最終平面図



第６図　２区213層上面足跡検出平面図

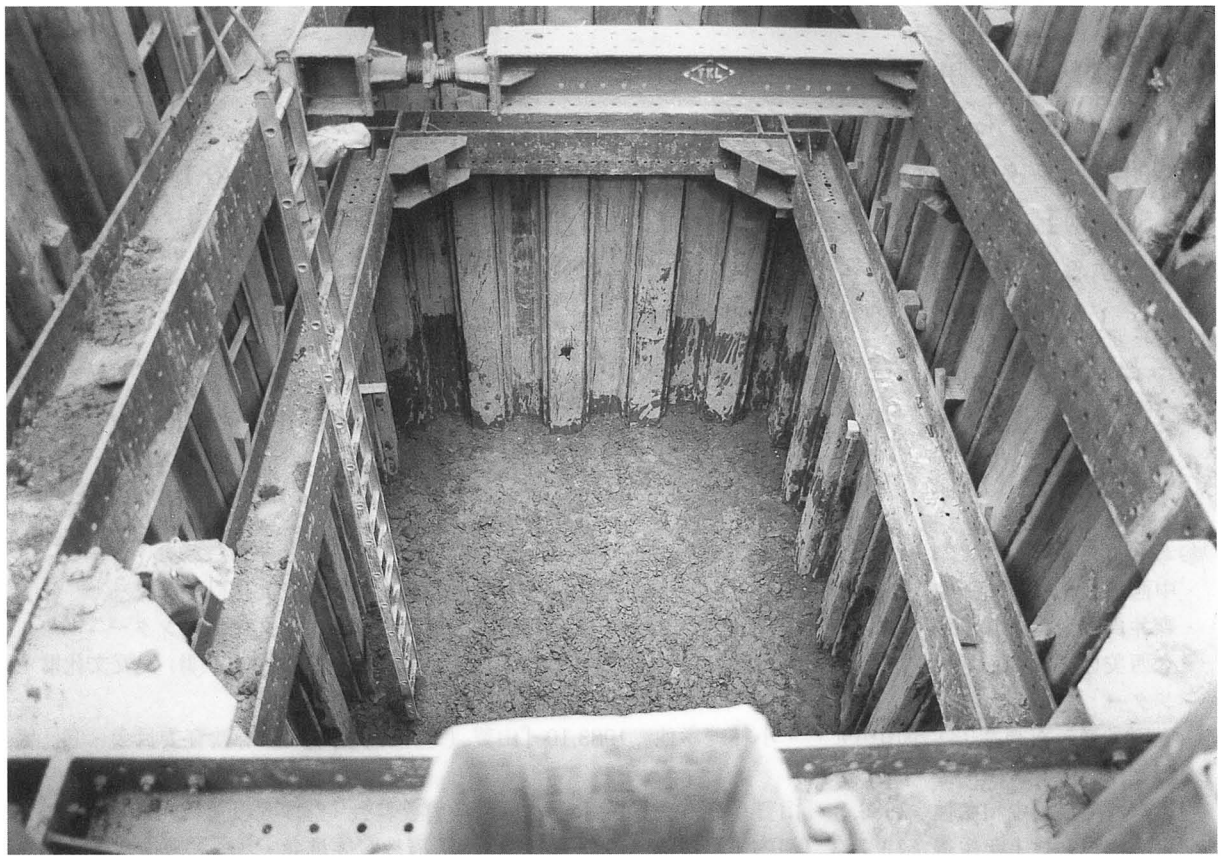
３．まとめ

今回の調査では、明確な遺構および各層の時代決定に有効な遺物の出土はみられなかった。しかし、小面積ながら、現地表下６ｍの深さまで地層観察を行うことができた。その結果、(財)大阪文化財センターが実施した近畿自動車道建設に伴う調査『山賀遺跡（その１）』～『山賀（その５・６）』で観察された第１黒色粘土層と第３黒色粘土層に比定される115層・215層、121層を確認することができた。

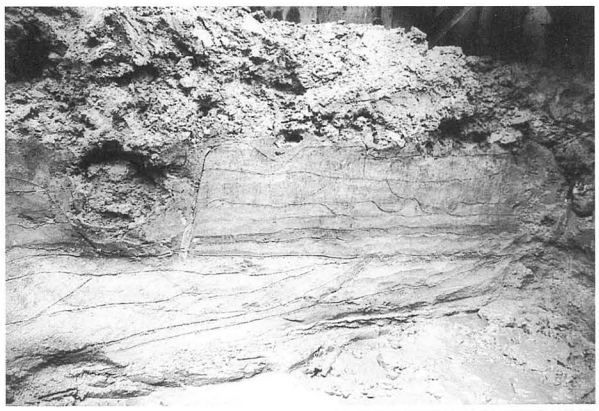
また、１・２区とも三時期の砂の堆積を確認した。(財)大阪文化財センターの調査に照らし合わせると弥生時代後期・弥生時代前期・縄文時代後期以前に相当するものとおもわれる。各層にはラミナや植物遺体の薄層などがみられることから、それぞれの時期の河川にあたっていたと考えられる。

参考文献

・中西靖人・杉本二郎他　1983.9『山賀（その１）』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・森井貞雄・高橋雅子他　1983.11『山賀（その２）』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・上西美佐子・西口陽一・宮野淳一他　1984.2『山賀（その３）』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・生田維道・石神幸子・小山田宏一・小林義孝他　1983.10『山賀（その４）』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・岸本道昭・田中和弘他　1986.3『山賀（その５・６）』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・赤木克視・村上年生編　1987.3『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
・成海佳子　1994.10『Ⅸ山賀遺跡第１次調査（ＹＭＧ93－１）』『Ⅹ山賀遺跡第２次調査（ＹＭＧ93－２）』(財)八尾文化財調査研究会報告43　(財)八尾市文化財調査研究会

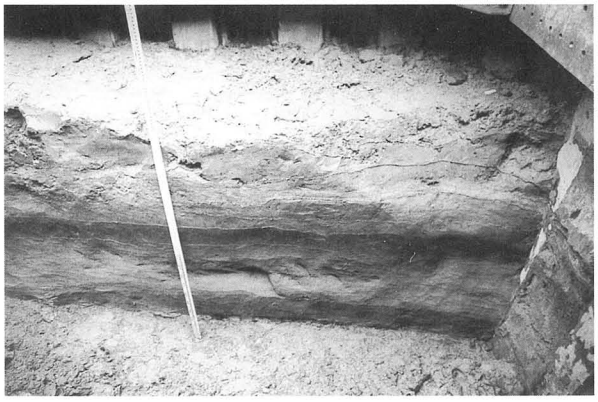


1区完掘状況（南から）



1区土層断面（東壁）T.P.＋3.3～1.7m付近

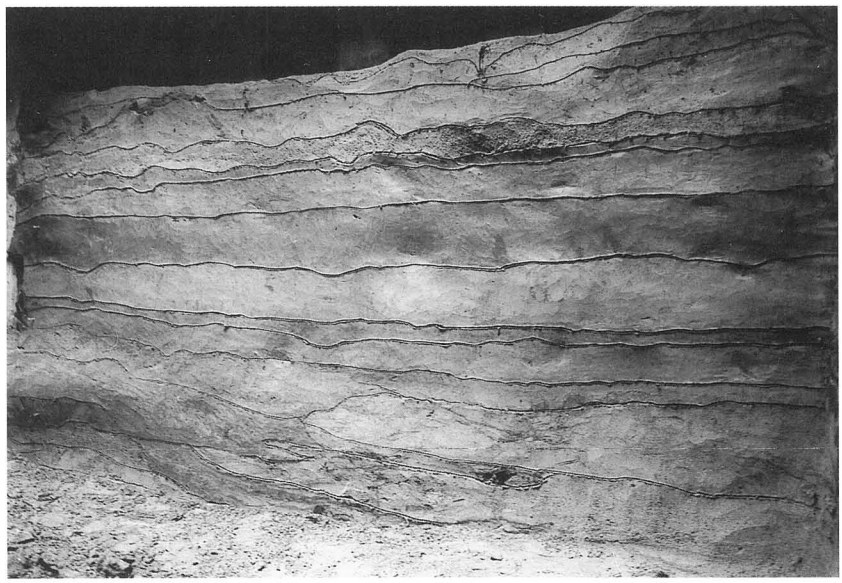
1区ＳＥ－１下段検出状況（東から）



1区土層断面（東壁）T.P.＋1.7～0.0m付近

1区ＳＥ－１下段半割状況（東から）

２区完掘状況（南から）



土層断面（東壁）
T.P.＋1.5～0.5m付近

213層上面足跡検出
状況（南から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書　　名	財団法人　　八尾市文化財調査研究会報告 60
副 書 名	Ⅰ跡部遺跡（第22次調査）Ⅱ跡部遺跡（第24次調査）Ⅲ植松遺跡（第５次調査）Ⅳ植松遺跡（第６次調査） Ⅴ亀井遺跡（第４次調査）Ⅵ萱振遺跡（第21次調査）Ⅶ木の本遺跡（第７次調査）Ⅷ久宝寺遺跡（第21次調査） Ⅸ小阪合遺跡（第33次調査）Ⅹ小阪合遺跡（第34次調査）XI 志紀遺跡（第３次調査）XII 田井中遺跡（第15次調査） XIII 竹渕遺跡（第７次調査）XIV 東郷遺跡（第52次調査）XV 東郷遺跡（第53次調査）XVI 中田遺跡（第33次調査） XVII 中田遺跡（第34次調査）XVIII 水越遺跡（第６次調査）XIX 山賀遺跡（第４次調査）IIX 山賀遺跡（第５次調査）
巻　　次	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	60
編 著 者 名	Ⅰ・Ⅱ・Ⅸ・XV・XV・XVII・XIII高萩千秋、Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・XI・XIII岡田清一、Ⅳ・Ⅹ・XIX原田昌則、Ⅲ・XVI西村公助、Ⅴ・XII 古川晴久、IIX森本めぐみ
編 集 機 関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所　在　地	〒581-0821　大阪府八尾市幸町４丁目58－２　TEL・FAX　０７２９－９４－４７００
発行年月日	１９９８年　月　日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
跡部遺跡（あとべいせき） （第22次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 太子堂（たいしどう）１丁目地内	27212		34度 36分 51秒	135度 35分 24秒	19960410 ～ 19960419	33m²	公共下水道
跡部遺跡（あとべいせき） （第24次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 太子堂（たいしどう）１・２丁目地内	27212		34度 36分 33秒	135度 35分 19秒	19970303 ～ 19970306	８m²	公共下水道
植松遺跡（うえまついせき） （第５次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 植松町（うえまつちょう）７丁目地内	27212		34度 36分 36秒	135度 35分 42秒	19960527 ～ 19960531	38m²	公共下水道
植松遺跡（うえまついせき） （第６次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 永畑町（ながはたちょう）３丁目１-11	27212		34度 36分 33秒	135度 35分 51秒	19961028 ～ 19961206	180m²	道路開発
亀井遺跡（かめいいせき） （第４次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 亀井町（かめいちょう）１・２丁目他	27212		34度 36分 59秒	135度 34分 53秒	19970217 ～ 19970221	17.92m²	公共下水道
萱振遺跡（かやふりいせき） （第21次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 萱振町（かやふりちょう）７丁目地内	27212		34度 38分 18秒	135度 36分 24秒	19960717 ～ 19960902	13m²	公共下水道
木の本遺跡（きもといせき） （第７次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 木の本（きもと）１丁目地内	27212		34度 35分 54秒	135度 35分 21秒	19961001 ～ 19961015	52m²	公共下水道
久宝寺遺跡（きゅうほうじいせき） （第21次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 西久宝寺（にしきゅうほうじ）地内	27212		34度 37分 38秒	135度 34分 57秒	19961225 ～ 19970120	39.2m²	公共下水道
小阪合遺跡（こさかあいいせき） （第33次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 南小阪合町（みなみこさかあいちょう）１丁目地内	27212		34度 37分 19秒	135度 36分 58秒	19961113 ～ 19961129	76m²	公共下水道
小阪合遺跡（こさかあいいせき） （第34次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 青山町（あおやまちょう）１・２丁目地内	27212		34度 37分 14秒	135度 36分 47秒	19970113 ～ 19970228	50.3m²	公共下水道
志紀遺跡（しきいせき） （第３次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 志紀町西（しきちょうにし）１丁目地内	27212		34度 36分 06秒	135度 36分 06秒	19970212 ～ 19970310	43.4m²	公共下水道

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
田井中遺跡（たいなかいせき） （第15次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 田井中（たいなか）４丁目地内	27212		34度 35分 48秒	135度 36分 29秒	19960312 ～ 19960328	17.92㎡	公共下水道
竹渕遺跡（たけふちいせき） （第７次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 竹渕（たけふち）３・４丁目地内	27212		34度 36分 49秒	135度 34分 24秒	19960628 ～ 19960713	37㎡	公共下水道
東郷遺跡（とうごういせき） （第52次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 桜ヶ丘（さくらがおか）１丁目88,89,90-1番地	27212		34度 37分 32秒	135度 36分 43秒	19961029 ～ 19961112	180㎡	店舗付共同住宅建設
東郷遺跡（とうごういせき） （第53次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 北本町（きたほんまち）２丁目67-２.68	27212		34度 37分 41秒	135度 36分 17秒	19961202 ～ 19961212	100㎡	個人住宅付共同住宅
中田遺跡（なかたいせき） （第33次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 中田（なかた）１・４丁目地内	27212		34度 36分 55秒	135度 36分 59秒	19960405 ～ 19960415	30.25㎡	公共下水道
中田遺跡（なかたいせき） （第34次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 八尾木北（ようぎきた）６丁目地内	27212		34度 36分 30秒	135度 37分 09秒	19960722 ～ 19960725	60㎡	公共下水道
水越遺跡（みずこしいせき） （第６次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 服部川（はっとりかわ）５丁目７番～12番地	27212		34度 37分 29秒	135度 38分 28秒	19960826 ～ 19960904	140㎡	特別養護老人ホーム建設
山賀遺跡（やまがいせき） （第４次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 山賀（やまが）４丁目53番３号	27212		34度 38分 41秒	135度 36分 23秒	19960701 ～ 19960726	300㎡	変電所建設
山賀遺跡（やまがいせき） （第５次調査）	大阪府（おおさかふ）　八尾市（やおし） 新家町（しんげまち）５・６丁目地内	27212		34度 38分 50秒	135度 36分 03秒	19970107 ～ 19970123	43.2㎡	公共下水道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
跡部遺跡 （第22次調査）	集落	古墳時代前期		土師器	
跡部遺跡 （第24次調査）	集落	古墳時代前期	河川１		
植松遺跡 （第５次調査）	集落	室町時代～近世	河川１	土師器・ 国産磁器	
植松遺跡 （第６次調査）	集落	平安時代前期	溝１	土師器・須恵器 黒色土器・土馬	
亀井遺跡 （第４次調査）	集落	室町時代前期～中期	溝１	土師器・瓦質土器・屋瓦	
萱振遺跡 （第21次調査）	集落	平安時代末～鎌倉初頭	河川１	巴文軒丸瓦	

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木の本遺跡（第７次調査）	集落	古墳時代前期		小型丸底壷	
久宝寺遺跡（第21次調査）	集落	古墳時代前期		土師器・焼土塊	
小阪合遺跡（第33次調査）	集落	古墳時代前期 平安時代末～鎌倉時代	河川１	土師器・瓦器椀	
小阪合遺跡（第34次調査）	集落	古墳時代前期・後期、平安時代前期・近世	井戸１・溝８・小穴２	弥生土器・土師器・須恵器	
志紀遺跡（第３次調査）	集落	縄文時代晩期～弥生前期・古墳時代・平安時代～鎌倉時代	沼沢地・河川・水田		
田井中遺跡（第15次調査）	集落	弥生時代前期・平安時代末期～鎌倉時代	河川・水田		
竹渕遺跡（第７次調査）	集落	室町時代		丸瓦	
東郷遺跡（第52次調査）	集落	奈良時代後期～平安時代初頭・平安時代末・近代	土坑２・溝７・小穴45	土師器・緑釉陶器・銅鈴	墨書土器
東郷遺跡（第53次調査）	集落	弥生時代後期～古墳時代前期	土坑２・溝６・小穴13	弥生土器・土師器	
中田遺跡（第33次調査）	集落	弥生時代後期・鎌倉時代	河川２・土坑３	弥生土器・土師器・瓦器椀	
中田遺跡（第34次調査）	集落	古墳時代前期～平安時代末		土師器・丸瓦	
水越遺跡（第６次調査）	集落	弥生時代後期末	土坑４	弥生土器	
山賀遺跡（第４次調査）	集落	古墳時代前期・古墳時代後期末・平安前期・平安時代後期～鎌倉時代初頭	土坑５・溝５・小穴21	土師器・須恵器・白磁碗	
山賀遺跡（第５次調査）	集落	近世	井戸１	肥前系磁器碗	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告60

Ⅰ　跡部遺跡（第22次調査）
Ⅱ　跡部遺跡（第24次調査）
Ⅲ　植松遺跡（第５次調査）
Ⅳ　植松遺跡（第６次調査）
Ⅴ　亀井遺跡（第４次調査）
Ⅵ　萱振遺跡（第21次調査）
Ⅶ　木の本遺跡（第７次調査）
Ⅷ　久宝寺遺跡（第21次調査）
Ⅸ　小阪合遺跡（第33次調査）
Ⅹ　小阪合遺跡（第34次調査）
Ⅺ　志紀遺跡（第３次調査）
Ⅻ　田井中遺跡（第15次調査）
XIII　竹渕遺跡（第７次調査）
XIV　東郷遺跡（第52次調査）
XV　東郷遺跡（第53次調査）
XVI　中田遺跡（第33次調査）
XVII　中田遺跡（第34次調査）
XVIII　水越遺跡（第６次調査）
XIX　山賀遺跡（第４次調査）
IIX　山賀遺跡（第５次調査）

発　行　平成10年９月
編　集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
〒581-0821　TEL　0729－94－4700
印　刷　(株) 近畿印刷センター